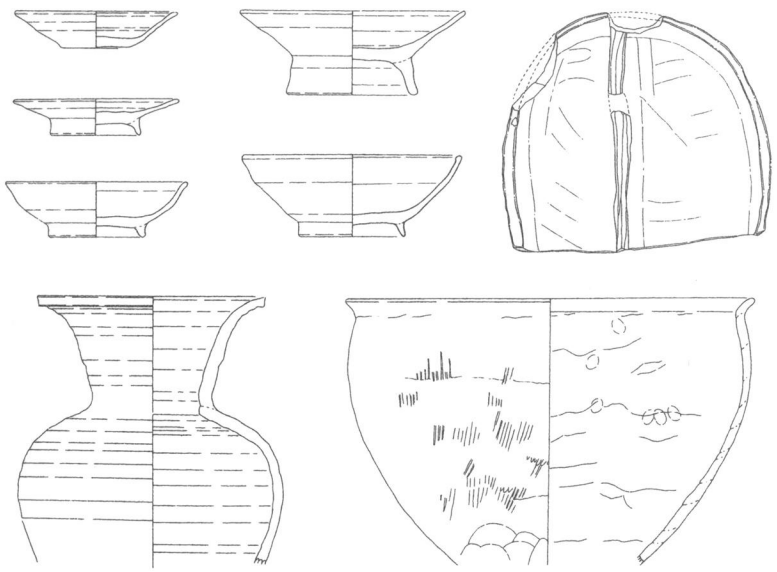
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第151集

大屋敷C古墳群
大屋敷1号窯

平成11～14年度（国）362号道路改良（２Ｂ一般）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

第２分冊



２００４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第151集

大屋敷C古墳群
大屋敷1号窯

平成11～14年度（国）362号道路改良（２Ｂ一般）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

第２分冊

２００４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

例　　言

1　本書は、静岡県浜北市宮口5831－532ほかに所在する大屋敷Ｃ古墳群及び大屋敷１号窯の発掘調査報告書のうちの第二分冊である。

2　調査体制、調査内容等は第一分冊に記載している。

目　　次

例言
凡例
目次……(1)
挿図目次……(2)
挿表目次……(3)
写真目次……(3)
図版目次……(4)
第Ⅴ章　大屋敷1号窯の調査……(10)
　第1節　宮口古窯跡群の概要……(10)
　第2節　大屋敷1号窯……(14)
　第3節　窯以外の遺構と遺物……(65)
　第4節　観察表……(66)
　第5節　自然科学分析……(75)
　第6節　付編　大屋敷古窯跡群関連遺物……(82)
　第7節　大屋敷1号窯の評価……(119)
　註……(125)
　引用・参考文献……(126)
第Ⅵ章　調査のまとめ……(128)
謝辞……(131)
図版……1～207

(第1分冊)
第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯
第Ⅱ章　調査の方法と経過
　第1節　調査の方法
　第2節　調査の経過
　第3節　基本層序
第Ⅲ章　位置と環境
　第1節　地理的環境
　第2節　歴史的環境
　第3節　大屋敷古墳群・大屋敷古窯跡群の調査歴
第Ⅳ章　大屋敷C古墳群の調査
　第1節　大屋敷C古墳群の概要
　第2節　1区の調査成果
　第3節　3区の調査成果
　第4節　観察表
　第5節　大屋敷C古墳群の評価
　参考文献

挿図目次

320　宮口古窯跡群の分布
321　大屋敷古窯跡群の分布
322　窯部位名称および計測位置図
323　大屋敷１号窯出土器種区分および計測位置図
324　２区地形測量図
325　大屋敷１号窯地形測量図
326　大屋敷１号窯実測図
327　大屋敷１号窯土層断面図
328　大屋敷１号窯・灰原土層序マトリックス
329　大屋敷１号窯灰原土層堆積状況図①
330　大屋敷１号窯灰原土層堆積状況図②
331　大屋敷１号窯遺物出土状況図
332　大屋敷１号窯出土灰釉陶器碗皿類グリッド別出土数
333　大屋敷１号窯出土灰釉陶器接合状況図①(碗皿類)
334　大屋敷１号窯出土灰釉陶器接合状況図②(長頸壺・硯)
335　大屋敷１号窯出土灰釉陶器接合状況図③(鉢)
336　大屋敷１号窯出土灰釉陶器碗類出土層位別比較図
337　大屋敷１号窯出土灰釉陶器器種別出土割合
338　大屋敷１号窯出土碗Ａ分類図
339　大屋敷１号窯出土灰釉陶器碗法量図
340　大屋敷１号窯出土灰釉陶器碗・皿類
　　底部・内面調整の割合
341　大屋敷１号窯出土灰釉陶器無台碗法量図
342　大屋敷１号窯出土灰釉陶器托法量図
343　大屋敷１号窯出土灰釉陶器長頸壺口径別出土数
344　大屋敷１号窯出土灰釉陶器鉢口径別出土数
345　大屋敷１号窯窯内床面直上出土灰釉陶器実測図
346　大屋敷１号窯窯内覆土出土灰釉陶器実測図①
347　大屋敷１号窯窯内覆土出土灰釉陶器実測図②
348　大屋敷１号窯窯内覆土出土灰釉陶器実測図③
349　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図①
350　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図②
351　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図③
352　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図④
353　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑤
354　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑥
355　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑦
356　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑧
357　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑨
358　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑩
359　大屋敷１号窯出土碗拓影①
360　大屋敷１号窯出土碗拓影②
361　大屋敷１号窯出土碗拓影③
362　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑪
363　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑫
364　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑬
365　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑭
366　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑮
367　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑯
368　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑰
369　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑱
370　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑲
371　大屋敷１号窯灰原出土窯道具実測図
372　土坑(SF06)遺構平面図
373　土坑(SF06)出土灰釉陶器実測図
374　大屋敷６号窯出土碗法量図
375　大屋敷６号窯表面採集遺物実測図①
376　大屋敷６号窯表面採集遺物実測図②
377　大屋敷６号窯表面採集遺物実測図③
378　大屋敷５号窯出土碗法量図
379　大屋敷５号窯出土遺物実測図①
　　(浜北市教委1989より)
380　大屋敷５号窯出土遺物実測図②
381　大屋敷５号窯出土遺物実測図③
382　大屋敷５号窯出土遺物実測図④
383　大屋敷５号窯出土遺物実測図⑤
384　大屋敷５号窯出土遺物実測図⑥
385　大屋敷５号窯出土遺物実測図⑦
　　(浜北市教委1989より)
386　大屋敷古窯跡群(麁玉中学校西採集ほか)
　出土遺物実測図①
387　大屋敷古窯跡群(麁玉中学校西採集ほか)
　出土遺物実測図②
　(1501～1503図　浜北市教委1989より)
388　吉名５号窯出土碗法量図
389　吉名５号窯出土遺物実測図①
　　(浜北市教委1989より)
390　吉名５号窯出土遺物実測図②
　　(浜北市教委1989より)
391　吉名５号窯出土遺物実測図③
　　(浜北市教委1989より)
392　吉名５号窯出土遺物実測図④および
　　吉名６号窯出土遺物実測図①
393　吉名６号窯出土碗法量図
394　吉名６号窯出土遺物実測図②
　　(浜北市教委1989より)
395　吉名６号窯出土遺物実測図③
396　吉名６号窯出土遺物実測図④
　　(浜北市教委1989より)
397　吉名１・２号窯出土遺物実測図
　　(浜北市教委1989より)および碗法量図
398　吉名１号窯出土碗法量図
399　吉名１号窯出土灰釉陶器実測図(静岡県1992より)
400　譲栄古窯跡群出土碗法量図
401　土取古窯跡群出土碗法量図
402　栃池古窯跡群出土碗法量図

403　西ノ谷古窯跡出土碗法量図
404　譲栄古窯跡群・土取古窯跡群ほか出土遺物実測図
（浜北市教委1989より）
405　宮口古窯跡群窯構造比較図
406　宮口古窯跡群生産器種構成図
407　宮口古窯跡群出土碗法量割合図
408　宮口古窯跡群出土無台碗法量割合図
409　宮口古窯跡群窯変遷図
410　大屋敷遺跡出土遺物実測図①
（浜北市教委1988より）
411　大屋敷遺跡出土遺物実測図②

挿表目次

54　大屋敷１号窯窯内・灰原接合関係①（碗皿類）
55　大屋敷１号窯窯内・灰原接合関係②（長頸壺・硯）
56　大屋敷１号窯窯内・灰原接合関係③（鉢）
57　大屋敷１号窯出土灰釉陶器器種別出土数
58　大屋敷１号窯出土灰釉陶器観察表
59　大屋敷１号窯出土炭化材の放射性炭素年代測定および
暦年代較正の結果
60　大屋敷１号窯出土炭化材樹種同定結果
61　宮口古窯跡群出土灰釉陶器・山茶碗観察表

写真目次

21　大屋敷１号窯出土炭化材の走査電子顕微鏡写真①
22　大屋敷１号窯出土炭化材の走査電子顕微鏡写真②

図版目次

表紙　大屋敷Ｃ５号墳の現状
1　大屋敷Ｃ古墳群・大屋敷１号窯の位置
2　大屋敷Ｃ古墳群・大屋敷１号窯遠景(北西より)
3　大屋敷Ｃ古墳群・大屋敷１号窯全景(俯瞰)
4　大屋敷Ｃ古墳群全景(俯瞰)
5　1　大屋敷Ｃ古墳群全景(南より)
　　2　大屋敷Ｃ２・３号墳全景(南より)
6　1　大屋敷Ｃ２号墳全景(南より)
　　2　大屋敷Ｃ２号墳玄室の状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ２号墳遺物出土状況(南より)
7　1　大屋敷Ｃ３号墳全景(南より)
　　2　大屋敷Ｃ３号墳敷石の状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ３号墳敷石の状況(北より)
8　1　大屋敷Ｃ３号墳玄室遺物出土状況(北より)
　　2　大屋敷Ｃ３号墳墓道遺物出土状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ３号墳閉塞石の状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ３号墳墓壙完掘状況(南より)
9　1　土坑(SF01)完掘状況(東より)
　　2　土坑(SF05)完掘状況(南より)
　　3　土坑(SF02)完掘状況(西より)
　　4　土坑(SF02)完掘状況(北より)
　　5　土坑(SF03)完掘状況(東より)
　　6　土坑(SF04)検出状況(南東より)
　　7　土坑(SF04)完掘状況(南より)
10　1　３区調査前の状況(西より)
　　2　３区完掘状況(平成12年度)(南西より)
11　1　３区完掘状況(平成13年度)(東より)
　　2　３区西側完掘状況(平成12年度)(俯瞰)
12　1　３区東側完掘状況(平成12年度)(南より)
　　2　３区西側完掘状況(平成13年度)(俯瞰)
13　1　３区東側完掘状況(平成14年度)(俯瞰)
　　2　３区東側完掘状況(平成14年度)(南西より)
14　1　大屋敷Ｃ６号墳石材検出状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ７号墳石材検出状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ13号墳石材検出状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ15号墳石材検出状況(南より)
15　1　大屋敷Ｃ10号墳全景(南より)
　　2　大屋敷Ｃ10号墳横穴式石室検出状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ10号墳横穴式石室奥壁の状況(南より)
16　1　大屋敷Ｃ10号墳右側壁の状況(南東より)
　　2　大屋敷Ｃ10号墳左側壁の状況(南西より)
　　3　大屋敷Ｃ10号墳基底石の状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ10号墳墓壙の状況(南より)
17　1　大屋敷Ｃ14号墳全景(南より)
　　2　大屋敷Ｃ14号墳横穴式石室検出状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ14号墳横穴式石室完掘状況(南より)
18　1　大屋敷Ｃ14号墳右側壁の状況(南東より)
　　2　大屋敷Ｃ14号墳左側壁の状況(南西より)
　　3　大屋敷Ｃ14号墳奥壁の状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ14号墳立柱石の状況(北より)
19　1　大屋敷Ｃ14号墳基底石の状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ14号墳墓壙の状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ17号墳全景(南より)
20　1　大屋敷Ｃ17号墳横穴式石室検出状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ17号墳横穴式石室完掘状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ17号墳右側壁の状況(南東より)
　　4　大屋敷Ｃ17号墳立柱石の状況(北より)
　　5　大屋敷Ｃ17号墳左側壁の状況(南西より)
　　6　大屋敷Ｃ17号墳奥壁の状況(南より)
21　1　大屋敷Ｃ17号墳遺物出土状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ17号墳遺物出土状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ17号墳基底石の状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ18号墳調査前の状況(南より)
22　1　大屋敷Ｃ18号墳周溝遺物出土状況(北より)
　　2　大屋敷Ｃ18号墳全景(南より)
23　1　大屋敷Ｃ18号墳横穴式石室検出状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ18号墳横穴式石室完掘状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ18号墳右側壁の状況(南東より)
　　4　大屋敷Ｃ18号墳左側壁の状況(南西より)
　　5　大屋敷Ｃ18号墳横穴式石室完掘状況(北より)
24　1　大屋敷Ｃ18号墳奥壁の状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ18号墳立柱石の状況(北より)
　　3　大屋敷Ｃ18号墳基底石の状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ18号墳墓壙の状況(南より)
25　1　大屋敷Ｃ19号墳調査前の状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ19号墳全景(南より)
26　1　大屋敷Ｃ19号墳全景(南より)
　　2　大屋敷Ｃ19号墳全景(南より)
27　1　大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室検出状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室検出状況(北より)
　　3　大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室完掘状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室完掘状況(北より)
28　1　大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室閉塞石の状況(南より)
　　2　大屋敷Ｃ19号墳立柱石の状況(南より)
　　3　大屋敷Ｃ19号墳奥壁の状況(南より)
　　4　大屋敷Ｃ19号墳立柱石の状況(北より)
29　1　大屋敷Ｃ19号墳玄室右側壁の状況(東より)
　　2　大屋敷Ｃ19号墳羨道右側壁の状況(東より)
　　3　大屋敷Ｃ19号墳玄室左側壁の状況(西より)
　　4　大屋敷Ｃ19号墳羨道左側壁の状況(西より)
　　5　大屋敷Ｃ19号墳基底石の状況(南より)
　　6　大屋敷Ｃ19号墳基底石の状況(北より)

30 1 大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室裏込めの状況（南より）
2 大屋敷Ｃ19号墳墳丘盛土東側の状況（南より）
3 大屋敷Ｃ19号墳墳丘盛土西側の状況（南より）
31 1 大屋敷Ｃ19号墳墓壙の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ19号墳立柱石下部の状況（南東より）
3 大屋敷Ｃ19号墳立柱石下部の状況（北東より）
4 大屋敷Ｃ19号墳周溝遺物出土状況（東より）
5 大屋敷Ｃ19号墳羨道遺物出土状況（北より）
6 大屋敷Ｃ19号墳閉塞部遺物出土状況（西より）
32 1 大屋敷Ｃ20号墳全景（南より）
2 大屋敷Ｃ20号墳横穴式石室検出状況（南より）
3 大屋敷Ｃ20号墳横穴式石室完掘状況（南より）
33 1 大屋敷Ｃ20号墳周溝遺物出土状況（南より）
2 大屋敷Ｃ20号墳横穴式石室遺物出土状況（南西より）
3 大屋敷Ｃ20号墳横穴式石室遺物出土状況（南より）
4 大屋敷Ｃ20号墳奥壁の状況（南より）
5 大屋敷Ｃ20号墳右側壁の状況（南東より）
6 大屋敷Ｃ20号墳左側壁の状況（南西より）
34 1 大屋敷Ｃ20号墳基底石の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ20号墳墓壙の状況（南より）
3 大屋敷Ｃ20号墳横穴式石室裏込めの状況（南より）
35 1 大屋敷Ｃ21号墳調査前の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ21号墳全景（南より）
36 1 大屋敷Ｃ21号墳外護列石の状況（南西より）
2 大屋敷Ｃ21号墳横穴式石室検出状況（北より）
3 大屋敷Ｃ21号墳敷石（上面）の状況（南より）
4 大屋敷Ｃ21号墳敷石（下面）の状況（南より）
37 1 大屋敷Ｃ21号墳右側壁の状況（南東より）
2 大屋敷Ｃ21号墳左側壁の状況（南西より）
3 大屋敷Ｃ21号墳奥壁の状況（南より）
4 大屋敷Ｃ21号墳立柱石の状況（北より）
38 1 大屋敷Ｃ21号墳基底石の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ21号墳墓壙の状況（南より）
3 大屋敷Ｃ21号墳前庭遺物出土状況（南より）
4 大屋敷Ｃ21号墳羨道遺物出土状況（南西より）
5 大屋敷Ｃ21号墳玄室遺物出土状況（南東より）
39 1 大屋敷Ｃ22号墳調査前の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ22号墳全景（南より）
40 1 大屋敷Ｃ22号墳横穴式石室検出状況（南より）
2 大屋敷Ｃ22号墳横穴式石室完掘状況（北より）
3 大屋敷Ｃ22号墳奥壁の状況（南より）
4 大屋敷Ｃ22号墳立柱石の状況（北より）
41 1 大屋敷Ｃ22号墳右側壁の状況（北東より）
2 大屋敷Ｃ22号墳左側壁の状況（北西より）
42 1 大屋敷Ｃ22号墳玄室遺物出土状況（北東より）
2 大屋敷Ｃ22号墳羨道遺物出土状況（南より）
3 大屋敷Ｃ22号墳羨道遺物出土状況（南東より）
4 大屋敷Ｃ22号墳基底石の状況（南より）
5 大屋敷Ｃ22号墳墓壙の状況（南より）
43 1 大屋敷Ｃ23号墳全景（南より）
2 大屋敷Ｃ23号墳横穴式石室完掘状況（南より）
3 大屋敷Ｃ24号墳横穴式石室検出状況（南より）
44 1 大屋敷Ｃ24号墳全景（南より）
2 大屋敷Ｃ24号墳横穴式石室完掘状況（南より）
3 大屋敷Ｃ24号墳奥壁の状況（南より）
45 1 大屋敷Ｃ24号墳墓道遺物出土状況（南より）
2 大屋敷Ｃ24号墳横穴式石室遺物出土状況（南西より）
3 大屋敷Ｃ24号墳基底石の状況（南より）
4 大屋敷Ｃ24号墳墓壙の状況（南より）
46 1 大屋敷Ｃ25号墳横穴式石室検出状況（南より）
2 大屋敷Ｃ25号墳横穴式石室完掘状況（南より）
3 大屋敷Ｃ25号墳基底石の状況（南より）
4 大屋敷Ｃ25号墳墓壙の状況（南より）
47 1 大屋敷Ｃ26号墳横穴式石室検出状況（南より）
2 大屋敷Ｃ26号墳全景（南より）
3 大屋敷Ｃ26号墳横穴式石室完掘状況（南より）
4 大屋敷Ｃ26号墳墓道遺物出土状況（南より）
48 1 大屋敷Ｃ26号墳奥壁の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ26号墳右側壁の状況（東より）
3 大屋敷Ｃ26号墳左側壁の状況（西より）
4 大屋敷Ｃ26号墳基底石の状況（南より）
5 大屋敷Ｃ26号墳墓壙の状況（南より）
49 1 大屋敷Ｃ27号墳全景（南より）
2 大屋敷Ｃ27号墳横穴式石室検出状況（南より）
3 大屋敷Ｃ27号墳横穴式石室完掘状況（南より）
50 1 大屋敷Ｃ27号墳敷石（下面）の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ27号墳基底石の状況（南より）
3 大屋敷Ｃ27号墳墓壙の状況（南より）
51 1 大屋敷Ｃ28号墳調査前の状況（南より）
2 大屋敷Ｃ28号墳全景（南西より）
52 1 大屋敷Ｃ28号墳墳丘南側盛土の状況（南東より）
2 大屋敷Ｃ28号墳横穴式石室完掘状況（南より）
3 大屋敷Ｃ29号墳全景（南より）
53 1 大屋敷Ｃ29号墳横穴式石室検出状況（南より）
2 大屋敷Ｃ29号墳横穴式石室完掘状況①（南より）
3 大屋敷Ｃ29号墳横穴式石室完掘状況②（南より）
4 大屋敷Ｃ29号墳奥壁の状況（南より）
54 1 大屋敷Ｃ29号墳右側壁の状況（東より）
2 大屋敷Ｃ29号墳左側壁の状況（西より）
3 大屋敷Ｃ29号墳墓壙の状況（南より）
55 1 大屋敷Ｃ30号墳全景（南より）
2 大屋敷Ｃ30号墳横穴式石室検出状況（南より）
3 大屋敷Ｃ30号墳横穴式石室完掘状況（南より）
56 1 大屋敷Ｃ30号墳石室遺物出土状況①（東より）
2 大屋敷Ｃ30号墳墓道遺物出土状況（南より）
3 大屋敷Ｃ30号墳石室遺物出土状況②（西より）
4 大屋敷Ｃ30号墳奥壁の状況（南より）
5 大屋敷Ｃ30号墳立柱石の状況（北より）

57　1　大屋敷Ｃ30号墳右側壁の状況（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ30号墳左側壁の状況（西より）
　　3　大屋敷Ｃ30号墳基底石の状況（南より）
58　1　大屋敷Ｃ31号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ31号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ31号墳横穴式石室完掘状況（南より）
59　1　大屋敷Ｃ31号墳周溝遺物出土状況①（南より）
　　2　大屋敷Ｃ31号墳周溝遺物出土状況②（北西より）
　　3　大屋敷Ｃ31号墳石室遺物出土状況（南東より）
　　4　大屋敷Ｃ31号墳基底石の状況（南より）
　　5　大屋敷Ｃ31号墳左側壁の状況（南西より）
　　6　大屋敷Ｃ31号墳右側壁の状況（南東より）
60　1　大屋敷Ｃ32号墳全景（東より）
　　2　大屋敷Ｃ32号墳横穴式石室検出状況（東より）
　　3　大屋敷Ｃ32号墳右側壁の状況（北東より）
61　1　大屋敷Ｃ33号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ33号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ33号墳横穴式石室完掘状況（南より）
62　1　大屋敷Ｃ33号墳閉塞石の状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ33号墳右側壁の状況（東より）
　　3　大屋敷Ｃ33号墳左側壁の状況（西より）
63　1　大屋敷Ｃ33号墳敷石の状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ33号墳奥壁の状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ33号墳基底石の状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ33号墳石室遺物出土状況（西より）
　　5　大屋敷Ｃ33号墳周溝遺物出土状況（南より）
64　1　大屋敷Ｃ34号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ34号墳基底石の状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ34号墳奥壁の状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ34号墳左側壁の状況（西より）
65　1　大屋敷Ｃ35号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ35号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ35号墳横穴式石室完掘状況（南より）
66　1　大屋敷Ｃ35号墳右側壁の状況（東より）
　　2　大屋敷Ｃ35号墳左側壁の状況（西より）
　　3　大屋敷Ｃ35号墳基底石の状況（南より）
67　1　大屋敷Ｃ36号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ36号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ36号墳横穴式石室完掘状況（南より）
68　1　大屋敷Ｃ36号墳右側壁の状況（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ36号墳左側壁の状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ36号墳石室遺物出土状況（北東より）
69　1　大屋敷Ｃ36号墳立柱石の状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ36号墳奥壁の状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ36号墳基底石の状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ36号墳墓壙の状況（南より）
70　1　大屋敷Ｃ37号墳調査前の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ37号墳全景（南より）
71　1　大屋敷Ｃ38号墳調査前の状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ38号墳全景（北より）
72　1　大屋敷Ｃ38号墳盛土の状況①（北より）
　　2　大屋敷Ｃ38号墳盛土の状況②（北西より）
　　3　大屋敷Ｃ38号墳完掘状況（北東より）
73　1　大屋敷Ｃ39号墳調査前の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ39号墳全景（南より）
74　1　大屋敷Ｃ39号墳横穴式石室完掘状況（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ39号墳横穴式石室完掘状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ39号墳石室遺物出土状況（北西より）
　　4　大屋敷Ｃ39号墳周溝遺物出土状況（南西より）
75　1　大屋敷Ｃ40・Ｃ41号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ40号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ40号墳横穴式石室完掘状況（南より）
76　1　大屋敷Ｃ40号墳左側壁の状況（南西より）
　　2　大屋敷Ｃ40号墳基底石の状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ41号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ41号墳横穴式石室完掘状況（南より）
77　1　大屋敷Ｃ41号墳奥壁の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ41号墳左側壁の状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ41号墳右側壁の状況（南東より）
　　4　大屋敷Ｃ41号墳基底石の状況（南より）
78　1　大屋敷Ｃ41号墳遺物出土状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ41号墳遺物出土状況（南東より）
　　3　大屋敷Ｃ42号墳調査前の状況（南より）
79　1　大屋敷Ｃ42号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ42号墳横穴式石室完掘状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ42号墳墓壙の状況（南より）
80　1　大屋敷Ｃ42号墳右側壁裏込めの状況（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ42号墳左側壁裏込めの状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ42号墳墳丘盛土の状況①（南西より）
　　4　大屋敷Ｃ42号墳墳丘盛土の状況②（南東より）
81　1　大屋敷Ｃ42号墳奥壁の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ42号墳奥壁下部の状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ42号墳石室遺物出土状況（北東より）
　　4　大屋敷Ｃ42号墳周溝遺物出土状況（北東より）
82　1　大屋敷Ｃ43・Ｃ44号墳全景（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ43号墳全景（南より）
83　1　大屋敷Ｃ43号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ43号墳横穴式石室完掘状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ43号墳奥壁の状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ43号墳立柱石の状況（北より）
84　1　大屋敷Ｃ43号墳右側壁の状況（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ43号墳左側壁の状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ43号墳裏込めの状況（南西より）
85　1　大屋敷Ｃ43号墳石室遺物出土状況①（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ43号墳石室遺物出土状況②（北東より）
　　3　大屋敷Ｃ43号墳墓道遺物出土状況（東より）
　　4　大屋敷Ｃ43号墳周溝遺物出土状況（北東より）

86　1　大屋敷Ｃ43号墳裏込めの状況（南西より）
　　2　大屋敷Ｃ43号墳裏込めの状況（東より）
　　3　大屋敷Ｃ43号墳基底石の状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ43号墳墓壙の状況（南より）
87　1　大屋敷Ｃ43・Ｃ44号墳の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ44号墳検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ44号墳横穴式石室完掘状況（南より）
88　1　大屋敷Ｃ45号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ45号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ45号墳横穴式石室完掘状況（南より）
89　1　大屋敷Ｃ45号墳左側壁の状況（南西より）
　　2　大屋敷Ｃ45号墳右側壁の状況（南東より）
　　3　大屋敷Ｃ45号墳奥壁の状況（南より）
90　1　大屋敷Ｃ45号墳閉塞石の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ45号墳基底石の状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ46号墳全景（南より）
91　1　大屋敷Ｃ46号墳横穴式石室検出状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ46号墳横穴式石室完掘状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ46号墳奥壁の状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ46号墳立柱石の状況（北より）
92　1　大屋敷Ｃ46号墳玄室右側壁の状況（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ46号墳玄室左側壁の状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ46号墳石室遺物出土状況（南東より）
　　4　大屋敷Ｃ46号墳石室遺物出土状況（東より）
93　1　大屋敷Ｃ46号墳基底石の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ46号墳墓壙の状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ46号墳裏込めの状況（南東より）
　　4　大屋敷Ｃ46号墳裏込めの状況（南東より）
94　1　大屋敷Ｃ47号墳全景（南西より）
　　2　大屋敷Ｃ47号墳石室完掘状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ47号墳遺物出土状況（北西より）
95　1　大屋敷Ｃ48号墳調査前の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ48号墳全景（南より）
96　1　大屋敷Ｃ48号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ48号墳横穴式石室完掘状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ48号墳左側壁の状況（南西より）
　　4　大屋敷Ｃ48号墳右側壁の状況（南東より）
97　1　大屋敷Ｃ48号墳遺物出土状況（東より）
　　2　大屋敷Ｃ48号墳周溝南側遺物出土状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ49号墳全景（南西より）
98　1　大屋敷Ｃ49号墳横穴式石室検出状況（南西より）
　　2　大屋敷Ｃ49号墳横穴式石室完掘状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ49号墳右側壁の状況（南東より）
　　4　大屋敷Ｃ49号墳左側壁の状況（南西より）
　　5　大屋敷Ｃ49号墳奥壁の状況（南西より）
　　6　大屋敷Ｃ49号墳横穴式石室閉塞石の状況（南より）
99　1　大屋敷Ｃ49号墳石室遺物出土状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ49号墳基底石の状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ50号墳調査前の状況（南より）
100　1　大屋敷Ｃ50号墳全景①（南より）
　　2　大屋敷Ｃ50号墳全景②（南より）
101　1　大屋敷Ｃ50号墳全景③（南より）
　　2　大屋敷Ｃ50号墳横穴式石室完掘状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ50号墳横穴式石室完掘状況（北より）
102　1　大屋敷Ｃ50号墳右側壁の状況（北東より）
　　2　大屋敷Ｃ50号墳左側壁の状況（北西より）
　　3　大屋敷Ｃ50号墳奥壁の状況（南より）
　　4　大屋敷Ｃ50号墳立柱石の状況（北より）
103　1　大屋敷Ｃ50号墳基底石の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ50号墳墓壙の状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ50号墳玄室遺物出土状況（北東より）
　　4　大屋敷Ｃ50号墳羨道遺物出土状況（南東より）
104　1　大屋敷Ｃ50号墳石室裏込めの状況（南西より）
　　2　大屋敷Ｃ50号墳盛土の状況（南より）
105　1　大屋敷Ｃ51号墳全景（北より）
　　2　大屋敷Ｃ51号墳横穴式石室検出状況（北より）
　　3　大屋敷Ｃ51号墳横穴式石室完掘状況（北より）
106　1　大屋敷Ｃ51号墳奥壁の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ51号墳立柱石の状況（北より）
　　3　大屋敷Ｃ51号墳左側壁の状況（北西より）
　　4　大屋敷Ｃ51号墳右側壁の状況（北東より）
107　1　大屋敷Ｃ51号墳周溝遺物出土状況（西より）
　　2　大屋敷Ｃ51号墳石室遺物出土状況①（北東より）
　　3　大屋敷Ｃ51号墳石室遺物出土状況②（南西より）
　　4　大屋敷Ｃ51号墳閉塞石の状況（南より）
108　1　大屋敷Ｃ51号墳基底石の状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ51号墳墓壙の状況（北より）
　　3　大屋敷Ｃ52号墳全景（南より）
　　4　大屋敷Ｃ52号墳基底石の状況（南より）
109　1　大屋敷Ｃ53号墳全景（南より）
　　2　大屋敷Ｃ53号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　3　大屋敷Ｃ53号墳横穴式石室完掘状況（南より）
110　1　大屋敷Ｃ53号墳立柱石の状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ53号墳左側壁の状況（南西より）
　　3　大屋敷Ｃ53号墳右側壁の状況（南東より）
111　1　大屋敷Ｃ53号墳遺物出土状況（南東より）
　　2　大屋敷Ｃ53号墳遺物出土状況（北東より）
　　3　大屋敷Ｃ53号墳基底石の状況（南西より）
　　4　大屋敷Ｃ53号墳墓壙の状況（南西より）
112　1　大屋敷Ｃ54号墳全景（北より）
　　2　大屋敷Ｃ54号墳横穴式石室検出状況（北より）
　　3　大屋敷Ｃ54号墳横穴式石室完掘状況（北より）
113　1　大屋敷Ｃ54号墳奥壁の状況（南より）
　　2　大屋敷Ｃ54号墳立柱石の状況（北より）
　　3　大屋敷Ｃ54号墳右側壁の状況（南東より）
　　4　大屋敷Ｃ54号墳左側壁の状況（南西より）
114　1　大屋敷Ｃ54号墳基底石の状況（北より）
　　2　大屋敷Ｃ54号墳墓壙の状況（北より）
　　3　陥し穴（SF07）完掘状況（南より）

4　陥し穴(SF08)完掘状況(東より)
115　1　陥し穴(SF09)完掘状況(東より)
2　陥し穴(SF10)完掘状況(東より)
3　陥し穴(SF11)完掘状況(南より)
4　土坑(SF12)完掘状況(南より)
116　1　大屋敷Ｃ２号墳横穴式石室出土遺物
2　大屋敷Ｃ３号墳横穴式石室出土遺物
117　大屋敷Ｃ２・３号墳出土遺物
118　大屋敷Ｃ３・Ｃ６・Ｃ７号墳出土遺物
119　大屋敷Ｃ８～14・17号墳出土遺物
120　大屋敷Ｃ17・18号墳出土遺物
121　大屋敷Ｃ19号墳周溝出土遺物一括
122　大屋敷Ｃ19号墳周溝出土遺物
123　大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室出土遺物
124　1　大屋敷Ｃ19号墳横穴式石室出土遺物一括
2　大屋敷Ｃ20号墳横穴式石室出土遺物一括
125　大屋敷Ｃ20・21号墳出土遺物
126　大屋敷Ｃ21号墳出土遺物
127　大屋敷Ｃ21号墳出土遺物
128　大屋敷Ｃ22号墳出土遺物
129　大屋敷Ｃ22号墳出土遺物
130　大屋敷Ｃ22号墳出土遺物
131　大屋敷Ｃ22号墳出土遺物
132　大屋敷Ｃ24号墳出土遺物
133　大屋敷Ｃ24～Ｃ27号墳出土遺物
134　大屋敷Ｃ28号墳出土遺物
135　大屋敷Ｃ28・30号墳出土遺物
136　大屋敷Ｃ30号墳出土遺物
137　大屋敷Ｃ31号墳出土遺物
138　大屋敷Ｃ33・36号墳出土遺物
139　大屋敷Ｃ36・37号墳出土遺物
140　大屋敷Ｃ37号墳出土遺物
141　大屋敷Ｃ37号墳出土遺物
142　大屋敷Ｃ37・38号墳出土遺物
143　大屋敷Ｃ39号墳出土遺物
144　大屋敷Ｃ39号墳出土遺物
145　大屋敷Ｃ40・41号墳出土遺物
146　大屋敷Ｃ42号墳出土遺物
147　大屋敷Ｃ42号墳出土遺物
148　大屋敷Ｃ42号墳出土遺物
149　大屋敷Ｃ43号墳横穴式石室出土遺物
150　大屋敷Ｃ43号墳出土遺物
151　大屋敷Ｃ43号墳横穴式石室出土遺物
152　大屋敷Ｃ43号墳横穴式石室出土遺物
153　大屋敷Ｃ46号墳横穴式石室出土遺物
154　大屋敷Ｃ46号墳横穴式石室出土遺物
155　大屋敷Ｃ46号墳横穴式石室出土遺物
156　大屋敷Ｃ46号墳横穴式石室出土遺物
157　大屋敷Ｃ46号墳横穴式石室出土遺物
158　大屋敷Ｃ46～48号墳出土遺物
159　大屋敷Ｃ48・49号墳出土遺物
160　大屋敷Ｃ50号墳周溝出土遺物
161　大屋敷Ｃ50号墳周溝出土遺物
162　大屋敷Ｃ50号墳周溝出土遺物
163　大屋敷Ｃ50号墳周溝出土遺物
164　大屋敷Ｃ50号墳周溝出土遺物
165　大屋敷Ｃ50・51号墳出土遺物
166　大屋敷Ｃ51・53号墳出土遺物
167　大屋敷Ｃ53・54号墳出土遺物
168　３・４区遺構外出土須恵器
169　３区 SR06出土遺物
170　1　３・４区遺構外出土灰釉陶器
2　３・４区遺構外出土山茶碗
171　３・４区遺構外山茶碗ほか
172　1　３区遺構外出土瓦(凹面)
2　３区遺構外出土瓦(凸面)
173　１・３・４区遺構外出土山茶碗
174　1　３区遺構外出土石鏃
2　３区遺構外出土石鏃
3　３区遺構外出土銅銭
4　３区遺構外出土煙管
175　1　大屋敷１号窯検出状況遠景(西より)
2　大屋敷１号窯検出状況近景(西より)
3　大屋敷１号窯灰原の状況(西より)
176　1　大屋敷１号窯遺物出土状況(西より)
2　大屋敷１号窯遺物出土状況近景(西より)
177　1　大屋敷１号窯・灰原完掘状況遠景①(西より)
2　大屋敷１号窯・灰原完掘状況遠景②(西より)
178　1　大屋敷１号窯完掘状況近景(西より)
2　大屋敷１号窯土層堆積状況(南より)
179　1　大屋敷１号窯北壁の状況(南より)
2　大屋敷１号窯南壁の状況(北西より)
180　1　大屋敷１号窯灰原遺物出土状況①(西より)
2　大屋敷１号窯灰原遺物出土状況②(西より)
3　大屋敷１号窯灰原遺物出土状況③(西より)
181　1　大屋敷１号窯灰原土層堆積状況(Ａライン)(南より)
2　大屋敷１号窯灰原土層堆積状況(Ｂライン)(南より)
3　大屋敷１号窯灰原土層堆積状況(Ｃライン)(南より)
182　1　大屋敷１号窯断ち割り状況(西より)
2　SF06遺物出土状況(西より)
183　大屋敷１号窯出土灰釉陶器集合
184　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(碗集合)
185　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(碗高台)
186　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(無台碗・皿)
187　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(皿・托・無台碗)
188　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(碗①)
189　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(碗②)
190　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(碗③)
191　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(碗④)
192　大屋敷１号窯出土灰釉陶器(碗⑤)

193　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(碗内面・外面)
194　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(釉着陶器)
195　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(焼台付着陶器)
196　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(長頸壺・鉢)
197　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(長頸壺)
198　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(長頸壺)
199　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(鉢)
200　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(壺)
201　大屋敷1号窯出土焼台付着灰釉陶器
202　大屋敷1号窯出土灰釉陶器(風字硯)
203　大屋敷1号窯出土風字硯・窯道具
204　大屋敷1号窯灰釉陶器・窯道具ほか
205　大屋敷6号窯表面採集遺物(鬼瓦・焼台)
206　大屋敷6号窯関連遺物
207　大屋敷6号窯関連遺物

第Ⅴ章　大屋敷１号窯の調査

第１節　宮口古窯跡群の概要

１　概要

（１）宮口古窯跡群の分布（第320図）

宮口古窯跡群は、第Ⅲ章にて記述したように、浜北市西部の丘陵斜面に築窯された灰釉陶器、山茶碗を焼成した窯跡群であり、東から西ノ谷古窯跡（群）、大屋敷古窯跡群、吉名古窯跡群、譲栄古窯跡群、新池古窯跡群、梶池古窯跡群、土取古窯跡群に区分されている。

さらに、西ノ谷古窯の東には８世紀の瓦や須恵器を生産した東ノ谷古窯が所在しており、また、浜北市於呂地区の浜北段丘の斜面には須恵器や瓦を焼成した篠場瓦窯跡群が操業されている。

（２）宮口古窯跡群における既往の調査と研究状況

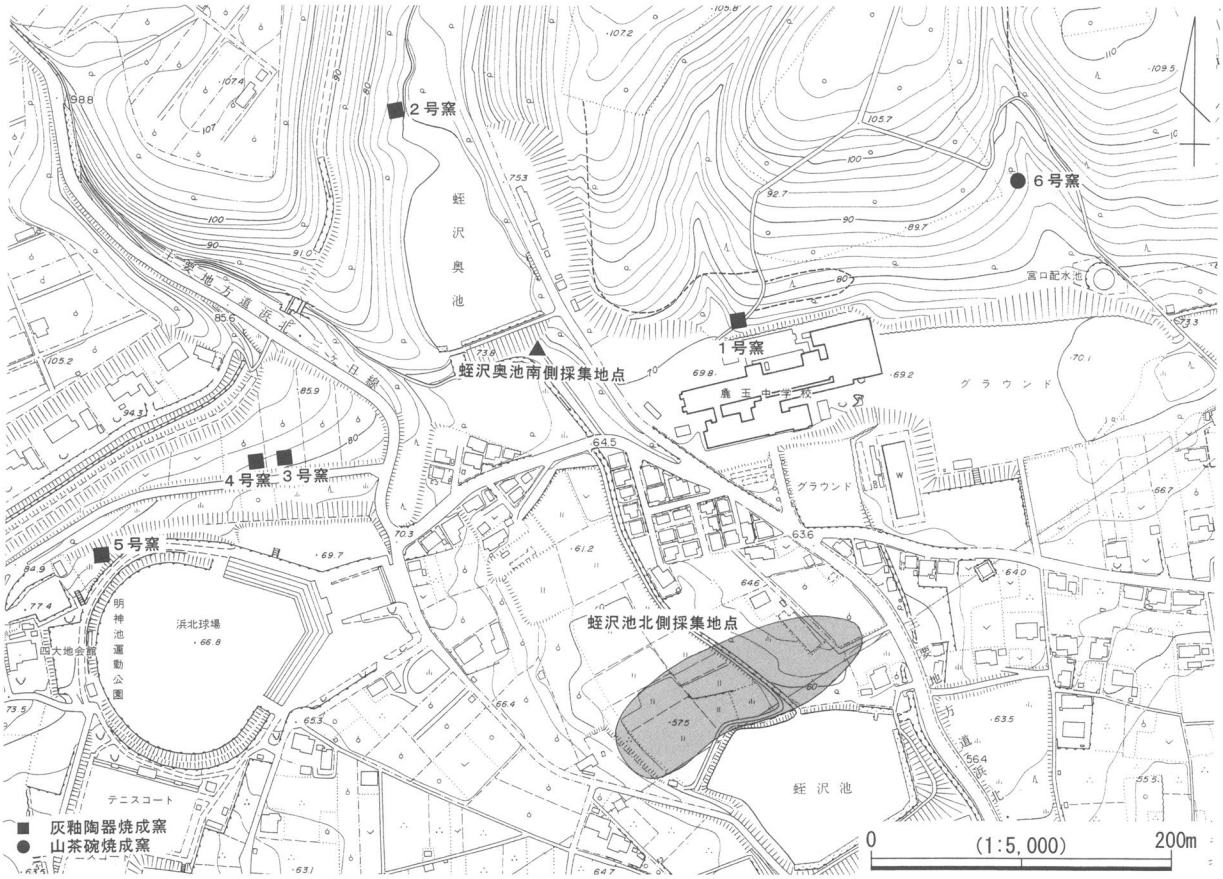
既往の調査　静岡大学教育学部浜松分校歴史研究部が1959（昭和34）年に吉名１・２号窯の調査を実施し、簡単な報告がなされている（静岡大学1959）。その後しばらく発掘は行われず、1987・88（昭和62・63）年に浜北市営明神池運動公園（浜北球場）の造成にあたり、吉名５・６号窯、大屋敷５号窯の３基が調査され、1988年に概要報告（浜北市教委1988）がなされ、1989年に正式報告書が刊行されている（浜北市教委1989）。また、『静岡県史』の編纂にあたり、吉名１号窯、大屋敷５号窯が取り上げられ、「宮口古窯跡群」として紹介されている（静岡県1992，平野1992）。

この後、10年間は地道な採集による研究が行われていたが、2000（平成12）年に静岡県埋蔵文化財調査研究所が、今回報告する大屋敷１号窯の調査を実施した。

研究状況　宮口古窯跡群の研究状況に関してみておきたい。

古くから灰釉陶器や山茶碗が表面採集されており、窯跡として認知されていた。上述した静岡大学の調査により、様相の一端が明らかにされた。この調査以降、しばらく進展は見られないが、1980年代中

第320図　宮口古窯跡群の分布



第321図　大屋敷古窯跡群の分布

頃以降、松井一明氏により表面採集資料を基礎にした研究が進められた。氏は1985年の資料紹介を契機に吉名５・６号窯、大屋敷５号窯の発掘調査資料を採集資料で補い、猿投古窯跡群の編年を基準にした宮口古窯跡群の灰釉陶器・山茶碗の変遷をまとめ、またその流通に関しても述べ、当窯跡群の出現の契機や変遷過程、流通範囲等、さまざまな問題に触れ、大きな成果を挙げている(松井1985・89a・89b・2004ほか)。

また、静岡県史にも取り上げられるなど、全国的に著名な窯跡群となった。

その後、贄元洋氏が『静岡県考古学研究』29号の中で「古代遠江の食膳具」を検討する中で宮口古窯跡群について触れ、宮口窯は愛知県猿投窯からの直接伝播ではなく、愛知県二川窯などからの二次的な伝播により生産を開始し、開始後は独自の変遷を遂げたと評価している(贄1997)。

(３)大屋敷古窯跡群の分布(第321図)

大屋敷古窯跡群は、浜北市営明神池運動公園北側の北麓丘陵から蛭沢奥池を挟んで龕玉中学校北側の丘陵斜面に位置する古窯跡群で、現在までに東西800m、南北300mの範囲に灰釉陶器焼成窯５基(１～５号窯)、山茶碗焼成窯１基(６号窯)、総数６基が確認されている。大屋敷３～５号窯が、蛭沢奥池西側の南側を向く丘陵斜面に築窯され、大屋敷２号窯は、蛭沢奥池の北側の斜面に築窯されている。一方、大屋敷１号窯は蛭沢奥池から尾根を一本挟んだ谷部の東側斜面に築窯されており、６号窯は１号窯からさらに200mほど東側の谷の西側斜面に築窯される。この谷から200mほど東に行くと、西ノ谷古窯の所在する西ノ谷池がある。

2　窯の部位名称と灰釉陶器の器種名称

(1)窯構造(第322図)

第322図に窯の模式図と名称、計測位置を示した。

焚口　燃焼室に火を焚くための燃料(薪)を入れ、還元焔焼成する時に閉塞される部分。

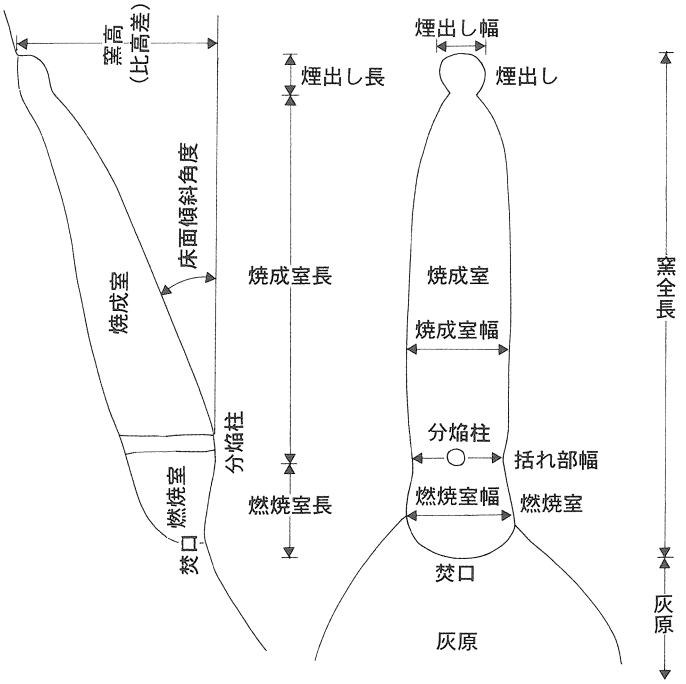
燃焼室　燃料(薪)が燃やされる部分。

焼成室　灰釉陶器を焼成する部分。

煙出し　煙を出す部分。

分焔柱　燃焼室と焼成室を区画し、熱効率を上げるために設置された円柱状の施設。

灰原　窯の下側に広がる灰や炭化物、焼成に失敗した灰釉陶器を廃棄する場所。

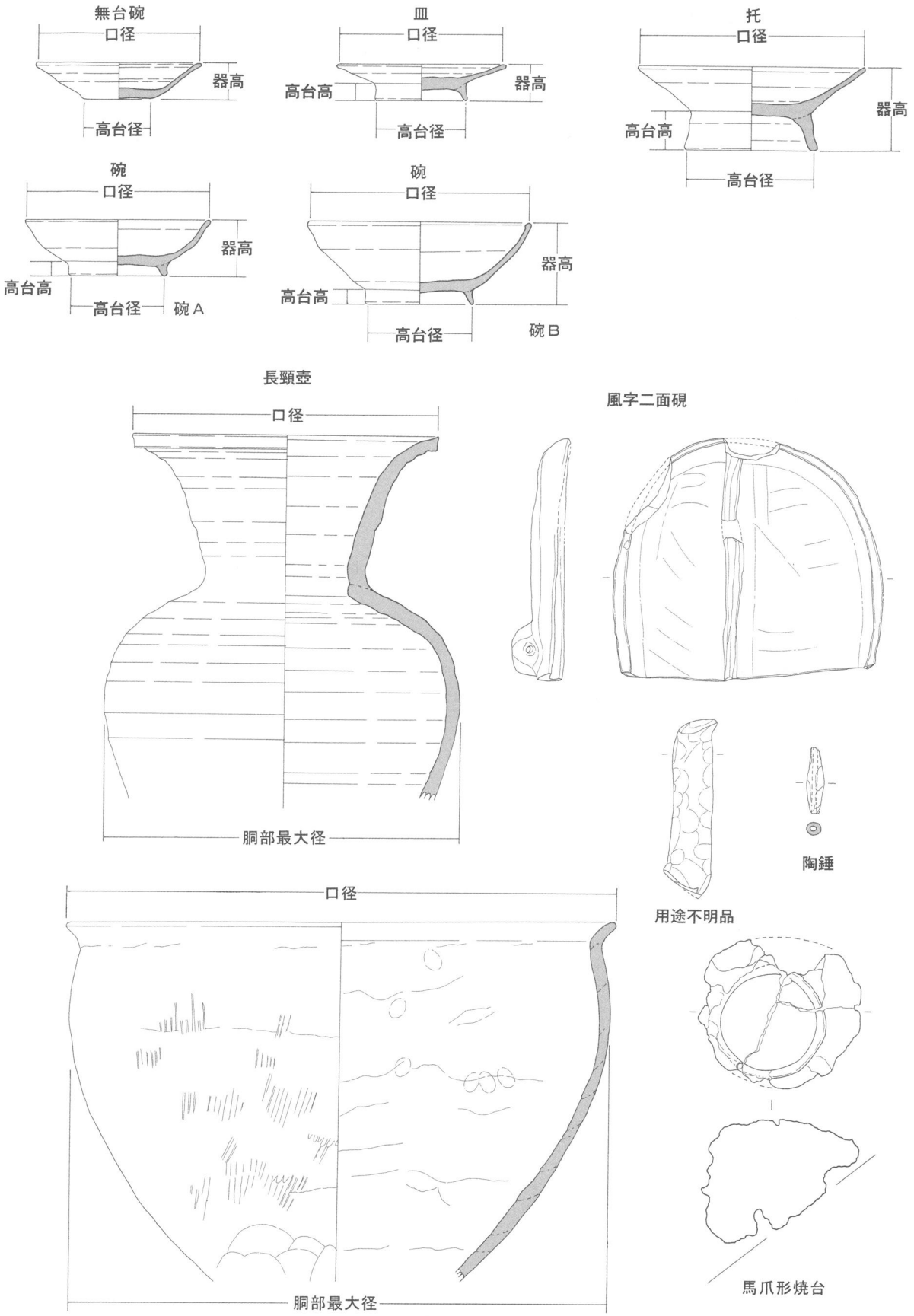


第322図　窯部位名称および計測位置図

(2)器種分類(第323図)

第323図のように碗、無台碗、皿、托、長頸壺、鉢、陶錘、窯道具の馬爪形焼台、窯道具と推測する棒状土製品に分類した。この他、輪花碗、甑が出土している。

また、碗、皿、托、長頸壺、鉢に関して観察表に掲載する計測部位を図示した。



第323図　大屋敷１号窯出土器種区分および計測位置図

第２節　大屋敷１号窯

１　大屋敷１号窯の構造

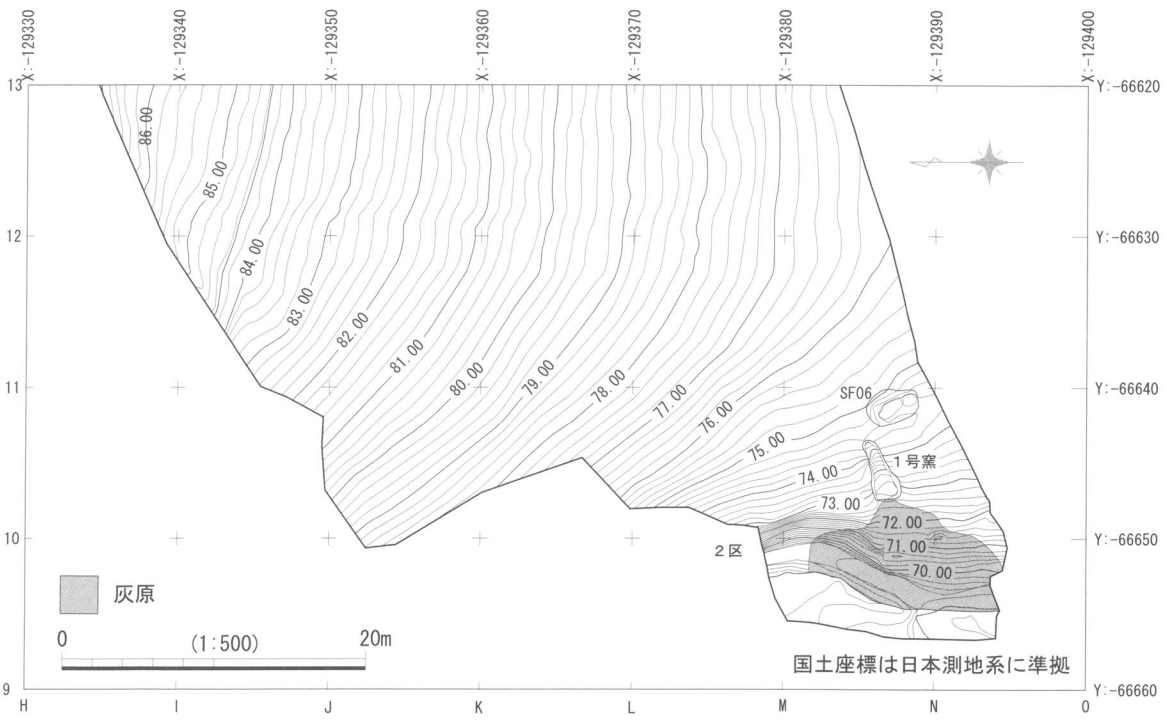
（１）立地（第320・321，324・325図，図版177）

大屋敷（おおやしき）１号窯は、浜北市立麁玉（あらたま）中学校体育館の北側の谷部に位置している。１区の尾根が、大屋敷Ｃ５号墳が所在する麁玉中学校の校門付近まで延びていたとするならば、谷を50mほど入った場所に築造されていたことになる。また、１区は標高80m、３区は標高77m前後で、谷底は標高69m前後であり、谷底と１区との比高差は約10m、３区との比高差は約８ｍをはかる。大屋敷１号窯は約30度の傾斜をもつ斜面の中腹、標高72.5～74.5mに築窯されており、地山①・②（第Ⅴ層１・2，第Ⅰ分冊第Ⅱ章参照）を現地表面より約１ｍ掘り込んで構築されている。

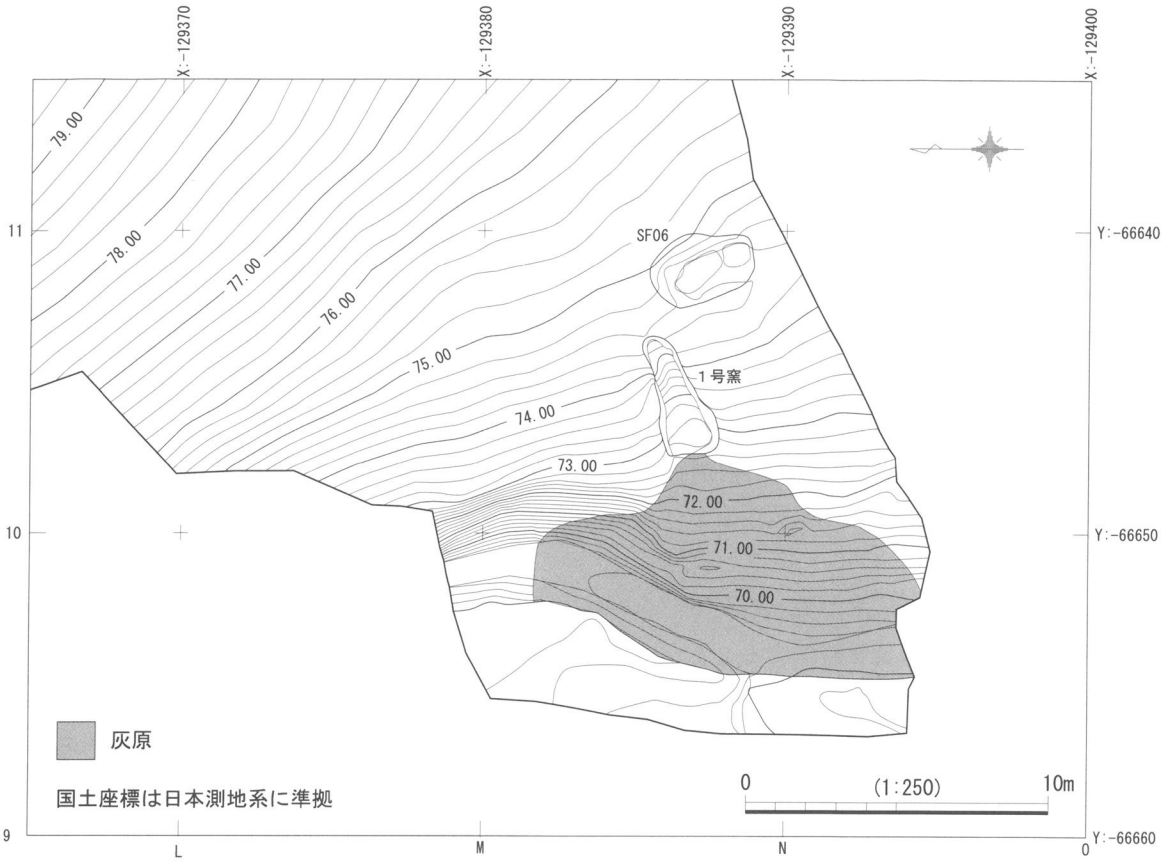
大屋敷１号窯は谷の東側（３区の西側）斜面に築窯された窖窯（あながま）である。谷の西側尾根が削られてしまっているため不明であるが、谷の西側斜面より東側斜面のほうが窯を築く、あるいは操業にあたり好都合であった可能性が高い。

また、大雨が降ると鉄砲水が流れるため、この谷の水量は豊富であったと想定でき、谷口部分を堰き止めれば、ある程度の水量を確保することができ、製品の運び出しなどに小舟が使用できた可能性もある。

自然環境をみておくと、古墳時代終末期に群集墳が築造された後は、今回の調査区内には人為的な痕跡（遺構・遺物）が出土していないため、大屋敷１号窯の操業段階まで人為が及ばず、古墳築造が終焉し、窯が築造されるまでの約300年間に樹木が繁茂していた可能性が高い。したがって、燃料材を得るためには好都合な自然条件になっていた可能性が高い（第５節２　樹種同定参照）。



第324図　２区地形測量図



第325図　大屋敷１号窯地形測量図

（２）窯体の構造（第326・327図，図版175・178・179・182）

大屋敷１号窯は、焚口の標高72.6m、最上部の標高約74.6m であり、谷底との比高差は約３ m をはかる。煙出しは、既に失われており確認することはできない。

構造　大屋敷１号窯は半地下式の無段無階式窖窯である。主軸は東西を向き、等高線にほぼ直交する。

平面形は燃焼室の幅が広く、焼成室部分で急激に狭まった後はほぼ同じ幅で伸びる無花果形（いちじくがた）を呈する。床面は焚口から燃焼室に向かって一旦（約0.2m）下がった後、約20度で緩やかに立ち上がって、焼成室へと続く。焼成室は約20度で傾斜し、焚口から約２ m の位置で約35度に変化し、やや急斜面となる。

大屋敷１号窯は残存長4.3m、燃焼室長1.3m、幅1.35m、深さ0.3m、焼成室残存長3.0m、焼成室の燃焼室側（床面）幅1.1m、燃焼室側深さ0.6m、先端（煙出し側）幅0.75m、深さ0.15m をはかる。

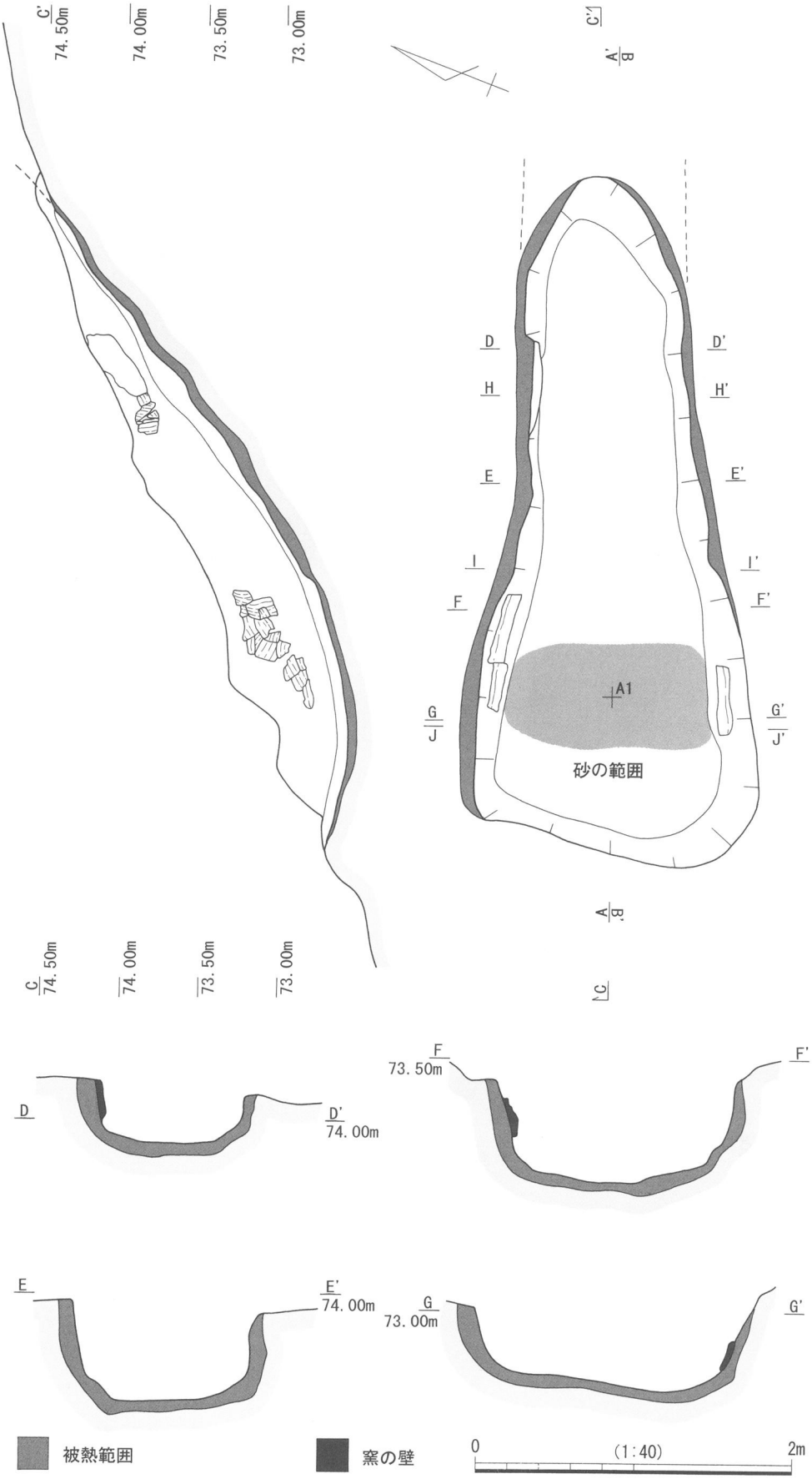
床面は地山をそのまま床面としており、貼床などの造作は確認できない。側壁はスサを多く含む粘土を指で強く撫で付けることにより貼り付けている。残存部位で、１枚、厚さ５cm 前後をはかり、残存する部分では継ぎ足しなどは確認できない。

なお、分焔柱は確認できなかった。

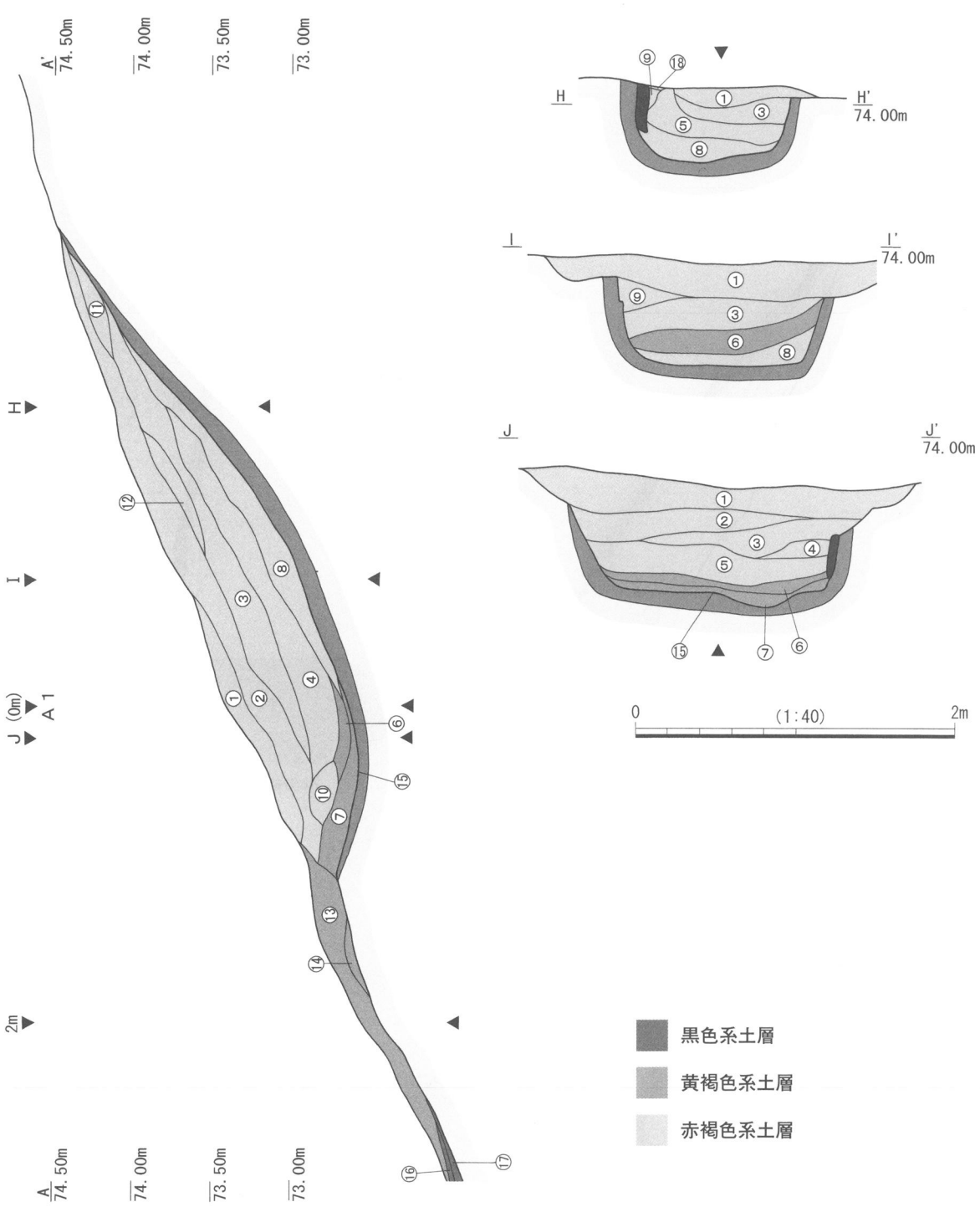
覆土　大屋敷１号窯内の土層は、天井が一度に崩落したような状況を想定することは困難であり、煙出方向から徐々に流れ込んだような状況を示している。

各土層には、灰釉陶器が含まれており、窯周辺に廃棄されていた灰釉陶器が流れ込んだような状況を示している。

なお、燃焼室の床面直上には薄らと厚さ５㎜以下の砂層が確認でき、焼成にあたり、窯道具が床面と釉着しないような工夫がなされていた可能性がある。



第326図　大屋敷１号窯実測図



第327図　大屋敷１号窯土層断面図

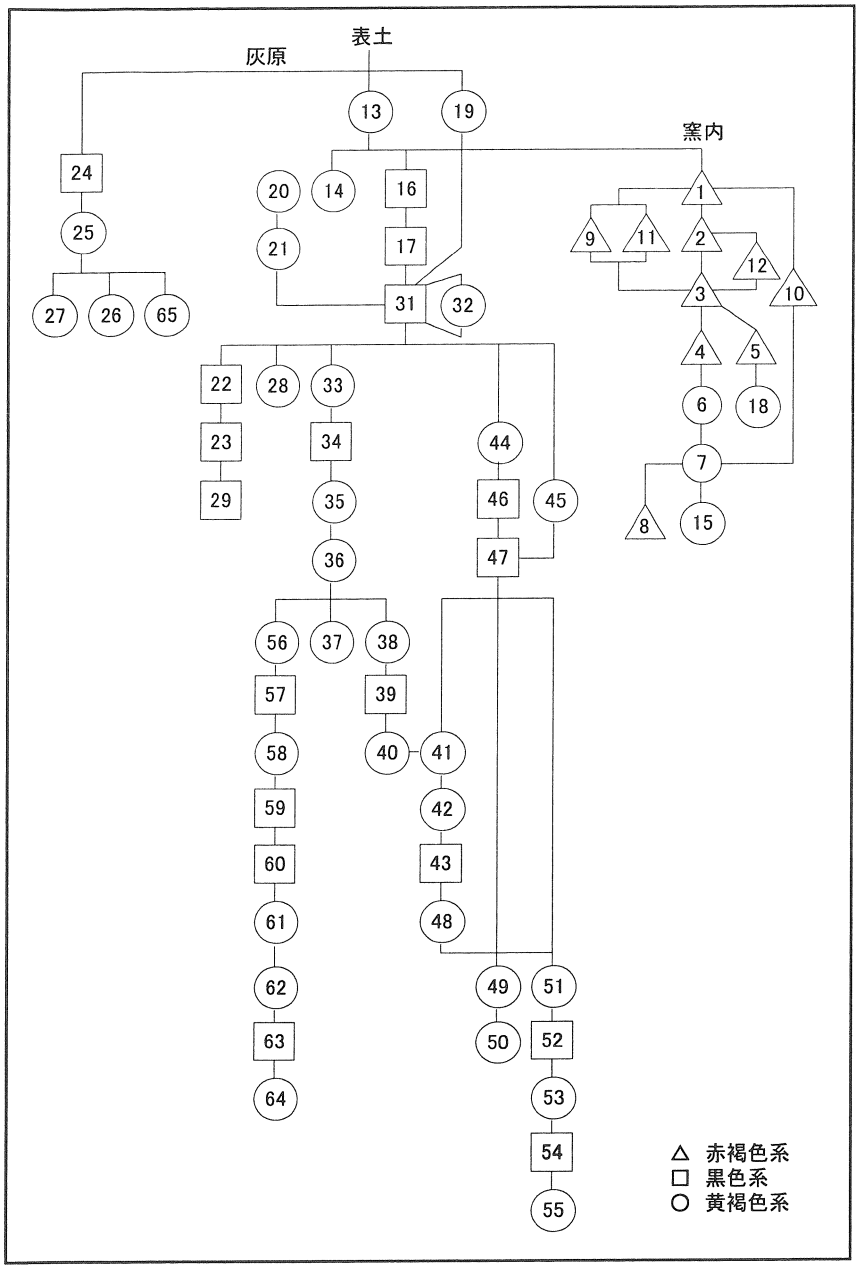
大屋敷１号窯・灰原土層注記（第327～330図）

窯内

1　褐色シルト　7.5YR4/4（灰釉陶器片を多く含む。窯壁片をやや多く含む。）
2　褐色シルト　7.5YR4/4（灰釉陶器片を多く含む。窯壁片をやや多く含む。）
3　褐色シルト　7.5YR4/4（灰釉陶器片・炭化物をやや多く含む。中型の窯壁片を多く含む。）
4　褐色シルト　7.5YR4/4（窯壁片をやや多く含む。）
5　褐色シルト　7.5YR4/4（大型の窯壁片を多く含む。炭化物をやや多く含む。）
6　にぶい黄褐色シルト　7.5YR4/3（窯壁片を多く含む。小礫をやや多く含む。）
7　灰黄褐色シルト　2.5Y5/2（灰・炭化物を多量に含む。窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
8　褐色～にぶい赤褐色シルト　7.5YR4/6～5YR4/4（窯壁片・灰釉陶器片若干含む。）
9　褐色～にぶい赤褐色シルト　7.5YR4/6～5YR4/4（窯壁片・灰釉陶器片やや多く含む。）
10　褐色窯壁　7.5YR4/4……窯壁の崩落
11　褐色シルト　7.5YR4/6（小型の窯壁片をやや多く含む。）
12　褐色シルト　7.5YR4/4（小型の窯壁片・灰釉陶器片を若干含む。）
15　灰色砂　10YR6/1（砂層）
18　にぶい黄褐色砂礫　7.5YR4/3（灰釉陶器片を若干含む。）……SR01

灰原

13　褐色シルト　10YR4/4（小礫を多量に含む。灰釉陶器片を若干含む。）
14　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（炭化物を多く含む。）
16　黒褐色シルト　10YR2/2（小型の窯壁片を若干、灰釉陶器片を若干含む。）
17　黒褐色シルト　10YR2/2（小型の窯壁片を若干、灰釉陶器片を若干含む。）
19　にぶい黄褐色砂礫　7.5YR4/3（灰釉陶器片を若干含む。）……SR01上の自然流路
20　にぶい黄褐色シルト　7.5YR4/3……攪乱
21　にぶい黄褐色シルト　7.5YR4/3……攪乱
22　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（灰釉陶器・窯壁をやや多く含む。）
23　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（灰釉陶器・窯壁をやや多く含む。）
24　黒褐色シルト　10YR2/2（炭化物を多量に含む。灰釉陶器片やや多く含む。）
25　にぶい黄褐色シルト　7.5YR4/3（灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。）
26　にぶい黄褐色シルト　7.5YR4/3（灰釉陶器片若干含む。）……地山の流れ込み
27　黄褐色砂礫　10YR5/6（灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。炭化物若干含む。）
28　黄褐色砂礫　10YR5/6（灰釉陶器片若干含む。）
29　黒褐色シルト　10YR2/2（炭化物・窯壁片・灰釉陶器片をやや多く含む。）
31　黒色シルト　10YR7/1～2.5YR2/1（灰釉陶器片を多く含む。窯壁片をやや多く含む。）
32　にぶい黄褐色砂礫　10YR4/3（灰釉陶器片・窯壁片を若干含む。）
33　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（炭化物を若干含む。）
34　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（炭化物を多く含む。灰釉陶器片をやや多く含む。窯壁片若干含む。）
35　黄褐色砂礫　10YR5/6（窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片・炭化物を若干含む。）
36　暗褐色シルト　10YR3/4（窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片・炭化物を若干含む。）
37　黄褐色シルト　10YR5/6（灰釉陶器片・窯壁片・炭化物を若干含む。）
38　黄褐色シルト　10YR5/6（窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片・炭化物を若干含む。）
39　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（炭化物を多く含む。灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。）
40　黄褐色砂礫　10YR5/6（灰釉陶器片・窯壁片を若干含む。）
41　暗褐色シルト　10YR3/4（窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
42　黄褐色シルト　10YR5/6（窯壁片を多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
43　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（炭化物を多く含む。灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。）
44　にぶい黄褐色砂礫　10YR4/3（灰釉陶器片・窯壁片を若干含む。）
45　にぶい黄褐色砂礫　10YR4/4（炭化物・灰釉陶器片を若干含む。）……旧地表の流れ込み。
46　黒褐色シルト　10YR2/2（炭化物・灰釉陶器・窯壁片をやや多く含む。）
47　黒褐色シルト　10YR2/2（炭化物・灰釉陶器片・窯壁片を多く含む。）
48　褐色シルト　7.5YR4/6（窯壁片を多く含む。灰釉陶器片を若干含む。）
49　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（灰釉陶器片・窯壁片・炭化物粒を多く含む。）
50　暗褐色シルト　10YR3/3（窯壁片多量に含む。灰釉陶器片・炭化物を多く含む。）
51　黄褐色シルト　10YR5/6（窯壁片を多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
52　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（炭化物を多く含む。灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。）
53　黄褐色シルト　10YR5/6（窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
54　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（灰釉陶器片をやや多く含む。）
55　黄褐色シルト　10YR5/6（窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
56　暗褐色シルト　10YR3/4（大型の窯壁をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
57　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（炭化物を多く含む。窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片を若干含む。）
58　暗褐色シルト　10YR3/4（大型の窯壁片・炭化物を多く含む。灰釉陶器片をやや多く含む。）
59　黒褐色シルト　10YR2/2（窯壁片・炭化物を多く含む。灰釉陶器片若干含む。）
60　黒色シルト　10YR17/1～2.5YR2/1（炭化物層。窯壁片・灰釉陶器片を多く含む。）
61　にぶい黄褐色～褐色砂礫混じりシルト　10YR4/3～7.5YR4/3（灰釉陶器片・窯壁若干含む。）
62　暗褐色シルト　10YR3/4（大型の窯壁片・炭化物を多く含む。灰釉陶器片やや多く含む。）
63　黒色シルト　10YR7/1～2.5YR2/1（炭化物層。窯壁片・灰釉陶器片若干含む。）
64　にぶい黄褐色砂礫　10YR4/3（大型の窯壁片を多く含む。灰釉陶器片やや多く含む。）
65　にぶい黄褐色シルト　10YR5/4（炭化物・焼土塊を若干含む。）



第328図　大屋敷１号窯・灰原土層序マトリックス

（３）灰原の構造（第328～330図，図版181）

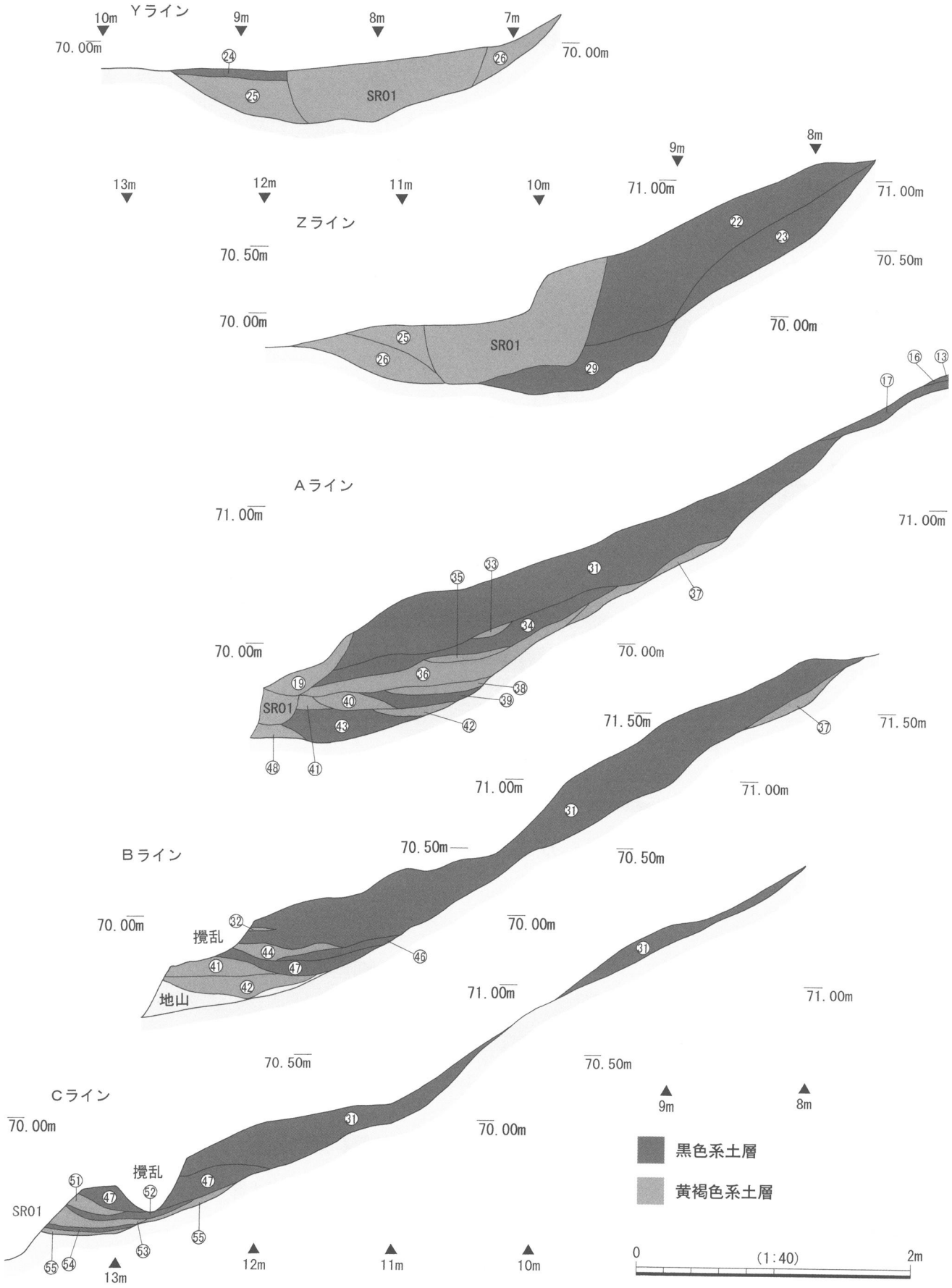
範囲　１号窯の斜面下部から谷底に広がる。灰原（物原）部分に現代の焼却炉やそのごみを棄てる土坑が掘削されていたため、灰原西側が破壊され、また灰原上部は攪乱されていたが、灰原は南北12m、東西６m、最深部で1.2mが残存していた。谷底に当たる部分は自然流路SR01によって灰や土砂が流され、灰釉陶器と上流の土砂が堆積していた。

堆積状況　土層の堆積状況は、斜面下部に向かって徐々に厚くなり、大きな攪乱や層位の乱れは確認できない。下層は窯壁を多く含み、灰釉陶器の少ない層（黄褐色土）と、炭化物や灰釉陶器を多く含む層（黒色土・黒褐色土）が、交互に堆積するような状況を示しており、上層は黒色土層（31・22層）が堆積している。

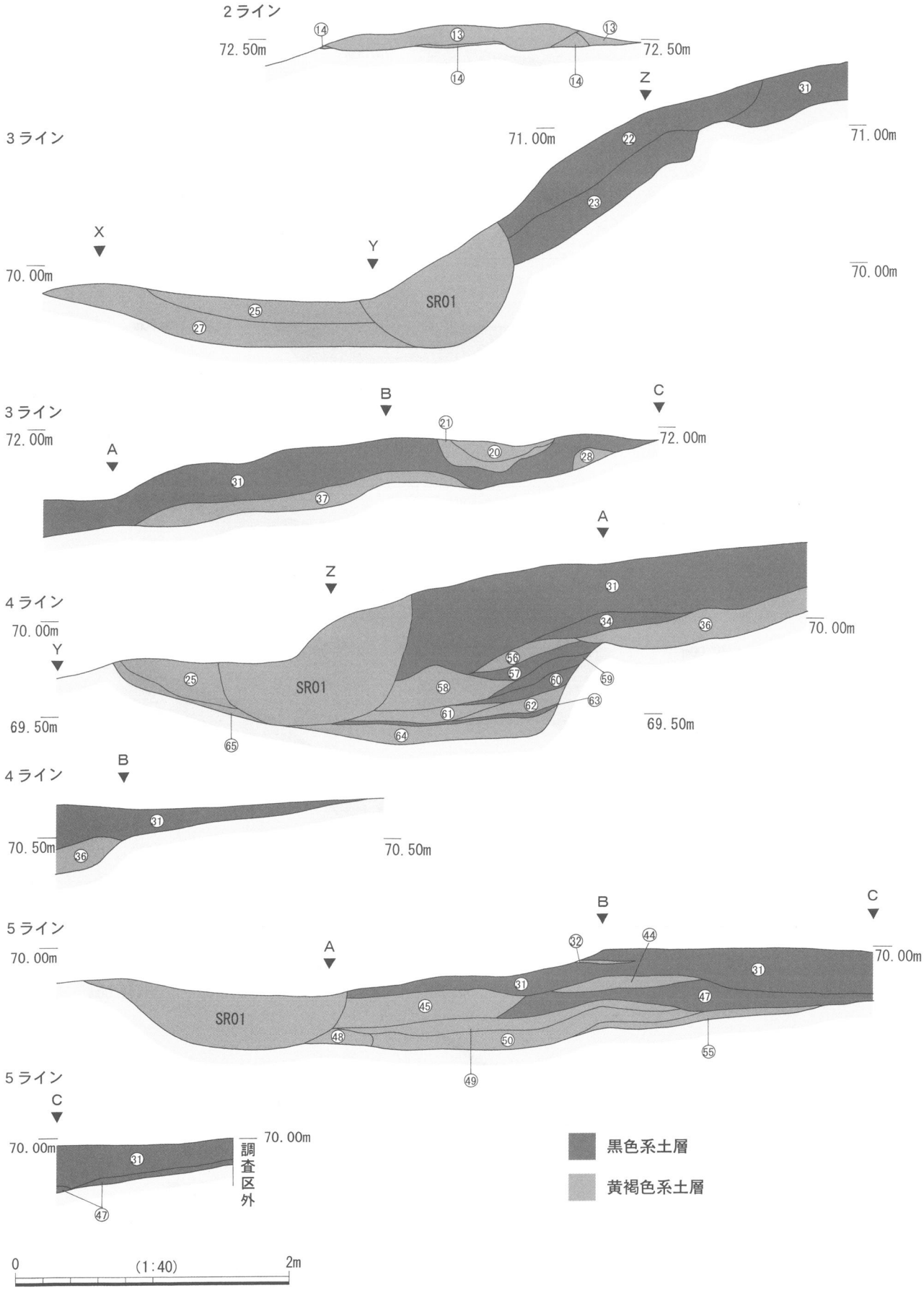
操業回数　黄褐色土には多量の窯壁の破片が含まれ、その間に黒色（黒褐色）土が堆積することから、最低４～５回は窯の部分的な修復が行われたことが判明する。

したがって、最低４回以上の大きな操業単位があったと推測することができる。

また、灰原上層の31層は、厚い黒色土の堆積であるが、中間に黄褐色土の堆積（32層）を確認することができ、31層の堆積途中でなんらかの中断があったと推測する。また、31層には窯壁も含まれるが、下層のように窯壁の破片で構成されるほどではないため、大量に窯壁が廃棄されることはなかったと想定する。したがって、大屋敷１号窯の最終段階は、窯の大きな改修・修復は行わずに操業していた可能性が高い。



第329図　大屋敷1号窯灰原土層堆積状況図①



第330図　大屋敷1号窯灰原土層堆積状況図②

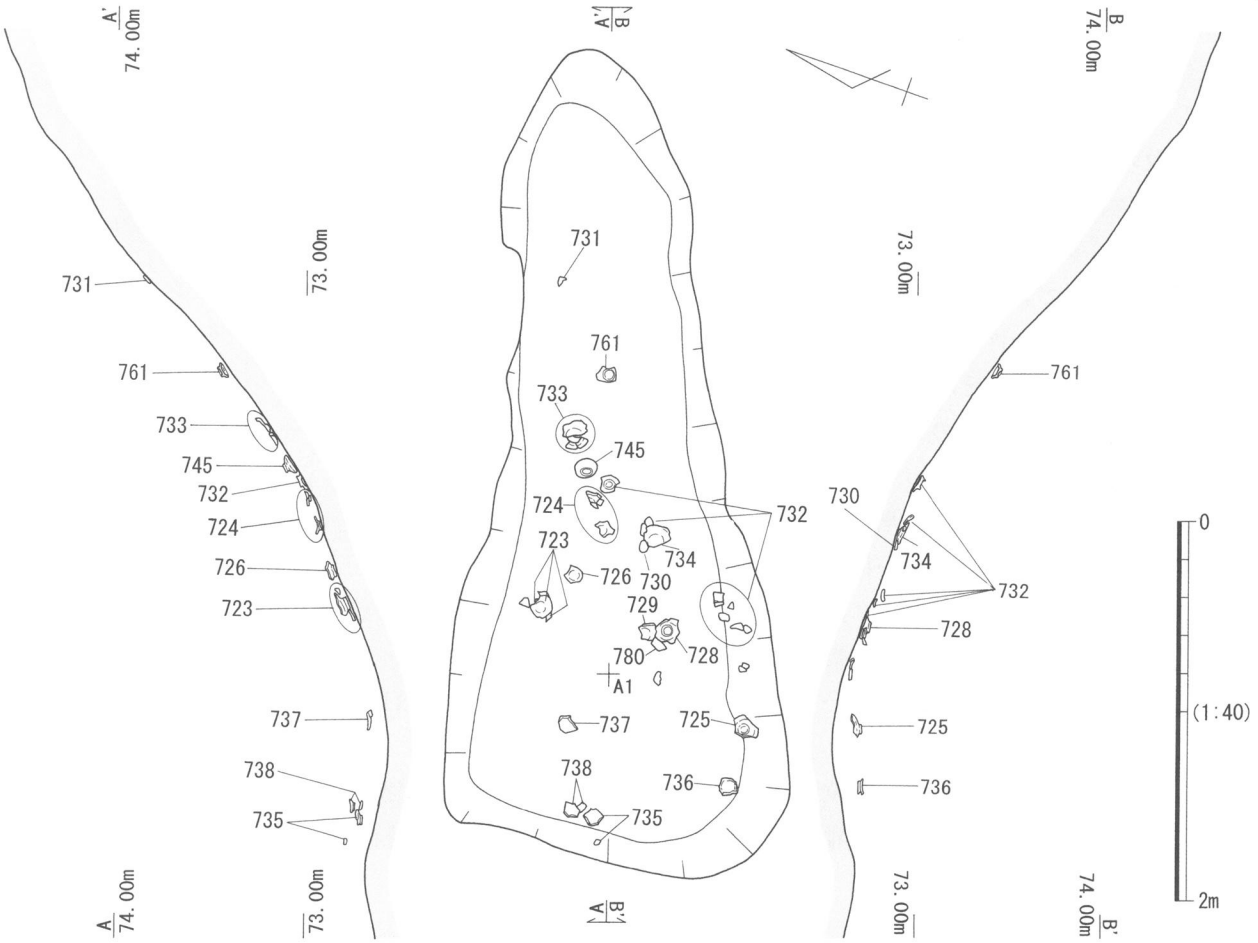
２　遺物出土状況

（１）窯（第331図，図版176）

窯の床面直上で出土した灰釉陶器の出土状況を第331図に図示した。焼台などは確認できず、また口縁部が上を向くものがあれば、下を向くものもあり、重ね焼きの状況で出土するものがないなど焼成時の原位置を保持して出土したものはなく、煙出しより流れ込んだような状況を示している。

また、床面直上から出土した灰釉陶器（第345図723～739，第346図745）は焼台として転用されたものが多く（第58表灰釉陶器観察表参照）、操業の最終段階に焼成された灰釉陶器ではない可能性が高い。

また、窯内の覆土より出土した灰釉陶器を第346～348図に図示した。これらは覆土に多量に含まれており、上層から下層まで量の多寡は確認できなかった。これらの灰釉陶器も焼台として転用されたものが多く確認できる。



第331図　大屋敷１号窯遺物出土状況図

（２）灰原（第332～335図，図版180）

①灰釉陶器の出土点数と出土位置（第332図）

大屋敷１号窯灰原から出土した壺・鉢類は、転用のため複数の箇所から出土しており、出土層位も安定していない。

一方、碗皿類は、焚口下部の谷底付近に多く出土しており、そこから離れることにより少なくなる傾向にある。

碗・皿の出土数は、黒色土層に多く、黄褐色土層に少ない。また、上層に多く、下層に少ない傾向がある。

碗	X	Y	Z	A	B	C	
2	14	3	1	6			
3	19	61	118	76	16		
4		26	119	198	117	21	
5				25	82	150	1052

無台碗	X	Y	Z	A	B	C	
2	1	0	0	1			
3	3	7	9	14			
4		1	13	27	10	0	
5				6	12	12	118

托	X	Y	Z	A	B	C	
2	1	0	0	0			
3	0	1	0	1	0		
4		1	0	1	1	2	
5				0	1	2	11

第332図　大屋敷１号窯出土灰釉陶器碗皿類グリッド別出土数

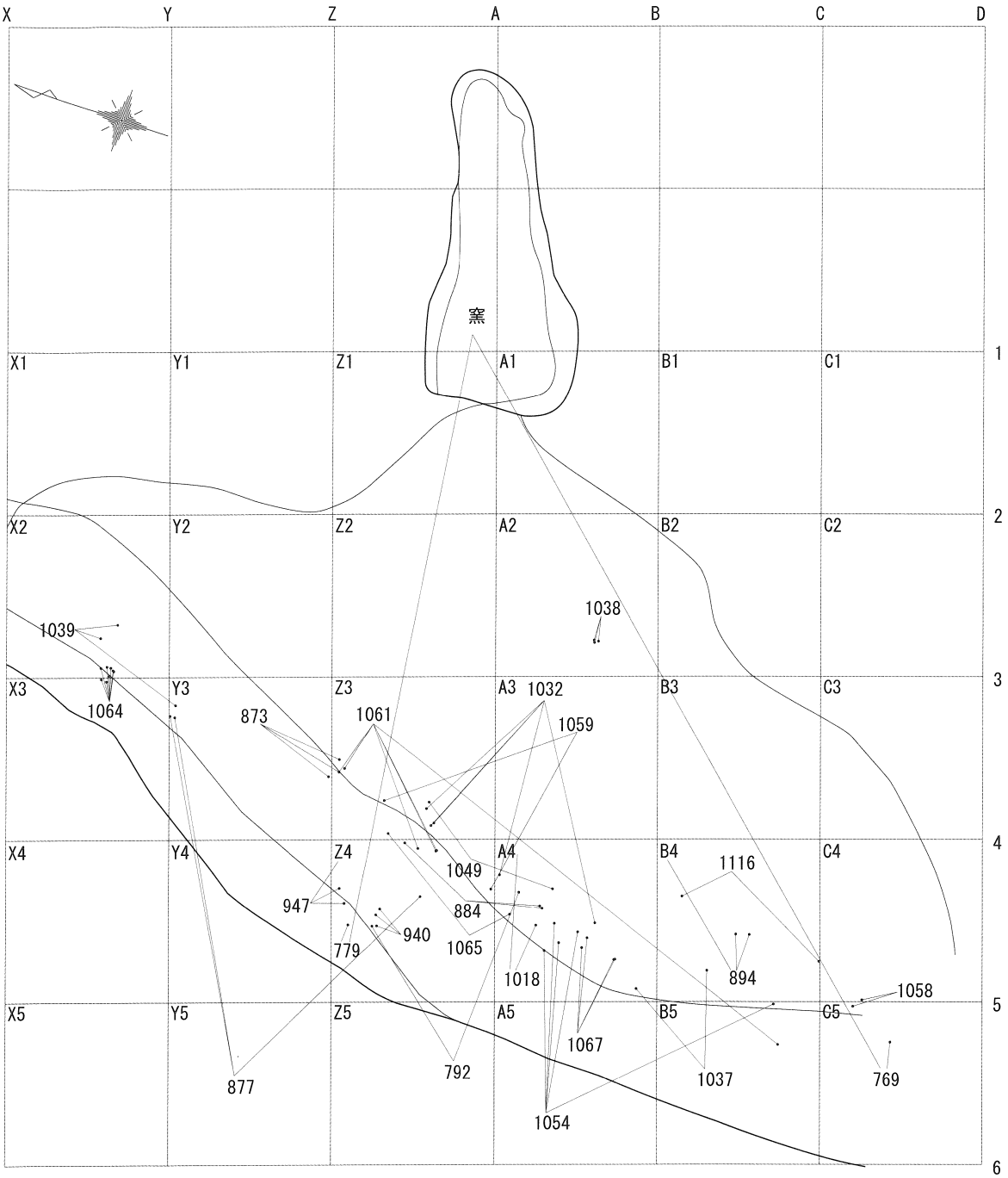
②灰釉陶器の接合状況（第333～335図，第54～56表）

複数のグリッドおよび複数の層位から出土した破片が接合した灰釉陶器を第54～56表に示し、その接合関係を第333～335図に示した。

複数の層位、複数のグリッドから出土している灰釉陶器は、碗皿類には少なく、壺・鉢類に多い。これは、碗皿類が2000個体以上出土しており、接合が難しかったことに起因する可能性が高い。

特徴的な接合状況は長頸壺（遺物番号788）であり、灰原北側のＸ２・Ｙ３区から南側のＢ３・５区にわたって接合し、層位も窯内、灰原上層（22・31層）、灰原下層（50・53層）で出土したものが接合している。また、長頸壺（1126）もＹ２・３区からＡ３グリッドにわたり接合し、層位も灰原上層（22・31層）と灰原下層（65層）から出土したものが接合している。このような複数のグリッド、上層・下層から出土した破片が接合する状況は碗（792・877・940・1061）、壺（1134・1135）、鉢（1158・1178・1198）などでも確認することができる。

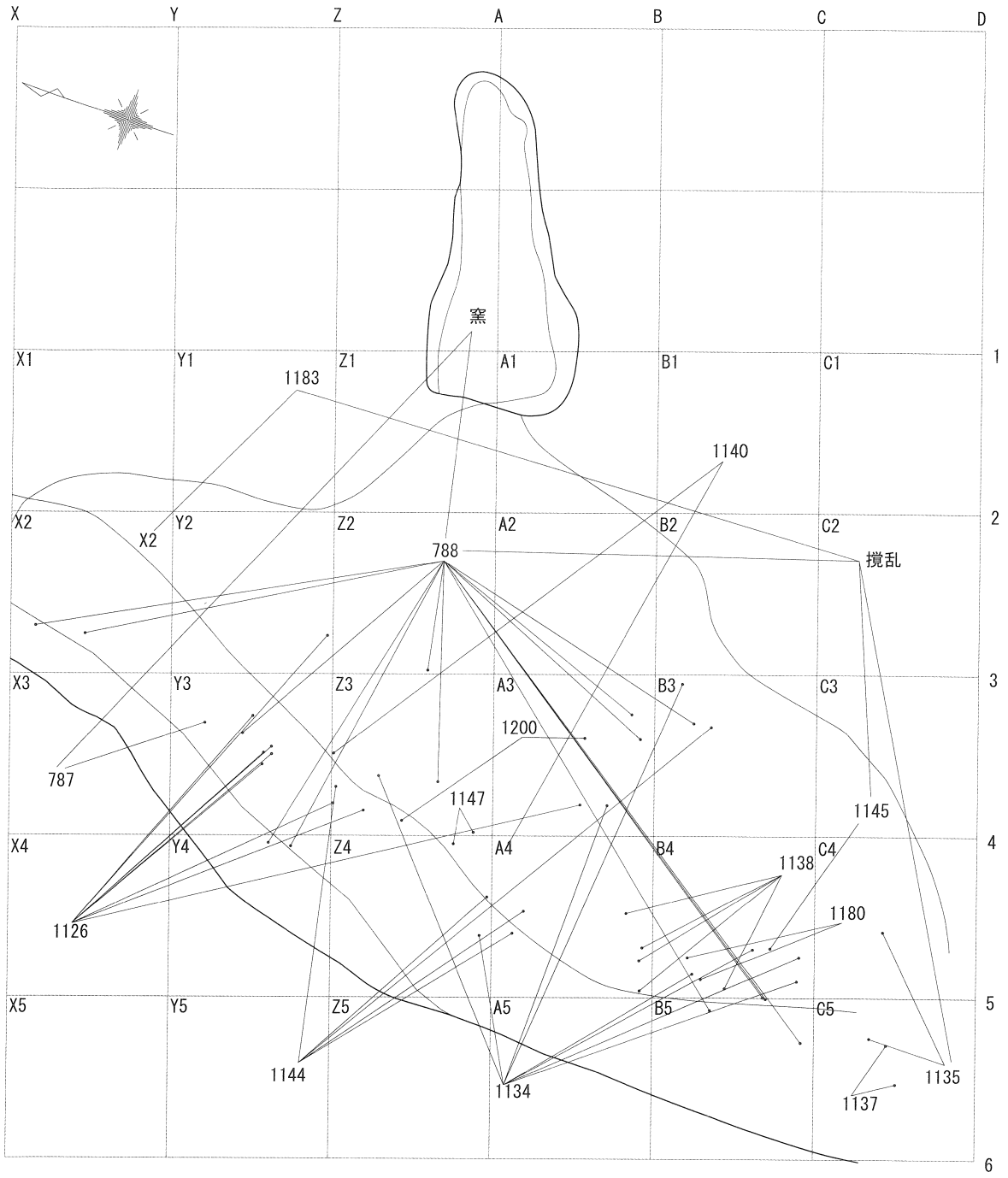
しかし、複数のグリッド・層位から出土する要因は、土層の堆積が攪乱等により乱れているわけではなく、後述するように多数の灰釉陶器が完形あるいは破片で窯道具（焼台）へ転用されていることに起因しているからである。



第333図　大屋敷1号窯出土灰釉陶器接合状況図①(碗皿類)

第54表　大屋敷1号窯窯内・灰原接合関係①(碗皿類)

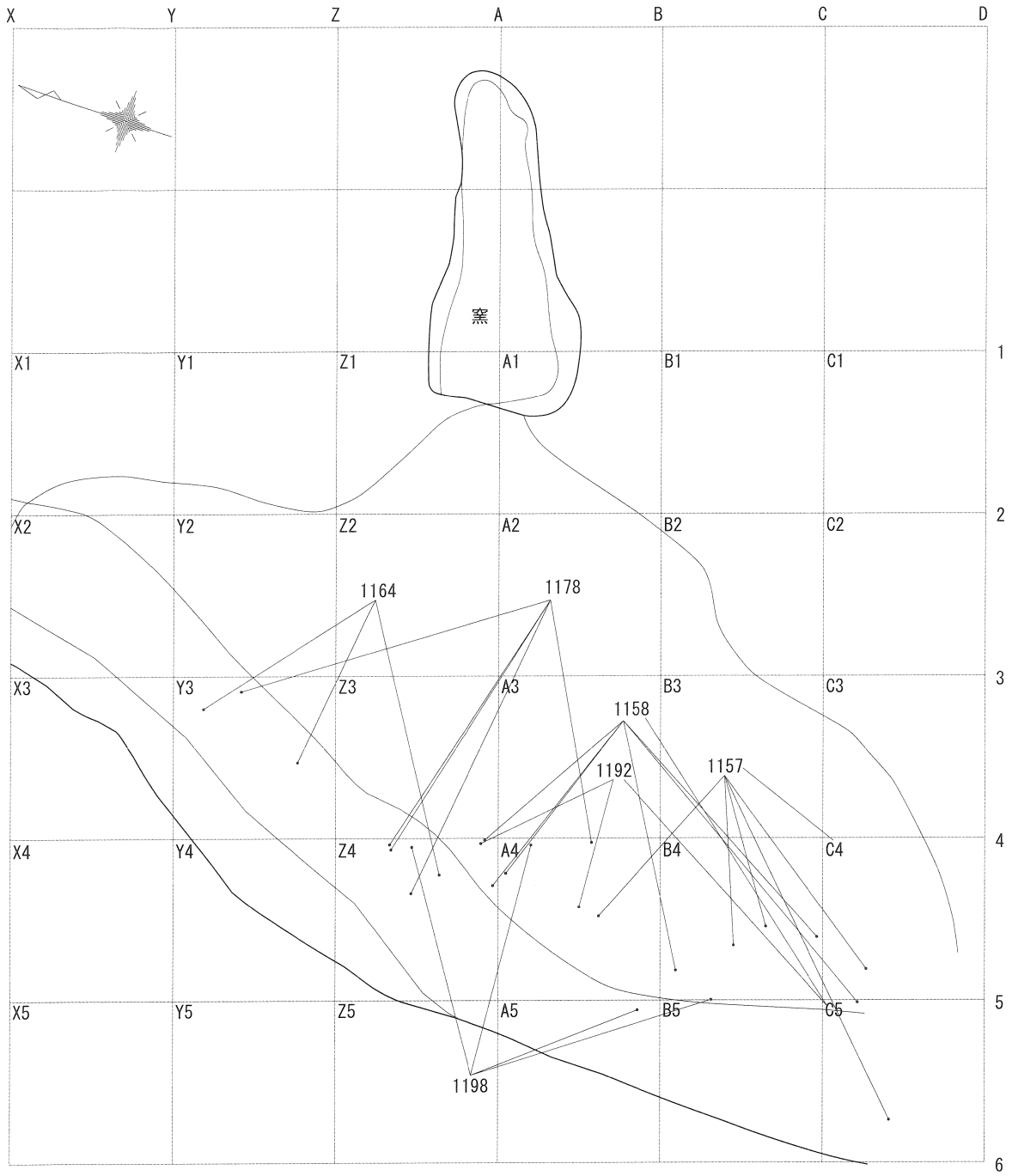
遺物番号	出土位置	出土層位
769	窯内 C5	床面直上・覆土 31
779	窯内 Z4	覆土 22
792	Z4 A4	25 42
873	X3 Y3	65
877	Y3 Z4	26・65 26
884	A4 Z4	36 26
894	B4	31・47
940	Z4	25・26・62
947	Z4	61・62・64
1018	A4	31・42
1032	A4 Z4 Z3	42 26・43 31
1037	A5 B4	31 44
1038	A2	19・31
1039	Y3 X2	25 24
1049	A4 Z3	36 31
1054	A4 B5	19・31 47
1058	C5	31・52
1059	Z3 Z4	31 43
1061	Z3 Z4 A4 B5	61・65 50 45 26・62
1064	X3	24・25
1065	Z4 A4	26 42
1067	A4 B4	31・36 49
1116	B4 C4	31



第334図　大屋敷１号窯出土灰釉陶器接合状況図②（長頸壺・硯）

第55表　大屋敷１号窯窯内・灰原接合関係②（長頸壺・硯）

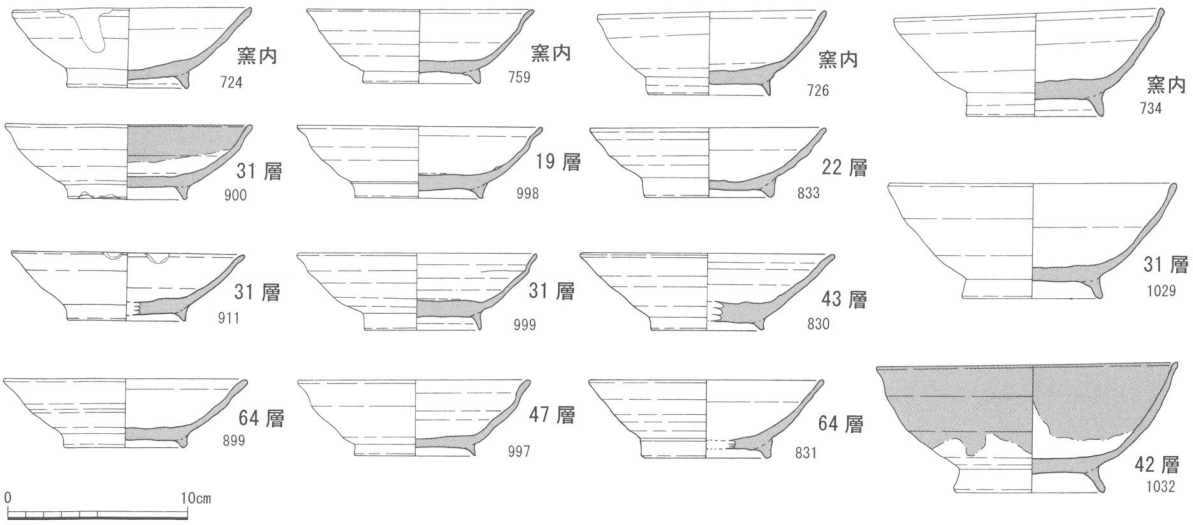
遺物番号	出土位置	出土層位
787	窯内 Y3	覆土 26･65
788	窯内 X2 Y3 Y4 Z3 A3 B3 B5	覆土 24・25 26 25 22 31 31 50・53
1126	Y2 Y3 Z3 A3	22 25・26 31・65 31
1134	Z3 Z4 A3 B3 B4 B5	50 43 31 31 31・47 31・50
1135	灰原 A4 C5	攪乱 31 51
1137	C5	51･55
1138	A4・A5 B4・B5	50 47
1140	B4 Z3	31 65
1144	Z4 A4 B3	65 42・50 31
1145	灰原 B4	攪乱 31
1147	Z4 C5	22 南壁
1180	B4 B5	31 31
1183	灰原 X2	攪乱 24
1200	A3 Z3	13 26



第335図　大屋敷１号窯出土灰釉陶器接合状況図③(鉢)

第56表　大屋敷１号窯窯内・灰原接合関係③(鉢)

遺物番号	出土位置	出土層位
1157	A4	31・49
	B4	31
	C4	31
1158	Z4	22・43
	A4	42
	B4	31・44
	C5	51
1164	Y3	26
	Z4	26
1178	Y3	26
	Z4	26・43・62
	A5	50
1192	Z4	34
	A4	31
	C5	南壁
1198	Z4	26
	A4	31
	A5	50
	B5	50



第336図　大屋敷１号窯出土灰釉陶器碗類出土層位別比較図

3　出土遺物（第336～371図，巻頭図版７・８，図版183～204，第58表）

ここでは、まず窯内、灰原から出土した灰釉陶器碗類に関して比較した後、碗皿類の出土位置別の法量等を比較し、器形や法量に出土位置で変化が確認できるかを検討する。つづいて、碗から出土位置を分けず、器種ごとに報告を行う。

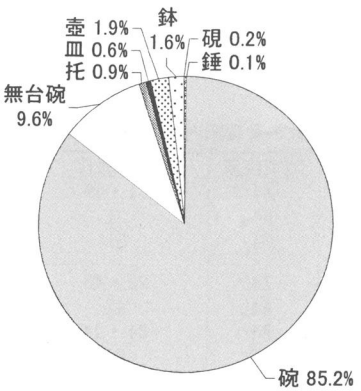
（１）大屋敷１号窯出土灰釉陶器の層位別比較（第336・339図）

第336図には、窯内、灰原上層、灰原下層から出土した灰釉陶器碗を同様の形態で並べて図示したものである。後述するように碗においても窯道具への転用が頻繁に行われており、上層で出土したからといって新しい段階の灰釉陶器と断定できないが、窯内、灰原上層、灰原下層から出土した碗は形態的（第336図）には区別することが難しい。

また、比較的新しい段階に出現するとされるいわゆる「玉縁」を有する碗が数点（第357図1061～1068）出土しているが、これらも比較的下層の42層から上層の31層まで出土している。したがって、形式組成の差異も確認することができず、上層から下層、窯内ともに同様の組成、型式が出土している。

また、法量に関してみておくと、窯内床面直上、窯内覆土、灰原出土の碗の口径、高台径ともに同様の分布を示すことが判明することから（第339図）、型式差は見出すことはできない。

したがって、出土状況や型式・法量、組成変化から大屋敷１号窯の灰釉陶器を区分することは難しい。以下では、大屋敷１号窯窯内、灰原から出土した遺物を一括して報告する。



第337図　大屋敷１号窯出土灰釉陶器器種別出土割合

（２）大屋敷１号窯出土灰釉陶器（第345～371図，巻頭図版７・８，図版183～204，第58表）

大屋敷１号窯内、灰原からは、灰釉陶器碗、輪花碗、無台碗、皿、托、長頸壺、風字二面硯、鉢、甑、陶錘のほか、窯道具として棒状土製品と馬爪形焼台、小型焼台が出土し

ている。耳皿、段皿、短頸壺等は出土していない。

出土数は残存率を調整した後の比率で、碗が約85%、無台碗約10%、壺・鉢がそれぞれ約２%、それ以外の製品は１%以下であり、碗が圧倒的多数を占めている。第57表に示したように碗は高台数(高台の残存率調整)で約1060個、無台碗は約120個である。

第57表　大屋敷１号窯出土灰釉陶器器種別出土数

器類	個体数	割合
碗	1052	85.2%
無台碗	118	9.6%
托	11	0.9%
皿	7	0.6%
壺	24	1.9%
鉢	20	1.6%
硯	2	0.2%
錘	1	0.1%

①碗(第338～340，345～361図，巻頭図版７・８，図版183～185，188～194)

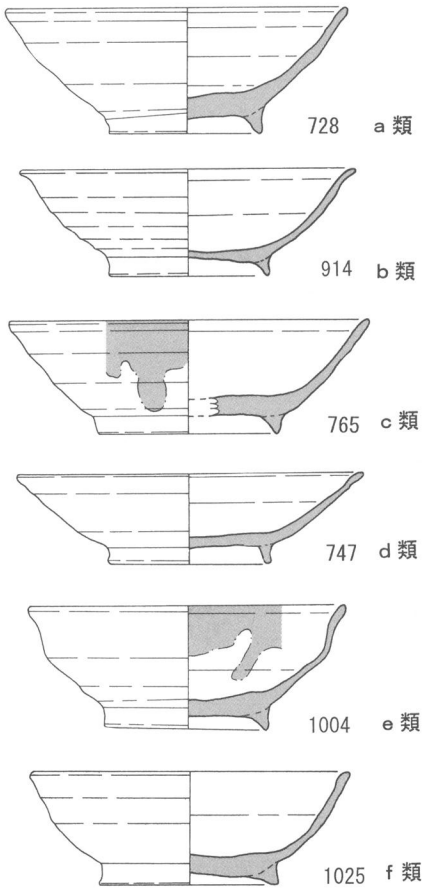
碗は、法量、高台の有無、高台の形状・高さにより、通常の碗(碗Ａ)と、深碗あるいは大碗(碗Ｂ，註1，註は125頁)、無台碗、輪花碗に区分することができる。

碗における比率は、碗Ａが80%、碗Ｂが20%である。

ｉ　碗Ａ(第338～340，345～361図，　図版183～185，188～191，193・194)

碗Ａは、口縁部の形状により６類に区分することができる。

高台は、断面が三角形の三角高台(高さ1.0cm 以下)と接合部分から高台の先端まで厚さがほぼ均一な爪形高台(高さ１cm以下)がある。また、三角高台、爪形高台ともに直線的なものと、ハ字形に開くものが確認できる。口縁部の形状の各分類(ａ～ｆ類)と厳密には対応せず、高台の形状はそれぞれが各分類に確認できる。



第338図　大屋敷１号窯出土碗Ａ分類図

分類(第338図)

ａ類　見込みから緩やかに立ち上がるもので、口縁端部まで直線的に伸びるもの(窯内床面728･729，窯内覆土741～742，762～764，灰原830～834，841～843，852～856，862～893)。

ｂ類　見込みから緩やかに立ち上がるもので、口縁部直下を強く撫で、口縁端部を屈曲させるもの(窯内727，730，灰原835～840，844～851，857～861，894，895～930)。

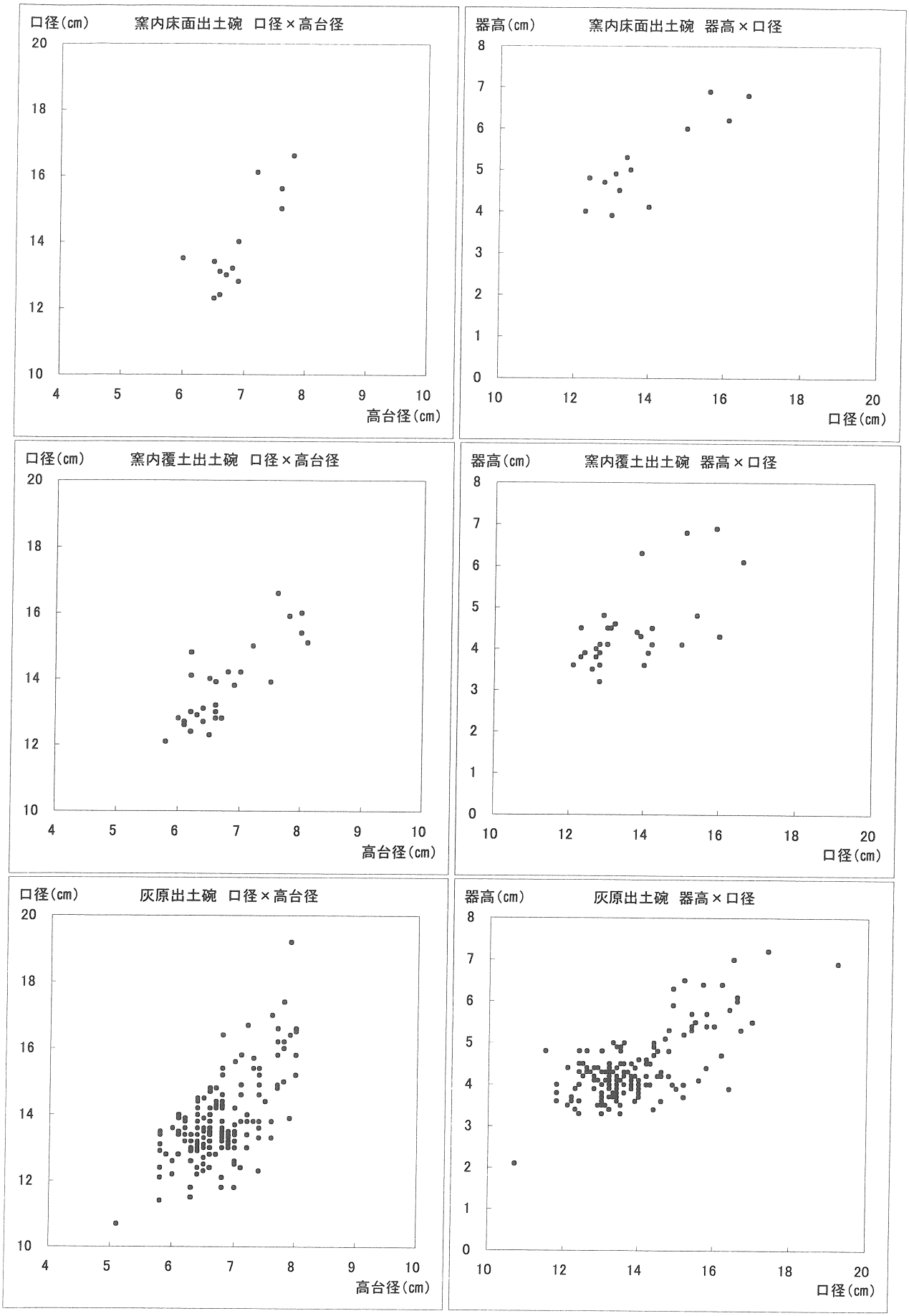
ｃ類　見込みから水平に伸びた後、急激に屈曲して箱形に立ち上がるもので、口縁端部まで直線的に伸びるもの(窯内床面723～726，窯内覆土743～746，750～755，763，765，灰原964～996)。

ｄ類　見込みから水平に伸びた後、急激に屈曲して立ち上がるもので、口縁部直下を強く撫で、やや口縁端部を屈曲させるもの(窯内覆土747・748，756・757，766，灰原931～963)。

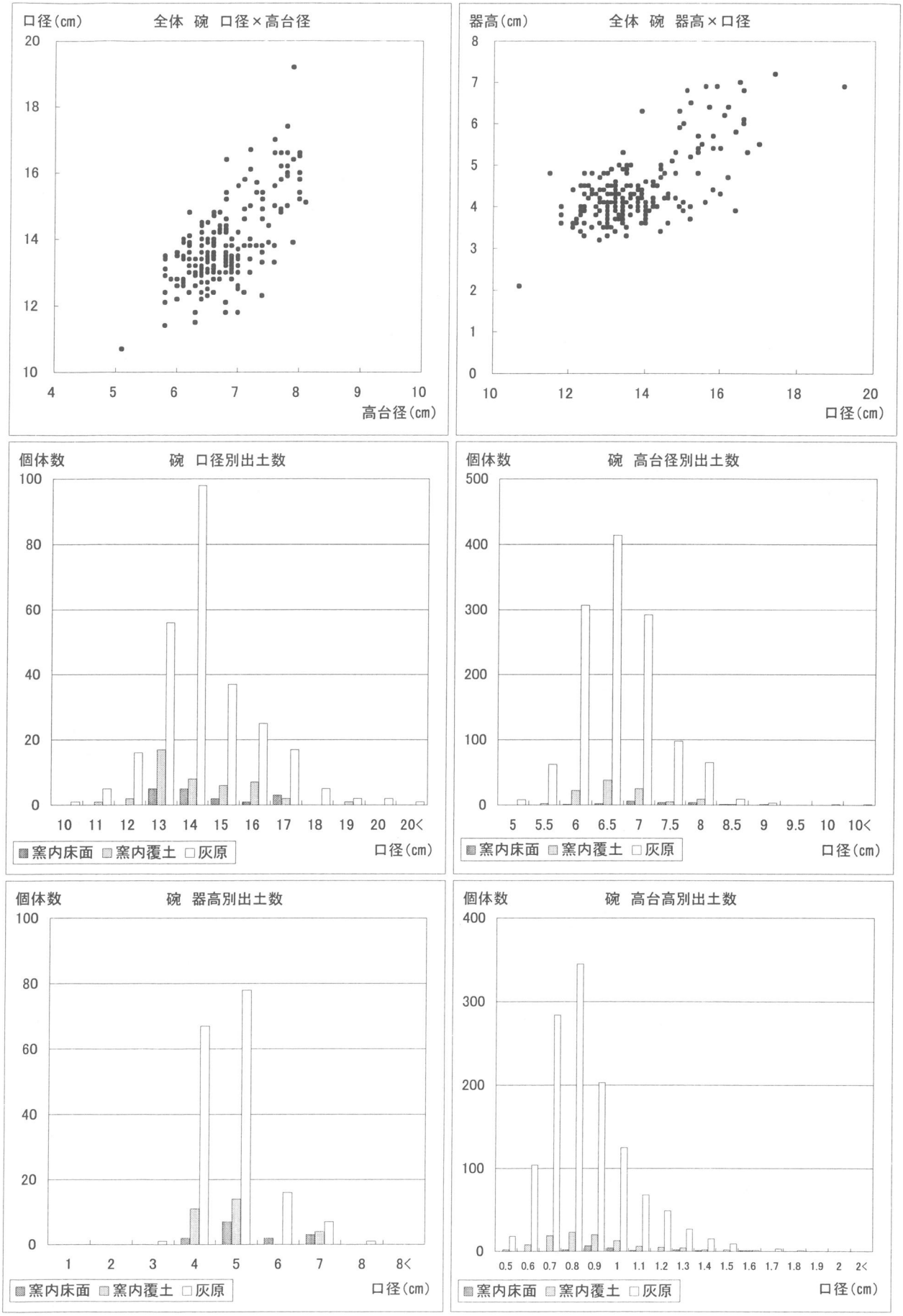
ｅ類　口縁部を強くナデ、明瞭な段を有するもの(窯内覆土757～759，767・768，灰原997～1020)

ｆ類　ゆったりとした碗で、いわゆる深碗に近い形態のもの(灰原1021～1026)。

ただし、以上のようにおおよそ６つに形態区分することができるが、ａ～ｄ・ｆと、口縁部に明瞭な段がつくｅ類は区分されていた可能性が高いものの、中間的な形態が多く、ａ～ｄ・ｆ類は形式として



第339図1　大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗法量図①



第339図2　大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗法量図②

安定したものではない。また、ａ～ｆ類は法量において区別することは難しい。

なお、ｂ・ｄ類における口縁端部直下を強く撫でる行為は、吉名５・６号窯製品にみられる口縁部の引き出しの簡略化(名残り)と考えてよいだろう。

また、第357図1074は、口縁端部直下に円孔が穿たれている。この円孔の用途や機能は不明である。

法量　碗Ａは、口縁部数を調整した後の状況で、口径は13.0～14.0cm が最も多く、約40%を占める。これを頂点に正規分布を示す。高台径は6.0～6.5cm を頂点に、正規分布を示し、5.5～7.5cm の 2 cm の間に集中する。高台高は0.8cm が最も多く、0.6～1.2cm までに集中する。

グラフには碗Ｂを含めているため、それを除いたものを示すと、口径12.0～15.0cm、器高4.0～5.0cm、高台径5.5～7.5cm の範囲にほぼ収まる。

ii　碗Ｂ(深碗あるいは大碗)(第345，347，356～358図，図版191・192)

分類　碗Ｂは、爪形の高い高台であり、おおよそ高台高１㎝(1.1cm以上を碗Ｂとした)を境に碗Ａと区分した(窯内床面第345図731～734，窯内覆土第347図773～783，灰原第356～358図1027～1069，1083～1090，1104～1109)。碗Ｂは、底部から直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げるもの(1027～1060)と、口縁部を玉縁状に仕上げるものの二者に区分することができる(1061～1068)。前者は、碗Ａのように口縁直下を強く撫で、明瞭な段を有するもの(1042・1044など)と、直線的なもの(1028・1029など)がある。

法量　碗Ｂは、口径14.0～18.0cm、高台径7.0～9.0cm、器高5.0～7.0cm の範囲に収まる。口径16.0cm、器高6.0cm、高台径7.0～8.0cm を頂点に正規分布を示す。碗Ａと比較して、口径で 3 cm 以上、器高 2 cm 以上、底部径で 1 cm 以上大型である。

iii　碗・皿における粘土の充填(第345・346，349，351図ほか，図版191・192・204)

一部の碗皿類口縁部付近に粘土を充填する個体を少数であるが確認することができる(724・733・767・809・862・876ほか，図版204)。全体を復元できるものがないため複数箇所に及んで充填が行われていたかは判然としないが、内面だけに充填するもの、口縁部にまで及ばないもの、明らかにひび割れを補修するために充填する個体が確認できる。したがって、本報告では特に分類せず、観察表では「補修痕」という表記に留めている。

これは、乾燥段階でひび割れしたものに粘土を充填して塞いだといえる。したがって、灰釉陶器の最終段階において、製作自体が粗製になっていた証拠である。

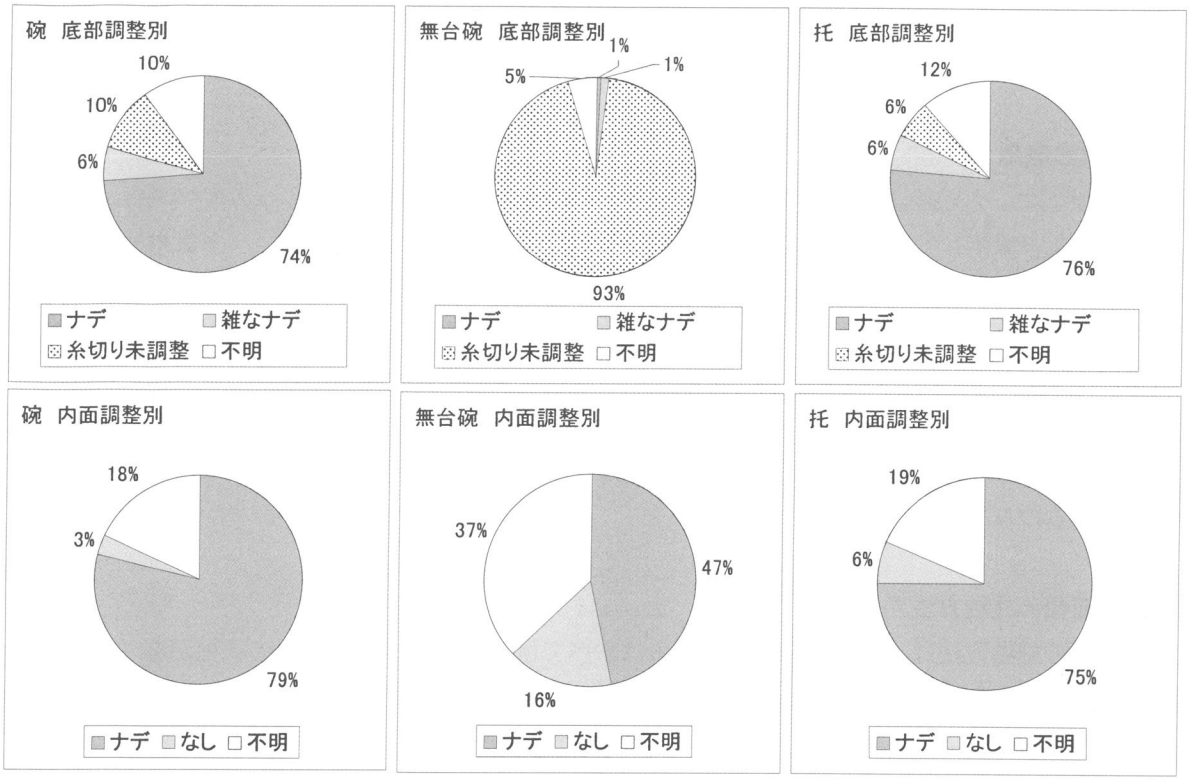
しかし、補修痕のある碗・皿が商品として流通していたかどうかは、実際に消費地で出土したものを確認するまでは断定できない。大屋敷１号窯では、不良品の転用が顕著であるため、乾燥段階でひび割れしてしまったものに補修を加え、窯道具として転用していた可能性もあり、現状では補修痕がある碗・皿があるという指摘するに留めておきたい。

また、碗のうち補修されるものは碗Ａに限られており、高台の接合などが丁寧に行われる傾向にある碗Ｂでは補修痕は確認することができない。

iv　碗・皿類における底部・内面調整技法(第340図，図版193)

大屋敷１号窯から出土した灰釉陶器碗・皿類の成形・整形段階における調整の特徴についてみておく。第340図に碗皿類における内面底部の調整と外面底部の調整について記した。

底部調整　碗・皿類は、底部は糸切り後高台を接着した後の技法に３種類あり、Ｘ　高台接着のためのナデが及ばなかった高台の内側全体を丁寧に撫でて糸切り(離し)痕を完全に消すもの、Ｙ　底部は撫で



第340図　大屋敷１号窯出土灰釉陶器碗・皿類底部・内面調整の割合

られるものの、雑に(弱く、簡単に撫でたため)糸切り痕が確認できるもの、Ｚ　撫で調整を行わない糸切り未調整のものが確認できる。

これらの割合は、第340図に示したように碗ではＸが約75%、Ｙが６%、Ｚが10%で、糸切り痕を消そうとする意識のあるものが８割を占める。托も同様であり、ナデ消すものが８割を占める。したがって、碗と托の底部調整は丁寧に行われていたことが判明する。

一方、無台碗では、逆に糸切りを残すもの(Ｚ)が約95%で、なんらかの調整を加えているものは２%と非常に少なく、無台碗の底部調整は行わないという考えがあったことが判明する。

内面調整　底部内面(見込み)部分には、一定方向の指ナデ(静止ナデ)を施すもの、あるいは回転ナデを施すもの(「ナデ」と表記)と、水挽きのままのもの(「なし」と表記)、の二者が確認できる。

第340図に示したように、碗では前者が約80%、後者は約５%であり、内面を調整するものが多い。托も碗と同様の傾向を示す。

一方、無台碗は前者が約45%で、後者が15%と、碗・托と比較すると無調整のものが増加しており、底部調整同様、簡略化が確認できる。

なお、一定方向のナデを施すものは１～２条のものが多いが、中には３～５条施すものも確認できる。また、窯内覆土から出土した772(第346図，図版193)は見込み(内面底部)に指頭圧痕が複数確認できる。

v　碗における高台の接合

碗の高台は、糸切り離し底部の体部側に取り付けられるものもあるが割合は少なく、底部の最外部に取り付けるものが大部分である。

底部と高台の接合は、高台を接着するときのナデのみで終えるものが多く、接合痕が目立つ。中には体部まで粘土がはみ出すものも確認することができ、接合部を丁寧に撫でて、接合の痕跡を見えなくしている個体は少ない。

接合の痕跡を丁寧に消すものは碗Ｂ類に多く、また碗Ｂは底部の糸切り痕をナデ消すものが多いことを重ね合わせると、碗Ａよりも碗Ｂの整形・調整の方が丁寧であったことが判明する。

vi　碗の高台底部

碗の高台には、ソダ痕(木枝痕？)が残存する個体を確認することができる。一方でソダ痕、籾痕が全く確認できない個体も多く、ソダ痕が残るもの約20%、籾痕が残るもの約１%、ソダ痕や籾痕が確認できないもの79%であり、乾燥の方法を推測する上で重要な資料となる。

ソダ痕は植物の枝葉を敷物として、乾燥時にその上に置いた痕跡と想定できる。直接枝葉の上に置いた個体にソダ痕が残り、その上に重ねて置いた碗類にはソダの痕跡が残らないと想定でき、乾燥時にすでに重ねられていた可能性がある。

なお、無台碗の底部にはソダ痕、籾殻痕はほとんど確認できず、僅かにソダ痕が確認できるものが約１%存在するのみである。

vii　碗・皿類の施釉方法

碗・皿類の施釉方法は、それが判明するものはすべて漬け掛けであり、一部に灰釉が施されないもの(無釉)のものが存在する可能性がある。刷毛塗りは確認することができないが、一部存在する可能性がある。

漬け掛けの回数は、残存状況が良好なもので碗Ｂでは５～６回に分けて釉薬に漬けていることがわかる。碗Ａでは、４～６回漬けているものが確認できる。灰釉陶器に後出する初現的な山茶碗は３回(３箇所)とされており、山茶碗段階よりは丁寧に灰釉を掛けていることが判明した。

viii　窯内における積載方法(第349・358図)

１号窯窯内、灰原より釉着した状態で出土した灰釉陶器碗・皿が出土している。これらはすべて製品を直接重ねた重ね焼きで、三叉トチや輪ドチなどの緩衝材(窯道具)は利用されていない。碗・皿類に転用が多いため複数回の転用で次々と釉着し、２～５段分が重なった可能性もあるが、他の個体の観察においても、多くの碗に高台の痕跡が確認できることから、重ね焼きであることは疑いない。

また、釉着した状態で出土したものには、碗と皿が釉着した状態のもの(第349図815，第358図1094)があり、焼成時に転用で碗と皿が重ねられた可能性が高い。

②無台碗(第341・346・349図，図版183・186・187・194)

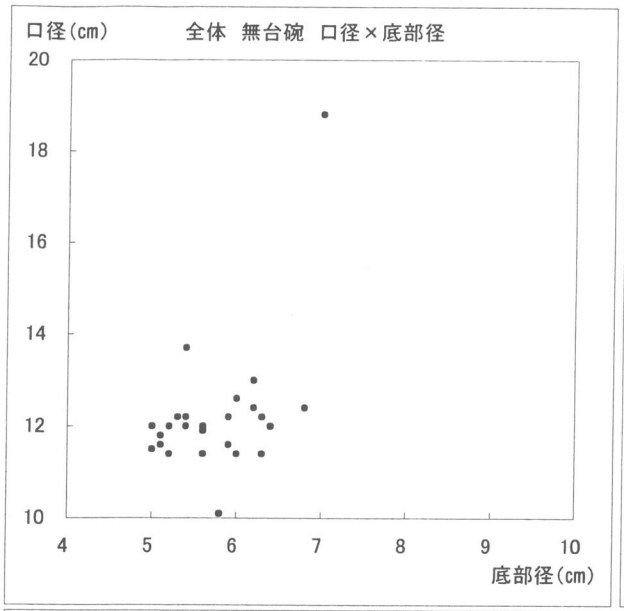
分類　高台が付かないものを総称する(窯内覆土740，灰原789～820)。口径が12cm前後のものと、それ以上の大型のものに区分できる。口径12cm前後のものは、口縁の形状は碗Ａ同様６種類がある。

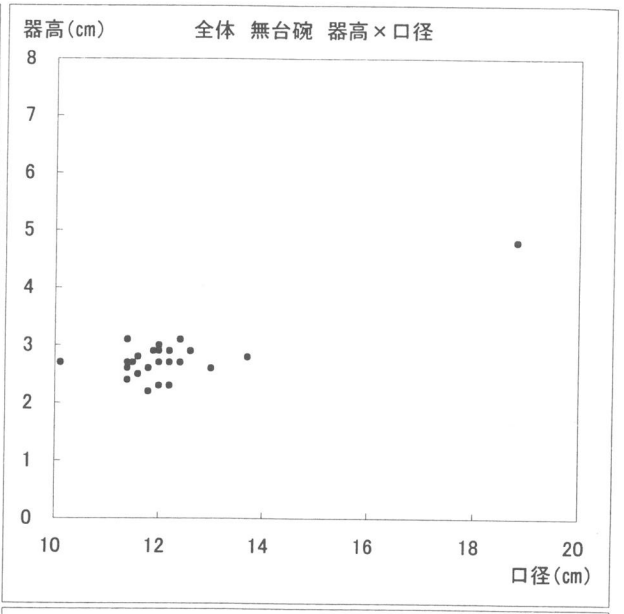
法量　口径12cm前後のものは、底径は5.5～6.0cmが最も多く、これを頂点に4.5～6.0cmの間に集中する。口径は11.0～12.0cmが最も多く、11.0～13.0cmにほぼ収まる。器高は2.0～3.0cmである。碗Ａと比べると口径は一回り小さく、器高も一回り低い。碗と無台碗は明らかに口径による作り分けがなされており、無台碗に高台をつけて碗としたものではないことが判明する。

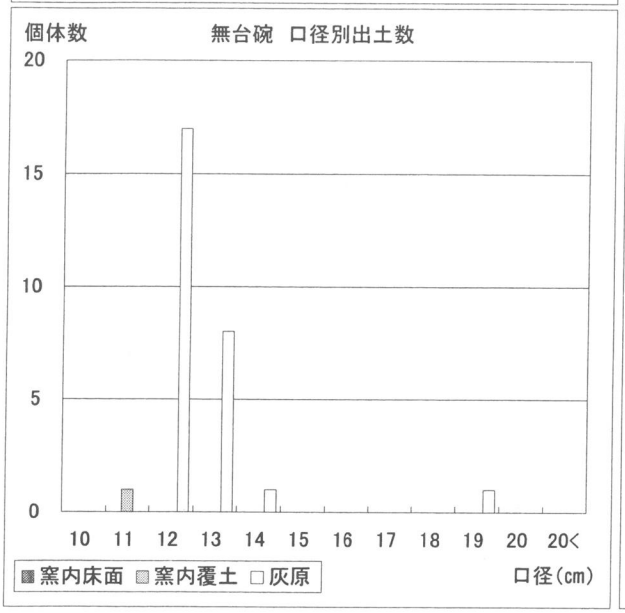
大型の無台碗は底部径8.0～9.0cmであり、口径は18.0～19.0cm、器高5.0cmであり、法量は碗Ｂに近い。

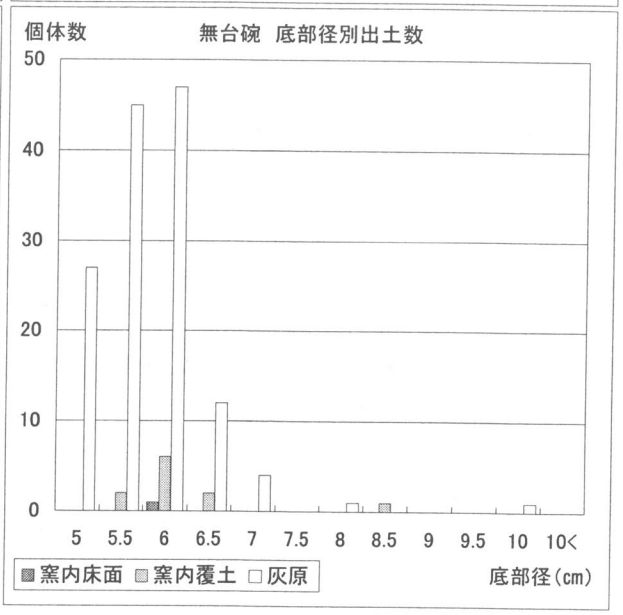
③輪花碗(第357図，図版192・204)

輪花碗(1070～1073，1763)は、完形に復元できるものがなく全体の形状は不明であるが、破片から復元できる法量は、碗Ｂに近く、碗Ａの法量のものに輪花が施されるものはないといえる。

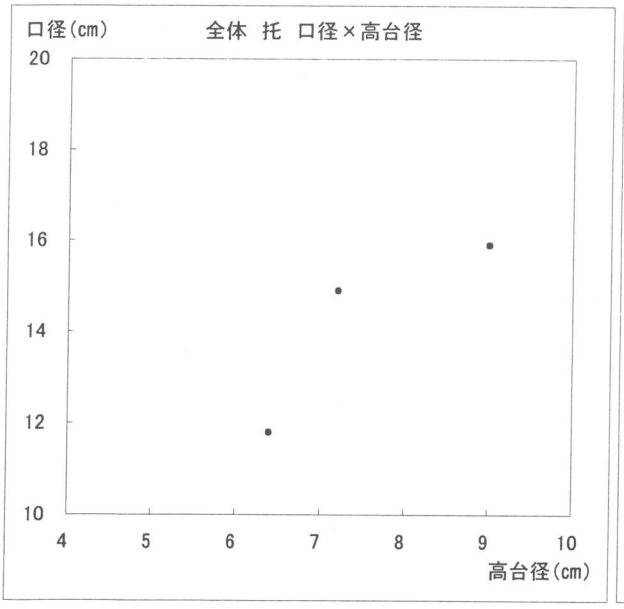


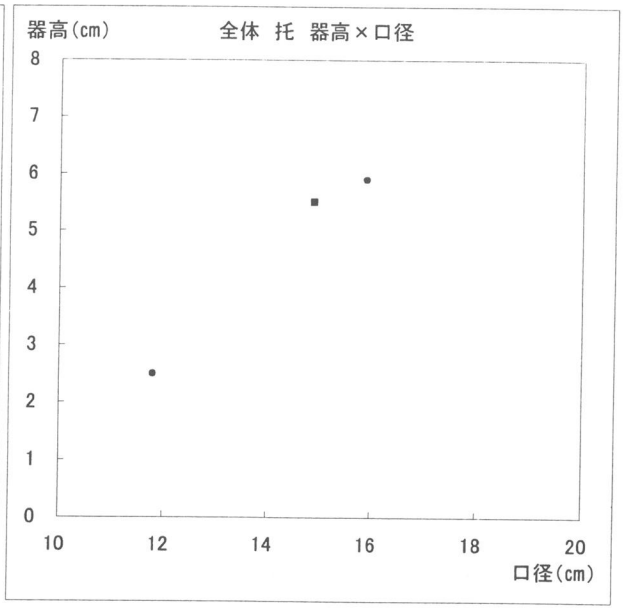






第341図　大屋敷1号窯出土灰釉陶器無台碗法量図





第342図　大屋敷1号窯出土灰釉陶器托法量図

輪花は、３箇所(復元)に施された可能性が高く、外側から内側に向かってヘラ状工具で押し込んで形成している。

法量　口径が判明するのは２点であり、口径15.0cm、器高は4.2cm 以上である。

④皿(第349図，図版183・186・187)

皿は器高が低く、体部が浅く開くものを分類した。高台は三角高台で、１cm 以下である。破片の場合、碗との区別は難しく、認定できた個体数は少ない。７点を図示した(灰原821～826，1760)。

分類　823・1760のように非常に浅いものと、821・822，824～826のようにやや深い、碗Ａの形態に近いものがある。しかし、碗Ａと比較すると、口径が小さく、やや浅いことから、皿とした。

法量　法量は口径11.0～17.5cm、器高2.5～3.5cm、高台径6.0～7.0cm をはかる。法量は無台碗と類似している。

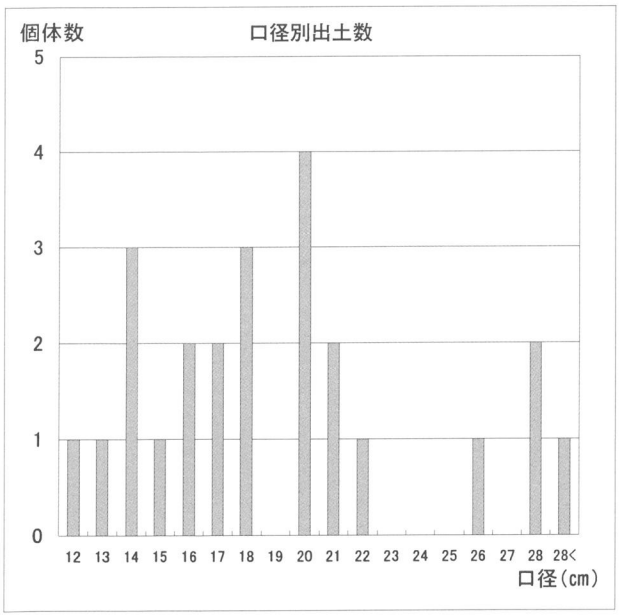
⑤托(第342，346・347・349・358図，図版183・186・187)

分類　高台が高く、太い爪形を呈し、底部から直線的あるいはハ字形に開くもので、10点図示した。体部は底部から低く開くものである(窯内覆土：第346図760・第347図782，灰原：第349図827～829，第358図1115～1119)。

法量　高台径は6.0～10.0cm まで確認でき、8.5～9.0cm が４点と最も多いが、極端に集中するような状況は確認できない。高台高は、1.0～3.0cm まで確認できるが、高台径同様極端に集中するような状況は確認できない。口径は11.0～16.0cm まで確認でき、器高は2.0～6.0cm まで確認できる。口径約15.0～16.0cm で、器高が6.0cm 前後と、口径12.0cm 前後で、器高3.0cm 前後に分かれる可能性が高い。

⑥長頸壺(第343，348，362～364，367～369図，図版183，196～198，200)

分類　長頸壺は肩が張るものの丸みを帯びており、口縁部は頸部からやや外反気味に立ち上がった後、口縁端部でより強く外反する形状を呈する(灰原1120～1142，1762)。斜め外上方へ引き出し外面に段をつけるもの(灰原1120～1135)、口縁部の形状は逆ハ字形に開いた後口縁端部を垂直に引き出すもの(灰原1136～1140)、口縁部を外下方に折り返し外面に段をつけるもの(灰原1141・1142)の３種類に区分することができる。



第343図　大屋敷１号窯出土灰釉陶器長頸壺口径別出土数

法量　第343図に示したように、口径により大きく４つのまとまりが確認でき、小型(口径14.0cm 前後)、中型(18.0cm 前後)、大型(20.0cm 前後)、特大型(28.0cm 前後)の４つの大きさが作り分けされていた蓋然性が高い。胴部最大径は、肩部にあり、小型(15.0cm 前後)、中型(20.0cm 前後)、大型(25.0～30.0cm 前後)、特大型(30.0cm 以上)をはかる。

底部まで残存するものがないため明瞭ではないが、平底のものと、ハ字形に開く三角高台がつくもの、角高台がつくものの三者がある可能性が高い。

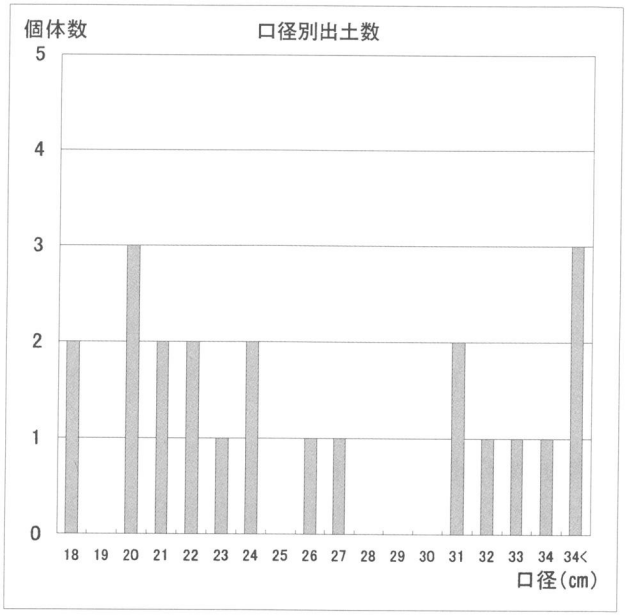
成形　胴部の成形は幅2.0～3.0cm 程度の粘土紐巻上げにより形作られた後、叩きにより成形されて

いる。中型から特大型の長頸壺は頸部～口縁端部までも同様に粘土紐巻上げにより形作られる。小型の長頸壺の頸部には粘土紐の痕跡が確認できず、一部が水挽により成形された可能性がある。

施釉　一部に灰釉ではなく黄土を刷毛塗りし、黒色に発色しているものを確認することができる(1133・1135・1138・1139・1146など，巻頭図版7)。黄土を塗布する範囲は、頸部まで及んでいる。中型以上のものに黄土刷毛塗りが施されるものが多い。

一方、通常の灰釉を施すものも確認することができる(1126・1143・1144)。小型～中型のものに多い。

なお、灰釉・黄土を塗布する範囲は胴部下半から口縁部まで及んでいる。



第344図　大屋敷1号窯出土灰釉陶器鉢口径別出土数

この他、壺あるいは鉢の底部と推測する個体が出土している(第367・368図)。平底のもの(1180～1186)とハ字形に開く三角高台(1170～1179)、四角高台(1169)がつくものがある。

また、壺あるいは鉢の破片のうち大きめのものを図示した(第369図)。

⑦鉢(第344，364～368図，図版183，199・200)

分類　鉢(1148～1167，1761)は口縁の形状から2形式に区分することができる。一方は、口縁部を外側に折り曲げるもの(1761、1148～1158)で、胴部は半球形に近いものである。もう一方は、体部から直線的に立ち上がるものであり、胴部は円錐形に近いものである(1159～1167)。底部まで残存する個体がないことから明確ではないが平底のものと、ハ字形に開く三角高台付のものがあった可能性が高い。

法量　大きさから小型(口径20cm前後)、中型(24cm前後)、大型(27cm前後)、特大型(30cm以上)に区分することができる。今回鉢と報告したものの中には、後述する甑の破片が混在している可能性が高い。

口縁部の形態に関係なく、小型から大型まで確認できる。

成形　鉢は、壺同様2.0～3.0cmの粘土紐を巻き上げた後、叩き、あるいは指押さえにより成形されている。粘土紐の痕跡が明瞭に残るものが多い。

施釉　長頸壺同様、灰釉ではなく、黄土を刷毛塗りし、黒色に発色しているものが確認できる(1148，1156～1160，1761など)。鉢の大部分に黄土が塗布されている。

しかし、長頸壺同様灰釉を塗布するものもある(1161・1162など)。通常の灰釉を施すものは長頸壺同様小型のものに多い。

なお、灰釉・黄土を塗布する範囲は、胴部下半から口縁部付近まで及んでいる。

⑧甑(第367図)

甑と推測できる把手1点(1168)が出土している。しかし、愛知県豊橋市二川(ふたがわよう)窯(豊橋市教委2000)などでは把手の付く鉢も出土しており、断定はできない。胴上部にやや斜め上方に向かって取り付けられた、幅広の把手である。

なお、1168には黄土が塗布されている。

⑨風字二面硯(第370図，図版183，202・203)

２点出土している(1200・1201)。１点は完形に近いが、もう１点は硯側縁部分の破片である。

1200は手捏ね成形である。半円形であり、側縁はななめ上方に向かって立ち上がっており、上面は面取りされ、平坦面に仕上げられている。また、内側にはやや左に偏って中央の仕切りが取り付けられている。左の面積と右の面積は４：６前後である。硯口の底面部分には左右にそれぞれ脚が取り付けられており、そのほぼ中央に硯の側縁に直交するように外側から内側に向かって約５㎜の孔がそれぞれ１孔穿孔されている。長さ17.0cm、幅18.5cm、高さ4.0cm、側縁高さ1.2cm、脚高さ1.5cm をはかる。

上面下面ともにナデ調整が施されている。

1201も手捏ね成形である。1200同様半円形である可能性が高い。側縁は斜め上方に向かって立ち上がっており、上面は面取りされ平滑に仕上げられている。残存長12.0cm、高さ2.8cm をはかる。

⑩陶錘(第370図，図版183，204)

１点出土している(1204)。細長い棗形の陶錘であり、中央に直径４㎜の円孔が穿たれている。全長4.7cm、直径1.2cm、重量５ｇをはかる。

⑪窯道具(第351，353・354，356，370・371図ほか，図版183，194・195，201，203・204)

窯道具には、棒状土製品、大型の馬爪形焼台、粘土を丸めた小さな焼台がある。

焼台の一種と考える棒状土製品が２点(1202・1203)出土している。両側が爪状に突出し、細長い乙形に整形されている。ともに焼成不良であり、どのような場所に使用されていたか判然としない。

馬爪形焼台を８点図示した(第354図974，第371図1208～1211，1213～1215)。焼成室の傾斜に合わせて焼台の底部は傾斜している。比較的大型の破片1214が約560g、1215が約450g をはかることから、本来は800～1000g 程度であった可能性が高い。

また、粘土を丸めた小さな焼台を７点図示した(第351図892，第353図946，第356図1037，第371図1205～1207，1212)。表面は平滑に仕上げられている。大きさは2.0～10.0cm まで存在している。平坦あるいは円形に仕上げられている。胎土には、５㎜前後の小石や砂が多く含まれている。

⑫窯道具としての灰釉陶器(第371図ほか，図版194・195，201ほか)

窯内・灰原・SF06から出土した灰釉陶器のうち、ある程度の大きさを保持する破片を中心に計測とともに観察を実施した。この結果、焼成状況が良好ではない軟質のものは転用されたか明瞭ではないが、観察した約3000点(破片数)のうち、約80%が窯道具(土器台)として転用されていることが判明した。

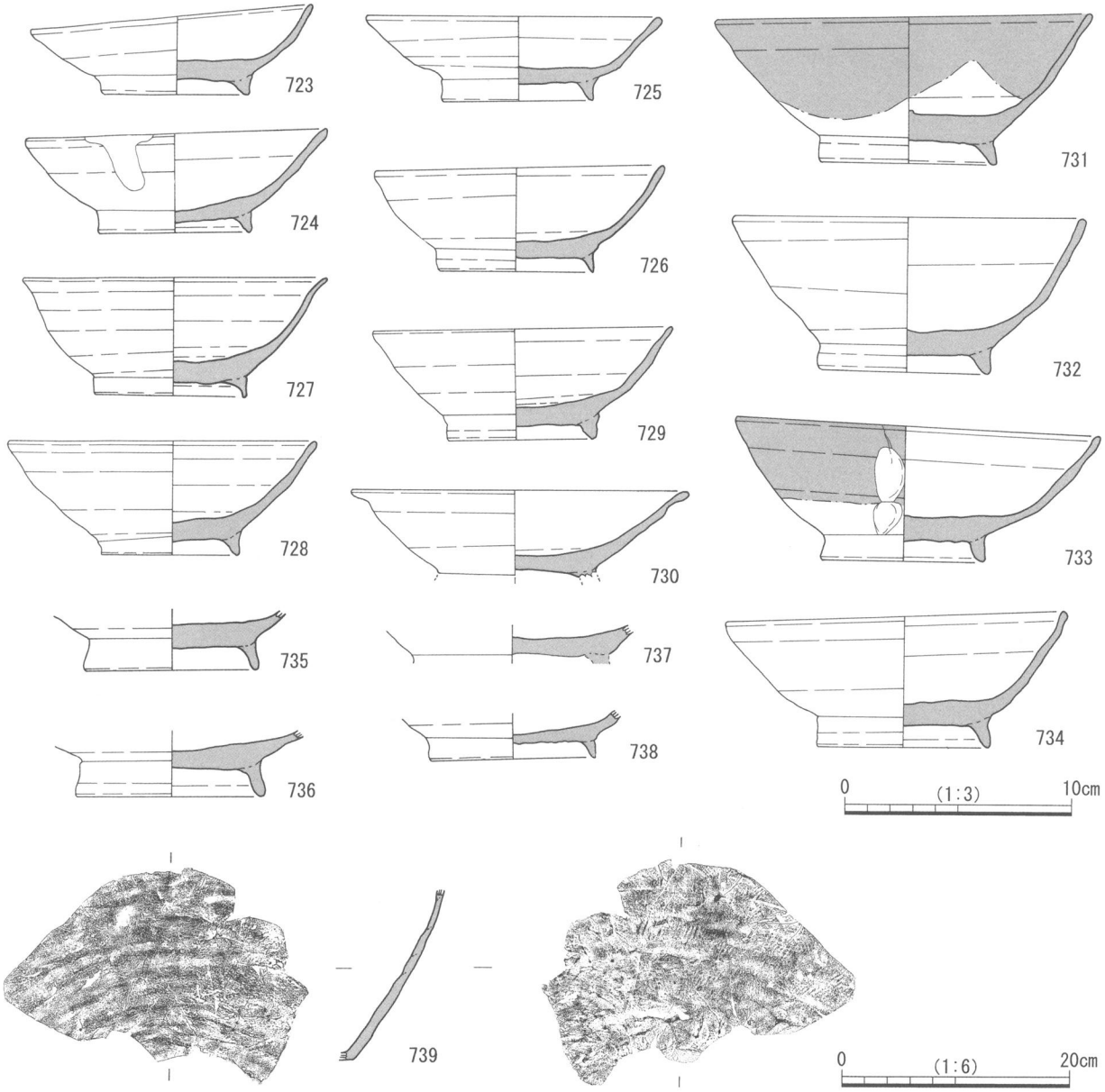
碗・皿類は完形に近い状況で転用されるものもあれば、破断面に自然釉が付着しているものも多々確認することができ、さらには小片で転用されているものがある。転用時に打ち欠いた、あるいは割れたものを転用したもの(破断面に自然釉が付着している個体)は200個出土している。一方、壺･鉢類は完形に近い状態で転用されたものはほとんどなく、大部分が20cm 以下の破片で転用されている。

また、転用に当たっては、直接灰釉陶器を土器台として使用するものもあれば、大型の焼台と組み合わせて使用するもの(1208～1211)、粘土を小さく丸めて灰釉陶器の下に入れ、水平になるような工夫をして転用するもの(1205～1207，1212)が確認できる。

(３)燃料

大屋敷１号窯の燃焼室および灰原から出土した炭化材の樹種分析を実施したところ、針葉樹のマツ属、落葉広葉樹のコナラ節、クヌギ節、クリ、アワブキが利用されていたことが判明した(第５節２参照)。

これらの樹種は現在の大屋敷１号窯周辺の植生に含まれるものであり(浜北市史編さん委1989)、大屋



第345図　大屋敷１号窯窯内床面直上出土灰釉陶器実測図

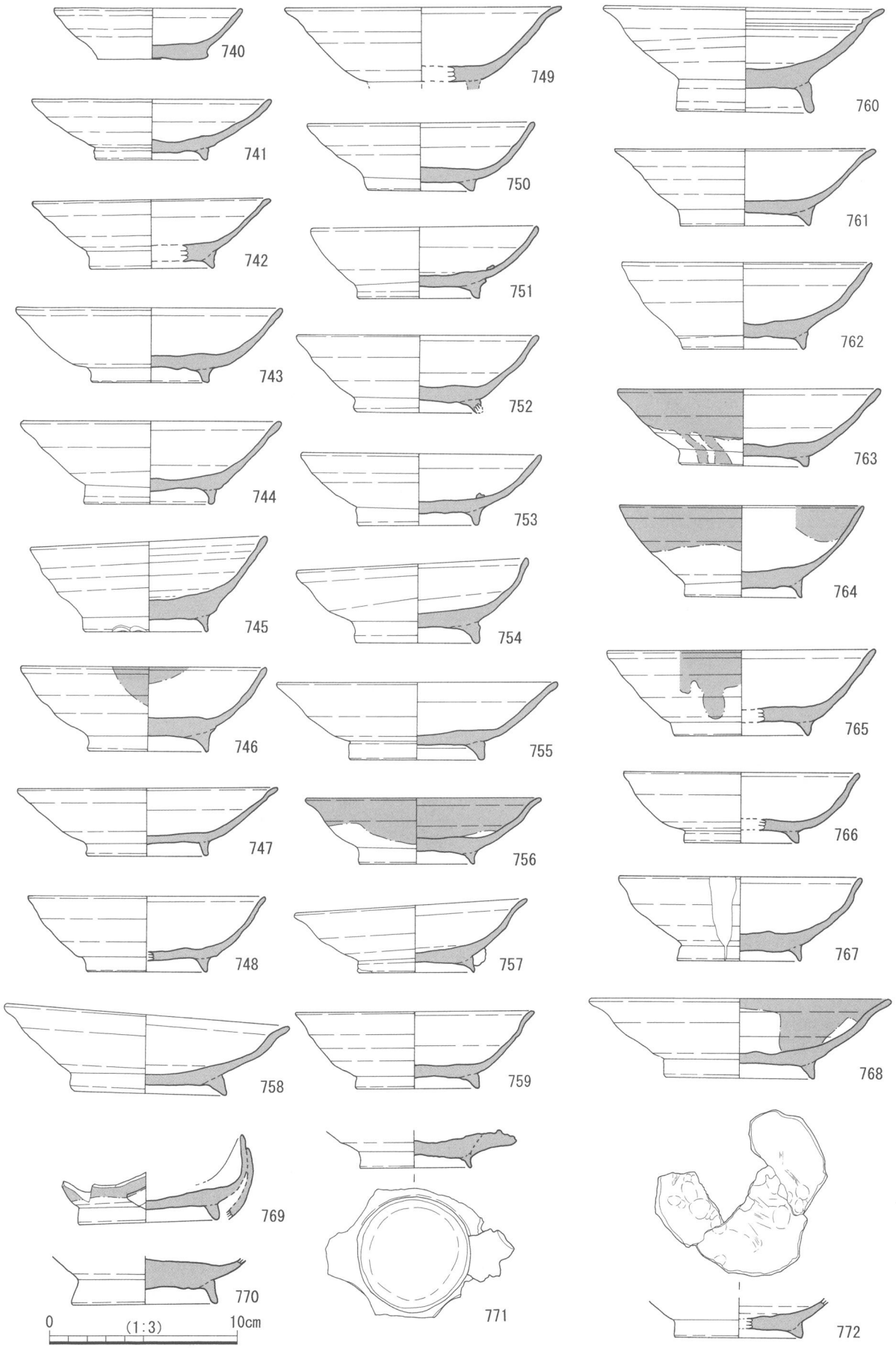
敷Ｃ古墳群の造営停止後、１号窯周辺に繁茂した木材(二次林)を切り倒し、燃料材として利用した可能性が高い。

(４)灰釉陶器以外の遺物（第368図，図版204）

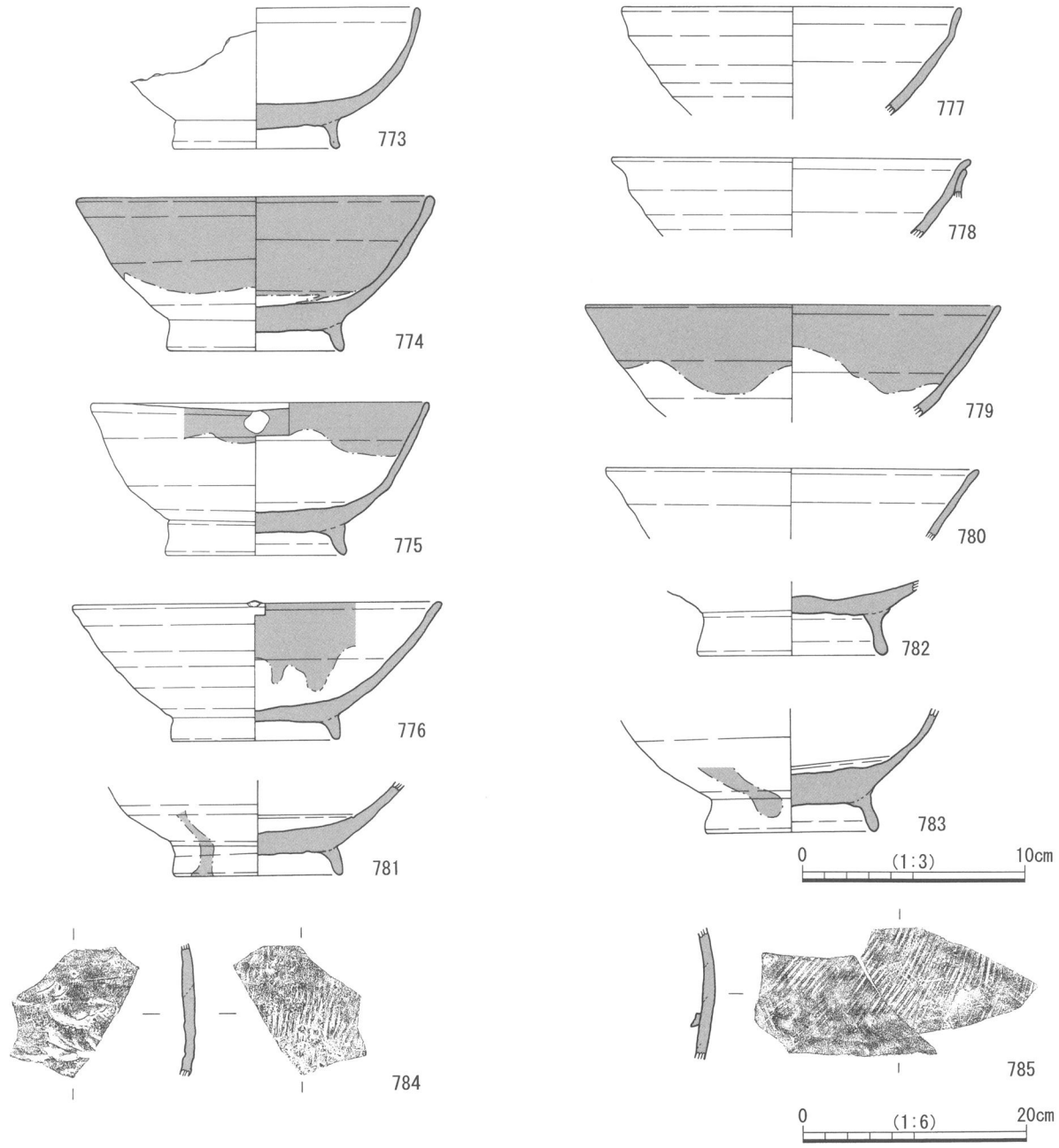
大屋敷１号窯灰原からは灰釉陶器のほか清郷甕と須恵器台付長頸壺が出土した。

清郷甕　清郷甕は１点(1187)がSR01より出土した。口縁部は逆Ｌ字形に折り曲げられており、山形を呈する。胴部は丸みを帯びる。口径29.0cmをはかる。

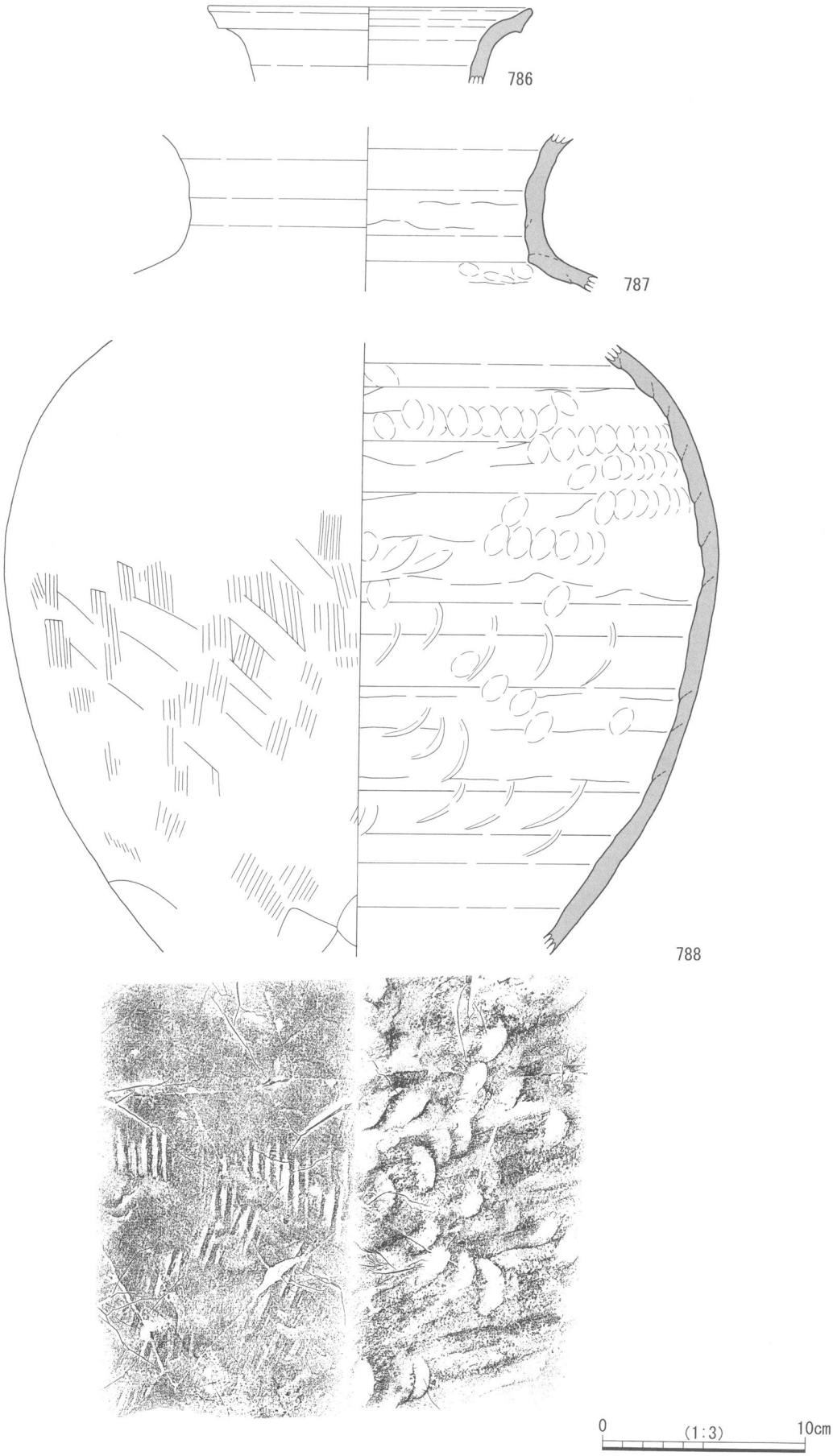
須恵器　台付長頸壺の底部片１点(1188)が灰原攪乱土から出土した。大屋敷Ｃ古墳群より流れ込んだ可能性が高い。高台は方形であり、高台径は7.6cmをはかる。



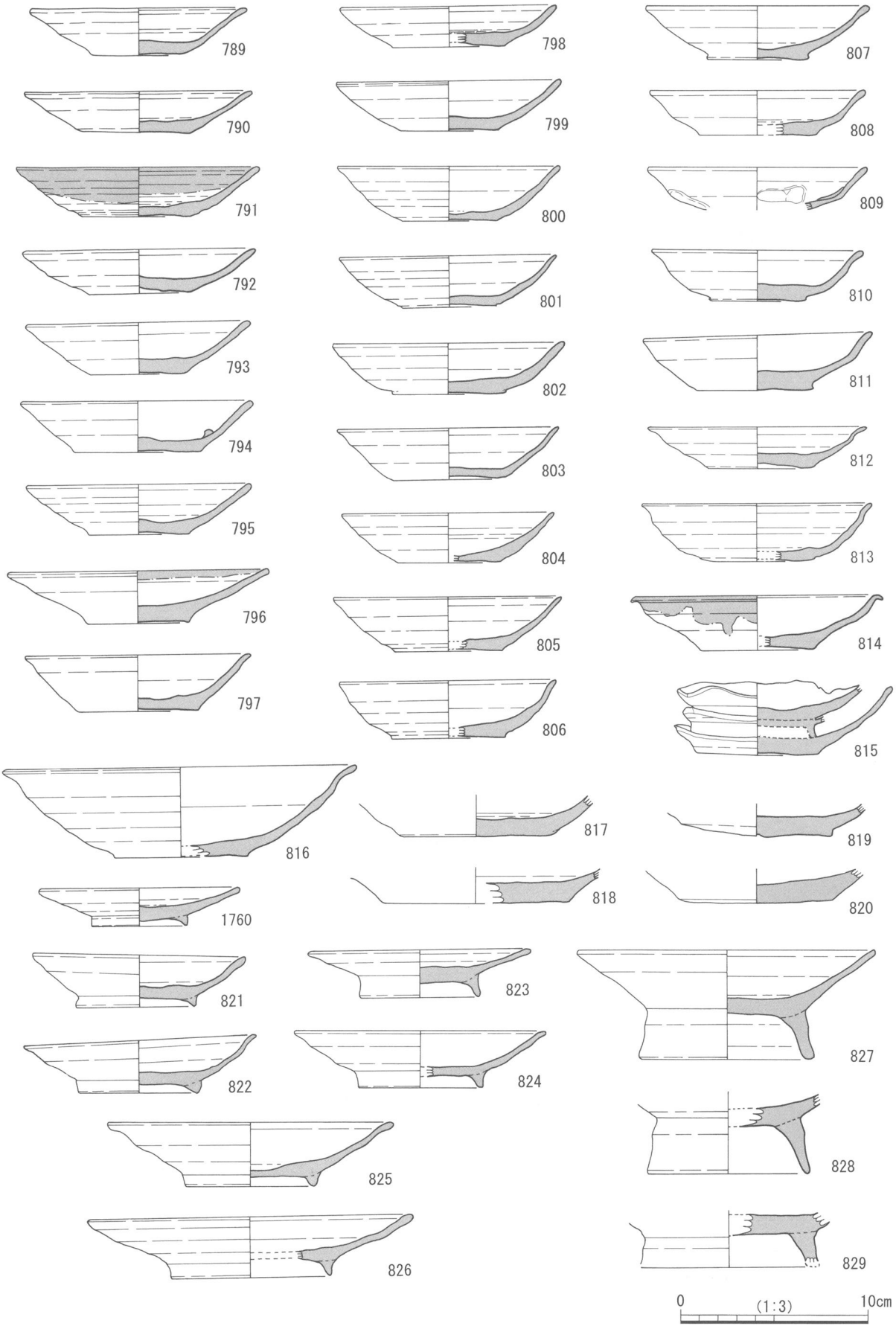
第346図　大屋敷１号窯窯内覆土出土灰釉陶器実測図①（745のみ窯内床面直上出土）



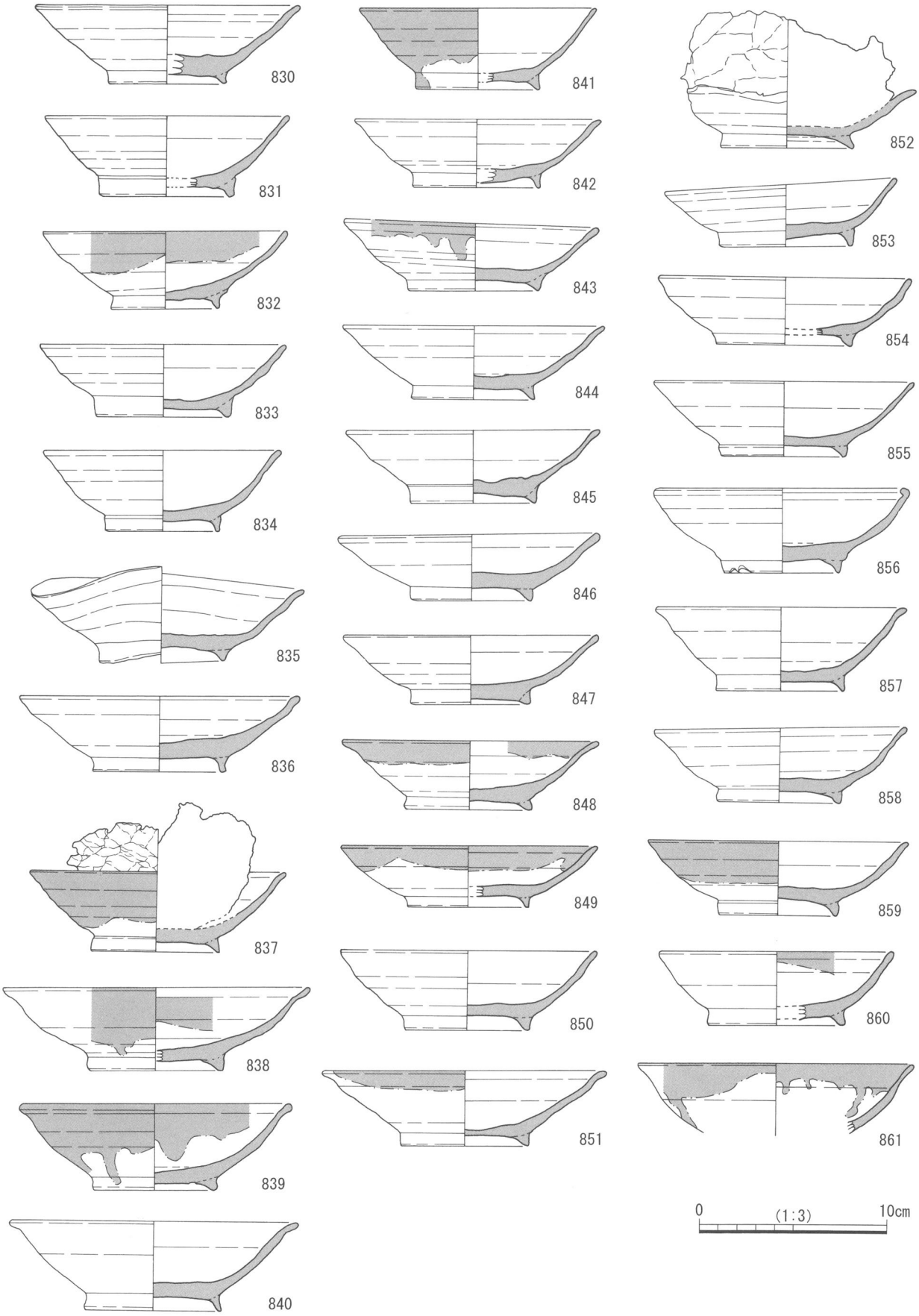
第347図　大屋敷1号窯窯内覆土出土灰釉陶器実測図②



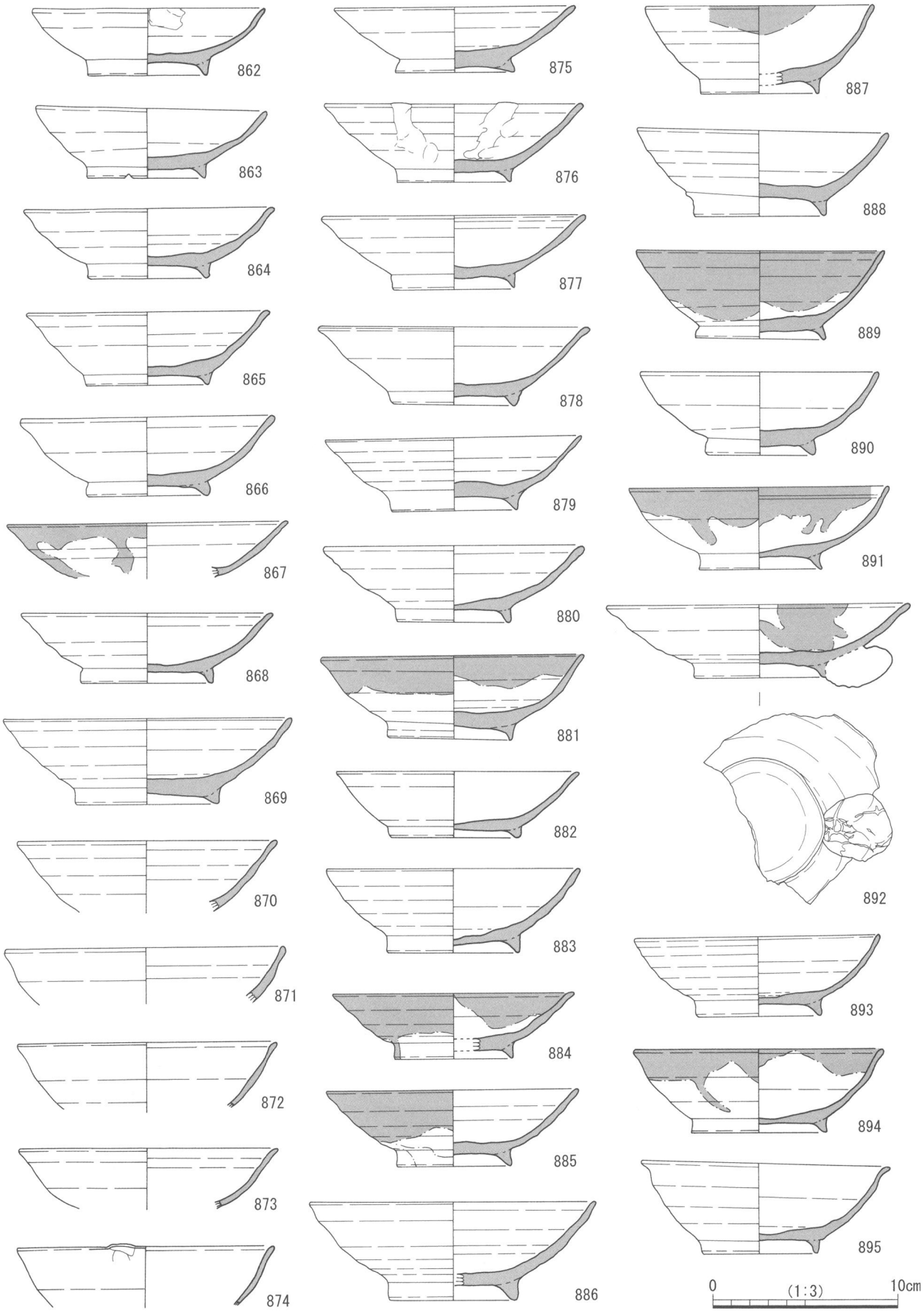
第348図　大屋敷１号窯窯内覆土出土灰釉陶器実測図③



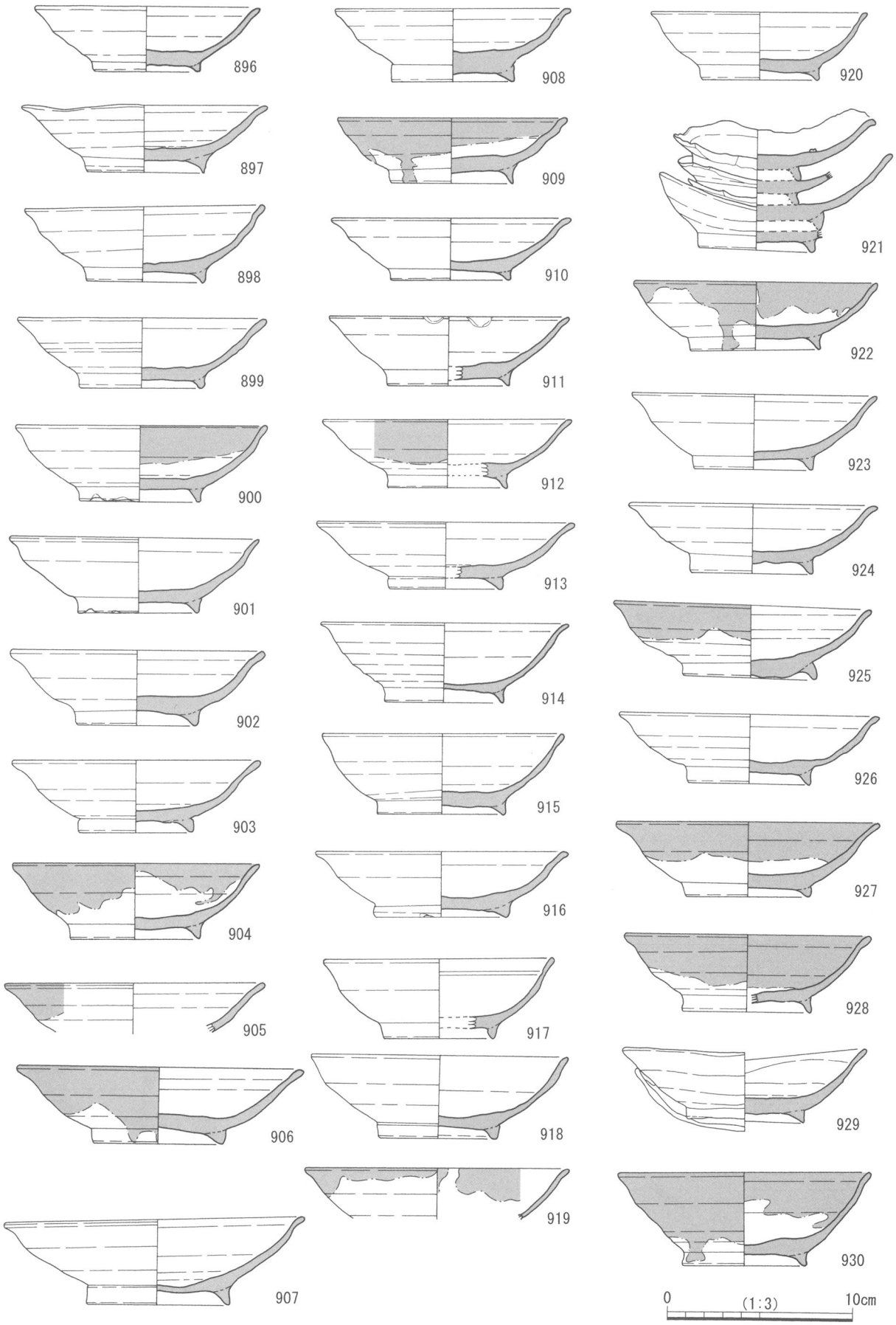
第349図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図①



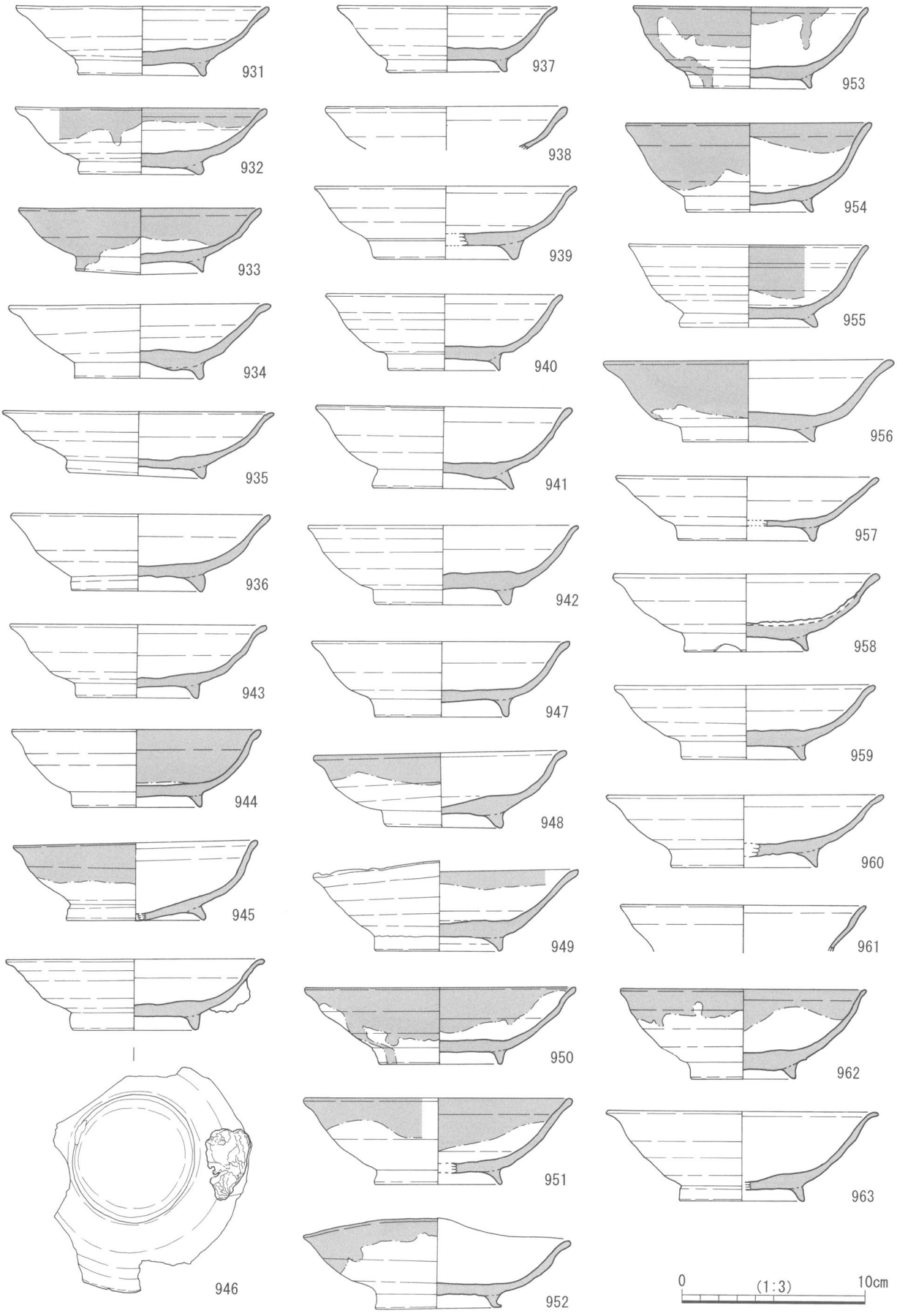
第350図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図②



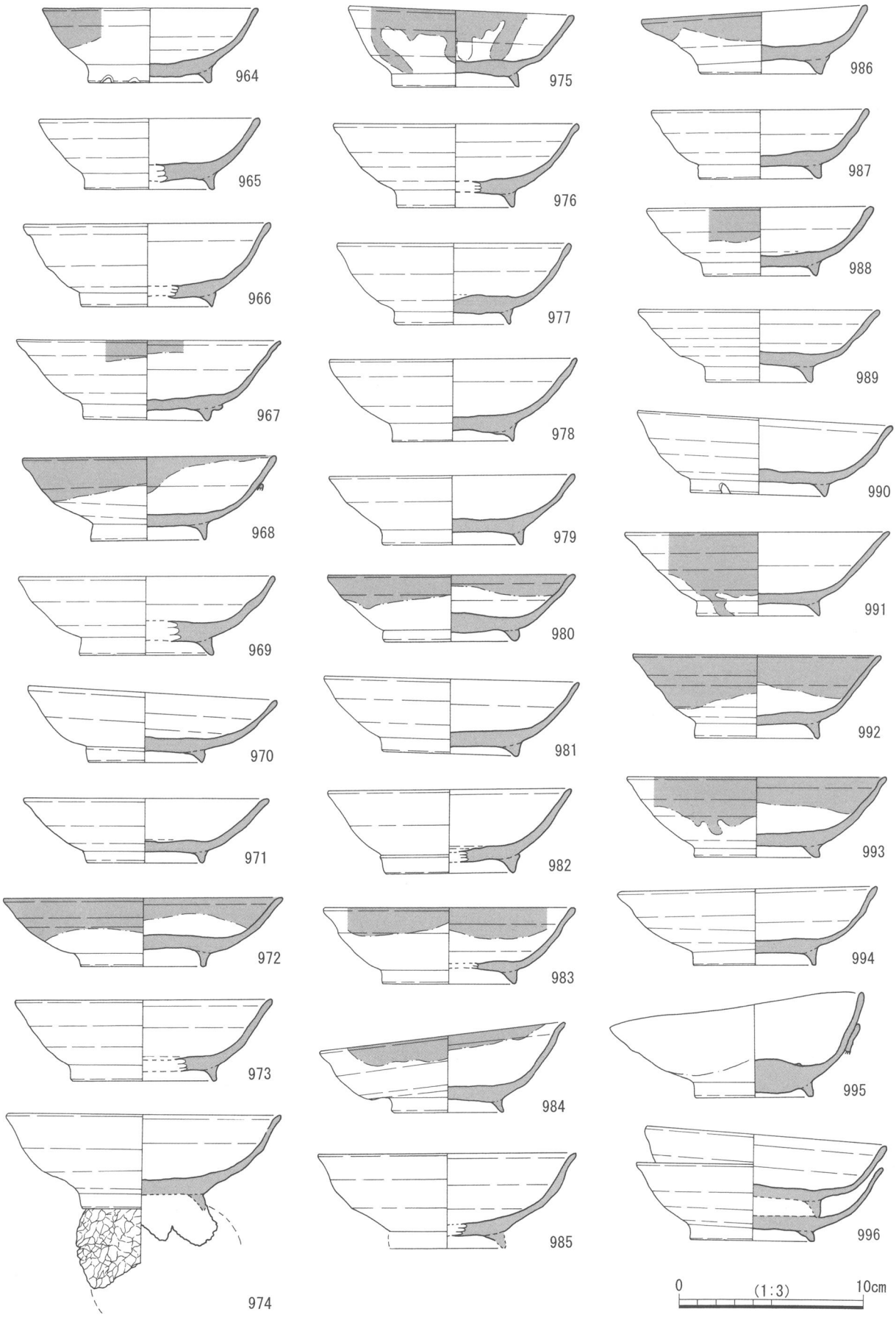
第351図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図③



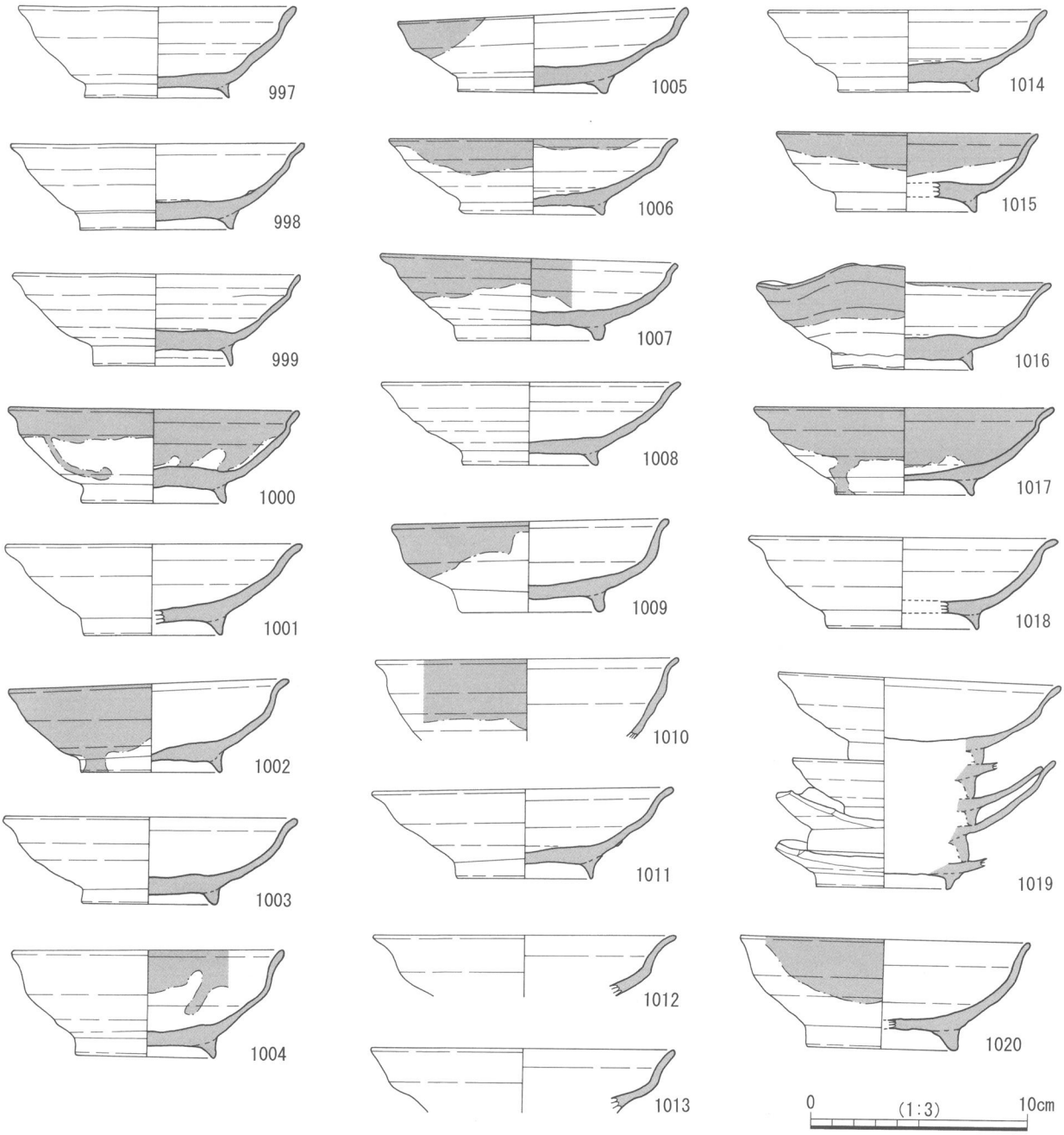
第352図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図④



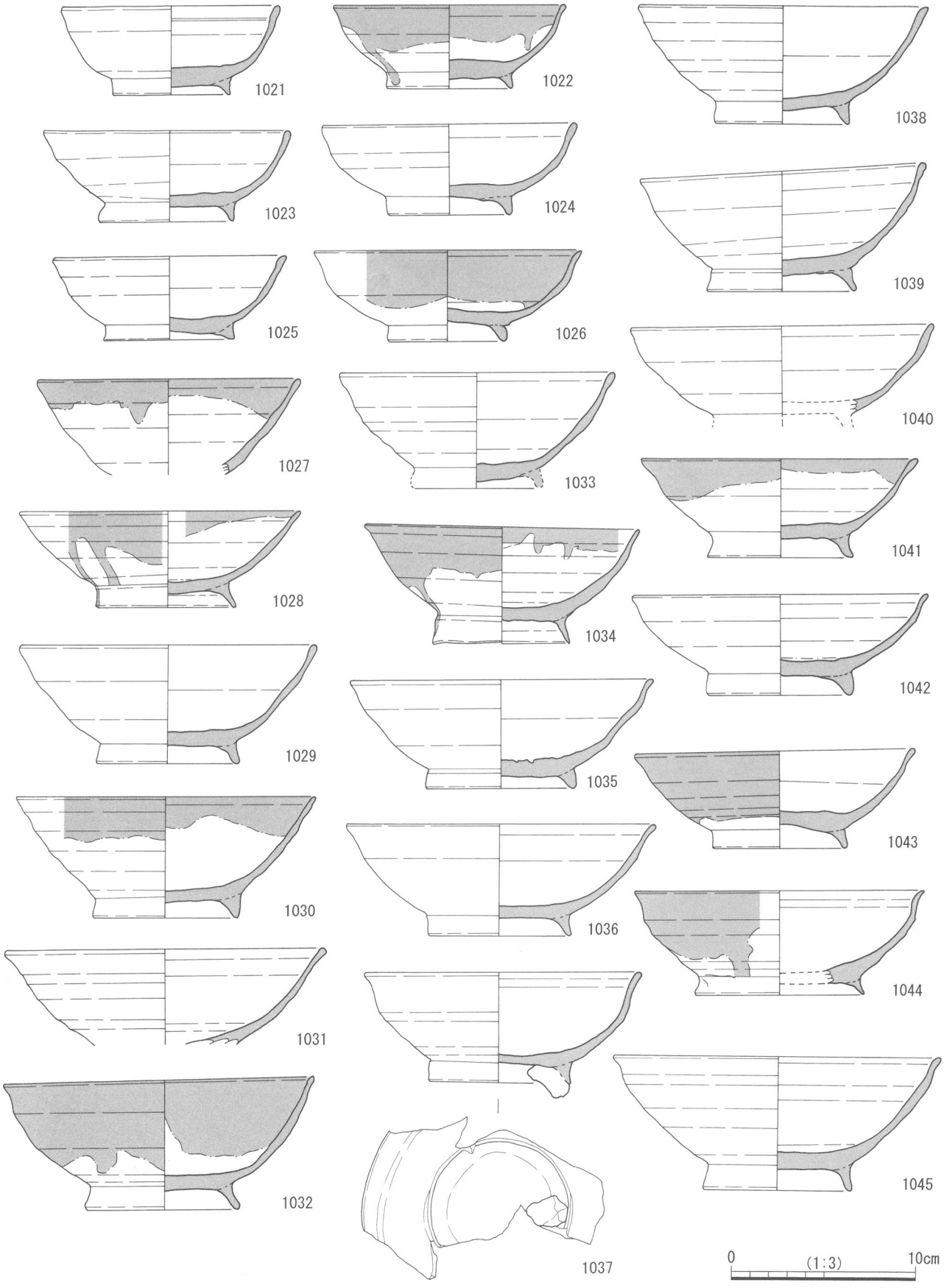
第353図　大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑤



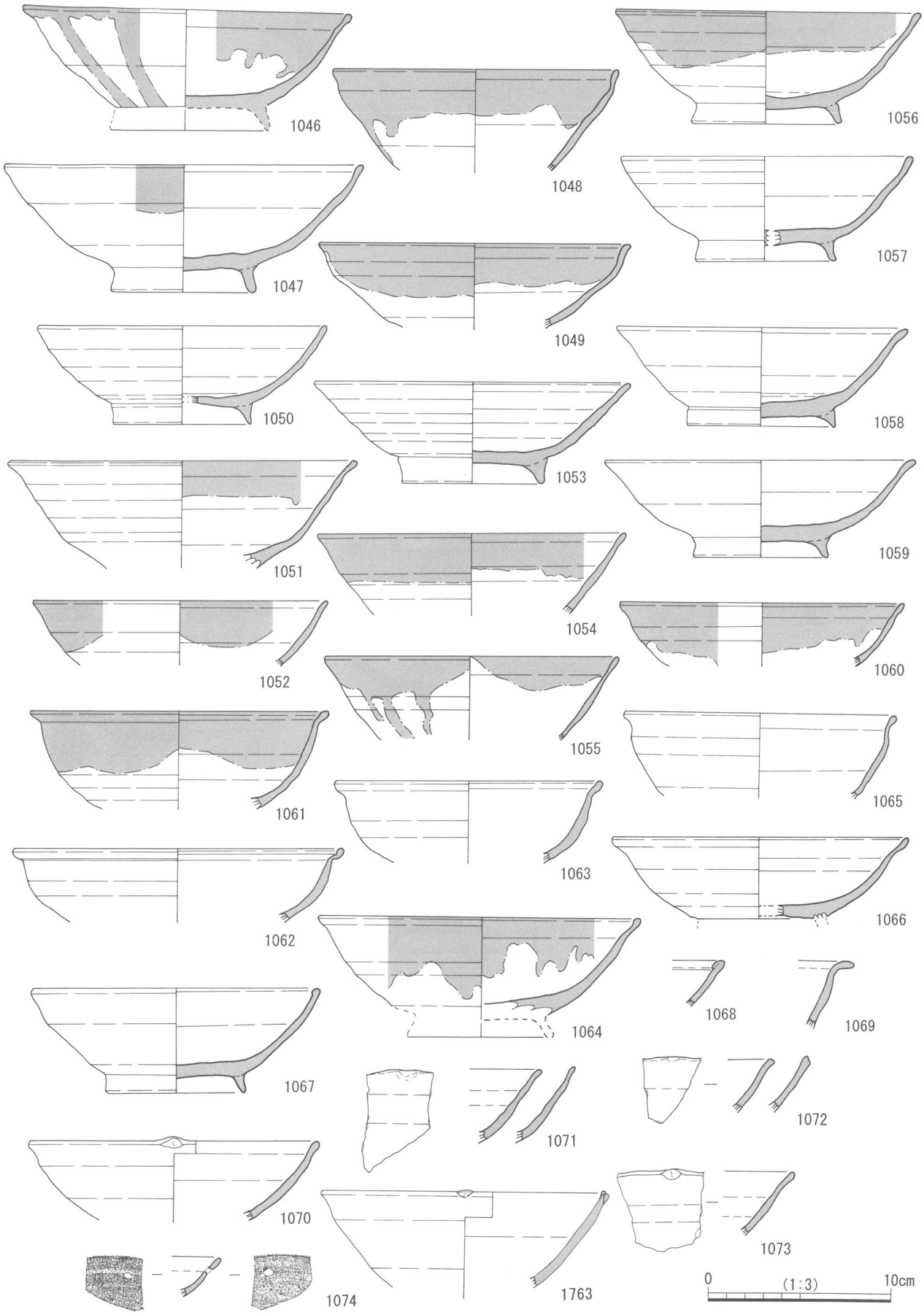
第354図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑥



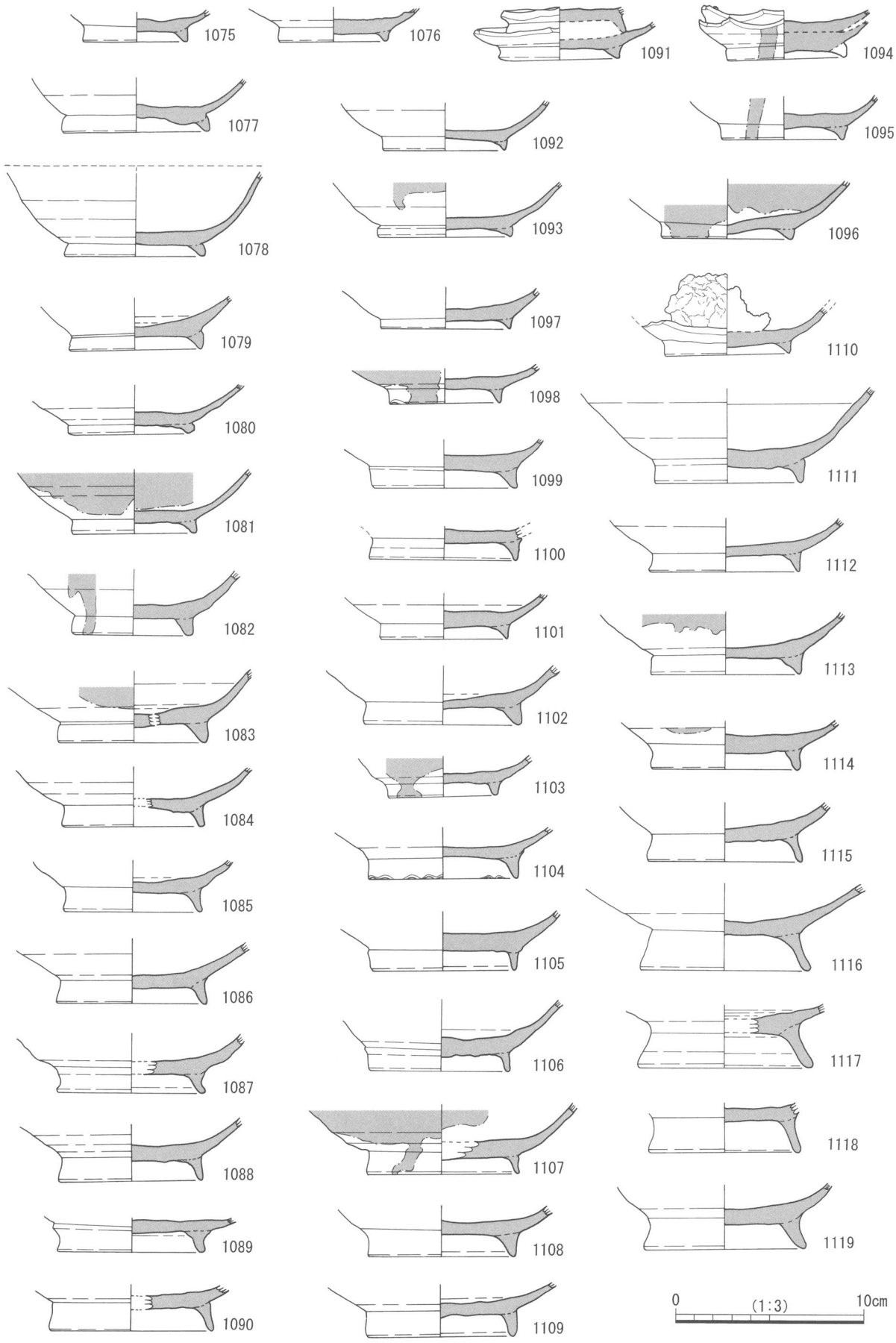
第355図　大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑦



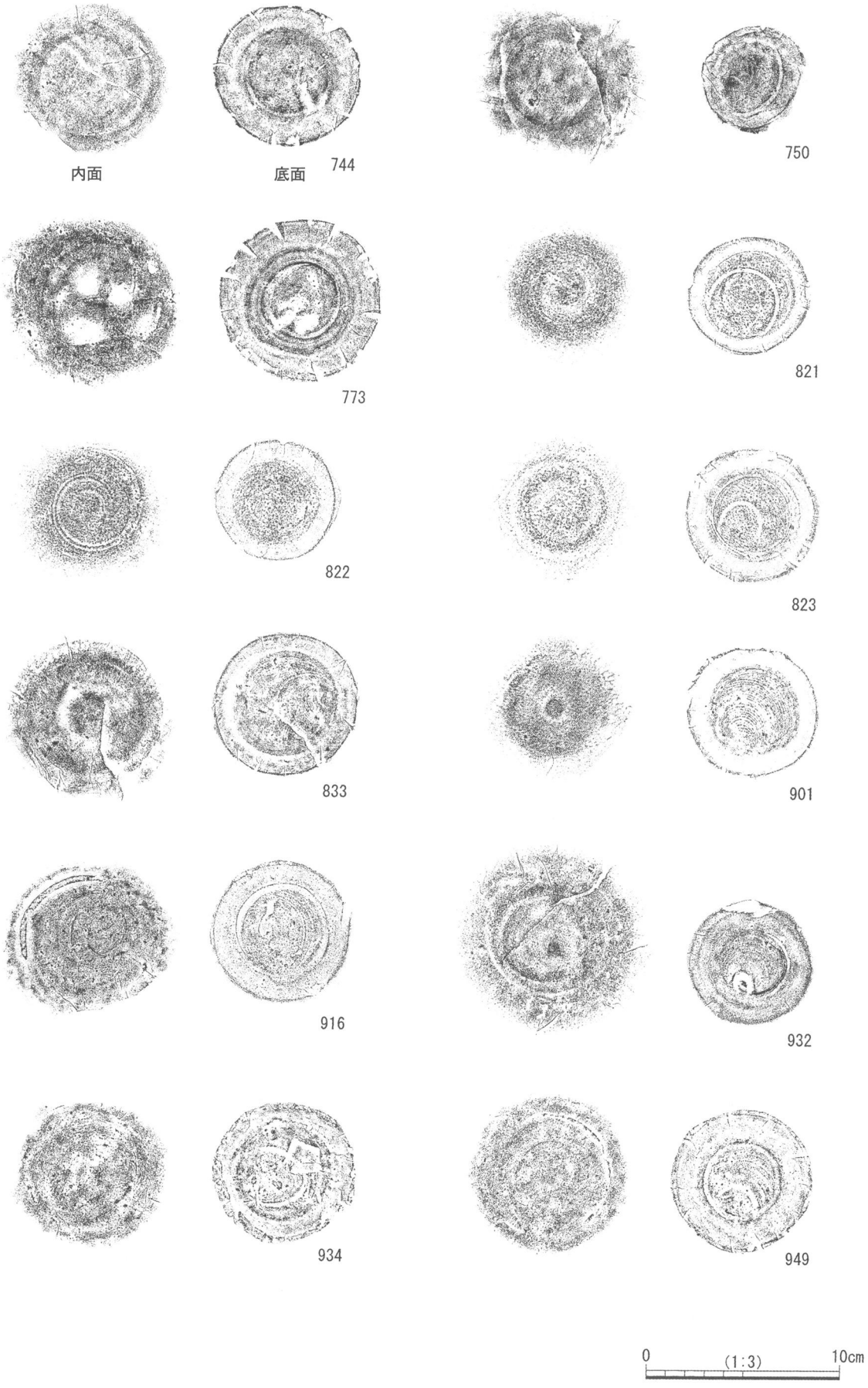
第356図　大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑧



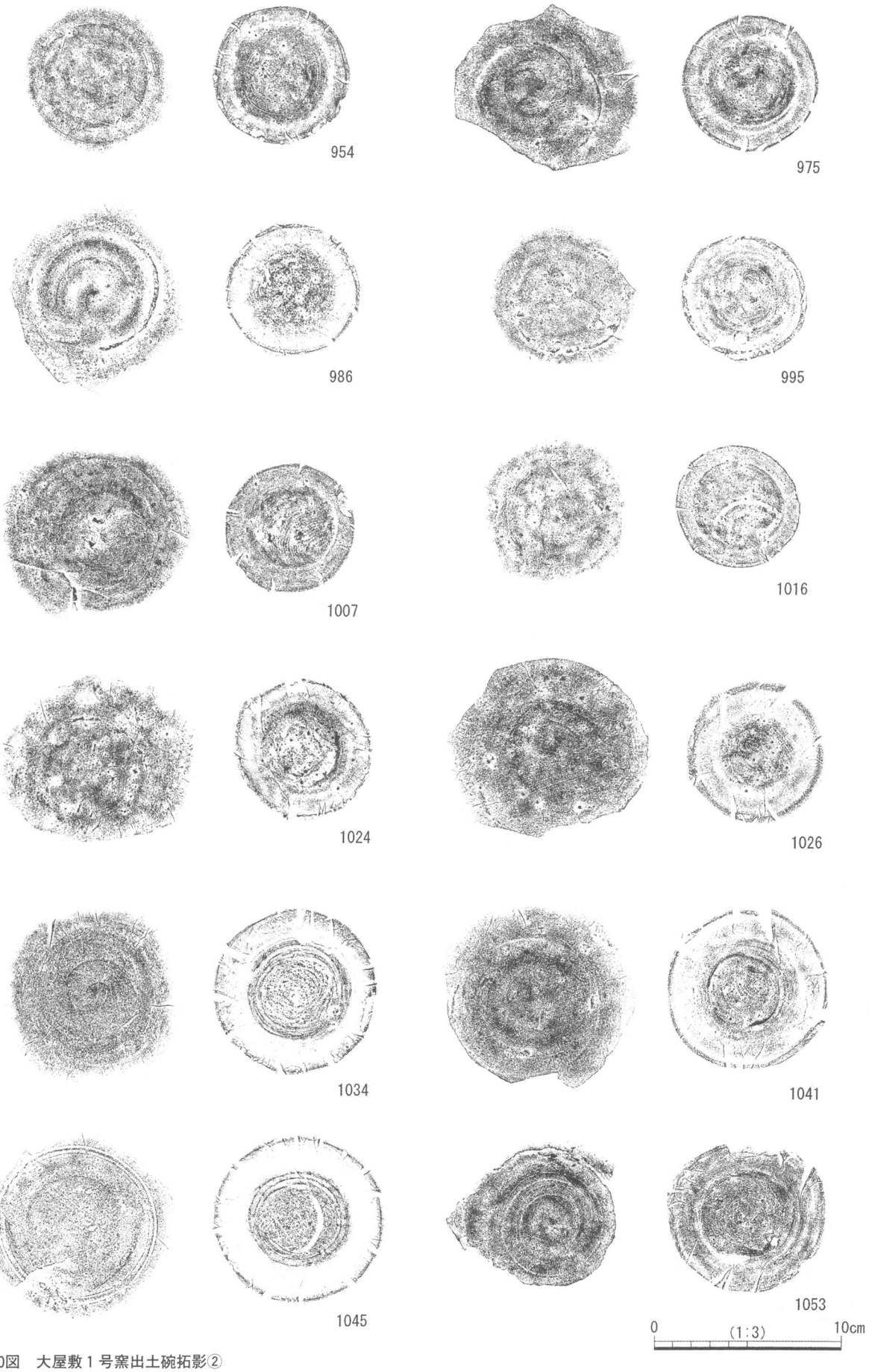
第357図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑨



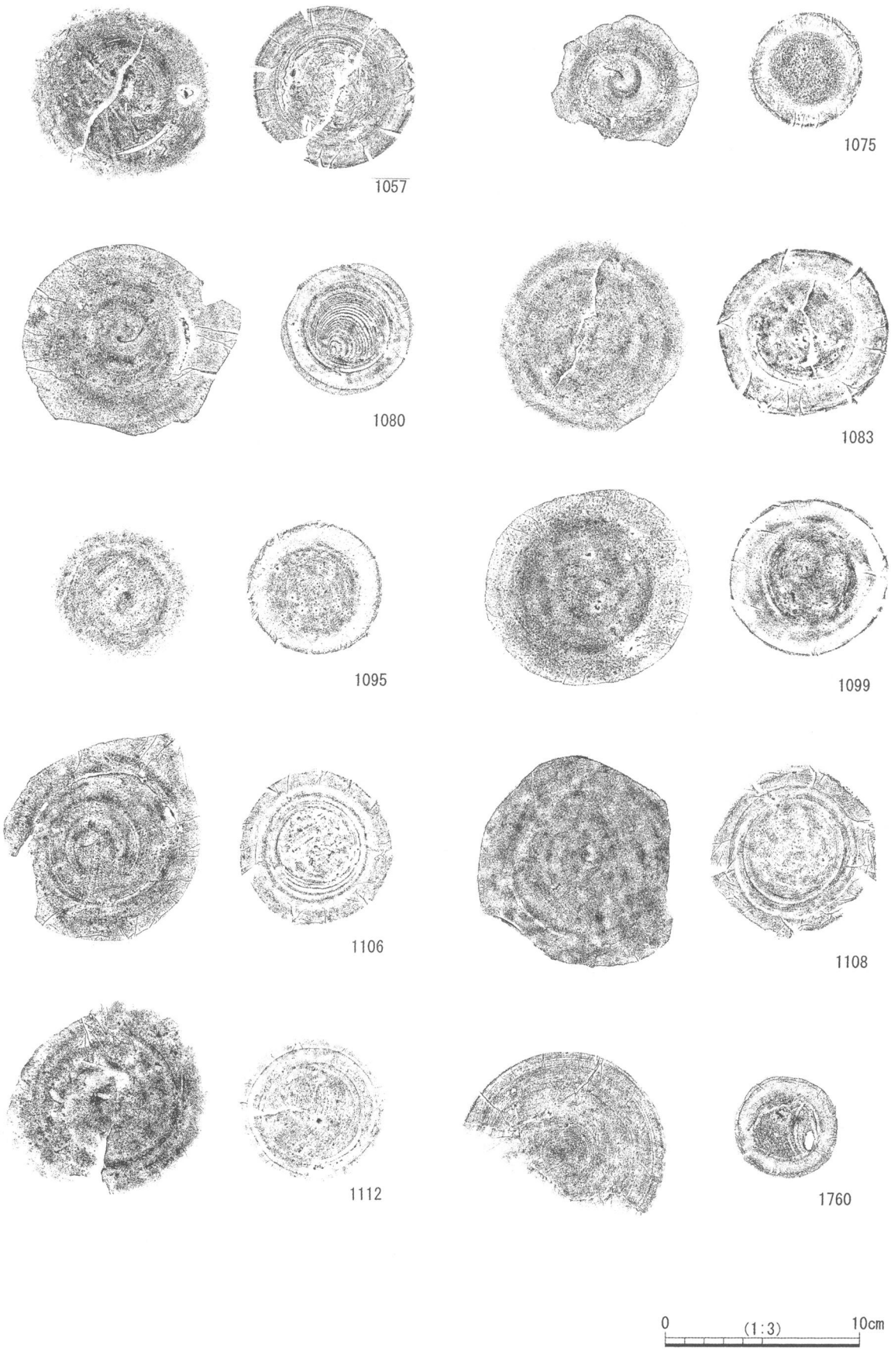
第358図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑩



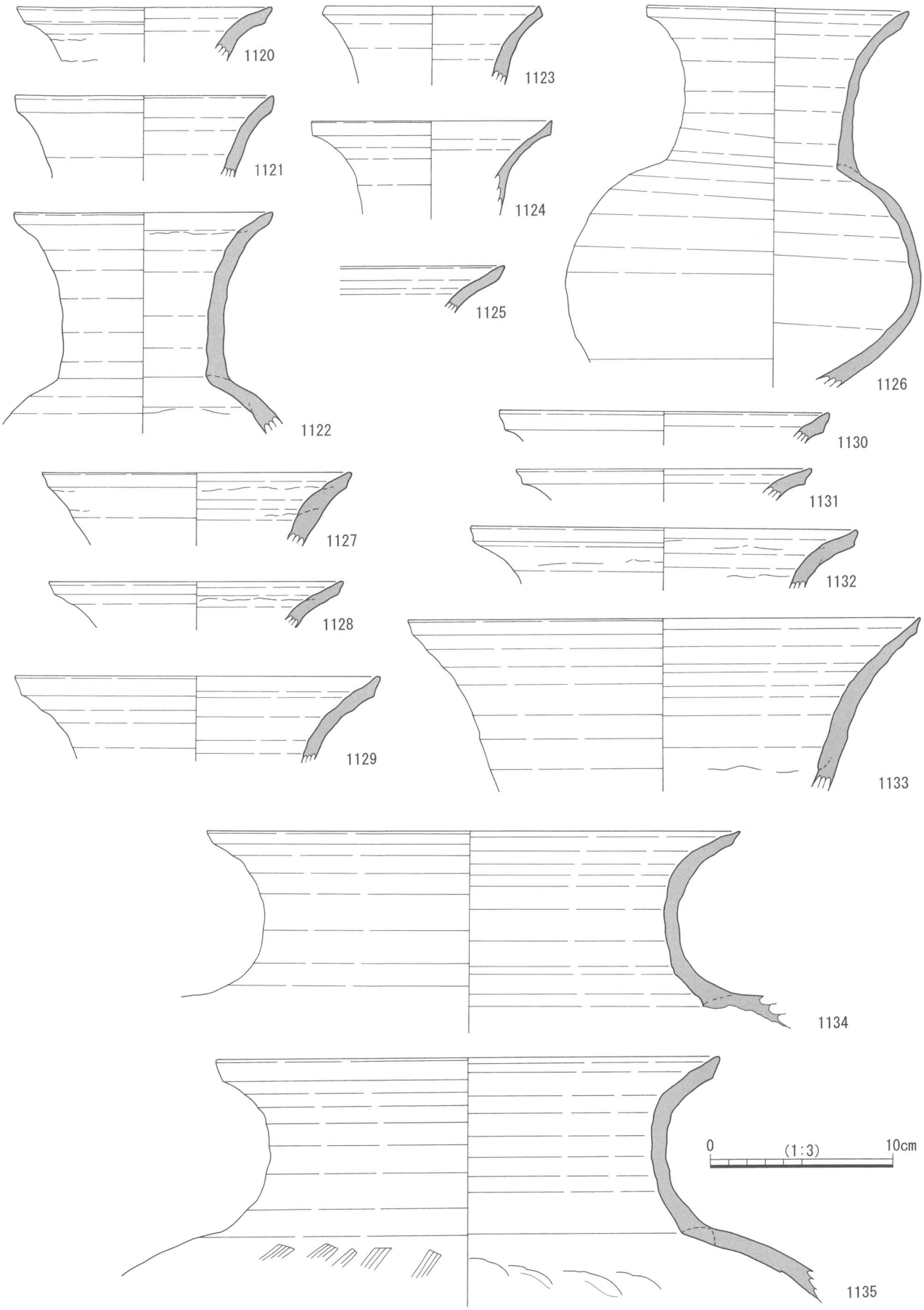
第359図　大屋敷1号窯出土碗拓影①



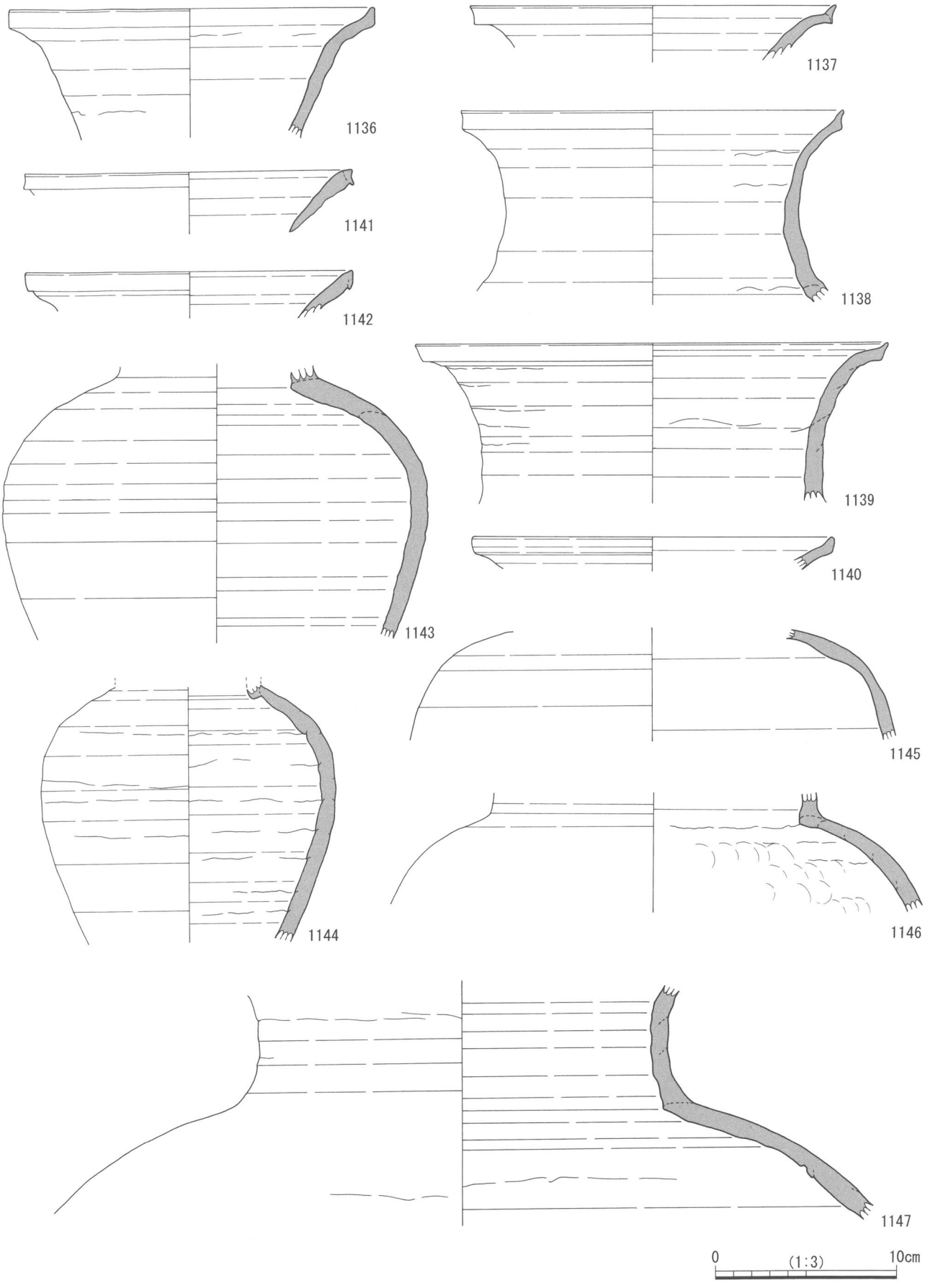
第360図　大屋敷１号窯出土碗拓影②



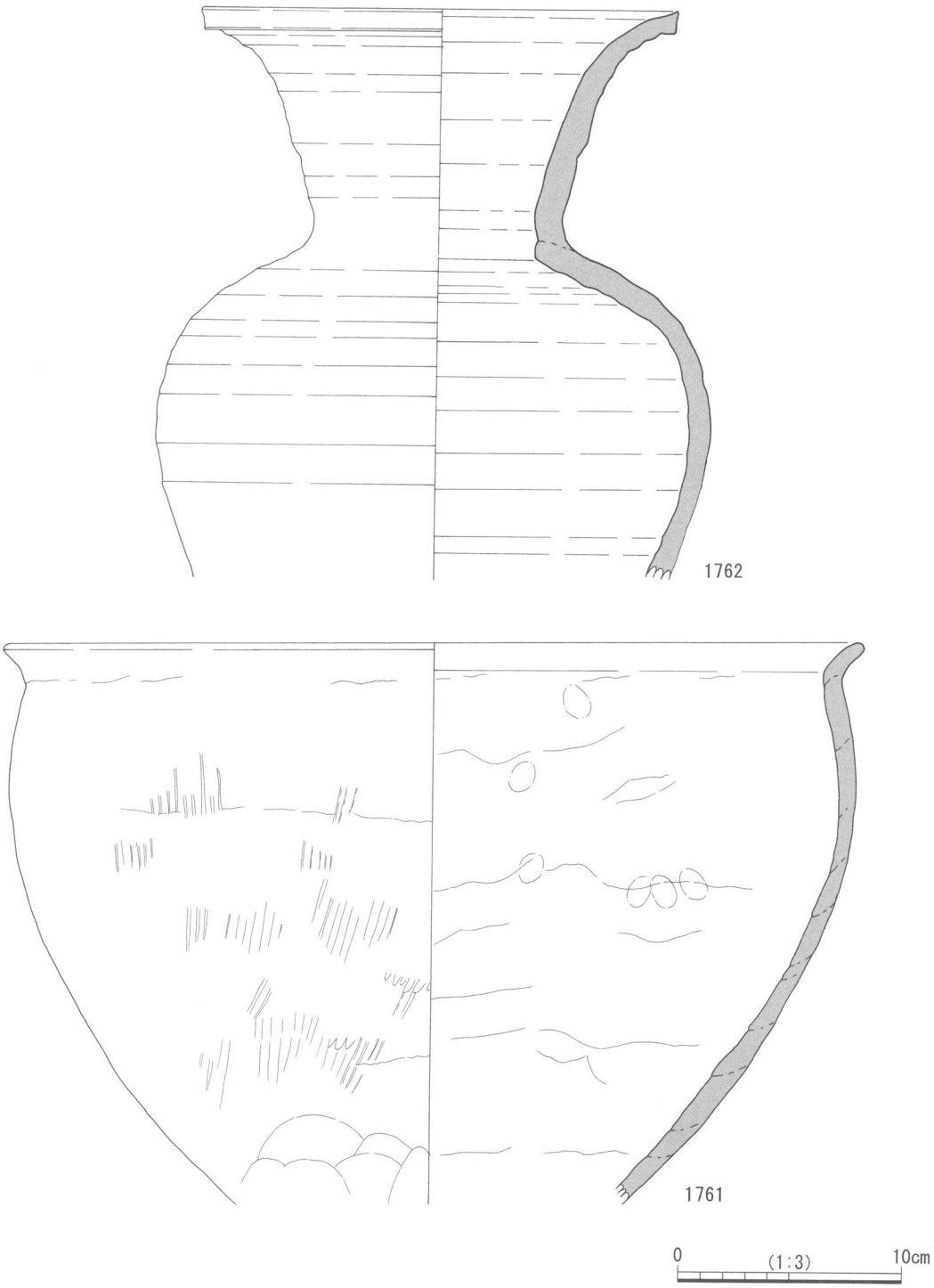
第361図　大屋敷1号窯出土碗拓影③



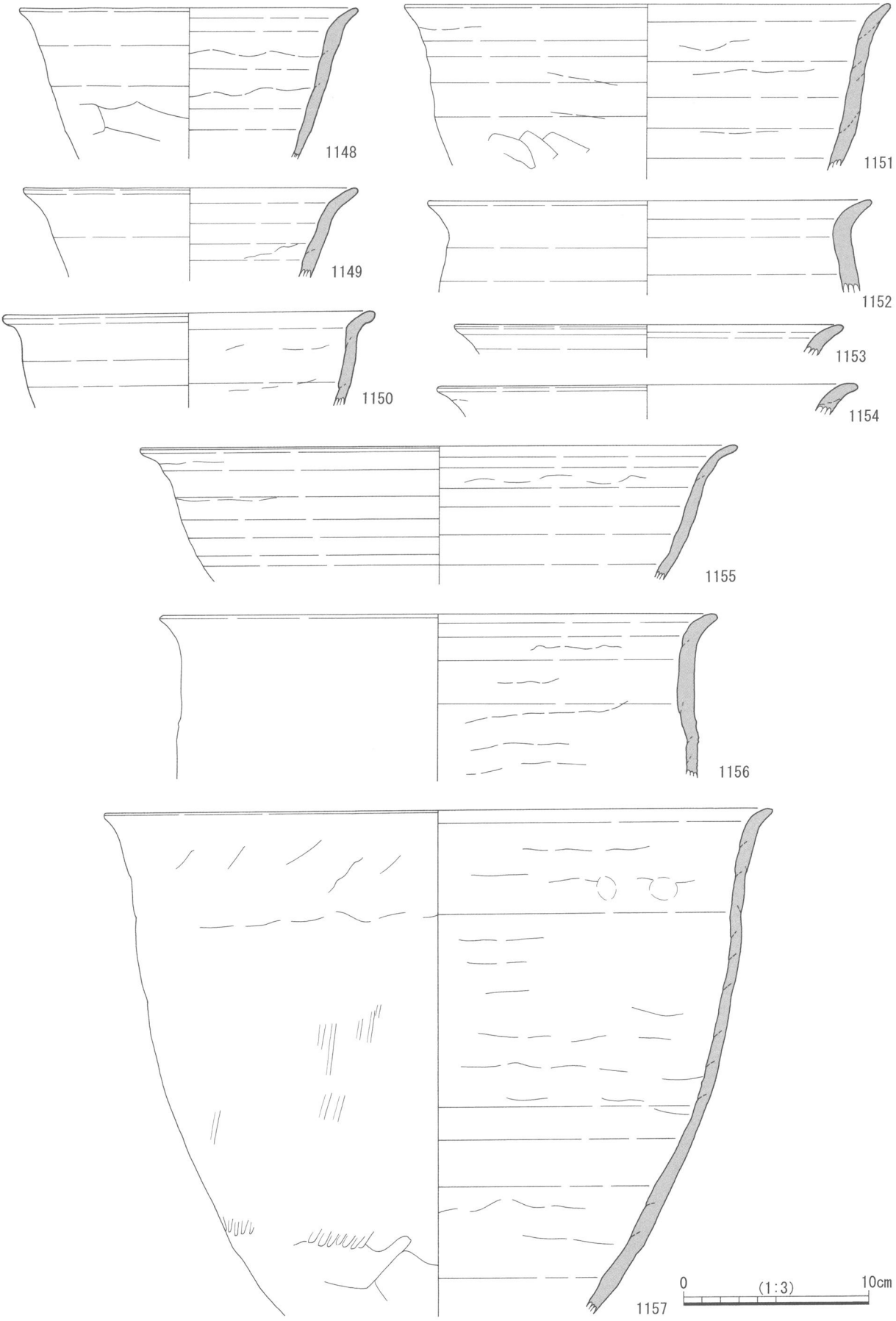
第362図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑪



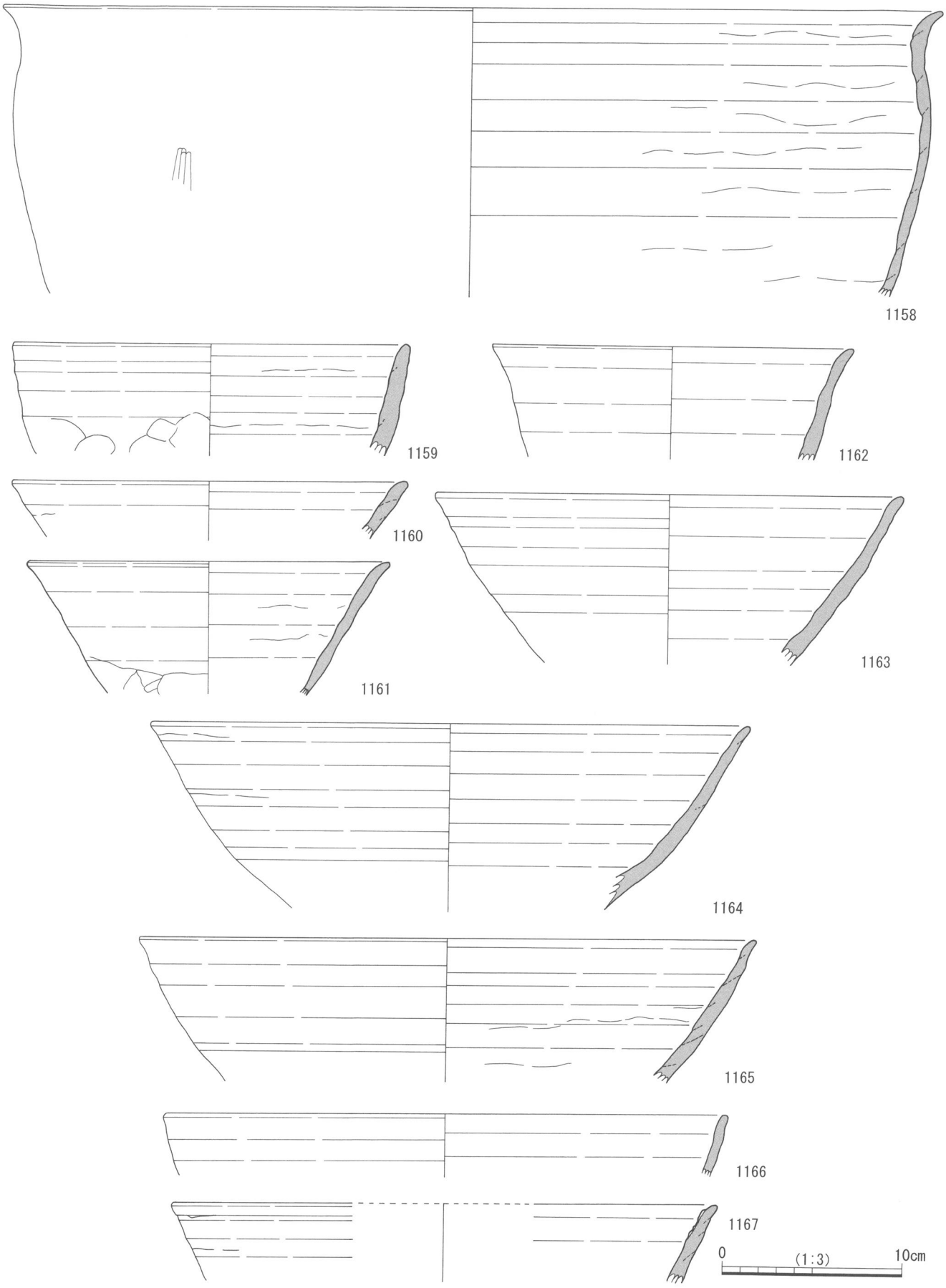
第363図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑫



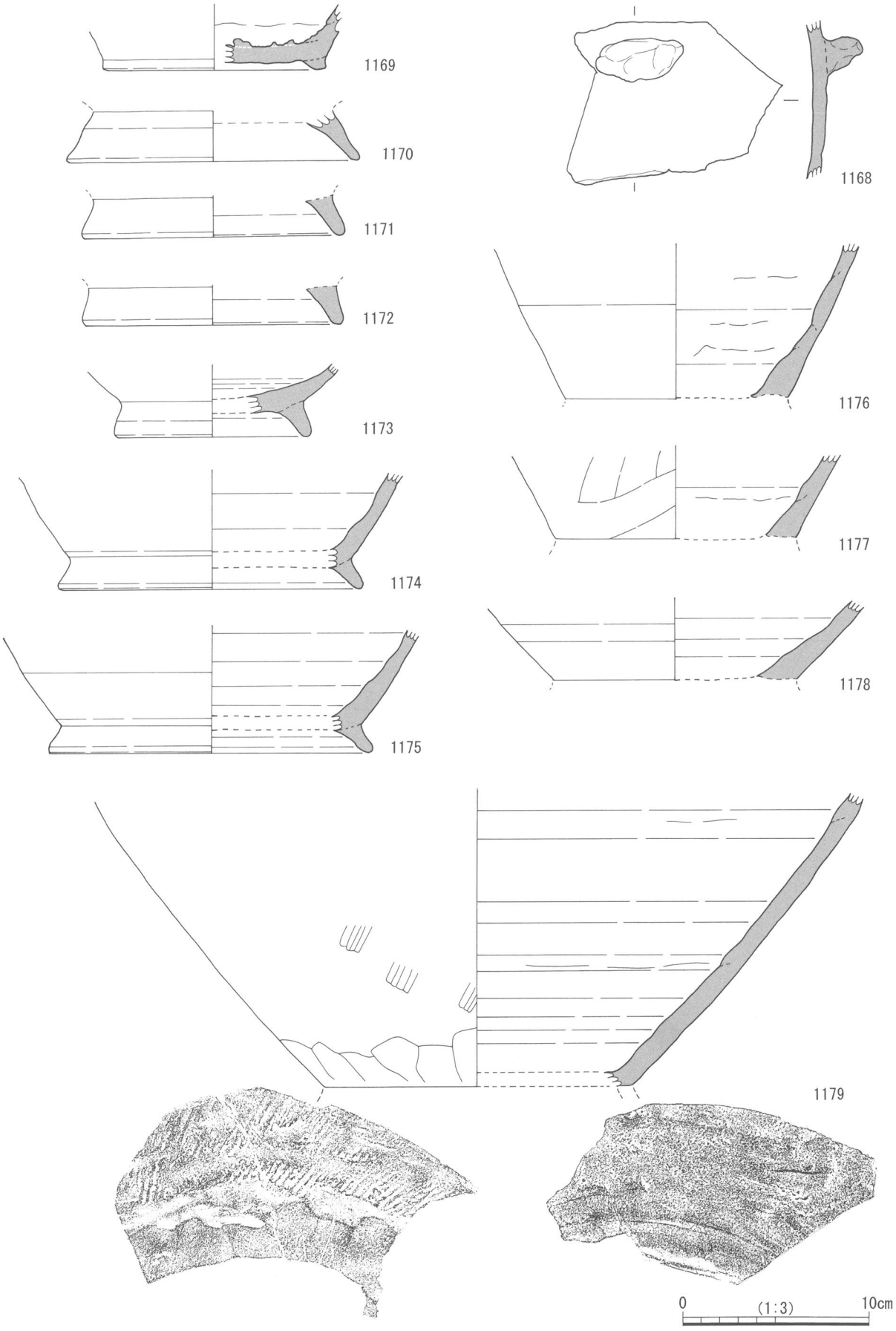
第364図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑬



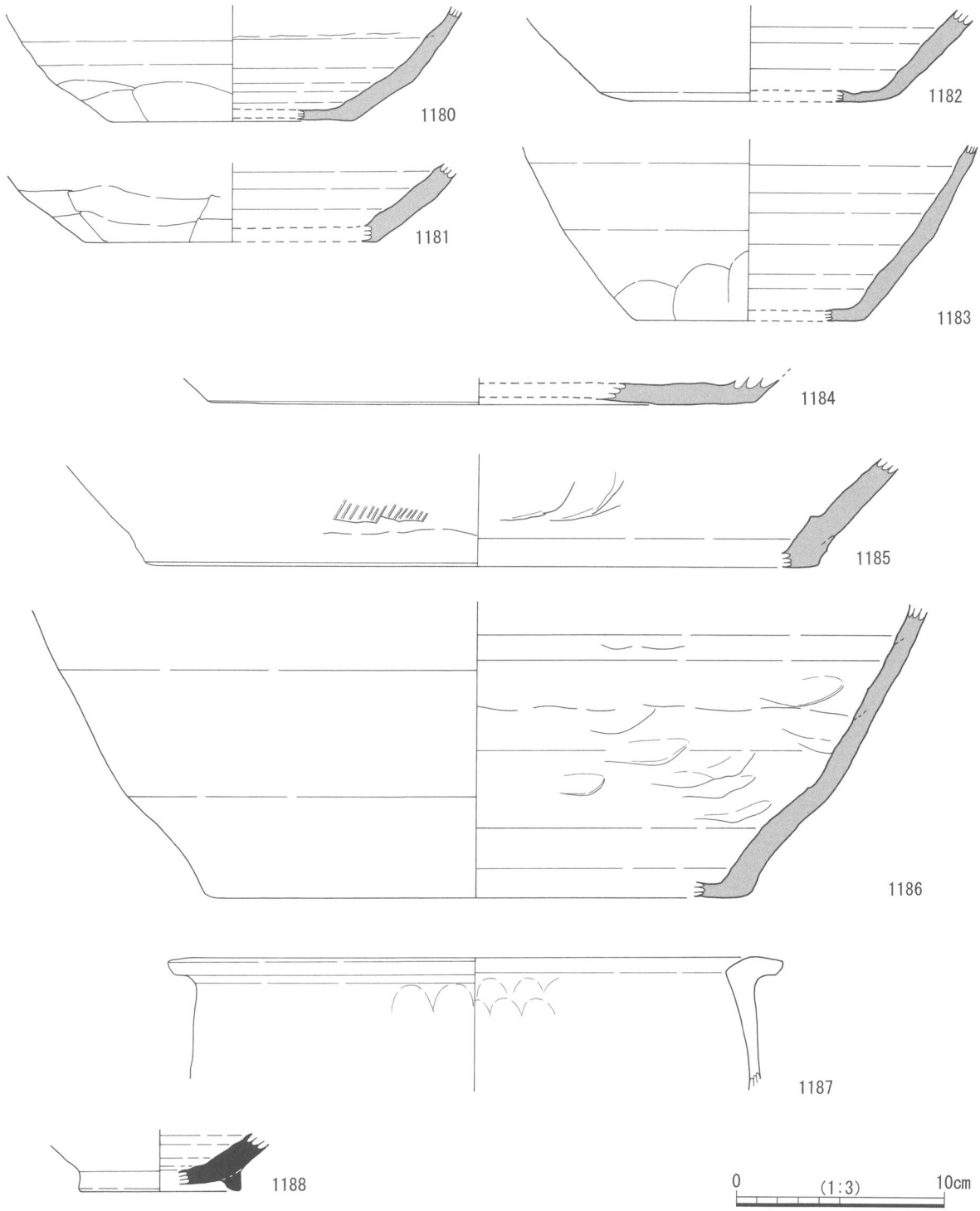
第365図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑭



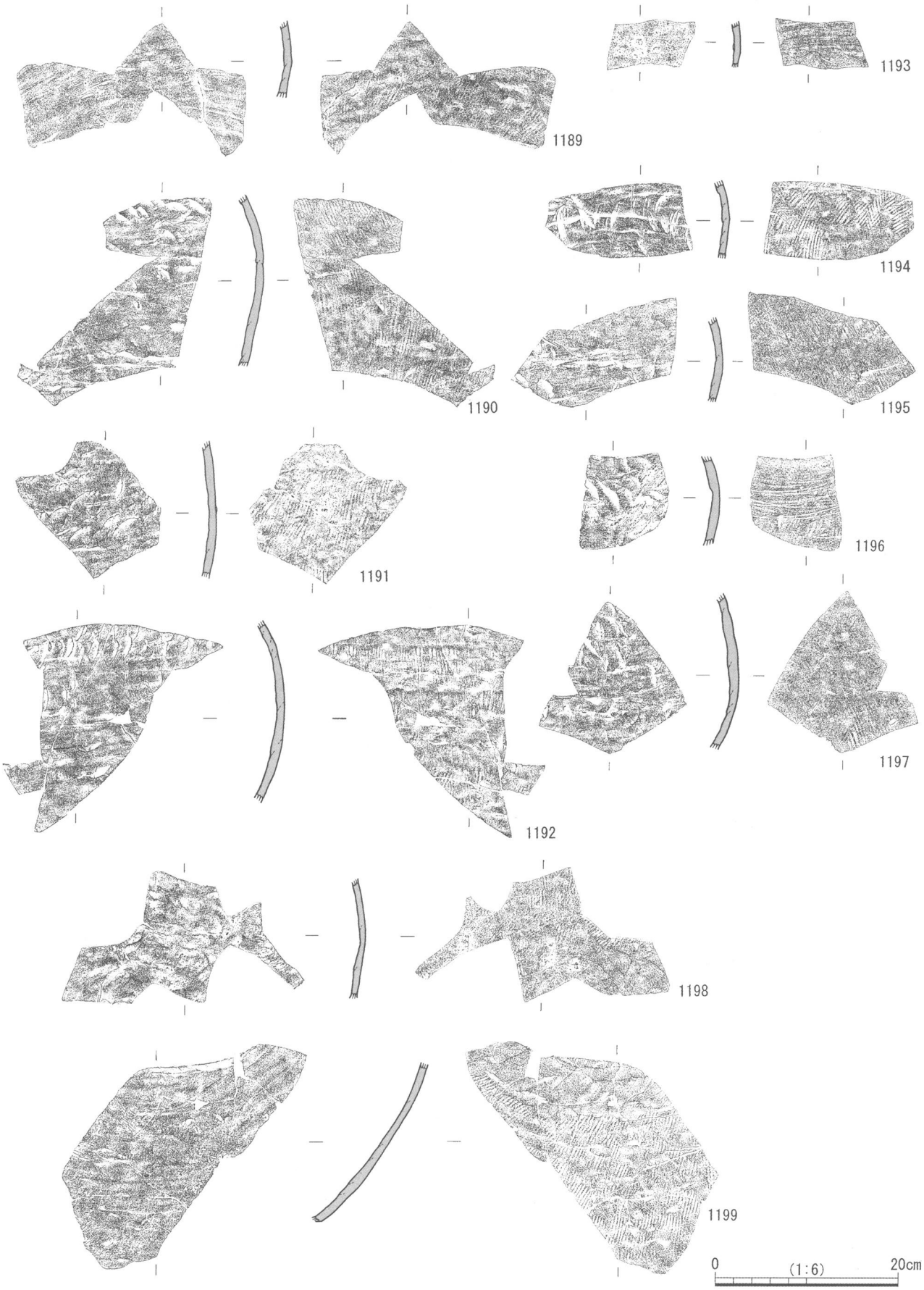
第366図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑮



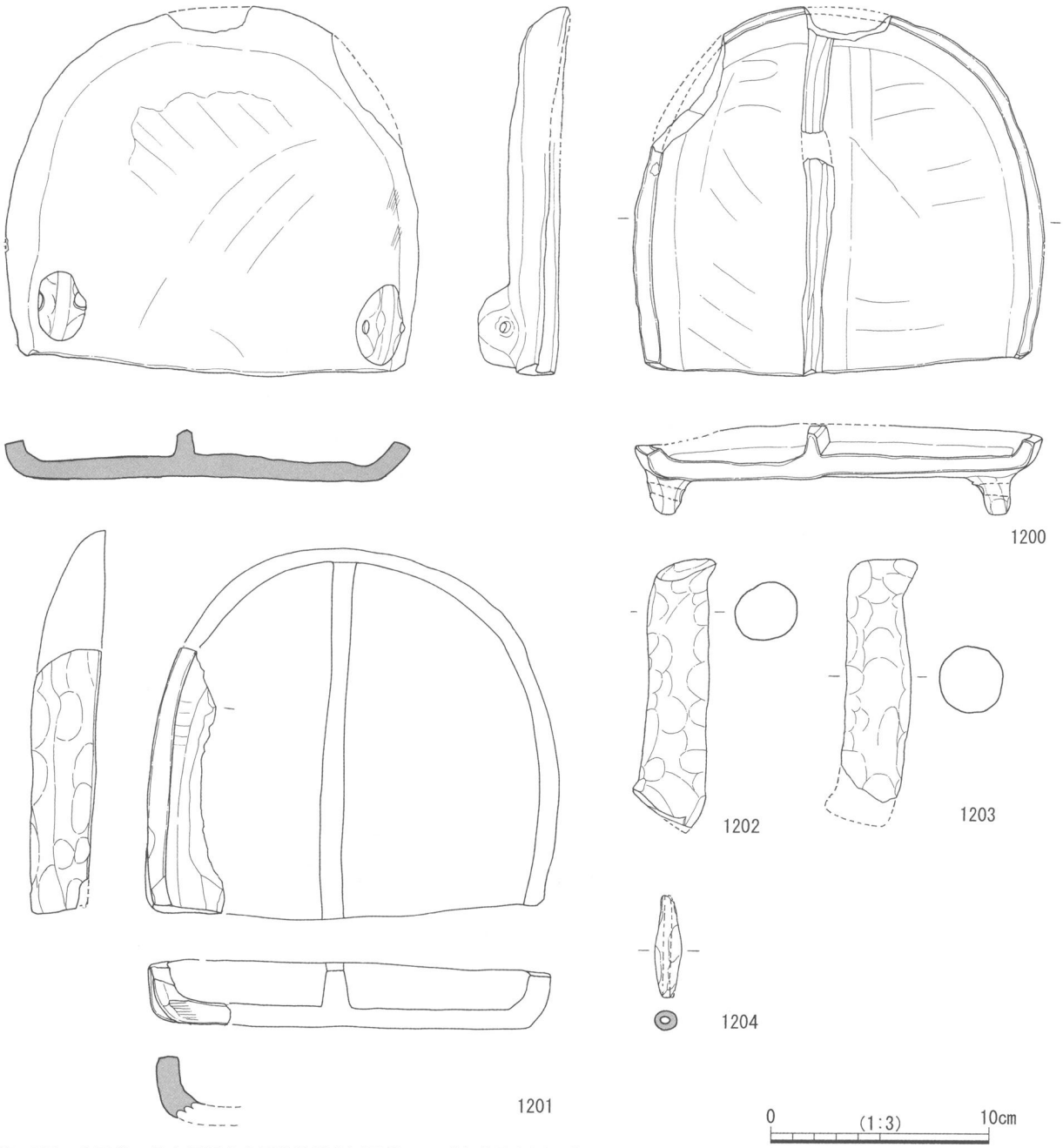
第367図　大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑯



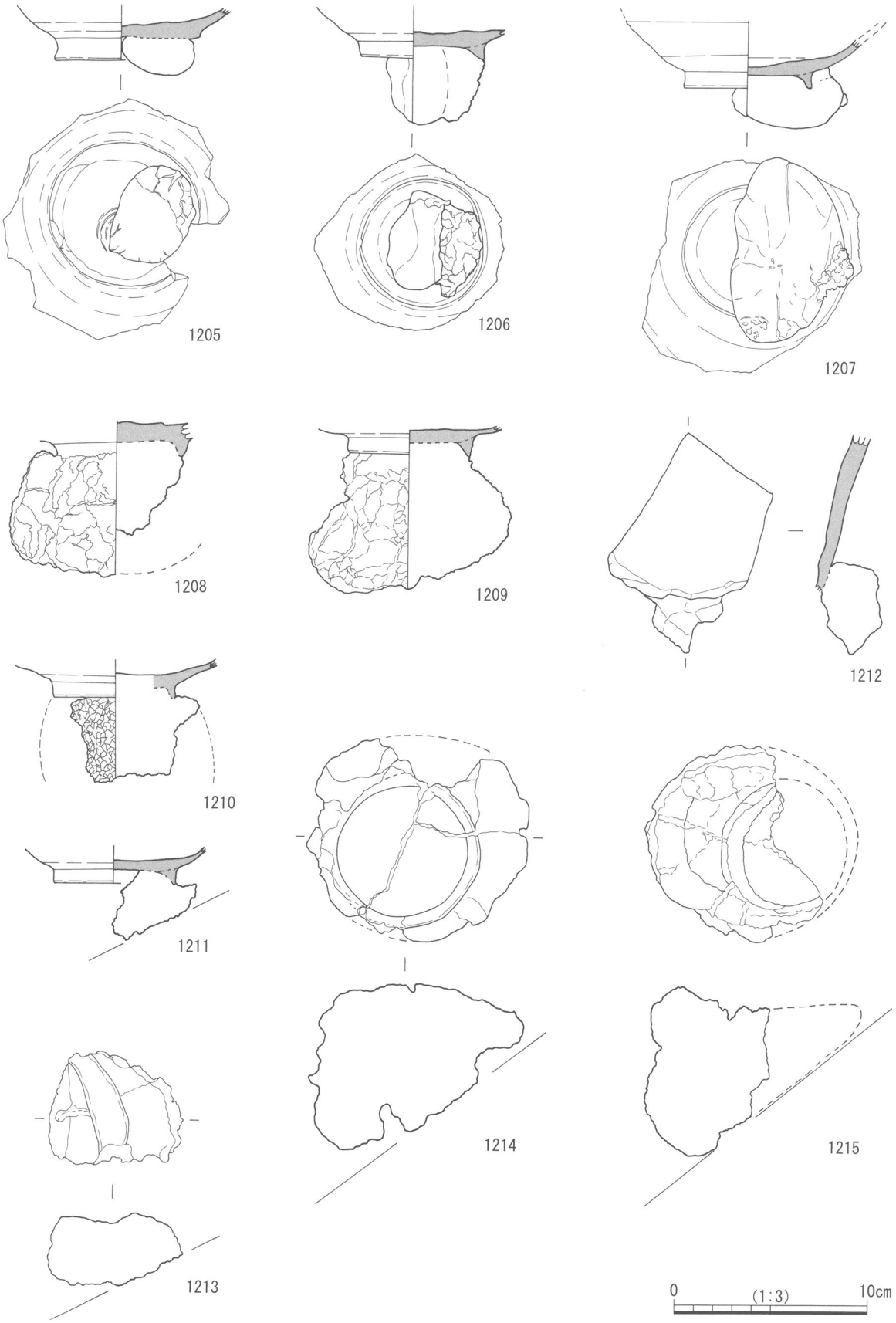
第368図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑰



第369図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑱



第370図　大屋敷１号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑲および窯道具実測図①



第371図　大屋敷1号窯灰原出土窯道具実測図②

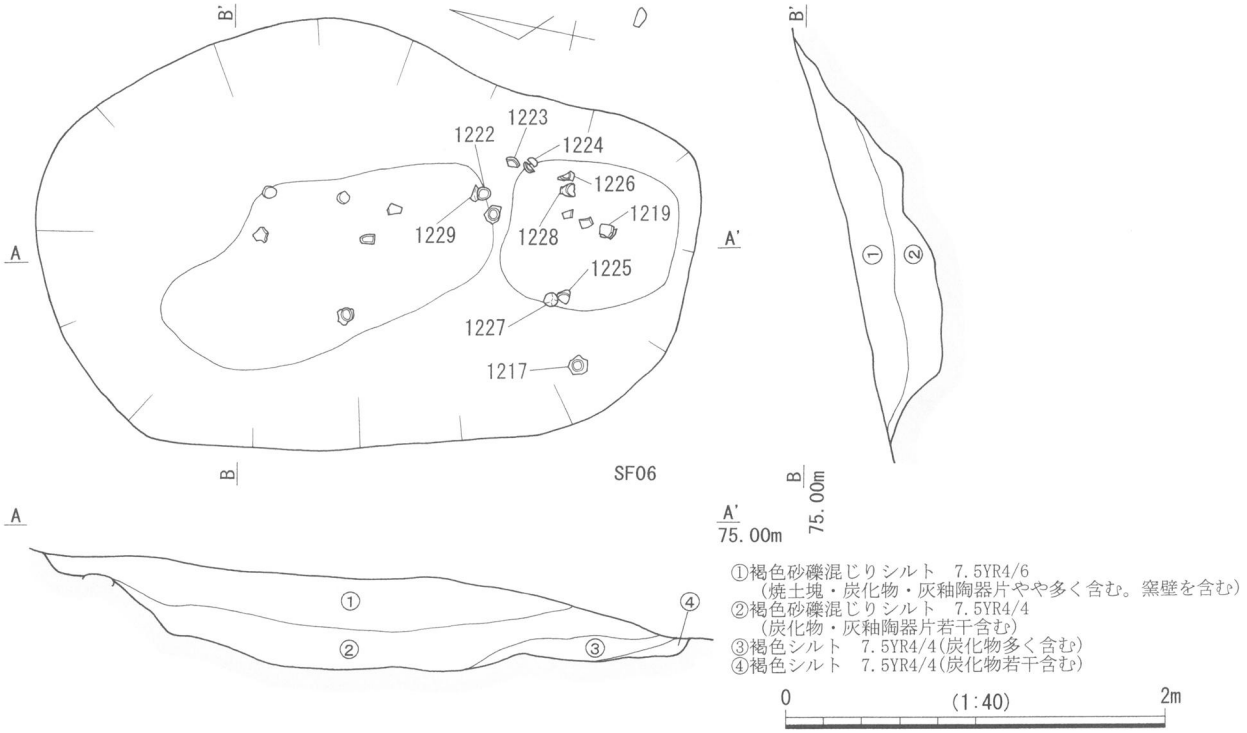
第３節　窯以外の遺構と遺物

１　SF06（第372・373図、図版182・191）

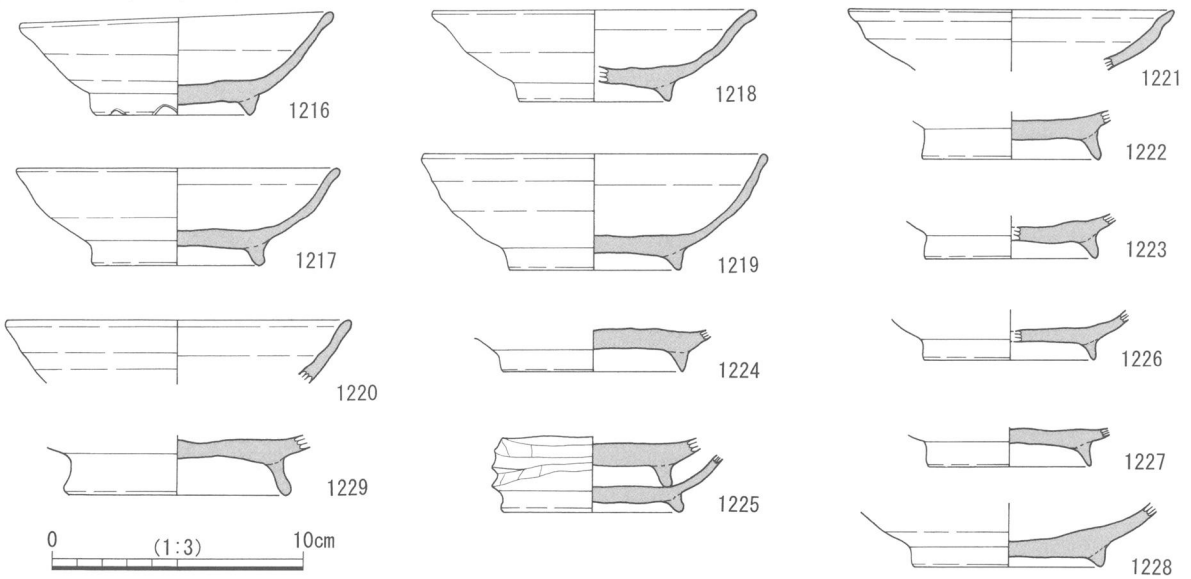
遺構　SF06は１号窯の南東約１ｍで確認された不整形な楕円形の土坑である。長軸3.5m、短軸2.3m、深さ0.5mをはかる（第372図、図版182）。①・②層に焼土塊が多量に含まれており、出土した灰釉陶器は１号窯と同様の特徴を有していることから総合して、１号窯と同時期に存在した窯操業に関係する作業場などの機能を有していたと想定する。

出土遺物　灰釉陶器碗（1216～1220，1222～1228）、皿か（1221）、托か（1229）が出土している（第373図）。

器形、高台の形、法量、底部の調整技法の特徴は１号窯・灰原出土の灰釉陶器と同様であり、１号窯の生産品であることが判明する。



第372図　土坑（SF06）遺構平面図



第373図　土坑（SF06）出土灰釉陶器実測図

第４節　観察表

観察表　凡例

①法量（口径等）

単位はcm。

括弧なし＝完存する数値。

括弧あり＝残存する数値。

②焼成

良好＝焼成良好。

不良＝焼成不良（生焼け）。

やや不良＝焼成やや不良。

過度＝過度の焼成（焼け歪み）。

③底部調整

未調整＝糸切り後未調整。

ナデ＝糸切り後ナデ調整。

雑なナデ＝糸切り後ナデ調整を施すが、糸切り痕が完全に消されていないもの。

不明＝摩滅や釉薬あるいは欠損のため調整が不明のもの。

④内面調整（水挽きによる成形後に行われた二次調整）

ナデ＝静止ナデ（なお、破片の場合はナデのみ。ナデの回数が判明するものには条数を記載した。ナデ１条＝静止ナデ１回、ナデ２条＝静止ナデ２回、……）

回転ナデ＝回転ナデ

指頭＝指頭圧痕。

未調整＝調整なし（成形による水挽きのみ）

④残存部位と残存率

記載なし＝残存率は全体に対する残存する割合（%）

記載あり＝残存率は残存部位の残存する割合（%）、例：底部　50%＝底部の残存が底部全体の50%であることを示す。

⑤高台（接地面）

ソダ痕＝植物に乗せた痕跡（棒状）が確認できるもの。

籾痕＝籾殻の痕跡が確認できるもの。

砂目＝砂の痕跡が確認できるもの。

⑥転用（自然釉の付着状況や重ね焼きの痕跡（重ね焼きされた底部の接着）などを総合的に判断した。）

有＝転用されたもの

回数＝転用された最低回数が判明するもの（例：２回＝２回以上）

無＝転用されていないもの

不明＝転用の有無が不明であるもの。

⑦施釉方法

漬掛＝灰釉漬け掛け

黄土＝黄土刷毛塗り

⑧備考

破片で転用＝破断面に自然釉や煤、焼台が付着するもの。

補修痕＝碗・皿などの口縁部に粘土を充填するもの。

第58表　大屋敷1号窯出土灰釉陶器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
723	345		窯内		床面直上	碗	12.3	4.0		6.5	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		33			1回	
724	345	188	窯内		床面直上 覆土	碗	13.2	4.5		6.8	1.0	密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		66			無	補修痕
725	345		窯内		床面直上 覆土	碗	13.0	3.9		6.7	1.0	密	過度	灰黄	右	未調整	ナデ		66			有	
726	345		窯内		床面直上 覆土	碗	12.8	4.7		6.9	0.9	粗	不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		50			有	
727	345	192	窯内		床面直上	碗	13.4	5.3		6.5	0.9	密	不良	灰褐	右	ナデ	ナデ1条		70			無	
728	345		窯内		床面直上	碗	13.5	5.0		6.0	0.8	粗	不良	黄灰	右	不明	ナデ		33			不明	
729	345	192	窯内		床面直上	碗	13.1	4.9		6.6	1.1	粗	不良	黄灰	左	ナデ	未調整		33			無	
730	345		窯内		床面直上 覆土	碗	14.8	(3.6)				密	過度	灰	右	ナデ	ナデ		80			3回	
731	345	191	窯内		床面直上 覆土	碗	16.6	6.8		7.8	1.0	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		33	ソダ痕	漬掛	無	
732	345	192	窯内		床面直上 覆土	碗	15.6	6.9		7.6	1.0	密	良好	黄褐	右	未調整	ナデ		95			有	歪む
733	345	192	窯内		床面直上	碗	16.1	6.2		7.2	0.9	密	良好	黄褐	右	ナデ	ナデ		33	ソダ痕	漬掛	不明	補修痕
734	345	192	窯内		床面直上 覆土	碗	15.0	6.0		7.6	1.4	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕		有	
735	345		窯内		床面直上	碗		(2.5)		7.4	1.3	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	100			有	
736	345		窯内		床面直上	碗		(2.9)		8.1	1.6	密	良好	暗灰	右	ナデ	ナデ	底部	100			有	
737	345		窯内		床面直上	碗		(1.2)				密	不良	灰白	不明		未調整	底部	10			有	破片で転用
738	345		窯内		床面直上	碗		(2.1)		7.2	0.8	密	不良	黄灰	右	ナデ	ナデ	底部	35	ソダ痕		無	
739	345		窯内		床面直上	鉢か壺		(14.7)				密	良好	灰黄	右			体部～底部	20		黄土	有	
740	346		窯内		覆土	無台碗	10.1	2.7		5.8		密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		33			有	焼台付着
741	346		窯内		覆土	碗	12.8	3.2		6.0	0.7	密	やや不良	灰白	右	ナデ	ナデ		25	ソダ痕		無	
742	346		窯内		覆土	碗	12.8	3.6		6.7	0.9	密	良好	灰褐	左	ナデ?	回転ナデ		33			有?	重ね焼きの一番上の可能性有り
743	346		窯内		覆土	碗	14.1	3.9		6.2	0.7	密	良好	黄褐	右	ナデ	ナデ		25	ソダ痕		有	
744	346		窯内		覆土	碗	13.8	4.4		6.9	0.9	密	やや不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		33			不明	
745	346	191 193	窯内		床面直上	碗	12.4	4.8		6.6	0.9	密	不良	黄灰	右	ナデ	ナデ3条		90	ソダ痕		不明	
746	346		窯内		覆土	碗	13.1	4.5		6.4	0.9	密	良好	灰黄	左	ナデ	ナデ		33			有	歪む
747	346		窯内		覆土	碗	14.0	3.6		6.5	0.7	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		23			有	
748	346		窯内		覆土	碗	12.7	4.0		6.4	0.8	密	良好	灰褐	左	ナデ	ナデ		19		漬掛	有?	
749	346		窯内		覆土	碗	14.8	(3.9)		6.2		密	やや不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		25			不明	
750	346		窯内		覆土	碗	12.1	3.6		5.8	0.6	密	不良	灰白	右	ナデ	ナデ		25	ソダ痕		不明	
751	346	190	窯内		覆土	碗	12.3	3.8		6.5	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		66			3回	歪む
752	346		窯内		覆土	碗	13.0	4.1		6.2	0.6	密	良好	灰白	右	ナデ	未調整		25	ソダ痕		有	
753	346		窯内		覆土	碗	12.8	3.9		6.6	0.8	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		50			3回	歪む
754	346	191	窯内		覆土	碗	12.3	4.5		6.5	1.0	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		50	ソダ痕		1回	
755	346		窯内		覆土	碗	15.0	4.1		7.2	1.0	密	不良	灰	右	未調整	未調整		25			不明	補修痕
756	346		窯内		覆土	碗	12.6	3.5		6.1	0.7	密	良好	灰	右	未調整	ナデ		33		漬掛	1回	
757	346		窯内		覆土	碗	12.4	3.9		6.2	0.6	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		30	ソダ痕		有	焼台付着
758	346	191 193	窯内		覆土	碗	15.4	4.8		8.0	1.1	密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕		有	歪む
759	346		窯内		覆土	碗	12.8	4.1		6.6	0.8	密	良好	灰褐	右	未調整	ナデ		6			有	
760	346	187	窯内		覆土	托	14.9	5.5		7.2	1.6	粗	不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		33			無	
761	346		窯内		覆土	碗	14.0	4.1		6.9	0.9	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		25			不明	
762	346		窯内		覆土	碗	13.2	4.6		6.6	0.9	粗	やや不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		33			有	
763	346		窯内		覆土	碗	14.2	4.1		6.8	0.6	密	良好	黄褐	右	未調整	ナデ		30		漬掛	有	
764	346		窯内		覆土	碗	12.9	4.8		6.3	0.8	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		25		漬掛	2回	歪む
765	346		窯内		覆土	碗	14.2	4.5		7.0	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		15		漬掛	有	
766	346		窯内		覆土	碗	12.7	3.8		6.1	0.5	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		25			無	
767	346		窯内		覆土	碗	13.0	4.5		6.6	0.9	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		12	ソダ痕		有	補修痕
768	346		窯内		覆土	碗	16.0	4.3		8.0	0.8	粗	やや不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		33			有	
769	346	194	窯内 灰原	C5	覆土 31	碗		4.3		7.1	0.9	密	過度	灰黄	右	ナデ	不明		50		漬掛	有	歪む
770	346		窯内		覆土	碗		(2.5)		7.6	1.3	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ2条	体部下半～底部	100			2回	
771	346		窯内		覆土	碗		(2.0)		5.9	0.7	密	良好	灰	右	不明	ナデ	底部	100			有	焼台付着
772	346	193	窯内		覆土	碗		(2.1)		6.8	0.9	密	良好	黄灰	右	ナデ	指頭	底部	60			無	
773	347	191	窯内		覆土	碗	13.9	6.3		7.5	1.3	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		70	ソダ痕		3回	歪む
774	347	192	窯内		覆土	碗	15.9	6.9		7.8	1.1	密	良好	黄褐	右	ナデ	ナデ		67	ソダ痕	漬掛	有	
775	347	192 193	窯内		覆土	碗	15.1	6.8		8.1	1.4	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		33		漬掛	2回	補修痕
776	347		窯内		覆土	碗	16.6	6.1		7.6	1.0	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		30		漬掛	有	
777	347		窯内		覆土	碗	15.1	(4.8)				密	良好	黄灰	右			口縁部～体部	15			無?	
778	347		窯内		覆土	碗	15.9	(3.5)				密	良好	灰黄	右			口縁部	25			有	
779	347		窯内	Z4	覆土 22	碗	18.6	(5.0)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	35		漬掛	有	
780	347		窯内		覆土	碗	16.6	(3.7)				密	良好	灰白	右			口縁部	35			有	破片で転用
781	347		窯内		覆土	碗		(4.1)		7.3	1.3	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	体部下半～底部	80		漬掛	有	
782	347		窯内		覆土	托		(3.3)		8.4	2.1	密	不良	灰黒	不明	ナデ	不明	体部下半～底部	75			無	
783	347		窯内		覆土	碗		(5.3)		7.6	1.5	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	体部～底部	100			有	歪む
784	347		窯内		覆土	鉢か壺		(11.6)				密	良好	黄灰	右			体部	10			有	
785	347		窯内 灰原		覆土	鉢か壺		(11.5)				密	良好	黄灰	右			体部	10		黄土	有	
786	348		窯内		覆土	長頸壺	15.9	(3.7)				密	良好	灰黄	左			口縁部	10		黄土	不明	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
787	348		窯内 灰原	Y3	覆土 26・65	長頸壺		(7.7)				密	良好	灰黄	右			頸部	50			有?	
788	348	183 196 198	窯内 灰原	X2 Y3 Y4 Z3 A3 B3 B5	覆土 24・25 26 25 22 31 31 50・53	長頸壺		(29.9)	35.0			密	良好	灰黄	右			胴部	25			有	破片で転用
789	349		灰原	A3	31	無台碗	11.6	2.5		5.1		密	不良	灰白	右	未調整	不明		60			無	補修痕
790	349		灰原	A3	31	無台碗	12.0	2.3		5.6		密	良好	黄灰	右	未調整	未調整		60			有	
791	349		灰原	B5	50	無台碗	13.0	2.6		6.2		密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ3条		25		漬掛	有	
792	349		灰原	Z4 A4	25 42	無台碗	12.2	2.3		5.3		密	良好	灰	右	雑なナデ	ナデ		30			有	
793	349		灰原	Z3	65	無台碗	12.0	2.7		5.2		密	良好	灰黄	右	未調整	不明		60			有	破片で転用
794	349		灰原	B4	46	無台碗	12.4	2.7		6.8		密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		50			有	
795	349		灰原	A5	50	無台碗	12.2	2.7		5.4		密	良好	灰白	右	未調整	不明		50			有	破片で転用
796	349	187	灰原	Y3	26	無台碗	13.7	2.8		5.4		密	不良	灰白	右	未調整	ナデ		60			無	
797	349		灰原	C5	47	無台碗	12.0	3.0		6.4		密	不良	黄灰	右	未調整	未調整		67			無	
798	349		灰原		SR01	無台碗	11.5	2.2		6.0		密	良好	灰黄	左	未調整	ナデ		40			不明	
799	349		灰原	Z3	22	無台碗	11.8	2.6		5.1		密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		50			無	
800	349		灰原	B5	50	無台碗	12.0	2.9		5.0		密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ		38			有	
801	349	187	灰原	A3	31	無台碗	11.5	2.7		5.0		密	良好	灰	右	未調整	ナデ		33			有	
802	349		灰原	Z4	43	無台碗	12.2	2.7		5.9		密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ		60			有	
803	349		灰原	A4	41	無台碗	11.6	2.8		5.9		密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ1条		66			1回	
804	349		灰原		SR01	無台碗	11.4	2.6		5.6		密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		33			不明	
805	349	187	灰原	A5	50	無台碗	11.9	2.9		5.6		密	良好	灰白	右	未調整	未調整		25			有	
806	349		灰原	A4	42	無台碗	11.4	3.1		6.0		密	良好	灰白	右	未調整	不明		33			有	
807	349		灰原	A4	31	無台碗	12.0	2.9		5.4		密	良好	灰黄	右	未調整	未調整		75	ソダ痕		不明	
808	349		灰原	A4	50	無台碗	11.4	2.4		6.3		密	良好	黄灰	右	未調整			25			有	やや歪む
809	349	204	灰原	B4	31	無台碗	11.7	(2.2)				密	良好	灰黄	右			口縁部～体部	20			不明	補修痕
810	349	187	灰原	A4	36	無台碗	11.4	2.7		5.2		密	良好	灰黄	右	未調整	未調整		50			有	
811	349		灰原	Y3	25	無台碗	12.2	2.9		6.3		密	良好	黄灰	右	未調整	未調整		80			有	
812	349		灰原	Z3	31	無台碗	11.8	2.2				密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		20			有	
813	349		灰原	B4	31	無台碗	12.4	3.1		6.2		密	良好	黄灰	右	未調整	不明		25			有	歪む
814	349		灰原	Y3	65	無台碗	12.6	2.9		6.0		密	良好	灰	右	未調整	ナデ		30		漬掛	不明	
815	349	194	灰原	Y3	65	無台碗		(1.8)				密	良好	黄灰	右		ナデ		30			有	
815	349		灰原	Y3	65	無台碗		(1.1)		6.5	0.7	密	良好	黄灰	右				30			有	
815	349		灰原	Y3	65	無台碗		(3.6)		6.4		密	良好	黄灰	右	未調整			40			有	
816	349	187	灰原	A4	44	無台碗	18.8	4.8		7.0		密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ		25			2回	
817	349		灰原		試掘溝	無台碗		(2.1)		8.3		密	不良	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	25			不明	
818	349		灰原		攪乱	無台碗		(1.8)		10.0		密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ	底部	15			不明	
819	349		灰原	Z3	56	無台碗		(1.7)		8.0		密	良好	灰褐	右	未調整	ナデ	底部	100			有	破片で転用
820	349		灰原		SR01	無台碗		(1.8)		8.3		密	不良	灰白	不明	不明	不明	底部	100			無	
821	349	188	灰原	Y4	25	皿	11.2	2.7		6.3	0.6	密	やや不良	灰白	右	ナデ	未調整		67			無	
822	349	188	灰原	Z4	43	皿	12.1	2.9		6.0	0.7	密	不良	灰黄	右	ナデ	未調整		80	ソダ痕		有	
823	349	187	灰原	Y4	25	皿	11.8	2.5		6.4	1.2	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		40			不明	
824	349		灰原	Z3	65	皿	13.2	3.0		6.5	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	不明		33			有	
825	349		灰原	B4	44	皿	14.8	3.4		6.9	0.6	密	やや不良	灰白	右	ナデ	ナデ		25	ソダ痕		有	
826	349		灰原	Z3	34	皿	17.4	3.2		8.5	0.8	密	良好	暗灰	右	ナデ	未調整	口縁部～高台部	30			有	歪む
827	349	187	灰原	C4	31	托	15.9	5.9		9.0	2.7	密	良好	灰	右	ナデ	ナデ		18			有	
828	349		灰原		SR01	托		(4.2)		8.4	3.0	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	高台部	35			不明	
829	349		灰原		攪乱	托		(2.6)				密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	30			有	
830	350		灰原	Z4	43	碗	13.9	4.2		6.1	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		50			2回	
831	350		灰原	Z4	64	碗	13.0	4.3		7.2	1.1	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		45	ソダ痕		有	
832	350		灰原	Z4	61	碗	13.1	4.1		5.8	0.7	密	良好	灰白	左	ナデ	ナデ		25		漬掛	不明	
833	350	188	灰原	Z3	31	碗	13.0	3.8		7.0	1.1	密	不良	灰白	右	未調整	ナデ3条		60	ソダ痕		有	
834	350		灰原	Z4	43	碗	12.6	4.3		6.0	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	不明		50			有	
835	350	188	灰原	Y2	22	碗	14.5	4.8		6.5	0.6	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		70			有	歪む
836	350	188	灰原	Z3	22	碗	14.9	4.0		7.1	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50	籾痕		有	
837	350		灰原	Z4	43	碗	13.6	4.3		6.8	0.8	密	良好	灰白	左	未調整	不明		25		漬掛	不明	窯壁片付着
838	350		灰原		SR01	碗	16.4	4.4		7.0	0.7	密	やや不良	灰白	右	ナデ	ナデ		25		漬掛	有	
839	350		灰原	X2	24	碗	14.2	4.6		6.4	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		20		漬掛	有	
840	350		灰原		SR01	碗	15.4	4.7		7.2	0.9	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ2条		40			不明	
841	350		灰原	Z3	61	碗	12.7	4.3		6.5	0.9	密	やや不良	黄灰	右	未調整	ナデ		30	ソダ痕		不明	
842	350		灰原		Zトレンチ	碗	13.0	3.6		6.6	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		15			有	
843	350		灰原	X3	24	碗	13.5	3.5		6.8	0.9	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		35		漬掛	不明	
844	350		灰原	Y3	65	碗	14.0	3.9		6.6	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		30			有	
845	350		灰原	Z3	58	碗	13.6	3.8		6.6	1.0	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		60			4回	破片で転用
846	350		灰原		攪乱	碗	14.0	3.6		6.4	0.6	密	良好	黄灰	右	未調整	未調整		70	ソダ痕		有	
847	350		灰原		攪乱	碗	13.5	3.7		6.4	0.8	密	良好	黄灰	左	未調整	回転ナデ		60			不明	
848	350		灰原		SR01	碗	13.8	3.6		6.8	0.6	密	良好	灰白	右	未調整	未調整		25		漬掛	有	
849	350		灰原	Z4	61	碗	13.5	3.3		6.5	0.6	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		45		漬掛	有	焼台付着
850	350		灰原	Z3	31	碗	13.6	4.2		6.4	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	未調整		35			有	
851	350	188	灰原	C4	31	碗	15.2	4.0		6.8	0.7	密	良好	黄灰	右	ナデ	不明		50	ソダ痕		有	
852	350		灰原	X3	25	碗		3.2		7.1	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	不明		60			有	天井か窯壁付着
853	350	188 193	灰原	C5	31	碗	12.4	3.3		7.1	0.9	密	不良	灰白	右	ナデ	ナデ		70	ソダ痕		2回	
854	350		灰原	B5	49	碗	13.4	3.6		7.2	0.6	密	過度	黄灰	右	ナデ	不明		25			有	
855	350		灰原	A4	31	碗	13.8	4.0		6.6	0.7	密	不良	灰黄	右	未調整	未調整		60	ソダ痕		有	
856	350		灰原	A4	31	碗	13.5	4.5		6.1	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		60	ソダ痕		有	
857	350		灰原		SR01	碗	13.4	4.4		6.8	0.9	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条		50			不明	
858	350		灰原		SR01	碗	13.5	3.9		6.4	0.5	密	不良	灰白	右	雑なナデ	未調整		50			不明	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
859	350		灰原	Y3	65	碗	13.8	3.9		6.2	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕	漬掛	有	
860	350		灰原	B3	31	碗	12.3	3.9		7.4	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ1条		25	籾痕か?	漬掛	不明	
861	350		灰原	Z4	22	碗	14.8	(3.6)				密	良好	灰	右			口縁部～体部	20		漬掛	有	
862	351		灰原	Z4	22	碗	12.4	3.6		6.4	0.9	密	良好	灰黄	右	未調整	未調整		50			有	外面のみススト付着・補修痕
863	351	189 193	灰原	Z3	22	碗	12.4	4.0		6.4	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		80	ソダ痕		有	
864	351		灰原	Y3	65	碗	13.3	3.8		6.5	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		35			有	
865	351		灰原	C5	47	碗	13.2	3.9		6.6	0.6	密	不良	灰白	右	ナデ	不明		50			無	
866	351		灰原	B4	31	碗	13.8	4.2		6.6	0.8	密	不良	灰白	右	未調整	回転ナデ		50			無	
867	351		灰原	Z3	65	碗	15.2	(2.9)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	100		漬掛?	有	
868	351		灰原	Z3	61	碗	13.4	3.8		6.8	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		35			有	
869	351		灰原		SR01	碗	15.4	4.6		7.6	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ2条		60			不明	
870	351		灰原	A4	43	碗	14.0	(3.8)				密	良好	灰黄	右			口縁部	30			有	
871	351		灰原		SR01	碗	14.9	(3.0)				密	良好	灰白	右			口縁部	20			有	
872	351		灰原	A3	31	碗	14.0	(3.5)				密	良好	灰	右			口縁部～体部	25			有	
873	351		灰原	X3 Y3	65	碗	14.0	(3.2)				密	良好	黄灰	右			口縁部～体部	25			不明	
874	351		灰原	Z4	43	碗	13.8	(3.2)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	50			不明	補修痕
875	351		灰原	A4	31	碗	13.0	3.5		6.4	0.7	密	不良	灰白	右	不明	未調整		40			無	
876	351	191	灰原	Y3	65	碗	13.9	4.2		6.1	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		50			有	補修痕
877	351		灰原	Y3 Z4	26・65 26	碗	14.2	4.0		6.6	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕		有	ススト付着
878	351		灰原	C5	51	碗	14.5	4.2		6.4	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		60			3回	破片で転用 焼台粘土付着
879	351		灰原	B5	53	碗	13.8	3.9		6.8	1.0	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		40			1回	
880	351		灰原	Z3	65	碗	14.0	4.1		6.1	0.7	密	良好	灰褐	右	ナデ	不明		15			4回	
881	351	188	灰原	Z4	34	碗	14.0	4.6		6.4	0.8	密	良好	灰	右	ナデ	ナデ		70		漬掛	不明	
882	351		灰原	B5	44	碗	13.0	3.5		6.9	0.7	密	良好	灰白	右	雑なナデ	ナデ		90	ソダ痕		無	
883	351		灰原	B4	31	碗	13.8	4.5		7.2	1.0	密	やや不良	灰白	左	ナデ	ナデ数条		50			無	
884	351		灰原	A4 Z4	36 26	碗	12.9	3.5		6.3	0.9	密	良好	灰白	右			口縁部～高台部	30		漬掛	有	
885	351		灰原	Y3	65	碗	13.4	4.1		6.1	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	不明		28		漬掛	有	
886	351		灰原	X3	25	碗	15.4	5.3		6.8	1.0	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		10			有	
887	351		灰原	Z3	22	碗	12.4	4.8		6.4	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ?	不明		35	籾痕	漬掛	有?	
888	351		灰原	Z3	31	碗	13.5	4.8		7.0	0.8	密	不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		60	ソダ痕		不明	
889	351		灰原		SR01	碗	13.6	4.7		7.1	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕	漬掛	1回	
890	351		灰原	Z3	31	碗	12.9	4.4		5.8	0.7	密	良好	黄灰	右	ナデ	不明		70			有?	
891	351		灰原	Z4	61	碗	13.9	4.4		6.5	0.9	密	不良	灰褐	右	未調整	ナデ1条		60		漬掛	有	
892	351		灰原	Z3	56	碗	16.4	3.9		6.8	0.6	密	良好	灰白	左	ナデ	ナデ		50			有	円礫付着
893	351		灰原	Z4	62	碗	13.2	4.3		6.8	0.9	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		30			不明	
894	351		灰原	B4	31・47	碗	13.6	4.5		7.4	0.7	密	不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		25		漬掛	有	補修痕
895	351		灰原	Z3	22	碗	13.4	4.9		6.1	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ1条		60	ソダ痕		不明	
896	352		灰原		Aトレンチ	碗	12.1	3.5		5.8	0.5	密	良好	灰	右	ナデ	ナデ		15	ソダ痕		有	
897	352	189	灰原	A4	42	碗	13.2	3.7		6.3	0.7	密	良好	灰褐	右	ナデ	不明		60			有	窯壁付着
898	352	189	灰原	A3	31	碗	13.0	4.0		6.4	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ1条		80			2回	
899	352		灰原	Z3	64	碗	13.4	3.8		6.8	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ1条		63			有	焼台付着
900	352		灰原	A4	31	碗	13.4	4.1		6.6	0.8	密	不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		75	ソダ痕	漬掛	有	
901	352		灰原	Z3	22	碗	13.5	4.1		6.6	0.8	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ2条		80	ソダ痕		有	
902	352		灰原	Y4	25	碗	13.6	4.0		6.5	0.9	密	不良	灰白	右	ナデ	未調整		60			無	
903	352		灰原	X2	24	碗	13.4	3.9		6.2	0.7	密	良好	灰黄	右	雑なナデ	ナデ		38			有	
904	352		灰原	A4	42	碗	13.1	4.1		6.9	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		25		漬掛	無	
905	352		灰原	C5	51	碗	13.9	(2.7)				密	良好	灰白	右			口縁部	50		漬掛	有	
906	352		灰原	Y3	26	碗	15.6	4.1		7.0	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	未調整		50		漬掛	有	
907	352		灰原		調査区南側壁	碗	16.2	4.7		7.7	1.1	密	不良	灰白	右	未調整	ナデ		60			有	
908	352		灰原	A4	50	碗	12.8	3.9		6.6	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	不明		50	ソダ痕		有	
909	352	189 193	灰原		SR01	碗	12.4	3.5		6.5	0.9	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条		80		漬掛	不明	
910	352		灰原	A5	43	碗	13.0	3.3		6.5	0.6	密	やや不良	灰白	右	ナデ	未調整		50			有	
911	352		灰原	B5	31	碗	13.0	3.7		6.6	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		25			有	補修痕
912	352		灰原		SR01	碗	13.4	3.6		6.5	0.6	密	良好	灰白	右	不明	ナデ	口縁部～高台部	20	ソダ痕	漬掛	有	
913	352		灰原	X2	24	碗	13.9	3.6		6.1	0.7	密	良好	灰白	右	未調整	不明		40			有	
914	352		灰原		Zトレンチ	碗	13.4	4.2		6.4	0.8	密	良好	灰褐	右	未調整	ナデ		60	ソダ痕		有	
915	352		灰原		SR01	碗	13.2	4.3		7.0	0.6	密	やや不良	灰白	右	ナデ	ナデ		30			有	
916	352		灰原	Y4	25	碗	13.5	3.5		6.9	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50			有	
917	352		灰原	Z4	43	碗	12.4	4.3		5.8	0.9	密	良好	灰黄	右	不明	不明		35			有	
918	352		灰原	Z4	31	碗	13.8	4.5		6.2	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		55			有	
919	352		灰原	Y4	25	碗	14.2	(2.7)				密	やや不良	黄灰	右			口縁部	30		漬掛	有	
920	352		灰原	C5	54	碗	11.8	3.6		6.3	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ1条		40	ソダ痕		不明	
921	352	194	灰原	C5	55	碗		(7.3)		6.0	0.7	密						底部	40			有	
921	352	194	灰原	C5	55	碗		(7.3)				密						底部	30			有	4個体釉着
921	352	194	灰原	C5	55	碗		(7.3)				密						底部	50			有	破片で転用
921	352	194	灰原	C5	55	碗		(7.3)				密						底部	50			有	
922	352		灰原	Z3	31	碗	13.2	3.7		7.0	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		30		漬掛	2回	
923	352		灰原	A3	13	碗	13.4	4.0		6.4	0.7	密	良好	灰白	左	未調整	回転ナデ		25			無	
924	352		灰原		調査区南側壁	碗	13.4	3.7		6.3	0.8	密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		40			有	ススト付着
925	352		灰原		Aトレンチ	碗	14.0	3.9		7.2	0.9	密	良好	灰	右	ナデ	ナデ		40		漬掛	有	
926	352	189	灰原	B4	47	碗	14.0	3.7		6.6	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	不明		50			有	
927	352		灰原	A4	31	碗	14.3	4.0		6.8	0.6	密	良好	灰白	右	未調整	回転ナデ		60		漬掛	有	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
928	352		灰原		SR01	碗	13.4	4.1		6.9	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	不明		15		漬掛	有	
929	352	189	灰原	Z4	40	碗	13.0	4.0		6.3	0.6	粗	良好	灰	右	ナデ	ナデ		70			有	歪む
930	352		灰原	Z3	58	碗	13.6	5.0		6.6	0.7	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		35	ソダ痕		有	
931	353		灰原		SR01	碗	13.8	3.7		6.8	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		25			有	
932	353	189	灰原		SR01	碗	13.6	3.6		6.4	0.7	密	良好	灰白	右	未調整	未調整		50		漬掛	無	
933	353		灰原	Z4	25	碗	13.1	3.5		6.4	0.8	密	良好	灰黄	左	ナデ	ナデ		60		漬掛	有	
934	353	189	灰原	A3	31	碗	14.2	4.0		7.0	0.9	密	良好	灰黄	右	雑なナデ	ナデ		83	ソダ痕		2回	
935	353		灰原		調査区南側壁	碗	14.6	3.6		7.4	0.7	密	過度	灰白	右	未調整	ナデ		10		漬掛?	有	歪む
936	353		灰原		SR01	碗	14.0	4.1		7.1	1.0	密	不良	灰白	右	未調整	ナデ		70			無	
937	353		灰原		SR01	碗	12.0	3.6		6.6	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ?			25	ソダ痕		不明	
938	353		灰原	Y3	25	碗	13.0	(2.3)				密	良好	灰白	右			口縁部	50			有	歪む
939	353		灰原		SR01	碗	14.0	4.0		7.7	1.1	密	良好	灰黄	右	ナデ	不明		25			2回	
940	353		灰原	Z4	25･26･62	碗	12.8	4.1		6.1	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		50			有	焼台付着
941	353		灰原	X3	24	碗	13.8	4.5		7.6	1.0	密	良好	灰白	右	ナデ	回転ナデ		15	ソダ痕		有	
942	353		灰原	C5	51	碗	14.6	4.3		7.1	0.8	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ4条		50			有	
943	353		灰原	Z3	58	碗	13.8	4.0		6.4	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		15			有	
944	353		灰原	A4	50	碗	13.4	4.2		6.9	0.8	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ2条		40			有	
945	353	188	灰原	A4	36	碗	13.3	4.3		7.6	0.7	密	良好	灰褐	右	ナデ	未調整		50		漬掛?	2回	
946	353		灰原	Y4	25	碗	14.0	3.8		6.6	0.8	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		70			2回	破片で転用 礫付着
947	353		灰原	Z4	61･62･64	碗	13.8	4.1		7.1	1.0	密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ		50			有	
948	353	189 193	灰原	A3	31	碗	13.8	4.0		6.4	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		75		漬掛	2回	
949	353	189	灰原	A4	36	碗	14.3	4.5		6.7	0.8	粗	良好	灰	右	未調整	ナデ		70		漬掛	有	歪む
950	353		灰原	Z3	22	碗	14.8	4.2		6.7	0.7	密	良好	灰褐	右	未調整	ナデ		25		漬掛	有	やや歪む
951	353		灰原	B4	49	碗	14.4	4.7		6.7	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50		漬掛	有	歪む
952	353	190	灰原	Y2	22	碗	14.4	5.0		6.8	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		100	ソダ痕		有	歪む
953	353		灰原	Z3	61	碗	12.8	4.4		6.7	0.7	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		50		漬掛	有	
954	353		灰原	A4	50	碗	13.0	4.8		6.8	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ2条		50	ソダ痕	漬掛	有	
955	353		灰原		SR01	碗	13.0	4.5		7.4	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	回転ナデ		33		漬掛	不明	
956	353		灰原	Y4	25	碗	15.8	4.4		7.1	0.8	密	良好	灰黄	左	ナデ	ナデ		25		漬掛	有	
957	353		灰原	A4	31	碗	14.4	3.4		7.5	0.8	密	良好	灰	右	雑なナデ	ナデ		20			有	
958	353		灰原	A5	43	碗	14.6	4.2		6.8	0.9	密	良好	灰白	右	ナデ	不明		50	ソダ痕		3回	
959	353	190	灰原	A5	50	碗	14.2	4.0		6.7	0.9	密	不良	黄灰	右	未調整	未調整		67			有	
960	353		灰原	Z3	58	碗	15.0	3.9		7.8	1.0	密	良好	灰	右	ナデ	ナデ		20			有	
961	353		灰原		SR01	碗	13.3	(2.5)				密	不良	黄灰	右			口縁部	35			不明	
962	353		灰原	B5	50	碗	13.5	4.9		5.8	0.9	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		50		漬掛	有	
963	353		灰原	A4	44	碗	14.8	4.8		6.6	0.8	密	良好	灰白	左	ナデ	不明		25			4回	
964	354		灰原	A3	31	碗	11.8	4.0		6.8	1.0	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		20	ソダ痕	漬掛	有	
965	354		灰原	C5	47	碗	11.8	3.8		7.0	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		30	ソダ痕		有	破片で転用
966	354		灰原	X3	25	碗	13.2	4.4		7.0	0.7	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		20			不明	
967	354		灰原		SR01	碗	14.4	4.2		6.9	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	未調整		40		漬掛	有	
968	354	190	灰原		調査区南側壁	碗	13.6	4.5		6.2	0.9	密	過度	灰褐	右	ナデ	ナデ		80		漬掛	有	歪む
969	354		灰原	C5	31	碗	13.7	4.3		7.0	1.0	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		35	ソダ痕		有	
970	354		灰原		SR01	碗	13.5	4.1		6.2	0.7	密	不良	黄灰	右	未調整	ナデ		70	ソダ痕		有	
971	354		灰原	Z3	31	碗	13.2	3.4		6.2	0.6	密	良好	灰黄	左	ナデ	ナデ		60			有	
972	354		灰原	Y3	65	碗	15.2	3.7		6.8	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50		漬掛	有	
973	354		灰原	A4	19	碗	13.9	4.4		7.9	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	不明		20			有	
974	354	195	灰原	Y3	25	碗	14.7	5.1		6.6	0.8	密	良好	灰白	右		ナデ		50			2回	破片で転用 焼台付着
975	354		灰原		調査区南側壁	碗	12.1	4.4		6.8	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ1条		60	ソダ痕	漬掛	2回	
976	354		灰原	Z3	58	碗	13.2	4.5		6.2	0.9	密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		30	ソダ痕		有	
977	354		灰原		調査区南側壁	碗	12.6	4.4		6.3	0.8	密	良好	灰黄	左	ナデ	ナデ		50		漬掛	1回	
978	354		灰原	C4	31	碗	13.4	4.4		6.6	1.0	密	良好	灰白	左	ナデ	回転ナデ		33			有	
979	354		灰原	Y3	26	碗	13.3	3.7		7.4	0.8	密	不良	黄灰	右	不明	ナデ		60			不明	
980	354		灰原	A4	31	碗	13.0	3.6		7.2	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕	漬掛	有	
981	354		灰原	Z4	31	碗	13.8	4.1		7.3	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		60			有	
982	354		灰原	A4	31	碗	13.2	4.5		6.9	1.0	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		35			有?	
983	354		灰原	B4	47	碗	13.2	4.1		7.0	0.7	密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		25		漬掛	無	
984	354		灰原	X3	24	碗	13.4	4.2		5.8	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		100	ソダ痕		有	歪む
985	354		灰原	A4	50	碗	13.8	(4.2)				密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		25			不明	
986	354		灰原	B4	31	碗	12.3	3.4		6.5	0.9	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		67		漬掛	有	
987	354		灰原		SR01	碗	11.6	3.7		6.6	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		33			有	スス付着
988	354		灰原	B4	31	碗	12.2	3.7		6.0	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		33		漬掛	有	
989	354		灰原		SR01	碗	13.0	3.9		5.7	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		33			有	
990	354		灰原	A4	19	碗	13.8	4.2		7.4	0.6	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		75	ソダ痕		有	
991	354		灰原	Y3	65	碗	14.2	4.5		6.6	0.8	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		60		漬掛	有	
992	354		灰原		SR01	碗	13.5	4.5		6.6	0.8	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		45	ソダ痕	漬掛	有	
993	354		灰原		10mトレンチ	碗	13.9	4.3		6.6	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		15		漬掛	有	
994	354		灰原		SR01	碗	14.0	4.0		6.7	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		33	ソダ痕		2回	歪む
995	354		灰原	C5	調査区南側壁	碗		5.6		6.3	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		60	ソダ痕	漬掛	2回	歪む
996	354	194	灰原	Y3	26	碗	13.2	4.0		6.4	0.5	密	良好	灰白	右	ナデ			40	ソダ痕		2回	2個体釉着
996	354	194	灰原	Y3	26	碗	12.6	4.8		7.0	0.9	密	良好	灰白	右		ナデ		30			2回	
997	355		灰原	C5	47	碗	12.8	4.2		6.7	0.7	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		40			有	
998	355		灰原	A4	19	碗	13.4	4.0		7.0	0.9	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		75			3回	
999	355		灰原	Z3	31	碗	13.2	4.2		6.3	0.9	密	良好	灰	右		ナデ		70			有	
1000	355	190	灰原	Z3	31	碗	13.1	4.3		6.5	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		100		漬掛	有	
1001	355		灰原	B4	44	碗	13.6	4.2		6.4	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		25			有	焼台付着
1002	355		灰原	X3	24	碗	12.9	4.1		6.4	0.9	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		100	ソダ痕	漬掛	有	歪む
1003	355	190	灰原	C5	55	碗	13.6	4.0		6.2	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		33			3回	
1004	355		灰原		SR01	碗	12.4	4.9		6.4	0.9	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		30		漬掛	有	
1005	355	191	灰原	A4	36	碗	13.3	3.8		6.8	0.7	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		80		漬掛	1回	
1006	355		灰原		SR01	碗	13.2	3.5		6.6	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	未調整		60		漬掛	有	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
1007	355	190	灰原		SR01	碗	13.6	3.7		6.5	0.7	密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ		90		漬掛	無	
1008	355		灰原	A3	13	碗	13.6	3.8		6.0	0.6	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		15			有	破片で転用
1009	355	190	灰原	A3	31	碗	12.5	4.2		6.5	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	回転ナデ		66	ソダ痕	漬掛	2回	
1010	355		灰原		10mﾄﾚﾝﾁ	碗	14.0	(3.7)				密	良好	灰黄	右			口縁部	8		漬掛	有	
1011	355		灰原	Y3	24	碗	13.9	4.2		6.2	1.1	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		60			2回	
1012	355		灰原	B3	31	碗	14.0	(2.7)				密	良好	黄灰	右			口縁部	15			不明	
1013	355		灰原	Z3	31	碗	14.0	(2.9)				密	不良	灰黄	右			口縁部	10			不明	
1014	355	190	灰原	Y3	25	碗	13.0	3.8		6.5	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		65			有	
1015	355		灰原	A4	31	碗	12.2	3.6		6.4	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		33		漬掛	有	
1016	355	190	灰原	Z3	34	碗	13.6	4.3		6.5	0.9	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ		70		漬掛	不明	歪む
1017	355		灰原	B4	31	碗	14.0	4.0		6.4	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50		漬掛	有	
1018	355		灰原	A4	42	碗	14.2	4.2		6.8	0.8	密	やや不良	灰黄	右	不明	不明		13			不明	
1019	355	194	灰原		調査区南側壁	碗	12.8	(3.8)		5.9	0.8	密	良好	灰白	右		ナデ		40			有	5個体釉着
1019	355	194	灰原		調査区南側壁	碗		(1.7)		不明	0.9	密	良好	灰白	不明				20			有	
1019	355	194	灰原		調査区南側壁	碗	11.4	(2.7)		5.8	0.9	密	良好	灰白	右				90			有	5個体釉着
1019	355	194	灰原		調査区南側壁	碗		(4.6)		7.1	1.3	密	良好	灰白	右				40			有	破片で転用
1019	355	194	灰原		調査区南側壁	碗		(2.0)		6.0	0.8	密	良好	灰白	右	雑なナデ			30			有	
1020	355		灰原	B5	44	碗	13.3	5.0		6.9	1.0	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ2条		25		漬掛	有	
1021	356		灰原		調査区南側壁	碗	11.5	4.8		6.3	0.9	密	過度	灰褐	右	ナデ	ナデ		38			有	歪む
1022	356		灰原	Z3	31	碗	12.4	4.5		6.6	0.9	密	良好	灰	右	ナデ	ナデ		40		漬掛	有	破片で転用
1023	356		灰原		SR01	碗	13.3	5.0		7.4	0.8	密	不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕		不明	
1024	356		灰原	A3	31	碗	13.4	4.9		6.6	1.0	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条		50	ソダ痕		2回	
1025	356	191	灰原	Y4	25	碗	12.5	4.5		7.0	0.9	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50			2回	
1026	356		灰原	A4	41	碗	14.4	4.9		6.4	0.9	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		33	ソダ痕	漬掛	有	
1027	356		灰原	A4	31	碗	14.2	(5.1)				密	良好	黄灰	右			口縁部～体部	15		漬掛	不明	
1028	356		灰原	Z3	22	碗	15.2	5.2		7.4	1.4	密	良好	暗灰	右	ナデ	ナデ		20	ソダ痕	漬掛	有	
1029	356		灰原	B4	31	碗	16.2	6.4		7.8	1.0	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		33			有	
1030	356		灰原		SR01	碗	16.1	6.5		7.8	1.1	密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		25		漬掛	無	
1031	356		灰原	A3	31	碗	17.0	(5.1)				密	良好	灰黄	右		不明	口縁部～体部	25			2回	
1032	356		灰原	A4 Z4 Z3	42 26・43 31	碗	16.5	7.0		8.0	1.4	密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ3条		100		漬掛	有	
1033	356		灰原		SR01	碗	14.5	(5.9)				密	不良	灰白	右	不明	ナデ	口縁部～底部	15			無	
1034	356	192	灰原	A4	36	碗	14.9	6.3		7.4	1.4	密	やや不良	灰白	右	ナデ	未調整		70		漬掛	有	やや歪む
1035	356		灰原	Z3	22	碗	16.4	5.8		7.9	1.1	密	良好	灰白	右	ナデ	不明		60			2回	
1036	356		灰原	Y4	25	碗	16.6	6.0		7.7	1.2	密	やや不良	灰白	右	ナデ	ナデ		50			無	
1037	356		灰原	A5 B4	31 44	碗	14.9	5.9		7.7	1.1	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		35			3回	礫付着 歪む
1038	356	191	灰原	A2	31	碗	15.7	6.4		7.3	1.2	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ数条		50			有	
1039	356		灰原	Y3 X2	25 24	碗	15.2	6.5		8.0	1.2	密	やや不良	灰白	右	ナデ	ナデ		65	ソダ痕		有	
1040	356		灰原	Z3	22	碗	16.1	(4.9)				密	良好	灰	右			口縁部～体部	15			有	歪む
1041	356		灰原	Y3	26	碗	14.8	5.3		7.7	1.4	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ1条		50		漬掛	1回	
1042	356		灰原	A4	41	碗	16.0	5.4		7.8	1.2	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		25			有	
1043	356		灰原		SR01	碗	15.1	5.4		7.3	1.1	密	良好	灰黄	右	雑なナデ	ナデ		80	ソダ痕	漬掛	有	
1044	356		灰原	A4	36	碗	15.5	5.5				密	良好	灰白	右	ナデ?	ナデ	口縁部～高台部	10		漬掛	有	内面に砂付着
1045	356		灰原		Cﾄﾚﾝﾁ	碗	17.4	7.2		7.8	1.2	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ3条		25			有	
1046	357		灰原	X3	24	碗	17.9	(5.4)				密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ2条	口縁部～体部	35		漬掛	不明	
1047	357		灰原	C4	31	碗	19.2	6.9		7.9	1.3	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ3条		40		漬掛?	2回	破片で転用 歪む
1048	357		灰原	A4	42	碗	15.4	(5.5)				密	良好	灰	右			口縁部～体部	50		漬掛	有	歪む
1049	357		灰原	A4 Z3	36 31	碗	17.0	(4.6)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	25		漬掛	無	
1050	357		灰原		Zﾄﾚﾝﾁ	碗	15.4	5.4		7.4	1.1	密	良好	灰白	右	未調整	ナデ		15			不明	
1051	357		灰原	Y3	25	碗	19.0	(5.8)				密	良好	灰黄	右		ナデ	口縁部	25		漬掛	不明	
1052	357		灰原	C5	51	碗	16.0	(3.6)				密	良好	黄灰	右			口縁部	50		漬掛	不明	
1053	357		灰原	X3	24	碗	17.0	5.5		7.6	1.4	密	やや不良	黄灰	右	ナデ	ナデ1条		60			不明	
1054	357		灰原	A4 B5	19・31 47	碗	16.8	(4.4)				密	良好	灰白	右			口縁部	50			不明	
1055	357		灰原		SR01	碗	16.0	(4.5)				密	良好	黄灰	右			口縁部～体部	30			不明	
1056	357		灰原	C5	54	碗	16.6	6.1		8.0	1.1	密	良好	灰黄	右	未調整	ナデ		60		漬掛	有	
1057	357		灰原	C5	51	碗	15.8	5.7		7.7	1.1	密	不良	黄灰	右	ナデ	ナデ		70	ソダ痕		無	
1058	357		灰原	C5	31・52	碗	15.8	5.4		8.0	1.0	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ		50			無	
1059	357		灰原	Z3 Z4	31 43	碗	16.7	5.3		7.2	1.1	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		50			3回	
1060	357		灰原	Z4	22	碗	15.4	(3.4)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	50		漬掛	有	
1061	357	192	灰原	Z3 Z4 A4 B5	61・65 50 45 26・62	碗	16.4	(5.3)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	75		漬掛	無	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
1062	357		灰原		Aトレンチ	碗	17.9	(4.0)				密	良好	灰黄	右			口縁部～体部	17			有	
1063	357		灰原	A4	42	碗	14.6	(4.9)				密	良好	灰	右			口縁部～体部	15			有	歪む
1064	357		灰原	X3	24・25	碗	17.2	(5.2)				密	良好	黄灰	右		不明	口縁部～体部	90		漬掛	不明	
1065	357		灰原	Z4 A4	26 42	碗	14.5	(4.6)				密	良好	灰	右			口縁部～体部	15			有	歪む
1066	357		灰原	X2	24	碗	16.2	(4.5)				密	やや不良	黄灰	右	不明	不明		30			有	
1067	357		灰原	A4 B4	31・36 49	碗	15.4	5.7		7.3	0.9	密	過度	灰褐	右	雑なナデ	ナデ		40			有	
1068	357		灰原	A3	13	碗		(2.5)				密	良好	灰白	右			口縁部	5			有	
1069	357		灰原	Z4	64	碗		(3.7)				密	良好	灰白	右			口縁部	5			不明	
1070	357	204	灰原	A4	48	輪花碗	15.8	(4.6)				密	良好	灰黄	右			口縁部～体部	25			有	
1071	357	204	灰原	A4	45	輪花碗		(4.1)				密	良好	灰白	右			口縁部	5			有	
1072	357	204	灰原	A4	31	輪花碗		(3.0)				密	良好	灰黄	右			口縁部	5			有	
1073	357		灰原	B4	試掘溝	輪花碗		(3.8)				密	良好	灰黄	右			口縁部	5			有	
1074	357		灰原	C5	55	碗		(2.2)				密	良好	灰白	右			口縁部	5			有	
1075	358		灰原		Aトレンチ	碗		(1.7)		5.6	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	未調整	底部	100			不明	
1076	358		灰原	A3	13	碗		(1.8)		5.7	0.6	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100			有	破片で転用
1077	358		灰原	Z4	22	碗		(2.9)		7.9	0.9	密	過度	黄灰	右	雑なナデ	不明	体部下半～底部	75			3回	破片で転用
1078	358		灰原	X2	24	碗		(4.6)		7.6	0.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	回転ナデ	体部～底部	45			有	
1079	358		灰原		SR01	碗		(2.8)		7.1	1.1	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条	底部	100			有	
1080	358		灰原	Z4	22	碗		(2.5)		6.7	0.6	密	良好	黄灰	右	未調整	回転ナデ	体部下半～底部	100			不明	
1081	358		灰原	Z4	43	碗		(3.4)		6.6	0.7	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	体部下半～底部	75	ソダ痕		有	
1082	358		灰原	A4	36	碗		(3.4)		6.5	1.0	密	良好	灰白	右	未調整	回転ナデ	体部下半～底部	80	ソダ痕		有	
1083	358		灰原	C5	51	碗		(3.9)		7.7	1.1	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	100	ソダ痕		有	
1084	358		灰原	Y3	65	碗		(3.2)		7.7	1.0	密	良好	灰	不明	雑なナデ	ナデ	体部下半～底部	35			有	
1085	358		灰原	A3	31	碗		(2.8)		7.4	1.3	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	40			有	
1086	358		灰原	Z4	43	碗		(3.3)		7.9	1.2	密	不良	灰白	右	ナデ	ナデ3条	体部下半～底部	75			有	
1087	358		灰原	Z4	43	碗		(3.2)		7.9	1.0	密	良好	灰褐	右	ナデ	不明	体部下半～底部	45			2回	
1088	358		灰原	X2	24	碗		(3.3)		7.6	1.3	密	不良	灰白	右	ナデ	ナデ2条	体部下半～底部	75			有	
1089	358		灰原	X2	24	碗		(1.8)		7.8	1.2	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ2条	底部	100			有	歪む
1090	358		灰原	Z4	22	碗		(2.5)		8.6	1.5	密	良好	灰白	右	雑なナデ	ナデ1条	底部	40			有	
1091	358		灰原	A5	50	碗		(1.9)		6.5	0.6	密	良好	灰白	右	ナデ		底部	30			2回	2個体釉着
1091	358		灰原	A5	50	碗		(1.4)		7.0	0.9	密	良好	灰白?	右		ナデ	底部	30			2回	
1092	358		灰原	Z4	22	碗		(2.5)		6.4	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	回転ナデ	体部下半～底部	75			有	破片で転用
1093	358		灰原	Z4	22	碗		(2.9)		6.9	0.6	密	良好	灰白	右	未調整	回転ナデ	体部～底部	75		漬掛?	有	
1094	358	194	灰原	A4	42	碗		(3.0)		6.4	0.7	密				ナデ	不明	底部	30			有	
1095	358		灰原	Z3	22	碗		(2.3)		6.5	0.7	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条	底部	100	ソダ痕		有	
1096	358		灰原		SR01	碗		(3.2)		6.8	0.6	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	体部下半～底部	75	ソダ痕	漬掛	有	
1097	358		灰原		Aトレンチ	碗		(2.2)		6.9	0.7	密	過度	黄灰	右	ナデ	ナデ	体部下半～底部	100			有	破片で転用
1098	358		灰原	Z4	22	碗		(2.0)		5.9	0.8	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条	体部下半～底部	50	ソダ痕		有	
1099	358		灰原	B4	31	碗		(2.5)		7.8	1.1	密	良好	灰	右	ナデ	ナデ	底部	100			有	
1100	358		灰原		Aトレンチ	碗		(1.8)		7.7	1.2	密	不良	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100			不明	
1101	358		灰原	Y3	25	碗		(2.4)		6.9	0.8	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	100			有	
1102	358		灰原	A3	31	碗		(3.2)		8.4	1.2	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	50			有	
1103	358		灰原	Z3	22	碗		(2.1)		5.8	0.7	密	良好	暗灰	右	ナデ	ナデ	体部下半～底部	80		漬掛	有	
1104	358		灰原	Y4	25	碗		(2.7)		8.0	1.1	密	やや不良	黄灰	右	雑なナデ	ナデ1条	体部下半～底部	50	ソダ痕		有	
1105	358		灰原		Aトレンチ	碗		(2.9)		7.6	0.9	密	良好	暗灰	右	ナデ	ナデ	底部	100			有	
1106	358		灰原	Y4	25	碗		(3.8)		7.3	1.0	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条	体部下半～底部	100			有	
1107	358		灰原	A4	19	碗		(3.7)		7.9	1.0	密	良好	灰褐	右	雑なナデ	ナデ	体部～底部	75		漬掛	有	
1108	358		灰原	X3	24	碗		(2.6)		7.8	1.3	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ2条	底部	100			不明	
1109	358		灰原		SR01	碗		(2.7)		7.8	1.3	密	不良	黄灰	右	ナデ	ナデ	体部下半～底部	50			不明	
1110	358		灰原	Y3	65	碗		(2.4)		6.7	0.6	密	良好	灰白	右	雑なナデ	不明	底部	30	ソダ痕		無	窯壁付着
1111	358		灰原	Z3	22	碗		(5.0)		7.7	1.1	密	良好	暗灰	右	ナデ	ナデ	体部～底部	75			有	
1112	358		灰原	Z3	65	碗		(2.9)		8.1	1.0	密	不良	灰白	右	未調整	ナデ	体部下半～底部	100			有	
1113	358		灰原		SR01	碗		(3.3)		7.9	1.1	密	良好	黄灰	右	雑なナデ	ナデ1条	体部～底部	90		漬掛	有	破片で転用 スス付着
1114	358		灰原	Z4	22	碗		(2.6)		7.8	1.2	密	良好	灰白	右	雑なナデ	ナデ	底部	100		漬掛	有	
1115	358		灰原	X2	25	托		(3.1)		8.2	1.5	密	不良	灰白	右	雑なナデ	ナデ	体部下半～底部	100			有	
1116	358		灰原	B4	31	托		(4.6)		9.1	2.0	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ	底部	100			3回	焼台付着
1117	358		灰原	A4	42	托		(3.4)		9.0	2.5	密	良好	灰白	右	ナデ	未調整	底部	35			不明	
1118	358		灰原	Y3	26	托		(2.6)		7.8	1.9	密	不良	灰黄	不明	不明	不明	底部	25			不明	
1119	358		灰原	A3	31	托		(3.4)		8.6	1.7	密	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	50			有	
1120	362	200	灰原		攪乱	長頸壺	13.9	(2.9)				密	良好	灰黄	右			口縁部	25		黄土	有	
1121	362		灰原		攪乱	長頸壺	14.0	(4.4)				密	良好	灰黄	右			口縁部	4			有	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
1122	362	196 200	灰原		調査区南側壁	長頸壺	14.0	(12.0)				密	良好	灰白	右			口縁部～肩部	35			有	
1123	362	200	灰原	B4	47	長頸壺	11.5	(4.3)				密	良好	灰白	右			口縁部	25			有	破片で転用
1124	362	196 200	灰原	B5	50	長頸壺	13.0	(5.1)				密	良好	灰白	右			口縁部	20			有	破片で転用
1125	362		灰原	Z3	22	長頸壺						密	良好	灰黄	右			口縁部	7			有	
1126	362	183 196 197	灰原	Y2 Y3 Z3 A3	22 25・26 31・65 31	長頸壺	14.4	(20.7)	19.5			密	良好	灰黄	右			口縁部～体部	80			有	破片で転用 歪む
1127	362		灰原		SR01	長頸壺	17.0	(4.0)				密	良好	灰白	左			口縁部	20			有	破片で転用
1128	362		灰原	Z3	22	長頸壺	16.1	(2.5)				密	良好	灰白	左			口縁部	15			有	
1129	362		灰原		SR01	長頸壺	20.0	(4.7)				密	良好	灰黄	右			口縁部	5			有?	
1130	362		灰原	Z4	43	長頸壺	18.0	(1.7)				密	良好	灰	左			口縁部	10			有	
1131	362		灰原	A3	31	長頸壺	16.0	(1.7)				密	良好	灰白	左			口縁部	8			有	
1132	362		灰原	C5	調査区南側壁	長頸壺	21.0	(3.3)				密	良好	灰白	右			口縁部	13		黄土	有	
1133	362		灰原		試掘溝	長頸壺	28.0	(9.4)				密	良好	黄灰	右			口縁部	25		黄土	有	やや歪む
1134	362	183 196 198	灰原	Z3 Z4 A3 B3 B4 B5	50 43 31 31 31・47 31・50	長頸壺	29.0	(10.7)				密	良好	灰黄	左			口縁部	25			有	
1135	362	183 196 198	灰原	A4 C5	攪乱 31 51	長頸壺	27.4	(13.4)				密	良好	灰黄	右			口縁部～肩部	10		黄土	有	
1136	363		灰原	Z4	26	長頸壺	20.0	(7.1)				密	良好	灰白	右			口縁部	10			有?	
1137	363	197	灰原	C5	51・55	長頸壺	20.0	(3.0)				密	良好	灰黄	右			口縁部	22			有	
1138	363	183 196 197	灰原	A4・A5 B4・B5	50 47	長頸壺	21.0	(10.5)				密	良好	灰白	右			口縁部	60		黄土	有	
1139	363	196 200	灰原		攪乱	長頸壺	26.0	(8.7)				密	良好	灰白	右			口縁部	6		黄土	有	
1140	363		灰原	B4 Z3	31 65	長頸壺	19.8	(1.8)				密	良好	灰白	右			口縁部	25			有	スス付着
1141	363		灰原	Z4	26	長頸壺	18.0	(3.4)				密	良好	灰白	右			口縁部	10			有	
1142	363		灰原	A5	43	長頸壺	17.9	(2.6)				密	良好	灰黄	右			口縁部	20			有	
1143	363	183 196 197	灰原	X2	24	長頸壺		(15.0)	23.3			密	良好	黄灰	左			胴部	50			無	
1144	363	196 197	灰原	Z4 A4 B3	65 42・50 31	長頸壺		(14.0)	16.0			密	良好	灰黄	右			胴部	25			有	
1145	363		灰原	B4	攪乱 31	長頸壺		(6.1)				密	良好	灰黄	右			肩部	15			有	
1146	363		灰原	B4	31	長頸壺		(6.5)				密	良好	灰	左			肩部	30		黄土	有	
1147	363		灰原	Z4 C5	22 南壁	長頸壺		(13.1)				密	良好	灰黄	右			肩部	25		黄土	有	破片で転用
1148	365		灰原		Aトレンチ	鉢	18.0	(8.1)				密	良好	灰黄	右			口縁部	15		黄土	不明	
1149	365		灰原	C5	31	鉢	18.0	(4.8)				密	良好	灰黄	右			口縁部	8			有	
1150	365		灰原		攪乱	鉢	20.0	(5.0)				密	良好	灰白	右			口縁部	10			有	
1151	365	196 199	灰原		攪乱	鉢	26.1	(8.9)				密	良好	灰白	左			口縁部～体部	15			不明	
1152	365	199	灰原		攪乱	鉢	24.0	(5.0)				密	良好	灰白	右			口縁部	10			不明	
1153	365		灰原	A5	50	鉢	21.0	(1.6)				密	良好	灰白	左			口縁部	10			不明	
1154	365		灰原	B4	31	鉢	22.8	(1.7)				密	良好	黄灰	左			口縁部	8			不明	
1155	365	196 199	灰原	B5	47	鉢	32.0	(7.2)				密	良好	灰黄	右			口縁部～体部	20			有	
1156	365	196 199	灰原	Z3	58	鉢	30.1	(8.8)				密	良好	黄灰	右			口縁部	12		黄土	有	
1157	365	196 199	灰原	A4 B4 C4	31・49 31 31	鉢	36.0	(27.1)				密	良好	灰黄	左			口縁部～体部	15		黄土	有	
1158	366	183 199	灰原	Z4 A4 B4 C5	22・43 42 31・44 51	鉢	51.8	(15.8)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	40		黄土	有	破片で転用
1159	366		灰原	A2	31	鉢	22.0	(6.2)				密	良好	灰白	左			口縁部～体部	15		黄土	有	
1160	366		灰原	A3	31	鉢	22.0	(3.1)				密	良好	灰白	右			口縁部	10		黄土	有	
1161	366		灰原		攪乱	鉢	20.2	(7.3)				密	良好	黄灰	右			口縁部～体部	15			有	
1162	366		灰原	Y4	25	鉢	20.0	(6.2)				密	不良	灰白	右			口縁部	10			無	
1163	366		灰原	B4	31	鉢	26.0	(9.4)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	10		黄土	無	
1164	366	196 199	灰原	Y3 Z4	26 26	鉢	33.0	(10.2)				密	良好	灰黄	左			口縁部～体部	20		黄土	有	歪む
1165	366		灰原	A4	19	鉢	34.0	(7.9)				密	良好	灰白	右			口縁部～体部	5		黄土	有	
1166	366		灰原	Y3	26	鉢	30.8	(3.5)				密	良好	灰白	右			口縁部	5			有	歪む
1167	366		灰原	Z4	26	鉢	不明	(4.4)				密	良好	黄灰	左			口縁部	5			有	
1168	367		灰原		攪乱	甑(鉢)						密	良好	灰黄	右				5		黄土	有	
1169	367	200	灰原	B3	31	鉢か壺		(3.4)		12.0		密	良好	灰黄	右	ヘラ削り?		底部	20			有	
1170	367		灰原	A4	41	鉢か壺		(2.7)		15.4	2.7	密	良好	黄灰	右			底部	17			不明	
1171	367		灰原	Y4	25	鉢か壺		(2.1)		13.8	2.1	密	良好	黄灰	右			脚部	35			不明	
1172	367		灰原	Y4	25	鉢か壺		(2.0)		13.5	2.0	密	不良	灰白	右			脚部	25			不明	
1173	367		灰原	Z3	22	鉢か壺		(3.8)		10.0	1.9	密	不良	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	35			不明	補修痕

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	器種	口径	器高	最大径	高台(底)径	高台高	胎土	焼成	色調	轆轤方向	底部調整	内面底部調整	残存部位	残存率(%)	高台	施釉	転用	備考
1174	367		灰原	B4	31	鉢か壺		(6.1)		16.1	1.8	密	良好	灰黄	左			体部下半～高台部	15			有?	
1175	367		灰原	A3	31	鉢か壺		6.5		17.1	1.4	密	良好	灰白	左			体部下半～高台部	12		黄土	有	
1176	367		灰原	A4	31	鉢か壺		(8.0)				密	良好	灰白	左			体部下半	15			有	
1177	367		灰原		攪乱	鉢か壺		(4.4)				密	良好	灰黄	右			体部下半	15			有	
1178	367	200	灰原	Y3 Z4 A5	26 26・43・62 50	鉢か壺		(4.2)				密	良好	灰黄	左			体部下半	30			有	
1179	367	200	灰原	C5	31	鉢か壺		(15.5)		16.6		密	良好	灰黄	左			体部下半	25		黄土	有	
1180	368	200	灰原	B4 B5	31 31	鉢か壺		(5.4)		11.6		密	良好	灰黄	右	ヘラ削り?		体部下半～底部	25			有	
1181	368		灰原	Z4	56	鉢か壺		(3.7)		14.0		密	良好	灰黄	右			体部下半	13			有	
1182	368		灰原	A3	31	鉢か壺		(4.4)		14.4		密	良好	黄灰	左			体部下半～底部	20			有	
1183	368		灰原	X2	攪乱 24	鉢か壺		(8.4)		11.1		密	不良	灰	不明	ヘラ削り?		体部下半～底部	20			無	
1184	368		灰原	Z3	22	鉢か壺		(1.2)		26.0		密	良好	灰黄	右	ヘラ削り?		底部	7		黄土	有	
1185	368		灰原		Aﾄﾚﾝﾁ	鉢か壺		(5.2)		32.1		密	良好	灰黄	右	ヘラ削り		体部下半	5			有	
1186	368	200	灰原		攪乱	鉢か壺		(14.0)		26.0		密	不良	灰白	右			体部下半～底部	20			無	
1187	368	204	灰原		SR01	清郷甕	29.4	(6.3)				密	不良	黄灰	不明			口縁部	5				
1188	368		灰原		攪乱	須恵器壺		(2.7)		7.6	0.9	密	良好	灰	左	ヘラ削り?	ナデ	底部	40				
1189	369		灰原	C5	調査区南側壁	鉢か壺		(8.4)				密	良好	灰黄	右			体部	10		黄土	有	
1190	369		灰原	X3	24	鉢か壺		(18.6)				密	良好	灰黄	右			体部	10		黄土	有	
1191	369		灰原		攪乱	鉢か壺		(14.8)				密	良好	灰黄	右			体部	5		黄土	有	
1192	369		灰原	Z4 A4 C5	34 31 南壁	鉢か壺		(19.9)				密	良好	灰黄	右			体部	10		黄土	有	
1193	369		灰原		攪乱	鉢か壺		(4.9)				密	良好	灰黄	右			体部	5			有	
1194	369		灰原	C5	31	鉢か壺		(8.5)				密	良好	灰黄	右			体部	5		黄土	有	
1195	369		灰原	Z3	31	鉢か壺		(9.2)				密	良好	灰黄	右			体部	5		黄土	有	
1196	369		灰原		攪乱	鉢か壺		(9.7)				密	良好	黄灰	右			体部	5		黄土	有	
1197	369		灰原		Aﾄﾚﾝﾁ	鉢か壺		(17.0)				密	良好	黄灰	右			体部or肩部	5		黄土	有	
1198	369		灰原	Z4 A4 A5 B5	26 31 50 50	鉢か壺		(13.0)				密	良好	黄灰	右			体部	10		黄土	有	
1199	369		灰原		SR01	鉢か壺		(17.5)				密	良好	灰黄	右			体部～底部	10		黄土	有	
1200	370	183 202	灰原	A3 Z3	13 26	硯						密	良好	灰白					90			無	
1201	370		灰原			硯						密	やや不良	浅黄					10			無	
1202	370	183 204	灰原			窯道具						密	やや不良	灰白					80			無	
1203	370	183 204	灰原			窯道具						密	やや不良	灰白					90			無	
1204	370	183 204	灰原			錘						密	やや不良	灰白					100			無	
1205	371	195	灰原	Y3	25	碗		(3.8)		6.6	1.2	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ1条	底部	80			有	焼台付着
1206	371	195	灰原	Z3	58	碗		(2.7)		6.4	0.7	密	良好	灰褐	右	ナデ	ナデ	底部	100			有	窯体付着
1207	371	195	灰原	C5	53	碗		(2.5)		6.6		密	良好	黄灰	右	未調整	ナデ	底部	30			有	礫・焼台付着 ス付着
1208	371	194	灰原		SR01	碗		(1.8)		6.0		密	良好	黄灰	右		ナデ	底部	100	ソダ痕		有	
1209	371	194	灰原	C5	54	碗		(2.0)		6.3	1.1	密	良好	灰黄	右		ナデ	底部	100			有	焼台付着
1210	371	195	灰原	A5	50	碗		(2.0)		6.0	0.9	密	良好	灰黄	右		ナデ	底部	100			有	
1211	371	195	灰原	Y3	26	碗		(1.9)		6.3		密	良好	黄灰	右	雑なナデ	ナデ	底部	100			有	焼台付着
1212	371		灰原	A4	36	鉢か壺		(8.0)				密	良好	灰黄	右			口縁部?	5		黄土	有	破片で転用 焼台付着
1213	371		灰原	A5	50	焼台						粗	良好	灰褐					30				
1214	371	204	灰原			焼台						粗	良好	灰褐					80				
1215	371	204	灰原			焼台						粗	良好	灰褐					70				
1216	373	191	SF06		覆土	碗	12.6	3.9		6.4	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ		50	ソダ痕		有	
1217	373		SF06		覆土	碗	12.9	3.9		6.9	1.0	密	良好	灰白	右	ナデ	ナデ		50			有	
1218	373		SF06		覆土	碗	12.7	3.6		5.8	0.7	密	良好	黄灰	右	ナデ	不明		50			有	歪む
1219	373		SF06		覆土	碗	13.8	4.6		6.9	0.9	密	やや不良	灰黄	右	ナデ	ナデ		50			有	
1220	373		SF06		覆土	碗	13.8	(2.5)				密	良好	灰黄	右			口縁部	8		黄土	有	
1221	373		SF06		覆土	碗	13.0	(2.4)				密	良好	灰黄	右			口縁部	13			不明	
1222	373		SF06		覆土	碗		(1.9)		7.1	1.3	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ2条	底部	100	ソダ痕		不明	
1223	373		SF06		覆土	碗		(1.8)		6.8	0.9	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	底部	50			有	
1224	373		SF06		覆土	碗		(1.7)		7.2	0.9	密	良好	黄灰	不明	未調整	不明	底部	60			不明	
1225	373		SF06		覆土	碗		(2.3)		7.0	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ		底部	100			有	2個体釉着
1225	373		SF06		覆土	碗		(1.9)		6.0	0.8	密	良好	黄灰	右		ナデ2条	底部	100			有	
1226	373		SF06		覆土	碗		(2.0)		6.8	0.8	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	底部	50	ソダ痕		有	
1227	373		SF06		覆土	碗		(1.5)		6.6	1.0	密	良好	黄灰	右	ナデ	ナデ	底部	67			不明	
1228	373		SF06		覆土	皿か		(2.5)		7.6	0.8	密	良好	黄灰	右	雑なナデ	回転ナデ	底部	67			不明	
1229	373		SF06		覆土	托か		(2.3)		9.0	1.5	密	良好	黄灰	左	ナデ	ナデ	底部	50			不明	
1760	349	187	灰原		覆土	皿	10.7	2.1		5.1	0.6	密	不良	灰白	右	未調整	未調整		70				
1761	364	196 199	灰原		覆土	鉢	38.2	(25.0)	37.7			密	良好					口縁部～体部	10		黄土	有	破片で転用
1762	364	183 196 197	灰原		覆土	長頸壺	21.2	(25.5)	24.6			密	良好	灰白				口縁部～体部	50				
1763	357	192	灰原		覆土	輪花碗	15.6	(5.2)				密	良好	淡黄				口縁部～体部	25				

第５節　自然科学分析

１　放射性炭素14分析

山形　秀樹（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

大屋敷１号窯より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。

（２）試料と方法

試料は、灰原Ａ４区45層より採取した炭化材（マツ属複維管束亜属）１点、１号窯燃焼室より採取した炭化材（アワブキ）１点、灰原最下層の43層より採取した炭化材（コナラ節）１点の併せて３点である。なお、測定試料には、これら試料の最外年輪部分を用いた。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した^{14}C 濃度を用いて^{14}C 年代を算出した。

（３）結果（第59表）

第59表に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値－25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、^{14}C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C 年代誤差（± １ σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}C 年代が、その^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68％であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、１σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその１σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10％未満についてはその表示を省略した。１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、第59表中に下線で示した。

（４）考察

各試料について同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した１σ暦年代範囲のうち、確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確率の高い年代値の範囲が示された。

第59表　大屋敷1号窯出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

資料番号	測定番号（測定法）	出土位置			樹種	$\delta^{13}C_{PDB}$（‰）	^{14}C年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
		場所	グリッド	層位				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
1	PLD-2251（AMS）	灰原	A4	45	炭化材（マツ属複維管束亜属）	-25.8	1,120±30	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 960	cal AD 895 - 905 (15.1%) cal AD 910 - 925 (21.6%) cal AD 935 - 975 (60.4%)
2	PLD-2252（AMS）	窯内	燃焼室		炭化材（アワブキ）	-29.0	1,085±30	cal AD 980	cal AD 900 - 920 (34.8%) cal AD 950 - 995 (65.2%)
3	PLD-2253（AMS）	灰原	A5	43	炭化材（コナラ節）	-25.1	1,125±30	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 945 cal AD 955	cal AD 890 - 905 (15.9%) cal AD 915 - 975 (84.1%)

引用文献

中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の^{14}C年代』　3－20頁

Stuiver, M. and Reimer, P. J. 1993 'Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program', "*Radiocarbon*", 35, p215-230.

Stuiver,M., Reimer, P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. 1998 'INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP', "*Radiocarbon*", 40, p1041-1083.

2　樹種分析

植田　弥生(パレオ・ラボ)

(１)はじめに

大屋敷１号窯が所在する浜北市宮口地区は、奈良時代から鎌倉時代の窯が点在する宮口古窯跡群として周知される窯業生産地である。窯業生産には燃料材が不可欠であり、どのような樹種を選択的に利用していたのか記録することは、燃料材を伐採した森林の景観や森林維持・管理など、窯業生産と森林利用との関り方を理解してゆくための基礎的資料の蓄積につながる。ここでは、大屋敷１号窯の窯内と灰原から出土した木材４試料について樹種同定結果を報告する。

なお、４試料中のNo.1～３については、放射性炭素年代測定を実施している。

(２)試料と方法

試料No.3とNo.4は、灰原の堆積土中に小破片の炭化材が散在している状態であったため、炭化材は水洗して取り上げた。試料中に複数破片がある場合は、形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種同定試料とした。

同定はまず炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に片歯の剃刀で弾くように接線断面と放射断面を割って作成し、この３方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大し材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM－T100型)で観察と写真撮影を行った。

なお、同定した炭化材の残り破片は、静岡県教育委員会により保管されている。

(３)結果(第60表，写真21・22)

同定結果の一覧を、第60表に示した。検出された分類群は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ節・クヌギ節・クリ・アワブキであった。

マツ属複維管束亜属は３試料から、コナラ節・クヌギ節・クリは１～２試料から検出され、これらはすべて灰原から検出されている。このような状況から、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節・クリの４分類群が主要な燃料材であったことが想定でき、少なくとも焼成の最終段階で多く利用されていた樹種といえる。

第60表　大屋敷１号窯出土炭化材樹種同定結果

試料番号	出土位置			樹　種	備　考	年代測定番号
	場所	グリッド	層位			
1	灰原	A4	45	マツ属複維管束亜属	推定直径4cmの一部破片	PLD-2251
2	窯内	燃焼室		アワブキ	推定直径2.5cmの一部破片	PLD-2252
3	灰原	A5	43	マツ属複維管束亜属	小破片複数	PLD-2253
				コナラ節	小径枝材の破片 ほかに小破片複数	
				クヌギ節	小破片少数	
				クリ	小破片複数	
				樹皮	破片多数	
4	灰原	Z3	31	マツ属複維管束亜属	小破片１	
				クヌギ節	小破片１	
				クリ	小破片複数	

１号窯燃焼室から出土した推定直径2.5cmほどの細い枝材は、アワブキであった。前述の４分類群とともにアワブキも燃料材樹種としての利用が周知されているが、窯跡からの調査事例では現在までほとんど検出されていない。

以下に、同定した樹

種の材組織を記載する。

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　**マツ科**　写真21　1a－1c(灰原Ａ４区45層)
2(灰原43層)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。仮道管と放射組織が交差する部分である分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸歯状肥厚がある。このような特徴から、アカマツとクロマツを含むマツ属複維管束亜属と同定される。

放射仮道管内壁の肥厚の形状により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別されるが、炭化材では内腔に張り出た部分が欠落しており詳細な形状は不明なため、２種を特定できない。

コナラ属コナラ亜属コナラ節　*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*　**ブナ科**　写真21　3a－3b(灰原43層)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織・複合状のものとがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。この材は加工がややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点があるが、人里近くに普通の樹種で入手しやすいこともあり利用頻度が高く、遺跡からは加工木や炭化材としてもよく出土する樹種である。堅果は食用となる。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Q.* subgen. *Q.* sect. *Cerris*　**ブナ科**　写真21　4a－4b(灰原43層)

年輪の始めに大型の管孔が１層配列し、その後は小型・厚壁で孔口は円形の管孔が単独で放射状に配列し広放射組織をもち、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は柵状である。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　**ブナ科**　写真21　5(灰原43層)
写真22　6a－6c(灰原Ｚ３区31層)

年輪の始めに中型～大型の管孔が１層配列し、その後は非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

灰原Ｚ３区31層から検出された炭化材の中には、年輪始めの管孔がやや小型の部分や管孔配列がまばらであるなど不規則な年輪界が多く(写真22－6a～6c)見られたが、恐らく節部に近い部分か根張りに近い部分であるためと推測され、それ以外の材組織はクリと同様な特徴であったのでクリと同定した。

アワブキ　*Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc.　**アワブキ科**　写真22　7a－7d(燃焼室覆土)

小型でやや厚壁の管孔が単独または柔細胞を介して放射方向に２個複合し、やや疎らに分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔と階段数が５本ほどの階段穿孔である。放射組織は異性、１～４細胞幅、細胞高は非常に高く、放射柔細胞は薄壁で大きく接線断面において放射柔細胞の構成は粗雑な印象をうける。周囲状柔組織が顕著である。

(４)まとめ

大屋敷１号窯の炭化材からは、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ・アワブキが検出された。

アワブキは燃焼室から出土した。アワブキは、本州島以南の暖帯の山地に普通の落葉高木で、枝は燃

やすと切口から泡を吹き出すことから、「泡吹き：アワブキ」と名付けられている樹種で、薪炭材としての利用が知られている。実際にアワブキの材が窯業跡から検出された事例は知らないが、利用されていた可能性は充分にあり、今回の調査で燃焼室から検出されたことは興味深い。

燃料材の残渣が投棄された灰原の３試料（試料番号１・３・４）からは、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節・クリが検出された。これらは、主要な窯業燃料材として多く利用されている樹種であり、当窯でも同様な樹種選択がなされていたことが判明した。

岐阜県や愛知県では、須恵器窯や平安時代の灰釉陶器窯跡から出土する炭化材の多くは、コナラ節またはクヌギ節で、マツ属複維管束亜属の検出量は少ない（恵那市教委1983、岐阜県文化財保護センター2003、日進町教委1984、愛知県埋文センター1999、三好町教委2000・2001など）。今回の調査では炭化材を量的に検討することができなかったので、岐阜県や愛知県の同時期の灰釉陶器窯と同様に、静岡県内においても落葉広葉樹のコナラ節とクヌギ節の方がマツ属複維管束亜属より多く利用されていたかどうかは不明であり、今後の課題といえる。

いずれにせよ、大屋敷１号窯では二次林要素の樹種が燃料材として多く利用されていたことが判明した。当地域一帯には古墳時代後期から終末期の古墳群が多く、当窯も７～８世紀に築造された古墳が点在する地区にあることから、周辺の森林は古墳時代に大規模な伐採・開発・利用が行われたと推測する。また、当地域では９世紀後半に灰釉陶器の生産が開始されており（松井1989）、当窯の操業時期である平安時代後半にはかなり二次林化が進行し、二次林の面積も拡大していたと想定できる。この二次林の木材を利用して灰釉陶器窯が操業されていたと推測する。

なお、静岡県西部、浜名湖西岸に立地する古墳時代から中世の湖西窯跡群でも、ニ葉松類（マツ属複維管束亜属とほぼ同義）が多く利用されていたことが明らかにされている（山口・千野1990）。この調査においても各時期・各窯跡の分析点数が少ないものの、古墳時代～奈良時代の窯からも常緑広葉樹のカシ類や落葉広葉樹のクヌギ類・ナラ類とともにニ葉松類が利用されていたことが判明している。したがって、他県における同時期の窯跡の燃料材に比べ、当地域一帯では比較的初期の段階からマツが燃料材に利用されていたようである。当地域一帯にはマツ材が利用可能な植生がすでに広がっていたとも想定でき、その過程や要因は今後も資料を蓄積して解明してゆく課題といえる。

引用文献

恵那市教育委員会　1983『正家１号窯発掘調査報告書』

岐阜県文化財保護センター　2003『深橋前遺跡』

日進町教育委員会　1984『愛知県日進町狭山地区埋蔵財発掘調査報告書』

愛知県埋蔵文化財センター　1999『細口下１号窯・鴻ノ巣古窯・高針原１号窯』

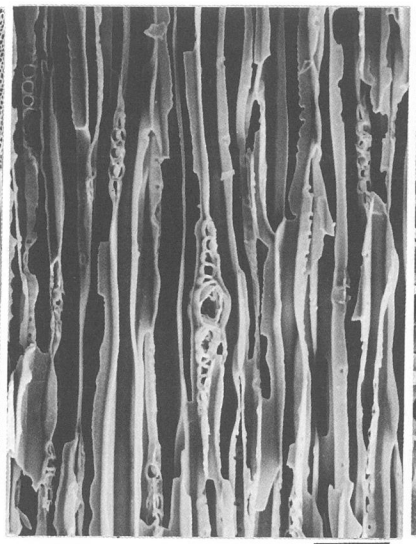
松井一明　1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』
静岡県教育委員会

三好町教育委員会　2000『北部畑総南工区藤塚地内　埋蔵文化財発掘調査報告書（K-47・K-110）』

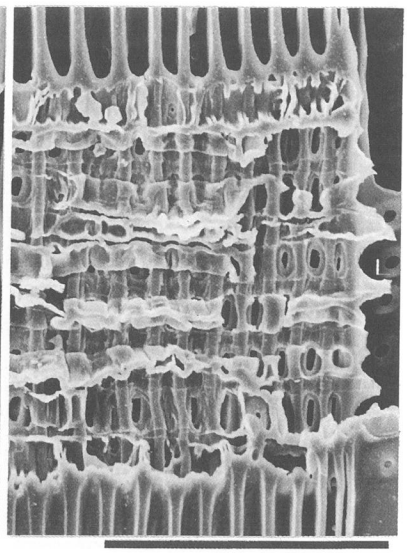
三好町教育委員会　2001『三好根浦特定土地区画整理事業地内　埋蔵文化財発掘調査報告書（K-3・K-4・K-G-21）』

山口慶一・千野裕道　1990「マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について」『東京都埋蔵文化財センター　研究論集』Ⅷ
85-114頁・図版１-10

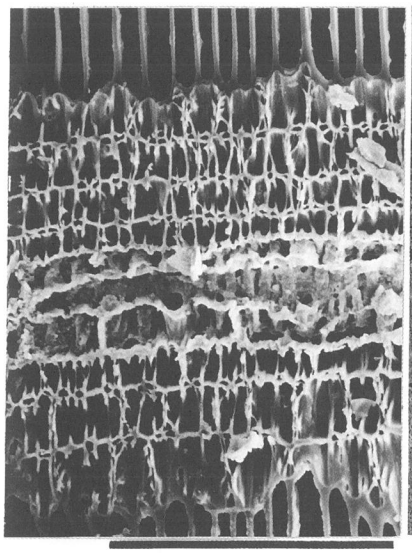
1a　マツ属複維管束亜属(横断面)
灰原A4区45層　bar:1.0mm



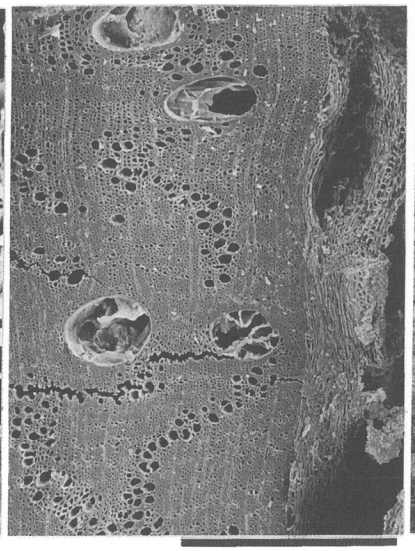
1b　マツ属複維管束亜属(接線断面)
灰原A4区45層　bar:0.1mm



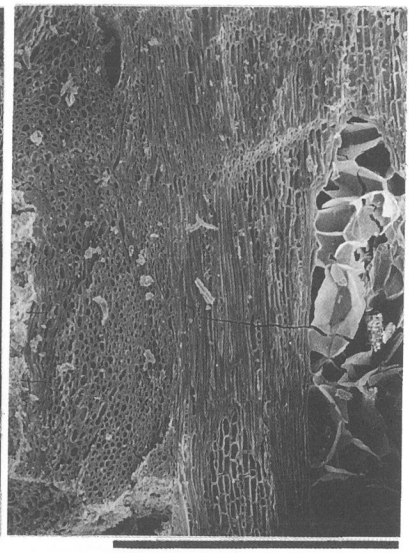
1c　マツ属複維管束亜属(放射断面)
灰原A4区45層　bar:0.1mm



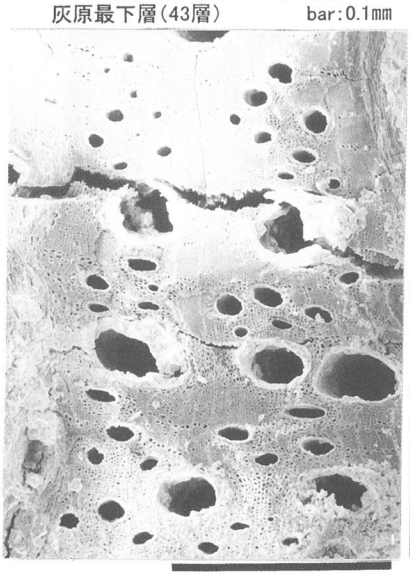
2　マツ属複維管束亜属(放射断面)
灰原最下層(43層)　bar:0.1mm



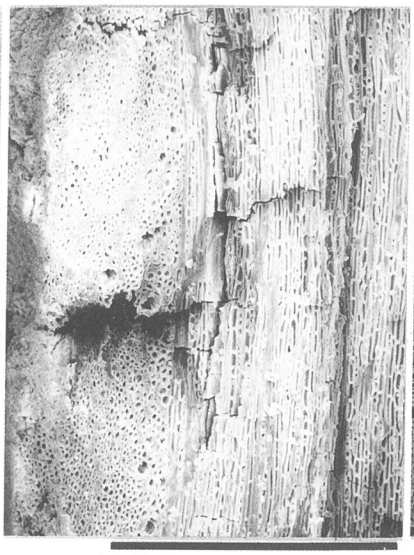
3a　コナラ節(横断面)
灰原最下層(43層)　bar:0.5mm



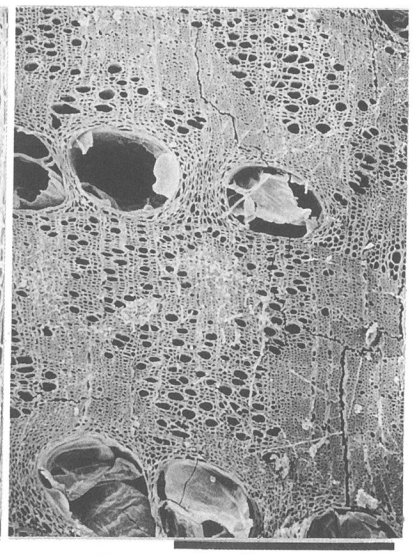
3b　コナラ節(接線断面)
灰原最下層(43層)　bar:0.5mm



4a　クヌギ節(横断面)
灰原最下層(43層)　bar:0.5mm

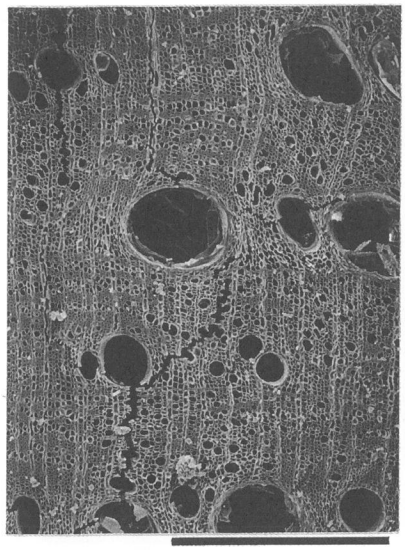


4b　クヌギ節(接線断面)
灰原最下層(43層)　bar:0.5mm

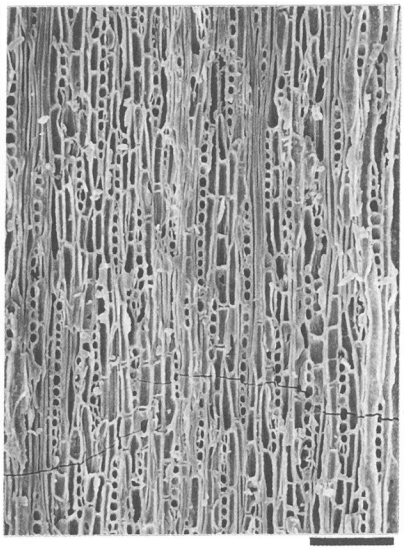


5　クリ(横断面)
灰原最下層(43層)　bar:0.5mm

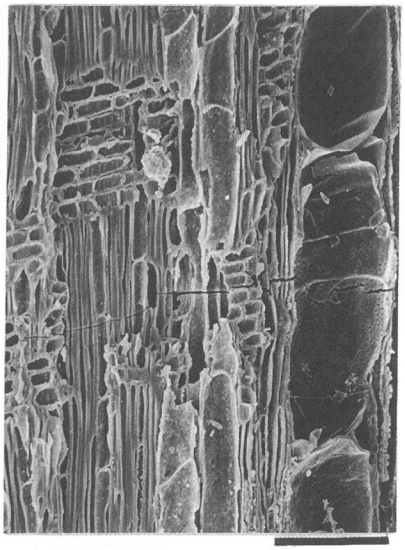
写真21　大屋敷1号窯出土炭化材の走査電子顕微鏡写真①



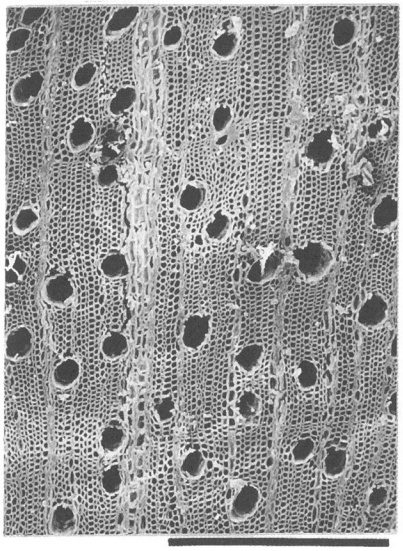
6a　クリ（横断面）
灰原Z3区31層　　bar：0.5mm



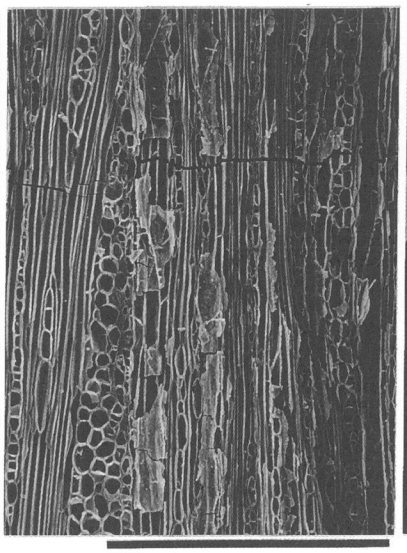
6b　クリ（接線断面）
灰原Z3区31層　　bar：0.5mm



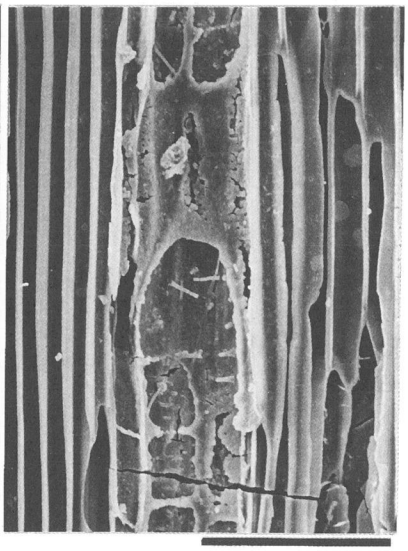
6c　クリ（放射断面）
灰原Z3区31層　　bar：0.1mm



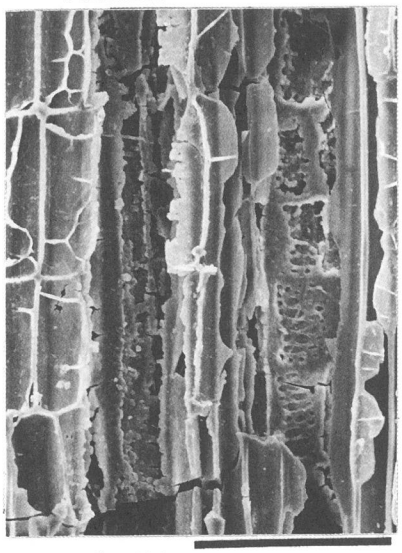
7a　アワブキ（横断面）
1号窯燃焼室　　bar：0.5mm



7b　アワブキ（接線断面）
1号窯燃焼室　　bar：0.5mm



7c　アワブキ（放射断面）
1号窯燃焼室　　bar：0.1mm



7d　アワブキ（放射断面）
1号窯燃焼室　　bar：0.1mm

写真21　大屋敷１号窯出土炭化材の走査電子顕微鏡写真②

第６節　付編　大屋敷古窯跡群関連遺物

大屋敷１号窯の評価を行うにあたり、宮口古窯跡群で出土している資料が重要であることから、ここでは、浜北市教育委員会より提供を受けた吉名５・６号窯、大屋敷５号窯、大屋敷地区採集遺物を中心に掲載する。

宮口古窯跡群は、本章第１節にて記述したように浜北市西部の丘陵斜面に築窯された灰釉陶器、山茶碗を焼成した窯跡群であり、東から西ノ谷古窯跡群、大屋敷古窯跡群、吉名古窯跡群、譲栄古窯跡群、土取古窯跡群、栂池古窯跡群、新池古窯跡群に区分されている。以下に大屋敷古窯跡群から順に概要を述べ、第７節において大屋敷１号窯との比較を行いたい。

１　大屋敷古窯跡群

（１）大屋敷６号窯（第374～377図，第61表，図版205～207）

大屋敷６号窯は、大屋敷Ｃ古墳群の発掘調査中に発見した未知の窯で、大屋敷Ｃ古墳群と大屋敷Ａ古墳群の間にある谷部の西側斜面に築窯されていると推測する。窯周辺で山茶碗、瓦、窯道具を表面採集した。また、今回の調査区内（３・４区内）から、釉着した山茶碗や、窯道具として転用され釉薬が表面に厚く付着した山茶碗や、瓦片が出土している。今回の調査区内から出土した遺物に関しては、第Ⅳ章にて報告した。ここでは表面採集した山茶碗、瓦、窯道具に関して報告する。

①鬼瓦（第375図，図版205・207）

後述する平瓦と同様の胎土を有する鬼瓦（1230）である。手捏成形であり、立体的に表現されている。成形には手とヘラを使用している。大部分が欠損しているが、鼻と上顎が残存している。残存する高さ21.4cm、幅13.8cm、厚さは眉間の突出部分で8.0cm、上唇で6.5cm、上歯部分で4.4cmをはかる。

鬼面は、鼻は欠損しており、その形状のみ知ることができる。鼻は幅12.7cm以上、高さ10.0cmをはかる。現存する寺院や他遺跡で確認される鬼瓦と同様、上唇は逆へ字形で、口を大きく開いた状態を表現しており、歯の左右の欠損部分には牙が表現されていた蓋然性が高い。唇の中央に鼻朶が表現されている。上唇の下には歯が表現されている。歯は方形で、現状で３本が確認できるが本来は両側の牙を含めて前歯４本、牙２本の計６本であった可能性が高い。上歯の下部は平端に仕上げられている。

裏面は平坦であり、掘り込みは確認できない。

②平瓦（第376図、図版207）

３区で出土した瓦と同様の整形手法を用いる平瓦（1239）が採集されている。１枚作りである可能性が高い。凹面にはコビキ痕と布目、凸面には粗い縄目叩きが施されている。側縁と凹面の端部付近はヘラにより面取りされている。

③山茶碗（第374・376図，図版206・207）

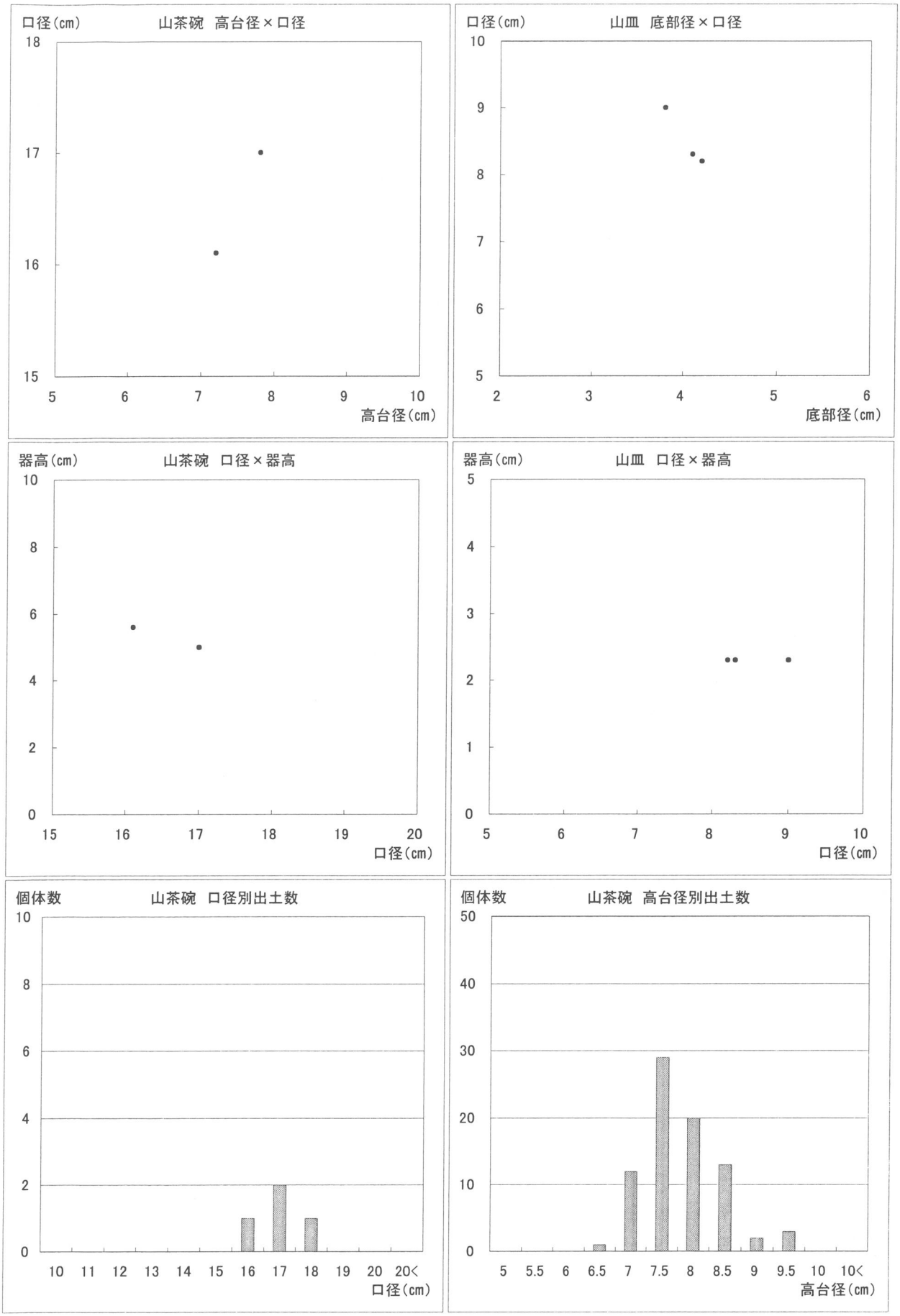
山茶碗、山皿を採集した（1231～1237）。第Ⅳ章SR06、遺構外出土遺物で報告したように、形態的な特徴は、３・４区で出土した山茶碗、山皿の特徴と同一である。したがって、３・４区遺構外で出土した山茶碗は６号窯の生産品である可能性が高い。

山茶碗　山茶碗（1231～1235）は、高台が低い、潰れた三角形である。高台径6.0～9.0cmをはかる。高台には、籾殻痕が確認でき、底部は糸切り（離し）後未調整のものとナデ調整が施されるものがある。

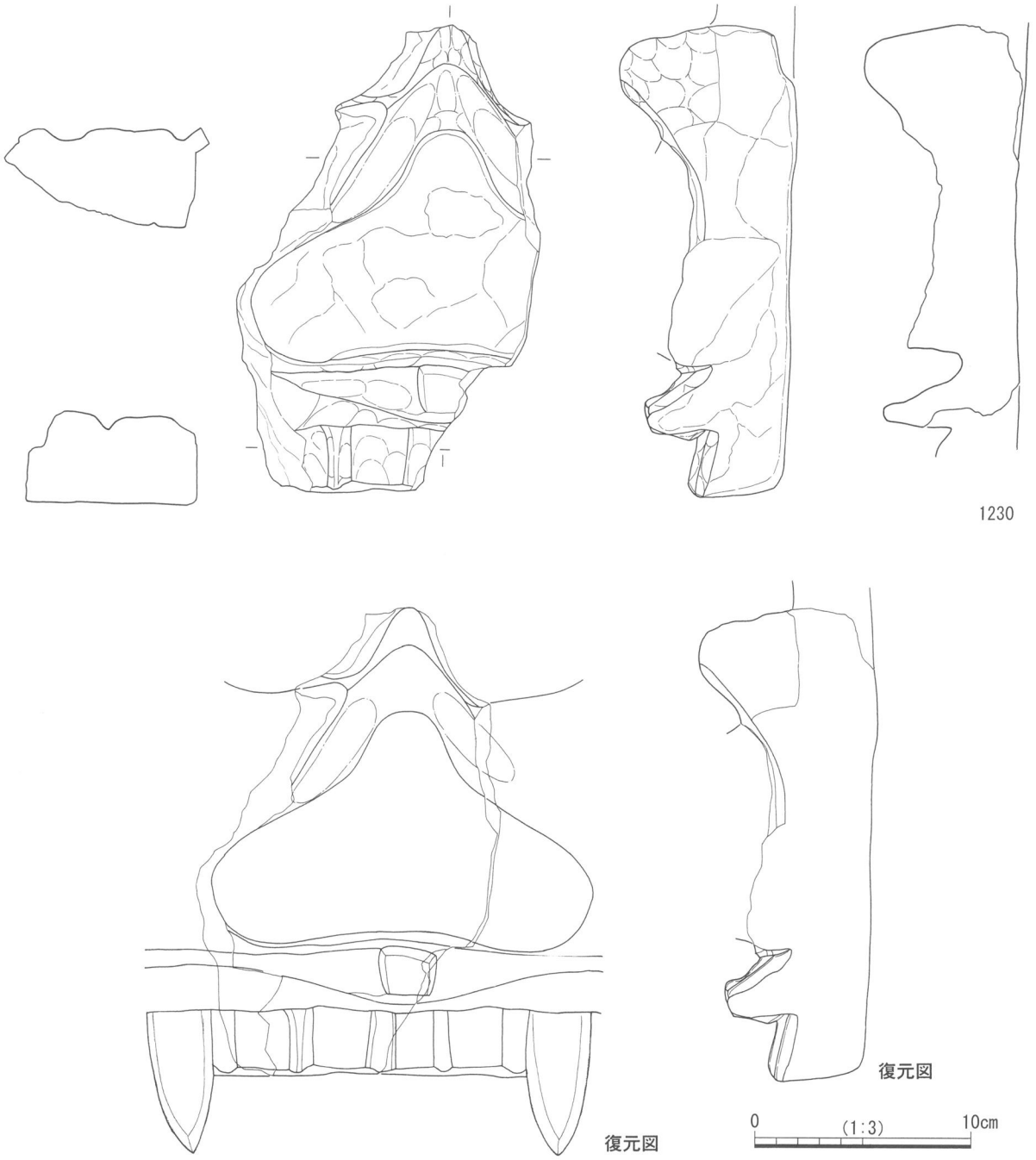
山皿　山皿（1236・1237）は、底部から逆ハ字形に直線的に開くもので、口径8.0cm前後、底部径約4.0cmをはかる。底部は糸切り（離し）後未調整である。

なお、第374図には３・４区で出土した山茶碗の法量を含めている。

６号窯に関連する山茶碗は、口径約18.0cm、高台径6.0～9.0cmをはかる。ここで自然流路SR06や古



第374図　大屋敷6号窯出土碗法量図



第375図　大屋敷 6 号窯表面採集遺物実測図①

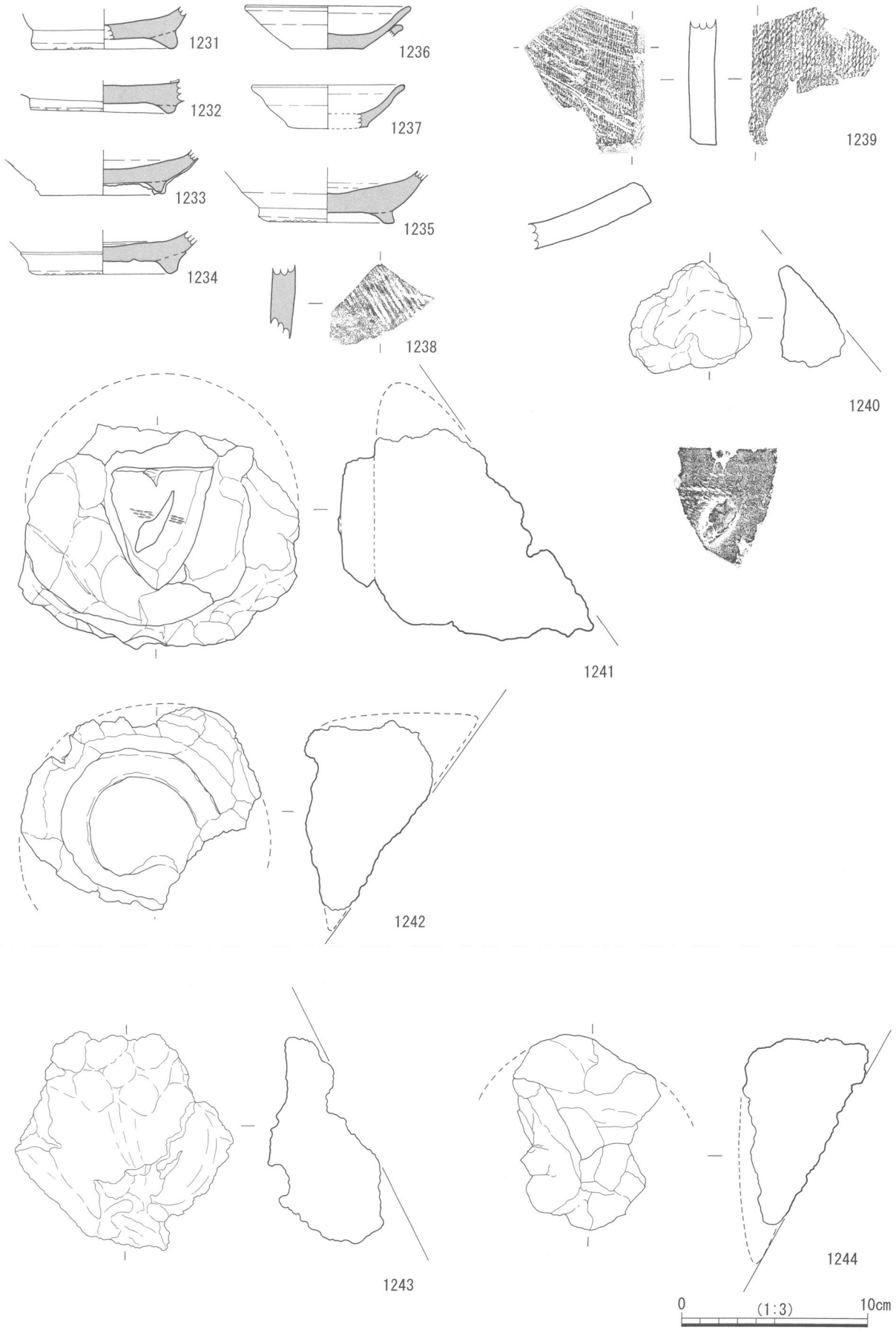
墳の墳丘などから出土した山茶碗を含めて法量を見ておく。

碗は高台径6.0～9.5cm をはかり、7.0～7.5cm をピークに正規分布を示す。高台高は 5 ～10㎜が約 7 割を占め、 5 ㎜以下が 3 割で、10㎜を越える個体は 1 点のみである。口径は16.0～18.0cm、器高5.0～6.0cm をはかる。小碗は高台径約4.5cm をはかる。

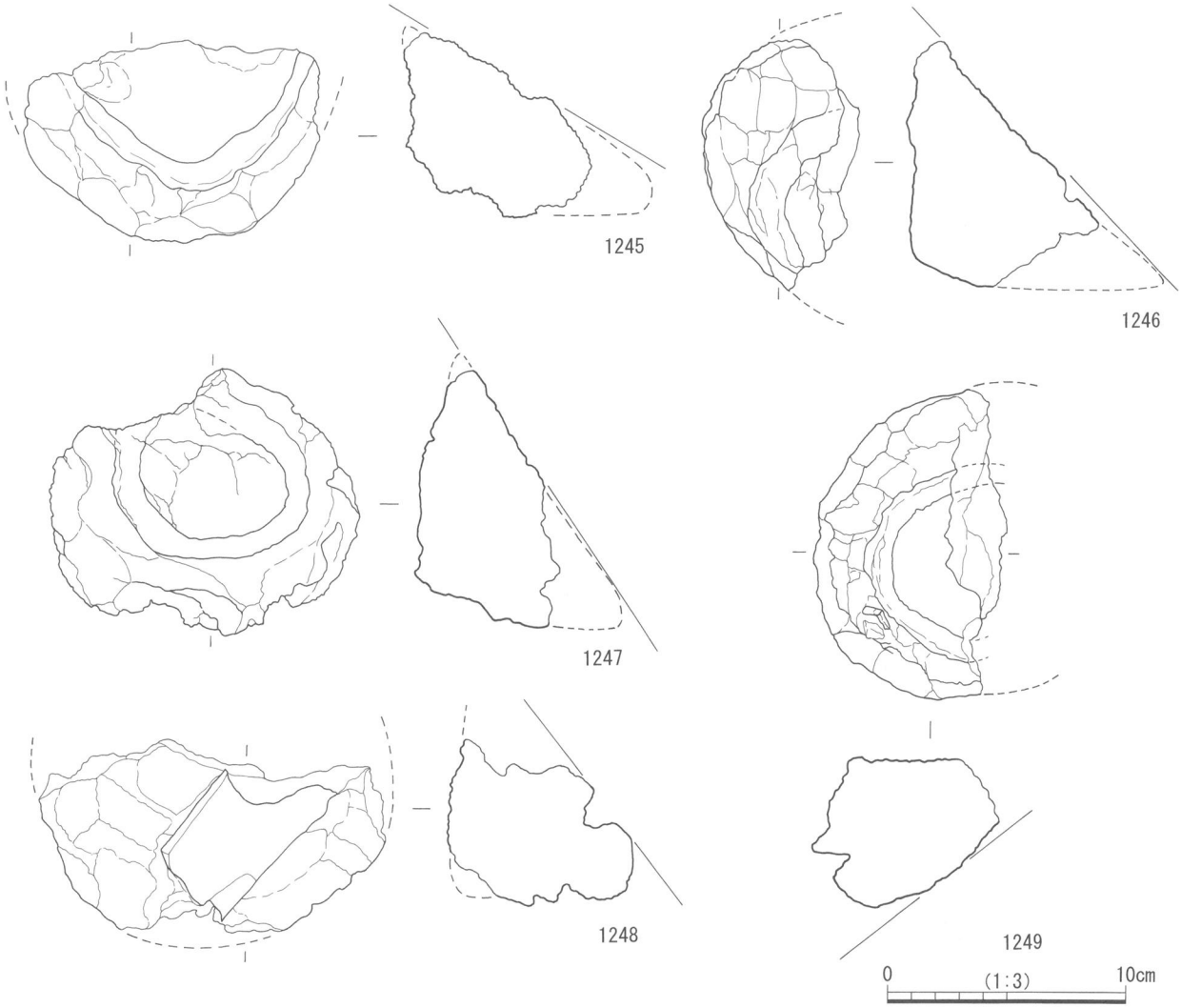
山皿は口径約8.0～8.5cm、底部径4.0cm 前後、器高2.5cm をはかる。

④窯道具（第376・377図，図版205・207）

馬爪形焼台10点（1240～1249）を表面採集した。1241の上面には平瓦片が釉着しており、その上にも瓦片が釉着していることから、焼台のうえに不要となった瓦を置き、その上に焼成する瓦を置いていたと考えることができる。馬爪形焼台は最も大きな破片1241が約1550g をはかり、大屋敷 1 号窯出土の筒形



第376図　大屋敷６号窯表面採集遺物実測図②



第377図　大屋敷6号窯表面採集遺物実測図③

に近い馬爪形焼台と比較して大型である。

したがって、山茶碗段階に入り、焼台は筒形から馬爪形へ変化し、大型化していることが判明する。

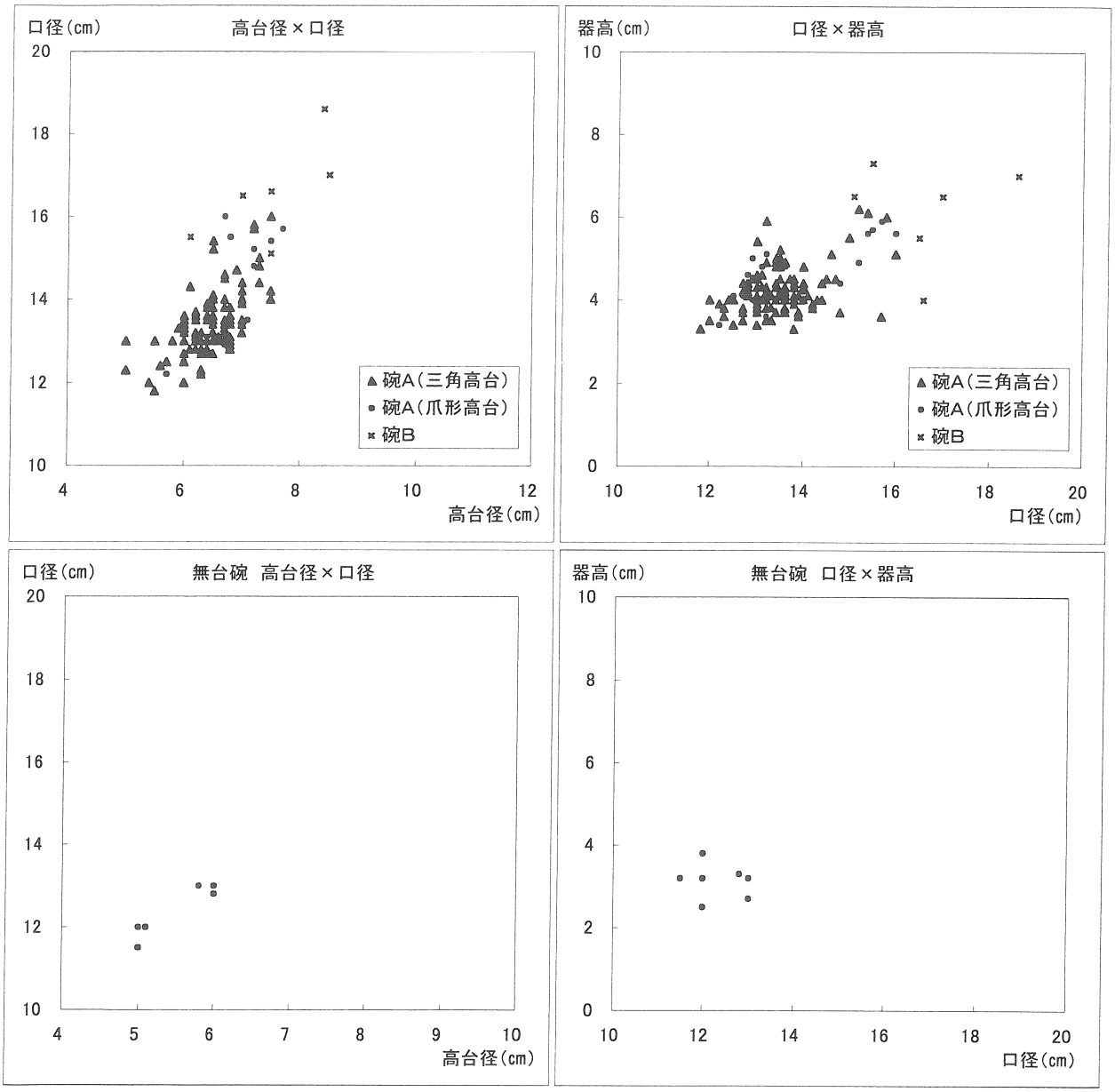
（２）大屋敷５号窯（第378～385図，第61表）

大屋敷５号窯は半地下式の窖窯であり、平面形は寸胴形（無花果形）である。現存長5.3m、燃焼部最大幅1.5m、焼成室の傾斜は15～25度である。窯の主軸は北北東を向く。

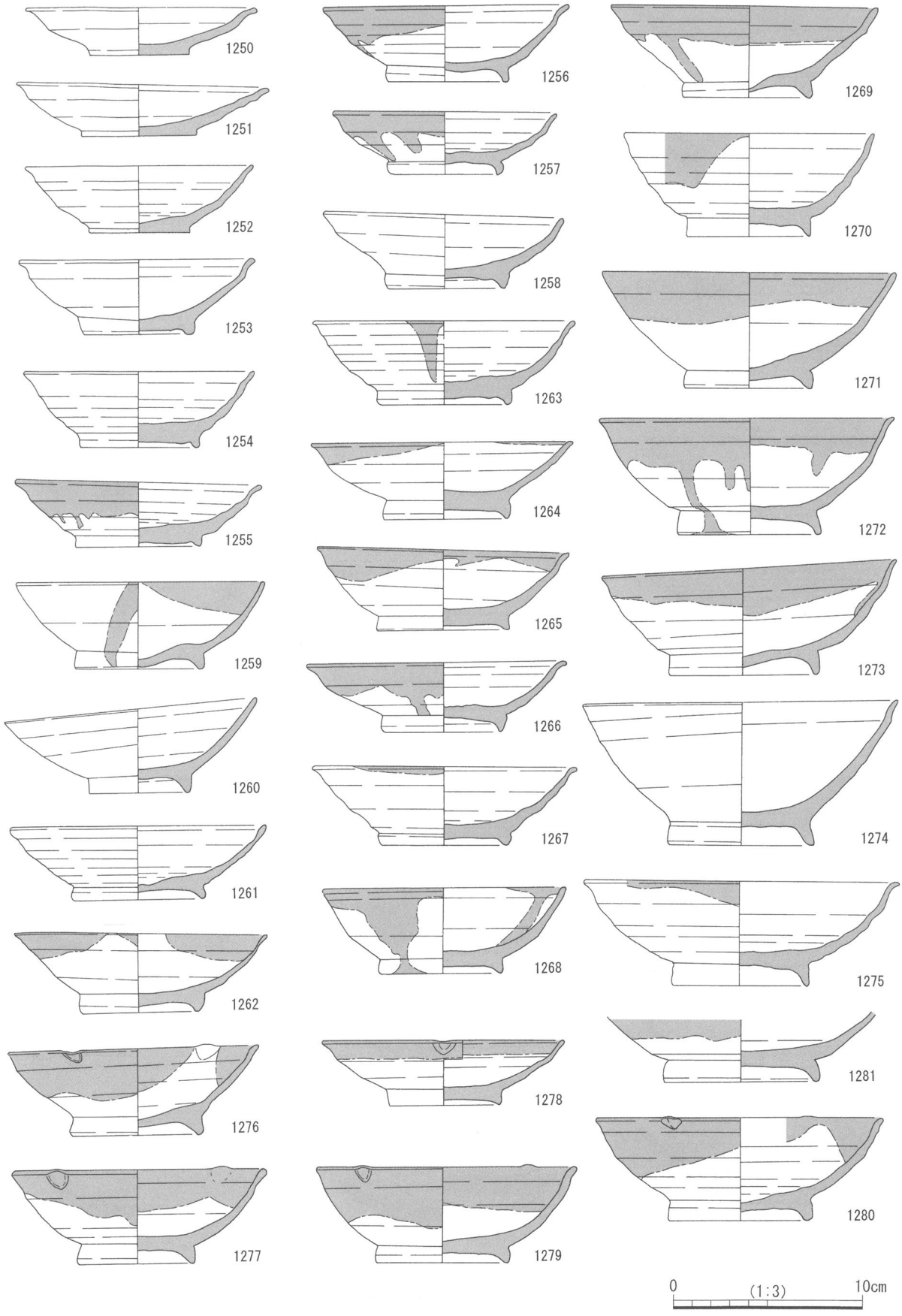
大屋敷５号窯からは灰釉陶器碗（1253～1275，1281～1419）、輪花碗（1276～1280、1426～1436）、皿、托、無台碗（1250～1252，1420～1425）、鉢（1437・1438）、脚付盤か大型托（1439）、長頸壺？（1440）、獣足付短頸壺（1443）、甑（1442）などが出土している（浜北市教委1989）。

碗（1253～1275，1281～1419）は、三角高台で低いもの（碗Ａ）と爪形で高いもの（碗Ｂ）がある。前者には胴部～口縁部が底部から直線的に立ち上がるもの、彎曲して緩やかに立ち上がるものがある。碗Ｂの高台はハ字形あるいは直立する高い爪形である。底部は糸切り未調整のものが多い。施釉方法は漬け掛けが多く、一部に刷毛塗りも確認されている（浜北市教委1989）。

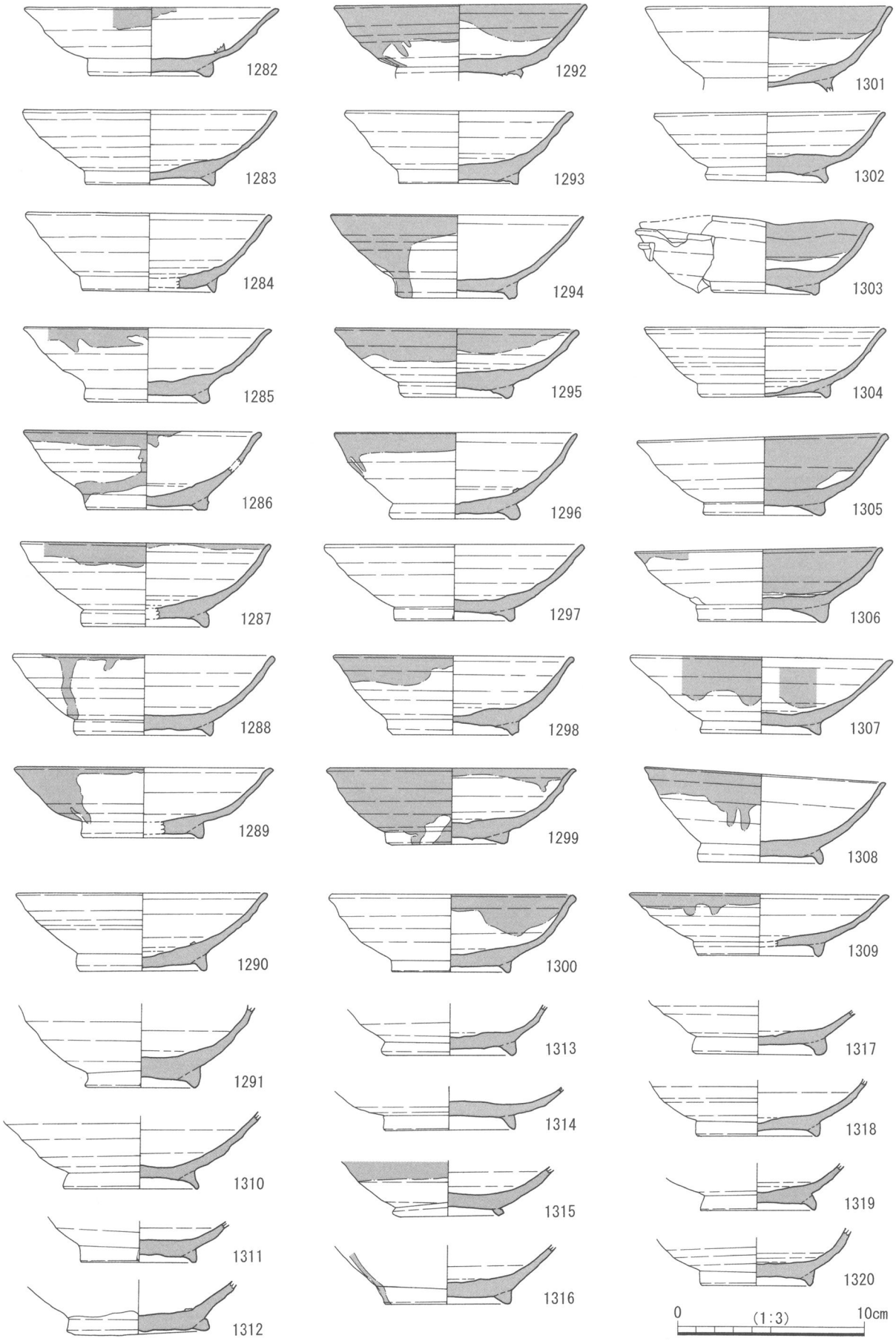
碗Ａは高台径6.0～6.5cmが最も多く、6.0～6.5cmを頂点に正規分布を示し、6.0～7.0cmの間に約６割が納まる。口径は13.5～14.0cmが最も多く、これを頂点に正規分布を示す。口径は12.0～16.0cmにほぼ収まる。



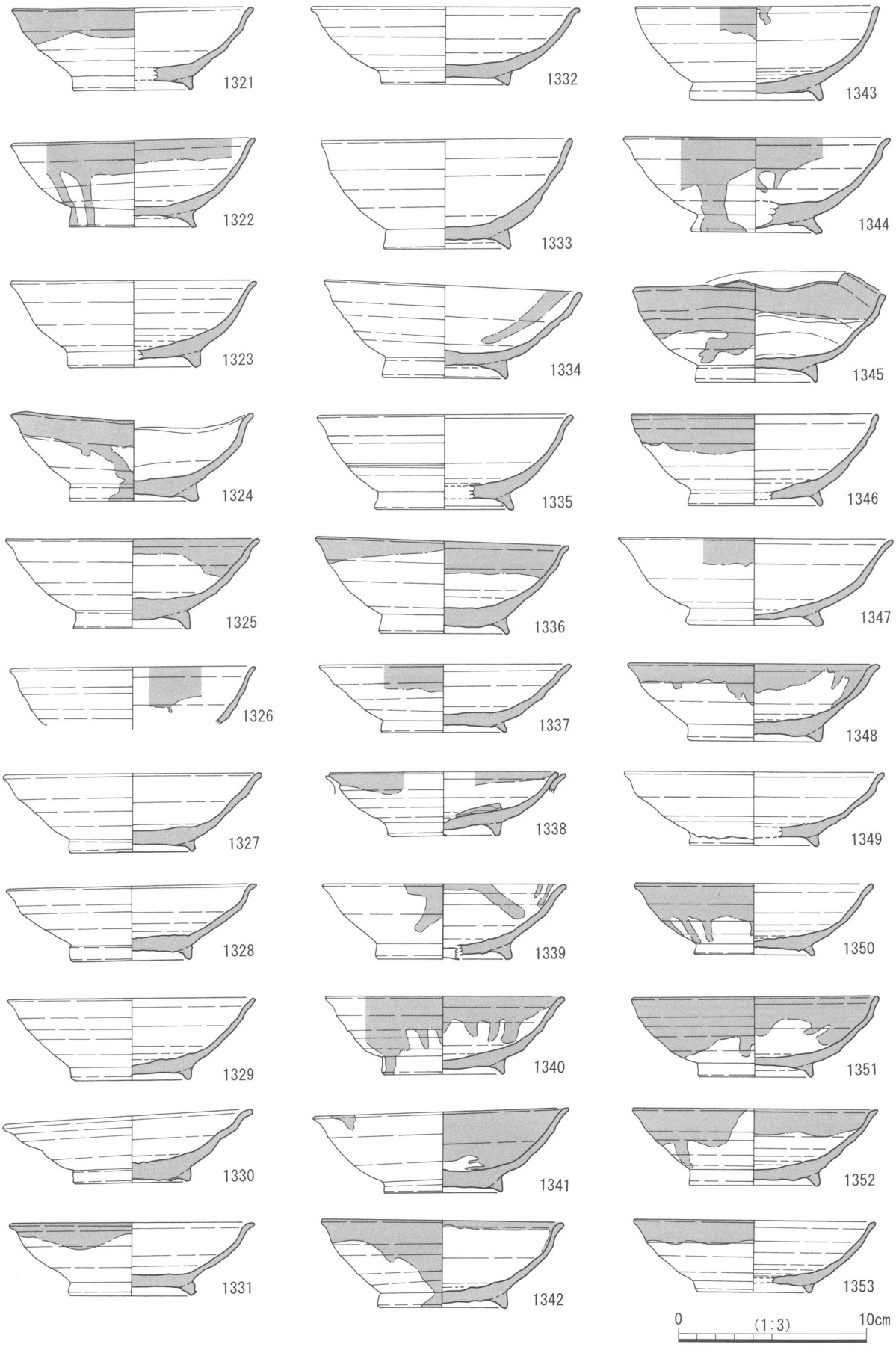
第378図　大屋敷５号窯出土碗法量図



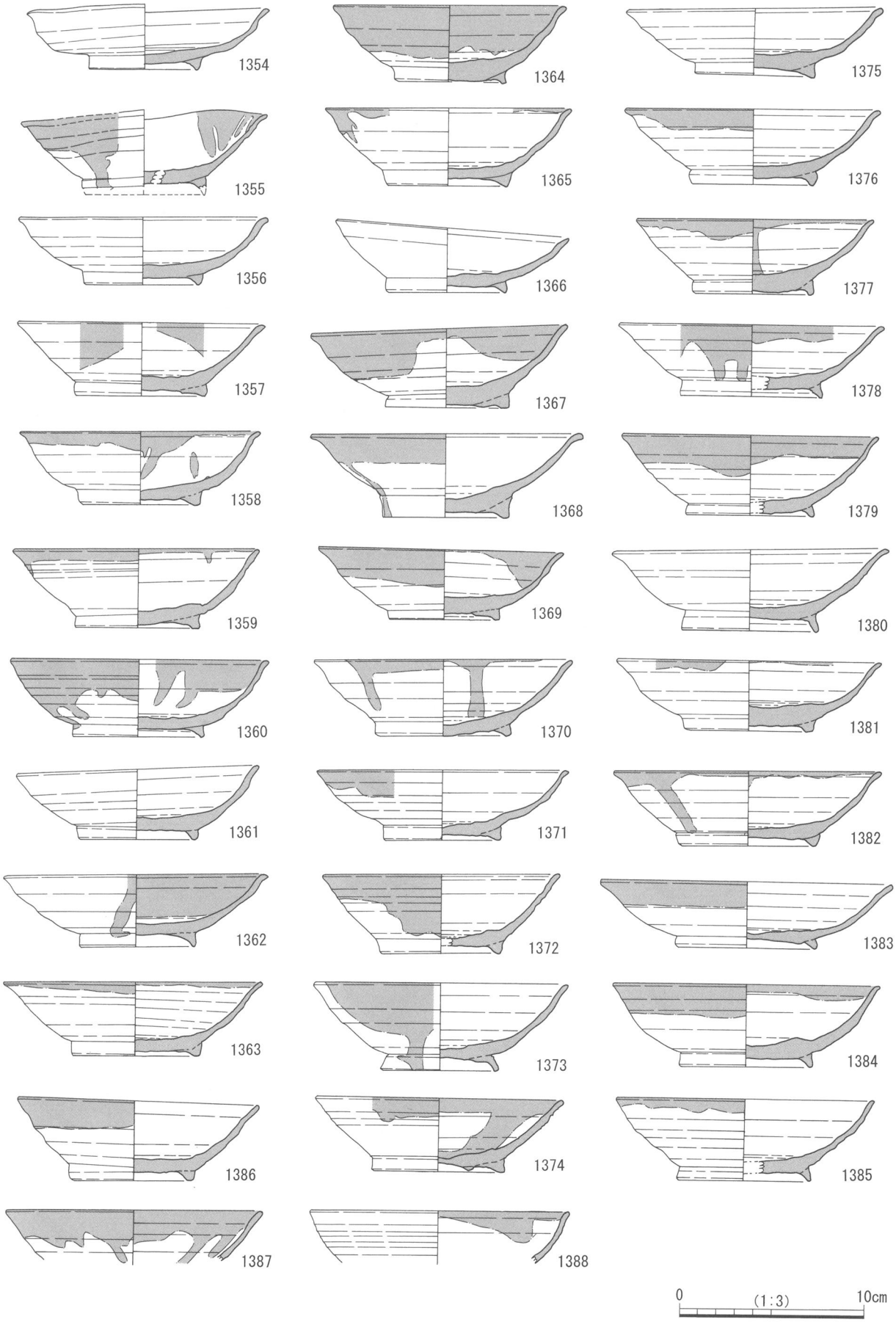
第379図　大屋敷５号窯出土遺物実測図①（浜北市教委1989より）



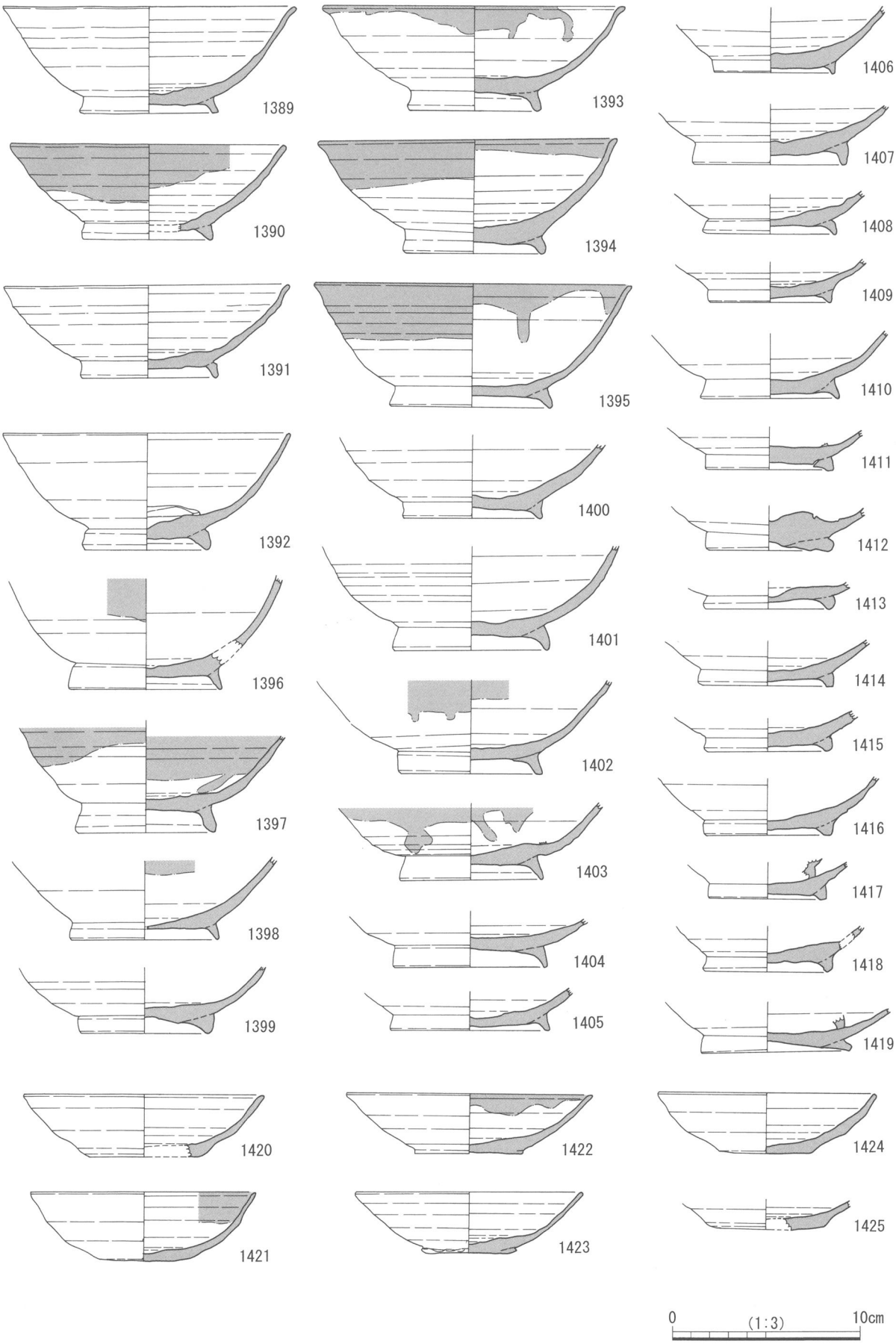
第380図　大屋敷５号窯出土遺物実測図②



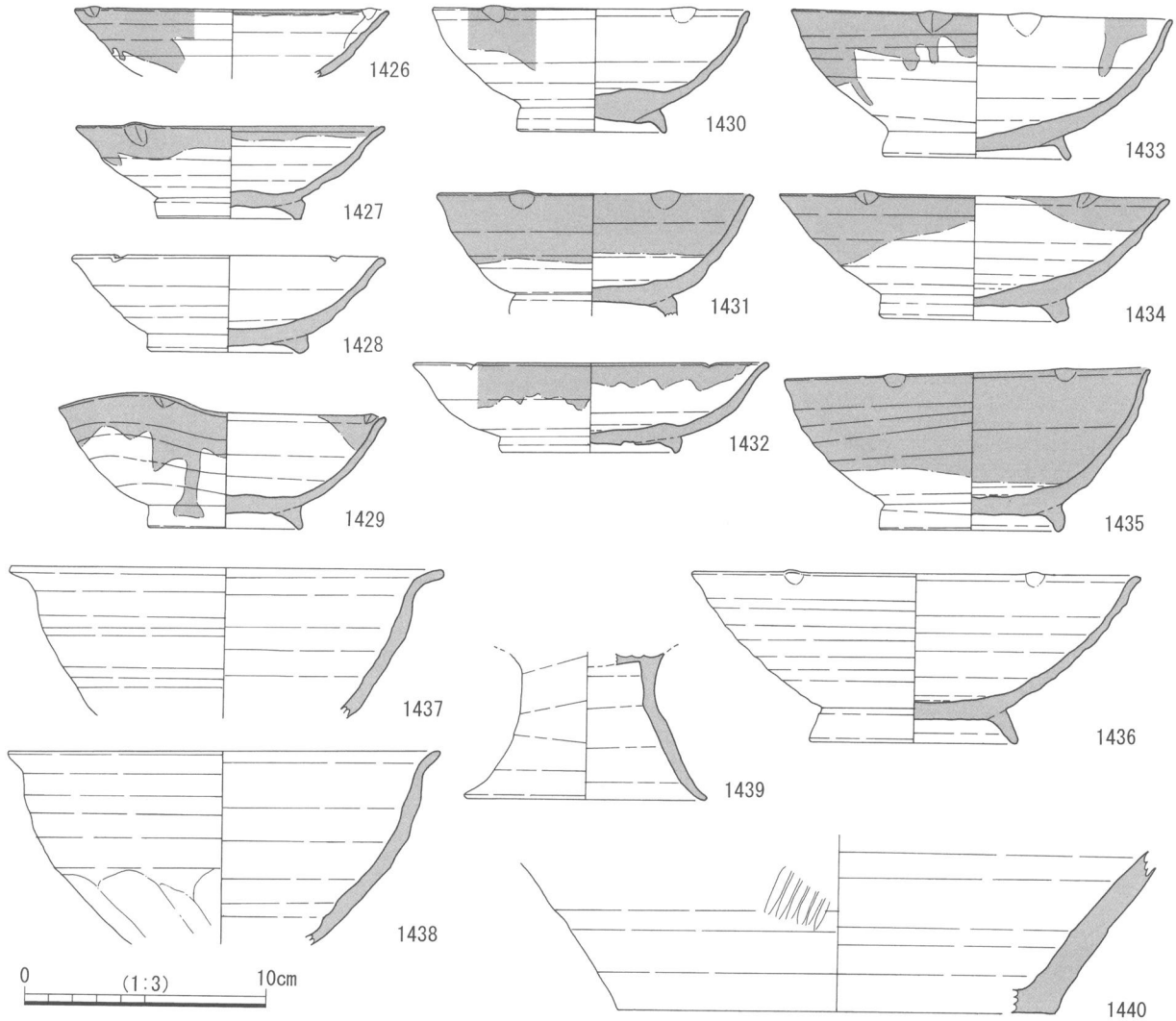
第381図　大屋敷５号窯出土遺物実測図③



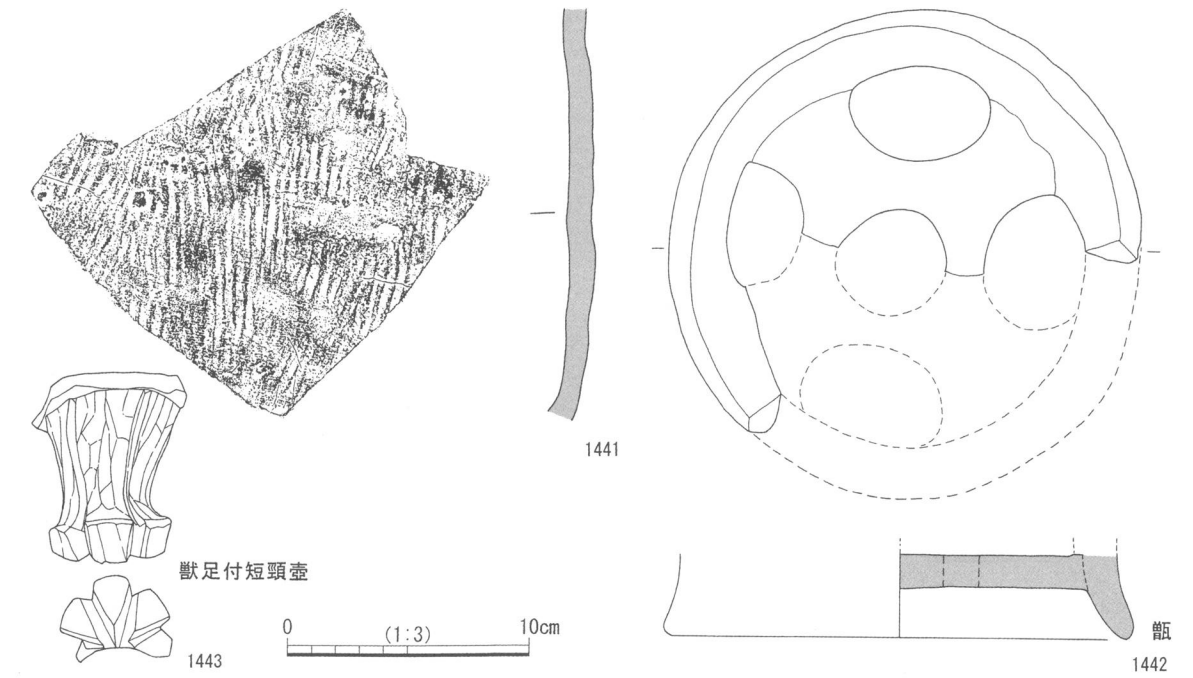
第382図　大屋敷5号窯出土遺物実測図④



第383図　大屋敷5号窯出土遺物実測図⑤



第384図　大屋敷５号窯出土遺物実測図⑥



第385図　大屋敷５号窯出土遺物実測図⑦（浜北市教委1989より）

碗Bは高台径7.5～8.0cmのものが最も多く、これを頂点に正規分布を示し、6.5～8.0cmの範囲に収まる。口径は15.0～16.0cmのものが最も多く、これを頂点に正規分布を示し、14.0～19.0cmの範囲に収まる。器高は4.0～7.0cmである。高台径は、6.5～8.5cmで、7.0～7.5cmを中心に正規分布する。

無台碗は、糸切り未調整で、形態は碗と同様である。口径は11.0～13.0cm、底径は4.5～6.0cm、器高は2.5～3.0cmをはかり、碗Aと比べて小型である。

大屋敷5号窯の碗類は、法量的にみると大屋敷1号窯とほぼ同様の傾向を示しており、形態的な類似性も高いことから、大屋敷1号窯とほぼ同時期の操業と考えることができる。

(3)大屋敷1・2号窯(第387図，第61表)

大屋敷1号窯あるいは2号窯の周辺で採集されたとされる灰釉陶器硯(1501，風字二面硯か？)、小型壺(1502)が出土している(浜北市教委1989)。

(4)大屋敷3・4号窯(第387図，第61表)

大屋敷3号窯あるいは4号窯に伴う灰釉陶器碗が1点(1503)確認されている。この碗は三日月高台であり、底部から外上方に立ち上がり、口縁端部は直線的であり、丸く仕上げられている。底部は糸切り未調整である。口径13.5cm、高台径5.5cm、器高3.7cmをはかる(浜北市教委1989)。

(5)麁玉中学校西側表面採集(・麁玉窯)採集資料(第386・387図，第61表)

麁玉中学校の西側で採集したとされる灰釉陶器が浜北市教育委員会に保管されている(1444～1490)。採集された灰釉陶器には、碗、無台碗、輪花碗、長頸壺、鉢がある。

古くより麁玉中学校北西側では灰釉陶器が採集されていることから、これらの灰釉陶器は大屋敷1号窯に伴うものと推測できる。

碗は三角高台で、高台径6.5～7.0cmが最も多く、それを頂点に正規分布を示す。口径は6.0～6.5cmが最も多く、5.5～8.0cmに収まる。器高は4.0～4.5cmが最も多く、3.0～5.0cmに収まる。高台径は6.0～6.5cmが最も多く、これを頂点に正規分布を示す。高台径は5.5～7.0cmの間にほぼ収まる。

なお、高台径6.5～8.0cmの碗は碗Bの可能性が高い。

無台碗は、口径4.5～6.0cm、器高2.0～3.5cm、底径4.5～6.0cmの範囲に収まる。

碗、無台碗ともに法量は大屋敷1号窯と同様の分布を示しており、形状が類似することから大屋敷1号窯に伴う遺物である証左となる。

(6)蛭沢池北側表面採集(第387図，第61表)

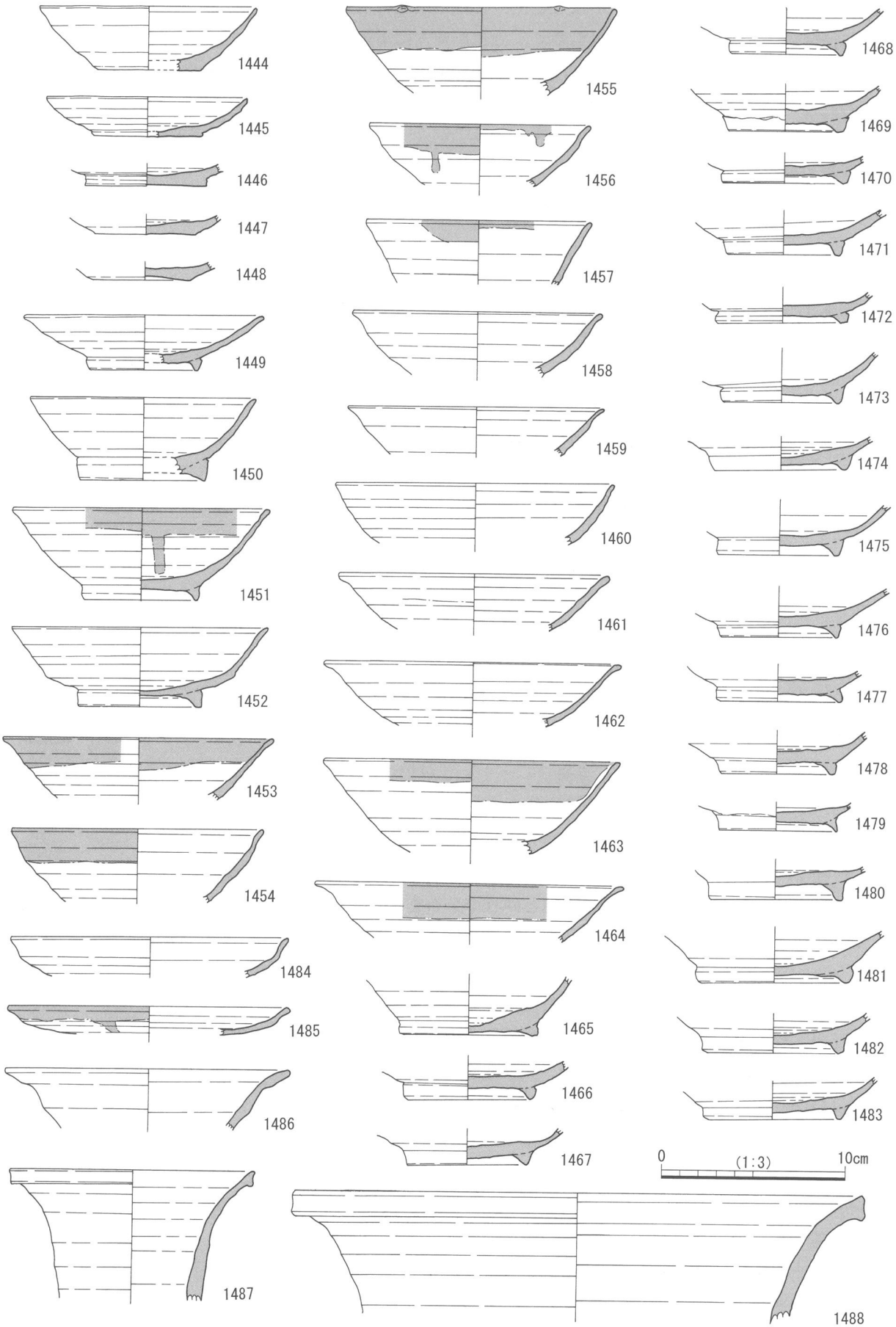
麁玉中学校の南西約500mの位置にある蛭沢池の北側で採集されたという遺物が保管されている。採集された灰釉陶器には碗、無台碗、壺、大型壺とともに窯道具のツクがある(1491～1499)。

碗(1491～1495)は、高台の低い三日月高台あるいは低い三角高台である。口縁部は底部から外上方に向かって直線的に伸びるもので、口縁部直下は強くナデられ、1492は口縁端部が外側に向かってつまみ出されている。

碗の法量は口径12.0cm(1491)、15.0cm(1492)があり、底部径6.0～7.0cmの範囲に収まる。

無台碗(1496)は、底径約4.5cmをはかる。

蛭沢池北側採集品は大屋敷2～5号窯の出土遺物と異なることから、この周辺に大屋敷2～5号窯以前の灰釉陶器を焼成した窯が存在する可能性も高い。また、窯道具ツクが出土しており、吉名6号窯と同時期の窯が存在する可能性もある。

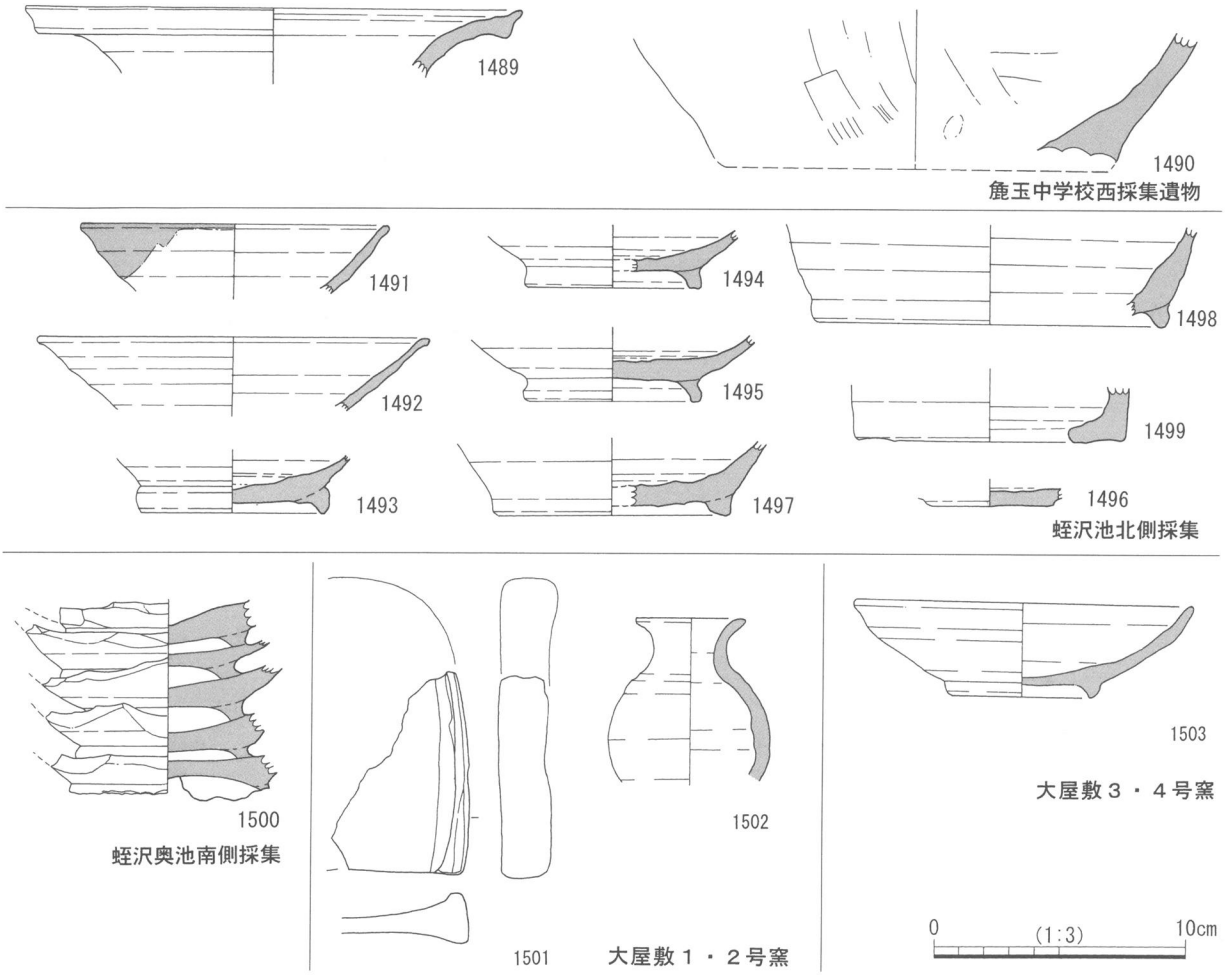


第386図　大屋敷古窯跡群（麁玉中学校西採集ほか）出土遺物実測図①

(7)蛭沢奥池南側採集(第387図，図版206，第61表)

国道362号バイパス道路工事に伴う蛭沢奥池南側の掘削工事において採集された、碗5枚が釉着した山茶碗(1500)である。山茶碗は碗が5段に釉着したもので、高台径は約6.0～7.0cm、高台高さ約6㎜で、高台は潰れた三角形を呈する。

この山茶碗が採集されたことにより蛭沢奥池周辺に未知の山茶碗窯が存在する可能性が高くなった。



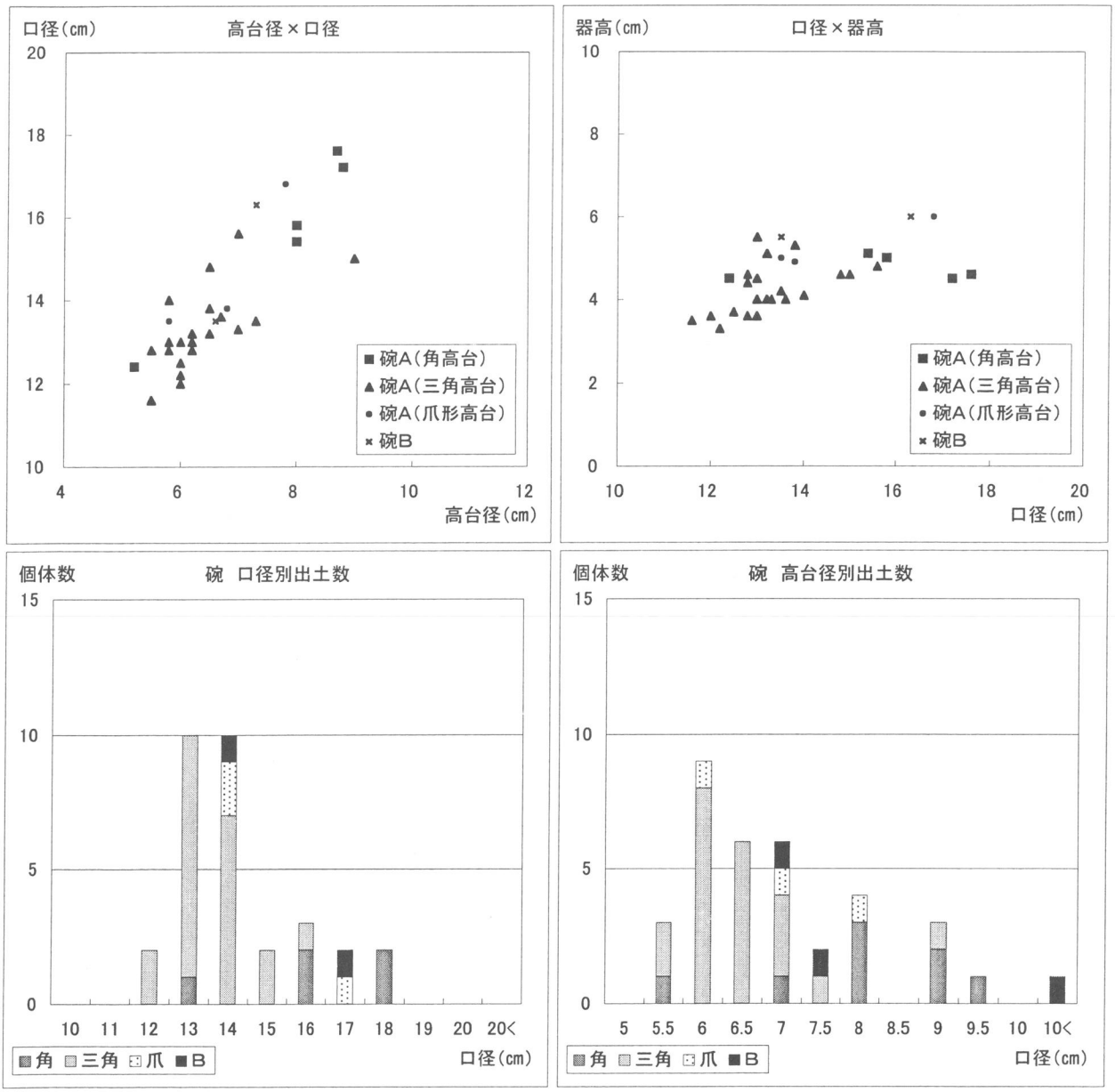
第387図　大屋敷古窯跡群(鹿玉中学校西採集ほか)出土遺物実測図②

2　吉名古窯跡群

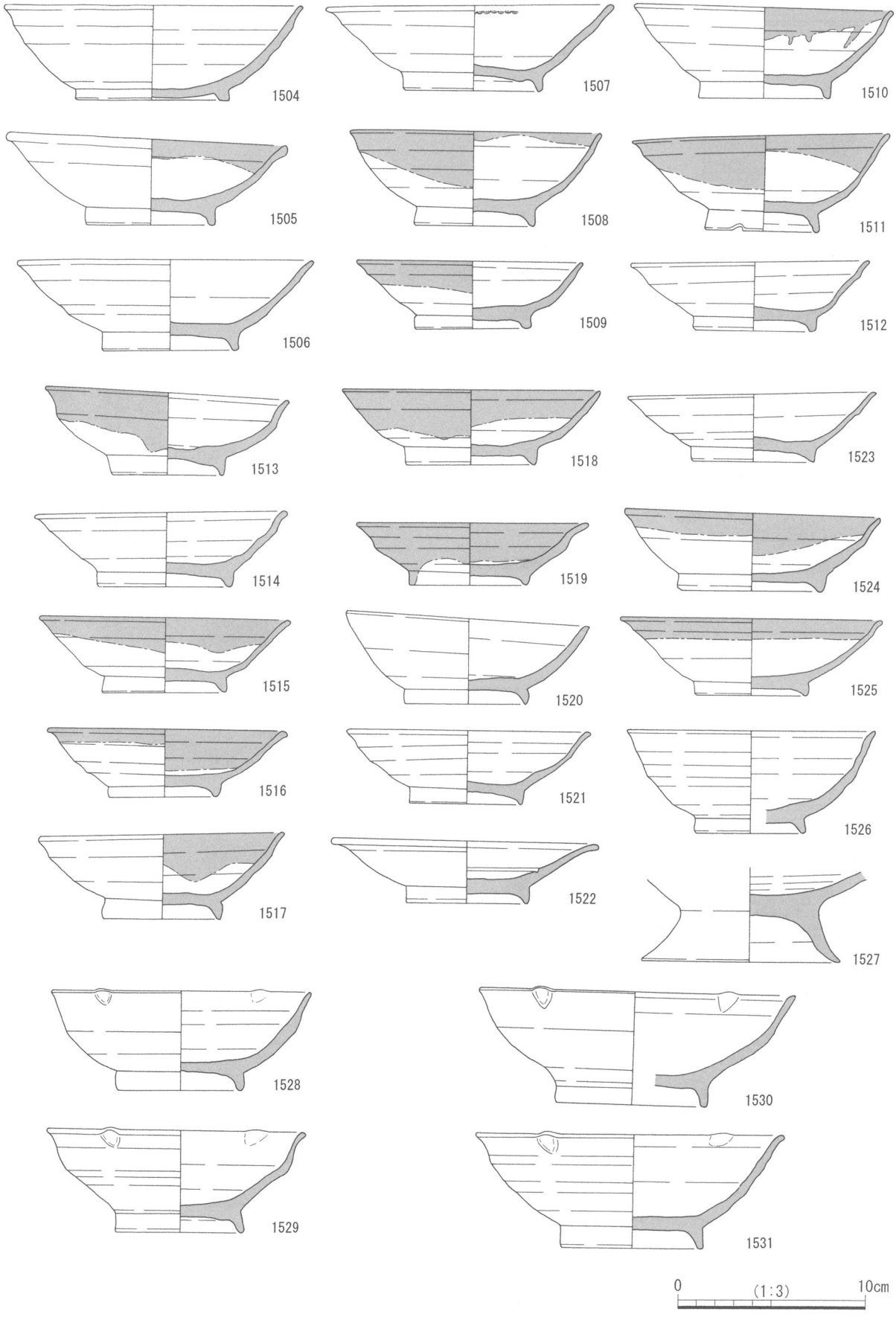
吉名古窯跡群は浜北市宮口吉名にある夜水沢池周辺の丘陵地に築窯されており、９基が確認されている。うち、吉名１・２号窯は1959(昭和34)年に静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部により発掘調査され(山村・平野1963)、吉名５・６号窯は1987・1988(昭和62・63)年浜北市営明神池運動公園の建設に伴い、浜北市教育委員会により大屋敷５号窯と共に発掘調査された。以下に、各窯の概要と出土した灰釉陶器の概要を示す。

(１)吉名５号窯(第388～392図)

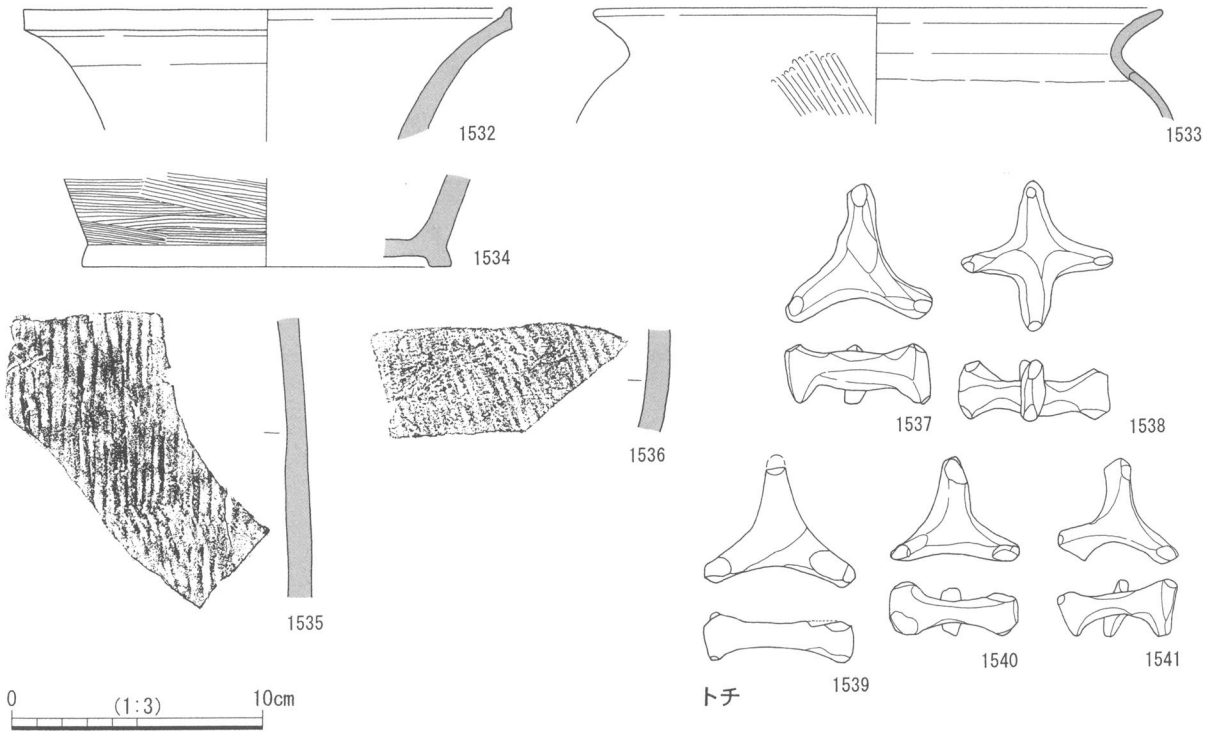
吉名５号窯からは灰釉陶器碗(1504～1521，1523～1526，1544～1549，1552，1571)、輪花碗(1528～1531)、皿(1522，1550・1551)、托(1527)、長頸壺(1532)、壺か鉢(1535・1536)、甕(1533)、窯道具の三叉トチ(1537，1539～1541，1553～1555)・十字トチ(1538)、平瓦(1543)、丸瓦(1542)が出土した。なお、吉名５号窯の灰原と６号窯の灰原は重複しており、以下に記述する角高台の碗・皿、トチは吉名６号窯に伴う蓋然性が高い。



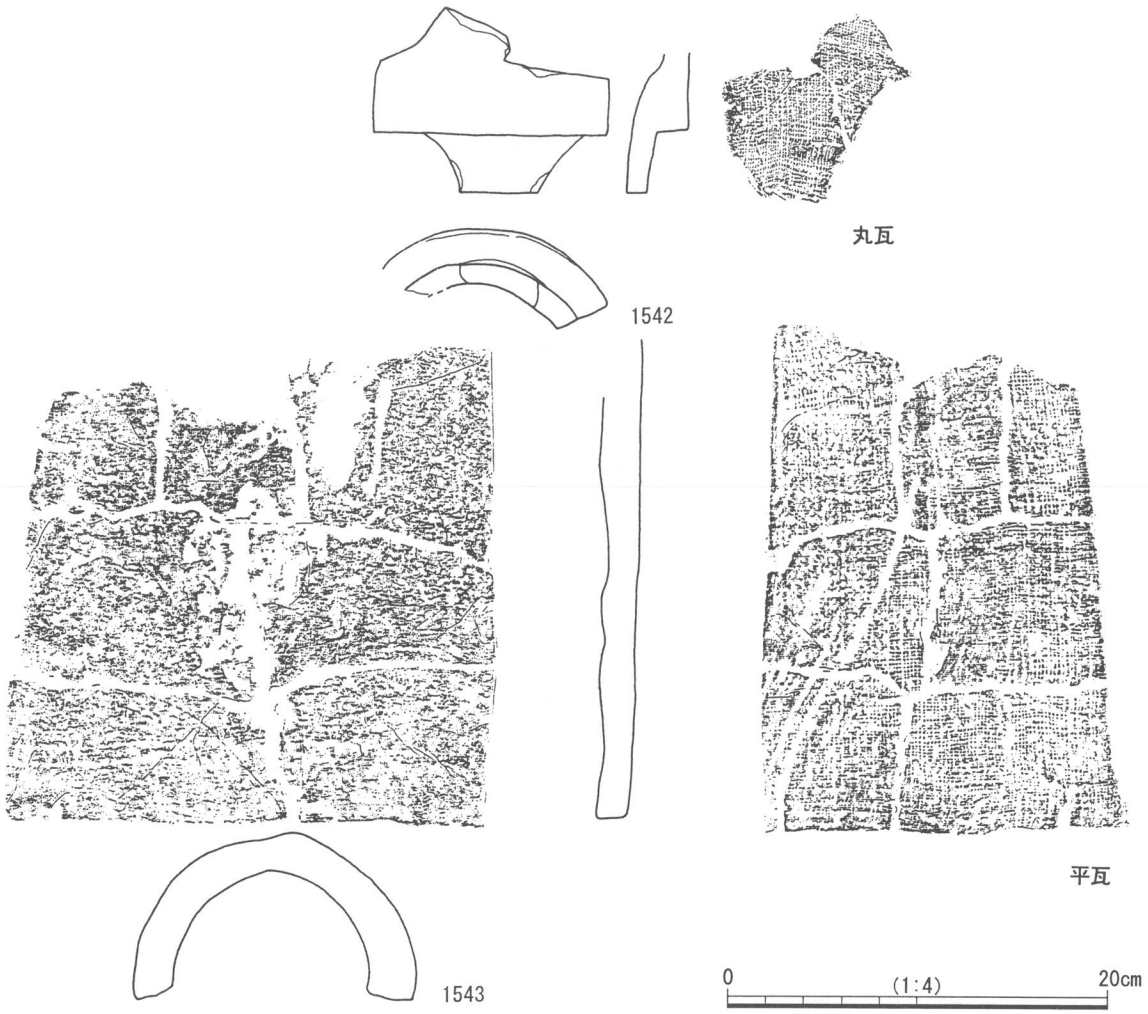
第388図　吉名５号窯出土碗法量図



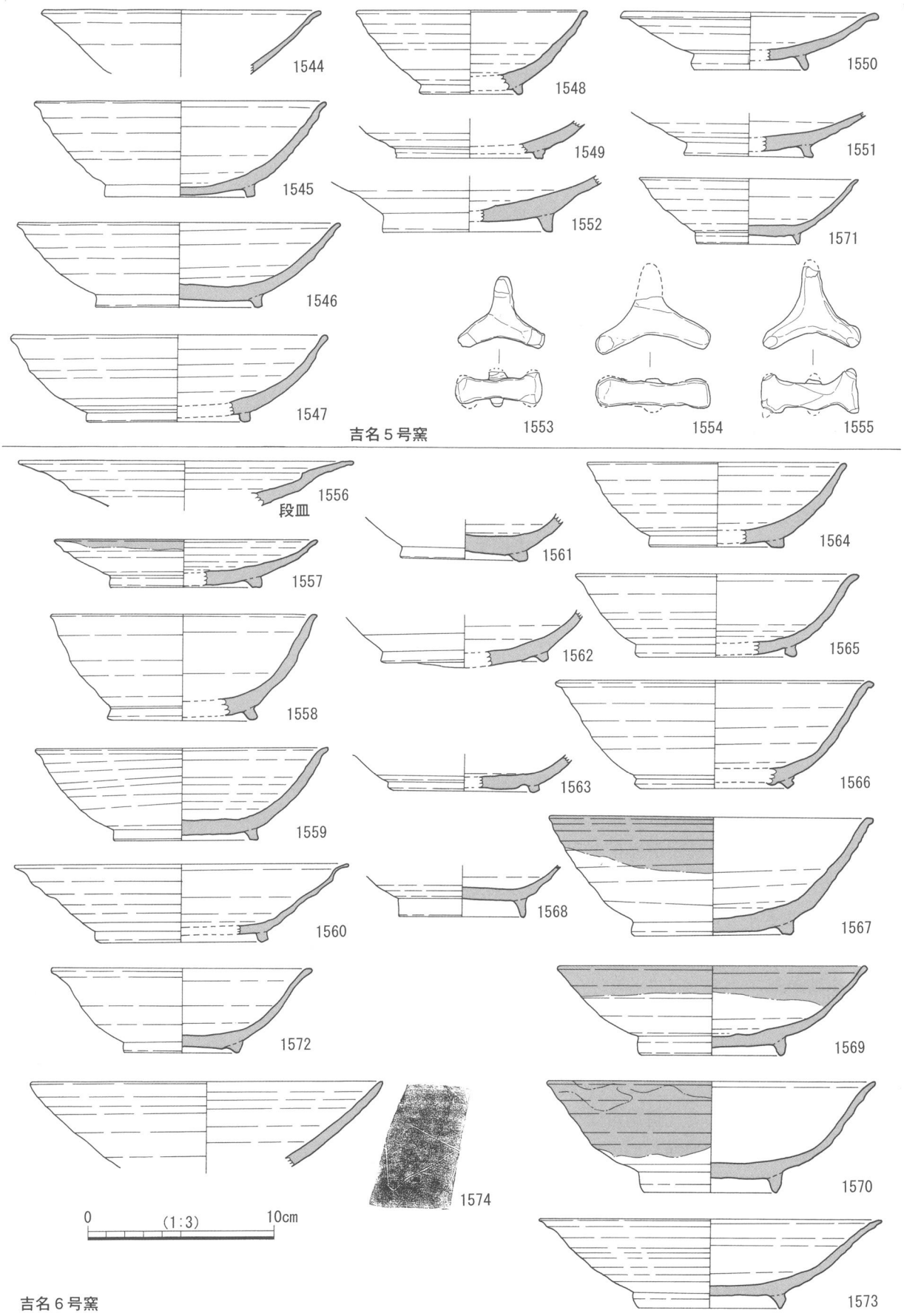
第389図　吉名５号窯出土遺物実測図①（浜北市教委1989より）



第390図　吉名５号窯出土遺物実測図②（浜北市教委1989より）



第391図　吉名５号窯出土遺物実測図③（浜北市教委1989より）



第392図　吉名５号窯出土遺物実測図④および吉名６号窯出土遺物実測図①

碗の高台は角高台、三角高台、爪形高台、爪形で高い高台(碗B)の4種が確認できる。

吉名5号窯出土碗は、高台径は6.0～6.5cmに大きな山があるが大きくなるにつれて減少するのではなく8.0～8.5cmのところにもう一度山が存在する。しかし、高台が4種類存在するため、それぞれでみると、角高台の碗(1504，1545～1548ほか)は、高台径7.0～9.0cm、口径15.5～17.5cm、器高4.5～5.0cmをはかる。

三角高台の碗(碗A，1507～1521，1523～1526，1571ほか)は高台径6.0～7.5cm、口径12.0～14.0cmの範囲にほぼ収まり、14.0cmを越えるのは2点のみである。器高は3.5～5.0cmをはかる。

爪形で高台が高いもの(碗B)は、輪花碗のみで口径16.3～16.8cm、器高6.0cm、高台径7.3～7.8cmをはかる。

したがって、角高台のものが大型であり、三角高台になると、口径、器高、高台径が小型化する傾向にある。また、角高台のものは、口縁端部を外側に引き出すが、三角高台のものは、口縁端部は直線的である。

皿は角高台(1551)、三日月高台(1550)、低い三日月高台(あるいは三角高台，1522)が出土しており、三日月高台の1550は、口縁端部を外側に向かって明瞭に引き出すが、低い三日月高台の1522は僅かに引き出すのみである。

1527は托の可能性があり、高台径10.0cm、高台高約3.0cmをはかる。

吉名5号窯製品のうち、角高台のものは隣接する吉名6号窯の製品が混在していると考えられている(浜北市教委1989)。三角高台・爪形高台の碗は大屋敷1・5号窯と同形態であり、法量も同様の傾向を示している。

(2)吉名6号窯(第392～397図)

吉名6号窯からは灰釉陶器碗(1558～1570，1572～1574，1577～1585，1588～1602)、皿(1557，1575・1576，1586・1587)、段皿(1556)、小型壺(1625)、長頸壺(1603・1604，1628)、短頸壺(1605・1626)、透かし入り脚付盤(1630)、手付瓶(1627)、甕か鉢(1631・1632)のほか窯道具の十字トチ(1609・1635)、三叉トチ(1610～1623，1633・1634)、コップ形ツク(1607・1608)などが出土している。

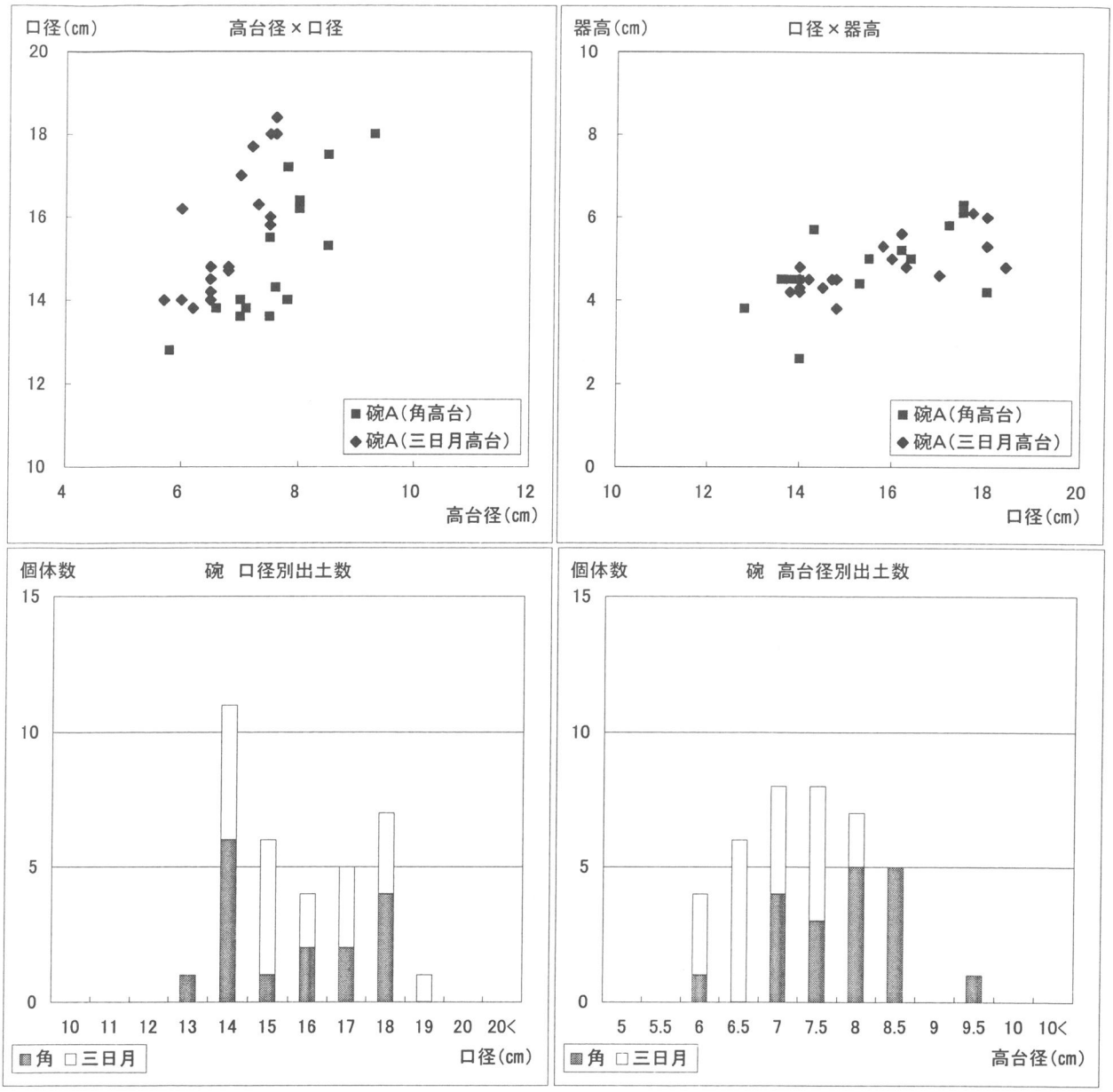
碗は角高台、三日月高台が存在する。高台の形ごとに法量をみると、角高台は高台径7.0～9.5cmの範囲に収まり、口径は13.0～17.5cmの範囲に収まり、14.0cm前後と16.5cm前後を頂点に二つの山を確認することができる。これにより、法量において大小に区分されていたことが判明し、大型は口径16.5～18.0cm、器高5.0～6.0cm、高台径7.0～9.0cmで、小型は口径14.0cm前後、器高4.0cm前後、底部径6.0～7.0cmをはかる。

三日月高台の碗は6.0～8.0cmの範囲に収まり、口径は14.0～18.0cmの範囲で、14.0～15.0cm前後と17.0～18.0cm前後の二つの山を確認することができ、角高台と同様、大小に作り分けされていたことが判明する。

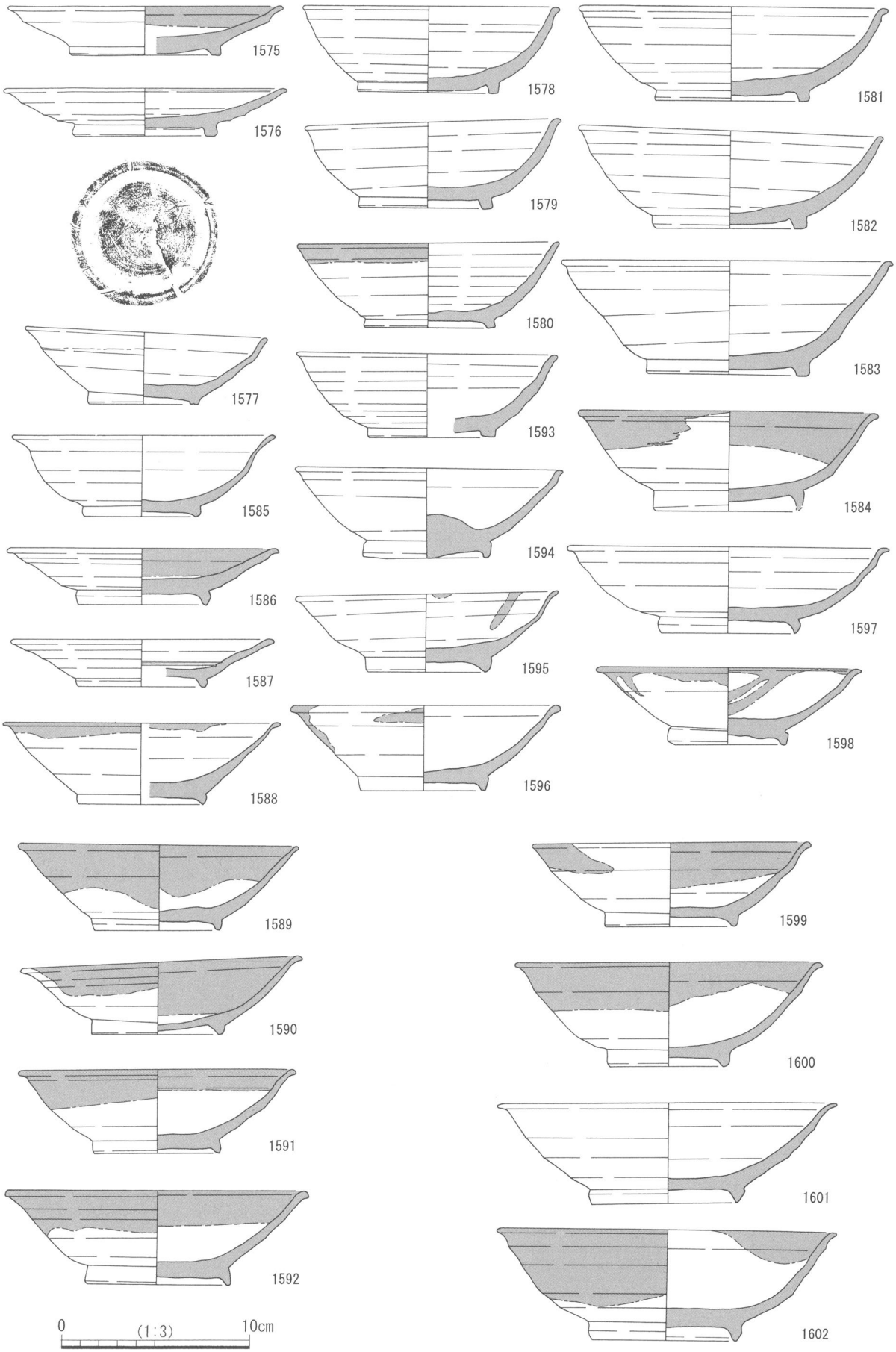
碗の底部調整に関して、角高台はヘラ削りを施すものが多く、三日月高台ではヘラ削りも確認できるが、ナデ調整のものが増加している。施釉方法は角高台、三日月高台ともに刷毛塗りが多い。

皿は角高台のもの(1575・1576)、三日月高台のもの(1586・1587)があり、ともに口縁端部は外側に引き出しているが、1587のみ底部から直線的にのび、丸く納められている。

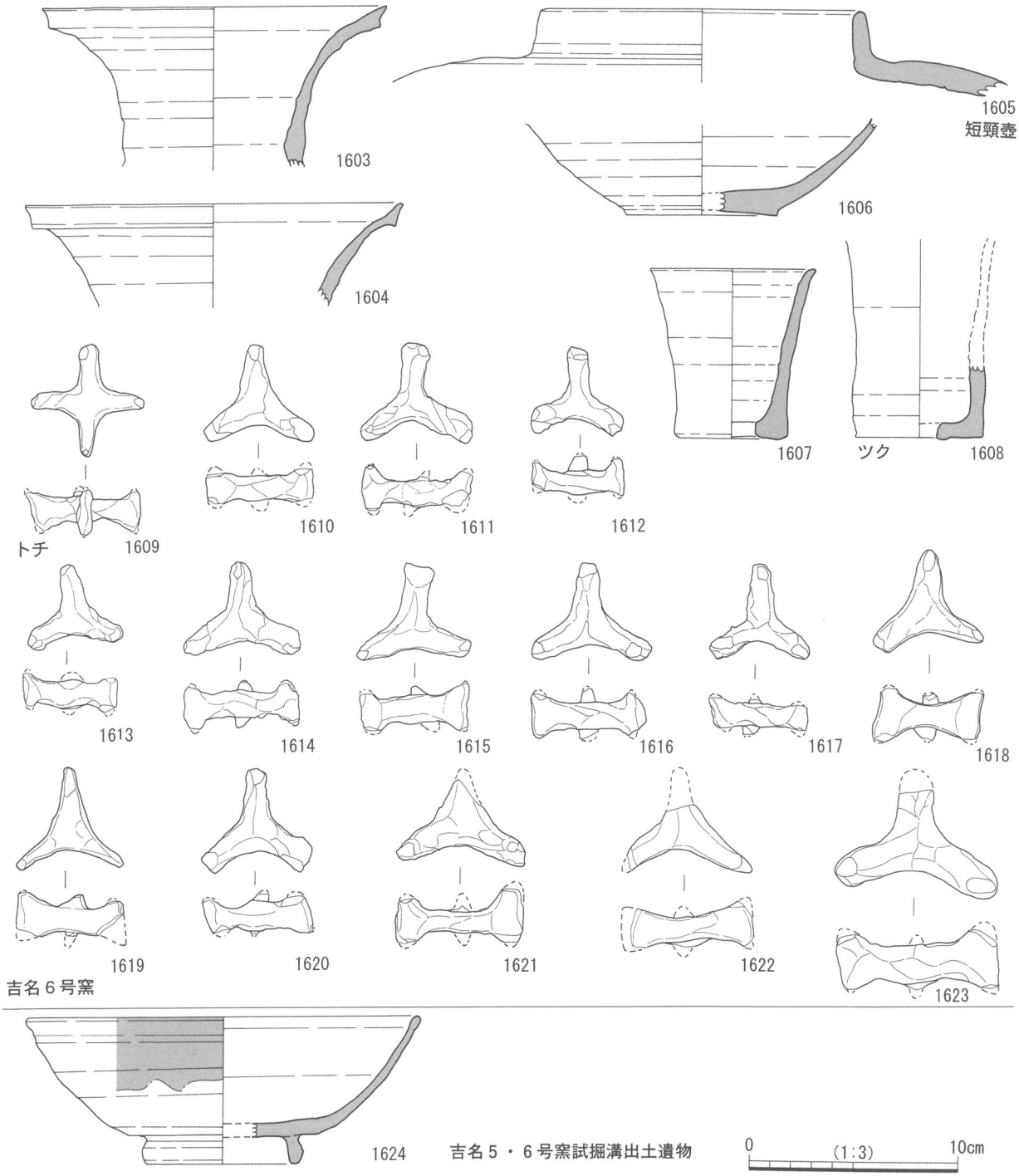
トチは長さ4.3～5.5cmの範囲に大部分が収まり、5.0cm前後が多く、1622が7.2cm、1623が11.5cmと大型である。高さは1.5～2.5cmで、1623のみ4.0cmをはかる。



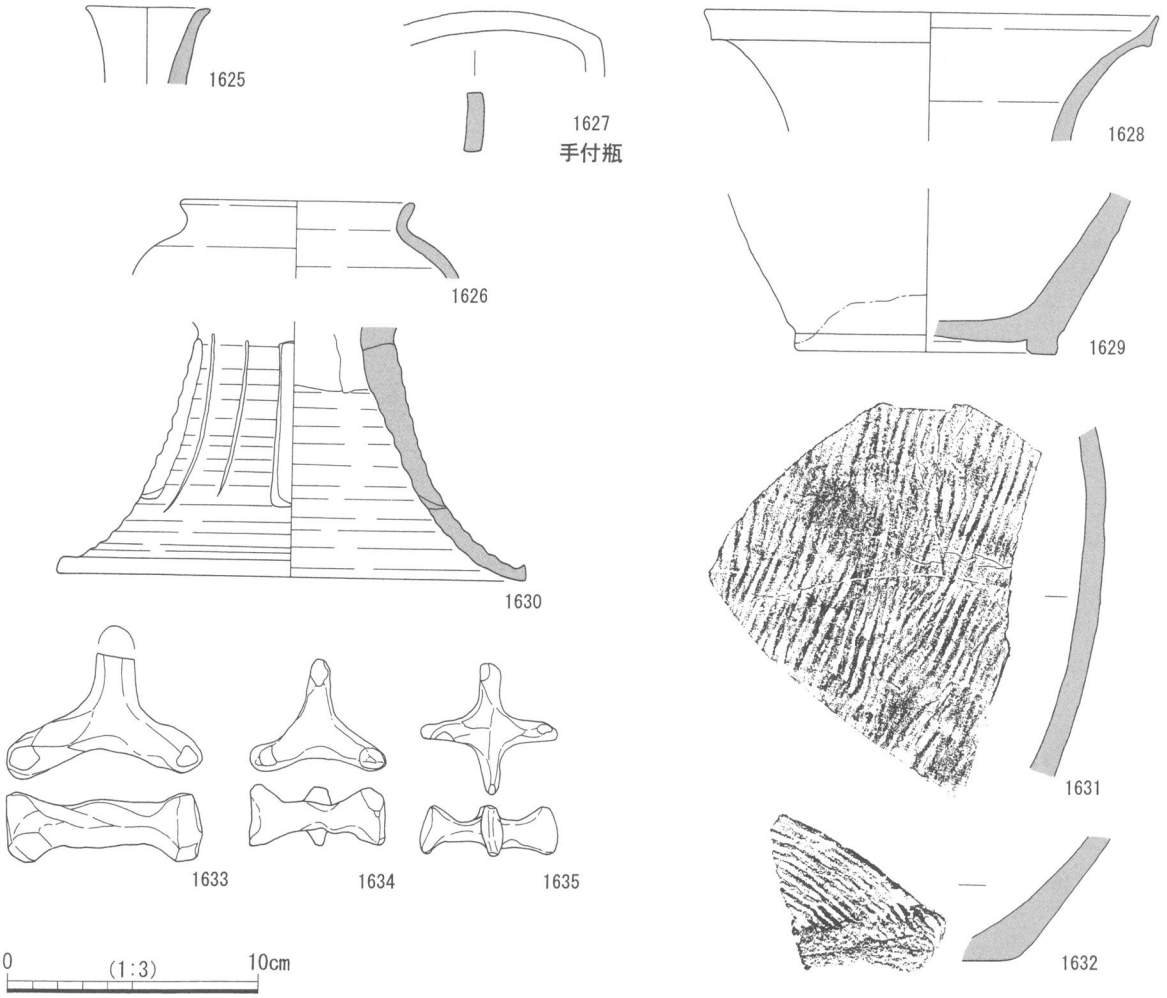
第393図　吉名6号窯出土碗法量図



第394図　吉名6号窯出土遺物実測図②（浜北市教委1989より）



第395図　吉名６号窯出土遺物実測図③



第396図　吉名6号窯出土遺物実測図④（浜北市教委1989より）

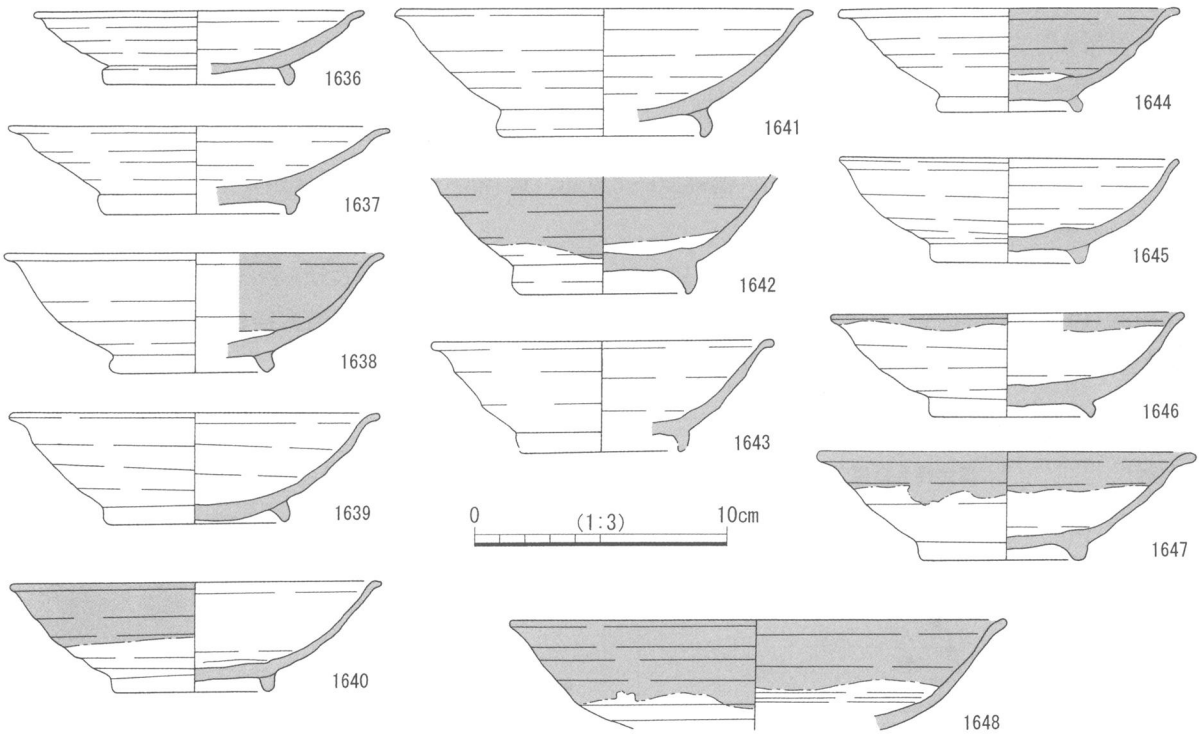
(3)吉名1・2号窯(第397図)

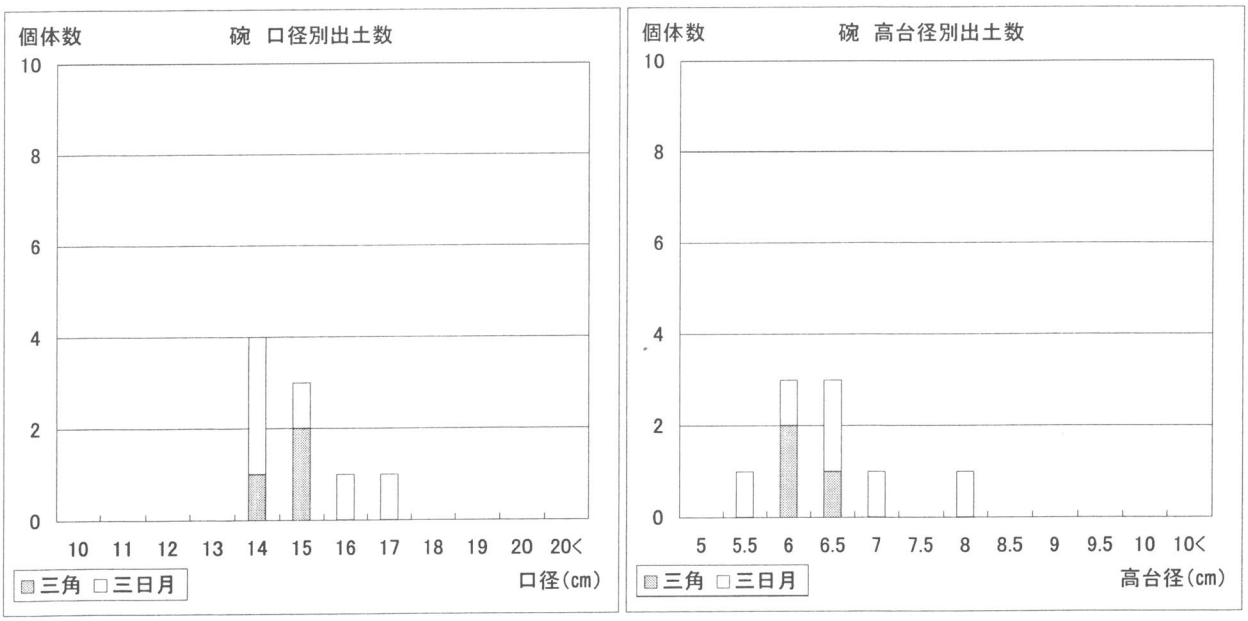
吉名1・2号窯出土とされる遺物が『明神池運動公園』に掲載されている(浜北市教委1989)。吉名1・2号窯は、昭和34(1959)年に静岡大学浜松分校歴史学研究部により調査が実施され、簡易な報告がなされている(静岡大学1959)。

報告された遺物(浜北市教委1989)は碗(1638～1648)と皿(1636・1637)であり、高台は三日月高台で、口縁端部は外側に引き出されている。

碗(1638～1647)の口径は、13.0～16.5cm、器高3.0～5.0cm、高台径5.5～8.0cmをはかる。碗(1648)は大型であり、口径19.6cmをはかる。

皿の口径は13.0cmと15.0cmで、器高は3.0cmと3.5cm、高台径7.0cmと7.2cmをはかる。





第397図　吉名1・2号窯出土遺物実測図(浜北市教委1989より)および碗法量図

（４）吉名１号窯（第398・399図）

吉名１号窯からは灰釉陶器碗（1649～1654，1659～1661，1664～1666，1669～1672）、耳皿（1673・1674）、皿（1656，1662，1667・1668）、無台碗（1657・1658，1663？）、小型壺（1675・1676）、長頸壺（1678）、蓋（1655・1679）、小型短頸壺（1677）、大型短頸壺（1680）、唾壺、円面硯、二面硯、瓦、不明大型土製品のほか、窯道具としてトチ、サヤが出土している（山村・平野1963，平野1992）。碗、耳皿、皿、無台碗、小型壺、長頸壺、蓋、小型短頸壺、大型短頸壺を『静岡県史』（平野1992）より転載した。

なお、１号窯からは内面に蓮華（1649など）や蝶（1650）が線刻された碗、蓋が出土している。

碗は、三日月高台、低い三日月高台のものが出土している。

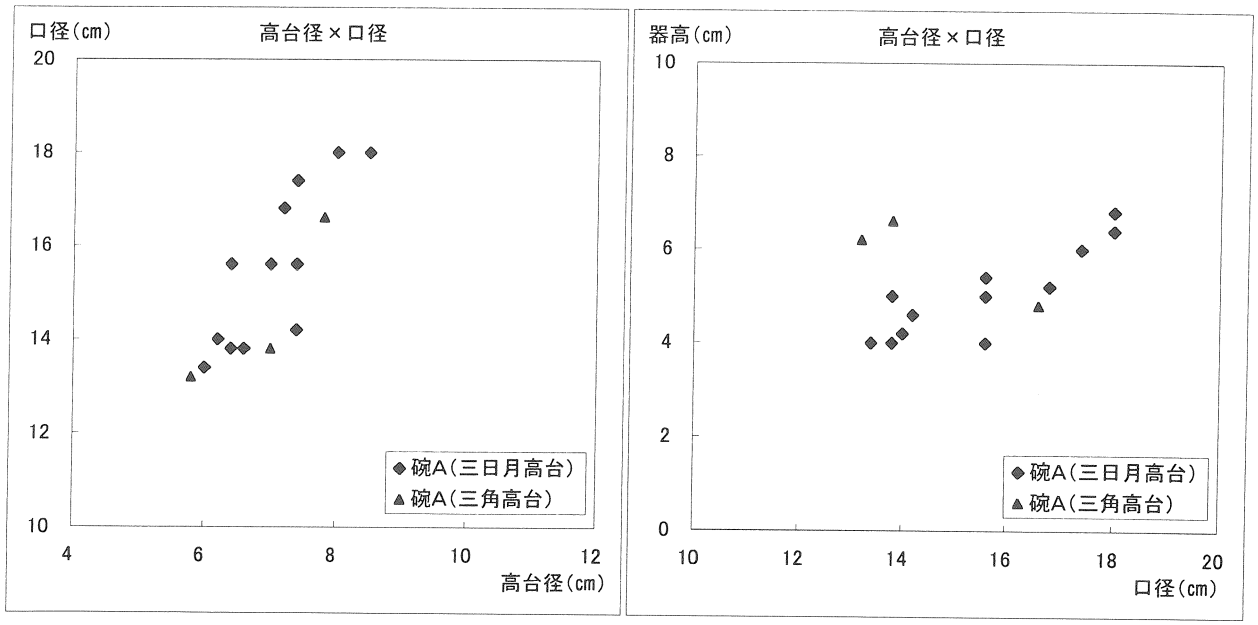
三日月高台は口径15.0cm以上、器高5.5～7.0cm、高台径7.0～9.0cmと、口径14.0cm前後、高台径6.0cm前後の大小が確認できる。口縁端部を外側に向かって水平に引き出すものが多い。三日月高台の法量は吉名６号窯出土の三日月高台碗の法量とほぼ同様であり、同時期の生産と考えることができる。

一方、低い三日月高台（三角高台）は口径13.0～14.0cm、器高6.0～7.0cm、高台径6.0～7.0cmと、やや大型の口径16.0～17.0cmをはかるものがある。

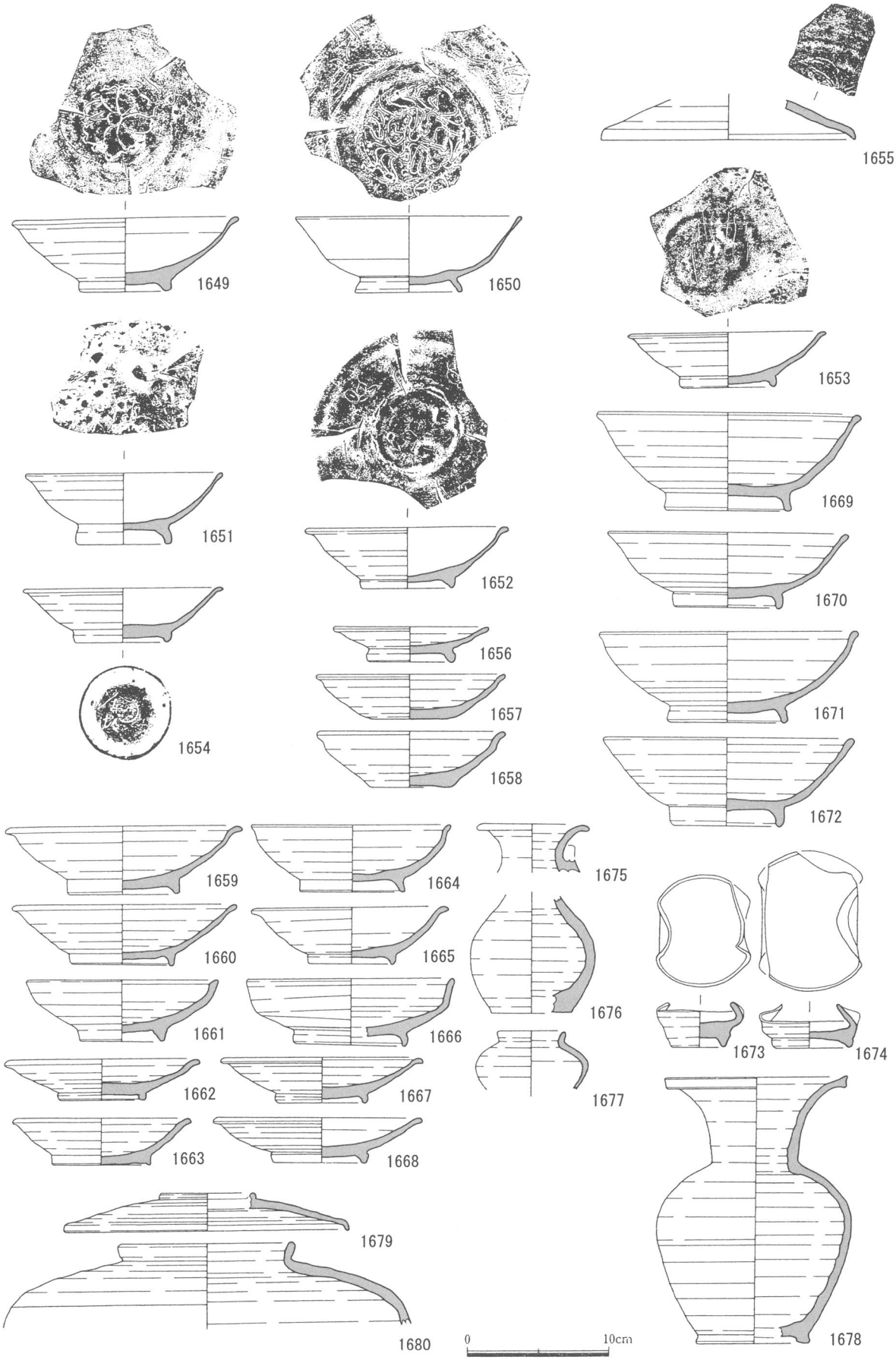
無台碗（1657・1658）は、口径13.0cm、器高3.0～3.8cm、底径5.0～5.4cmをはかり、口縁部直下を強く撫でて、折碗状の段にしている。

皿（1656，1662，1667・1668）は口径10.6～14.4cm、器高2.3～3.2cm、高台径5.8～6.2cmをはかる。

長頸壺（1678）は角高台を有するもので、口径12.0cm、器高18.6cm、胴部最大径13.5cm、高台径7.6cmをはかる。口径からみると、大屋敷１号窯の小型に近い大きさである。



第398図　吉名１号窯出土碗法量図



第399図　吉名１号窯出土灰釉陶器実測図（静岡県1992より）

3　新池古窯跡群

新池古窯跡群は浜北市宮口に所在する新池東側の丘陵地の斜面に存在しており、灰原が新池に水没しているため基数等は不明である。碗・瓦等が出土している（浜北市教委1989）。図示されていないため、様相は不明である。

4　譲栄古窯跡群（第400・404図）

譲栄古窯跡群は、浜北市宮口譲栄の三方原台地の東縁に８基が確認されており、碗、皿、長頸壺、甕が採集されている。うち１・５号窯周辺で表面採集された遺物が報告されている（浜北市教委1989）。

譲栄１号窯出土遺物が灰釉陶器碗（1681）、譲栄５号窯出土遺物が灰釉陶器碗（1682・1683）である。前者は三角高台で口径12.3cm、高台径6.5cm、器高4.5cm をはかる。譲栄５号窯出土の1683は三角高台で口径14.5cm、高台径6.0cm、器高4.2cm をはかる。1682は爪形の高い高台で、高台径5.8cm をはかる。

5　梶池古窯跡群（第402・404図）

梶池古窯跡群は別名「天神山窯」と呼称されており（静岡大学1958）、３基確認されている。山茶碗、小碗、輪花碗、壺、小壺、甕が採集されている。

梶池古窯跡群から山茶碗４点（1696～1699）、小碗３点（1693～1695）が報告されている。碗と小碗の組み合わせである。

碗（1696・1697）は潰れた三角高台で、高台先端には籾痕が残存する。口径16.0cm、器高5.4cm、高台径8.0cm をはかる。輪花碗（1698・1699）は碗よりもやや大型で、口径17.0～17.5cm、器高5.0cm、高台径8.0cm をはかる。

小碗（1693～1695）は、潰れた三角高台で口径8.8～9.6cm、器高2.7～2.9cm、高台径4.2～4.5cm をはかる。後述する土取古窯跡群出土のものよりやや小型である。

6　土取古窯跡群（第401・404図）

土取古窯跡群は別称「森山窯」（静岡大学1958）とされ、浜北市宮口土取の丘陵地の斜面に位置しており、２基が確認されている。小碗、山茶碗、壺が出土している。

山茶碗・輪花碗は三角高台（1689・1690）、潰れた三角高台（1691）があり、後者に籾殻痕が残る。底部は糸切り未調整である。山茶碗は口径16.0～16.4cm、器高5.0～5.5cm、高台径6.6～7.0cm をはかる。輪花碗は、口径20.7cm、器高7.0と大型であり、高台径7.8cm をはかる。

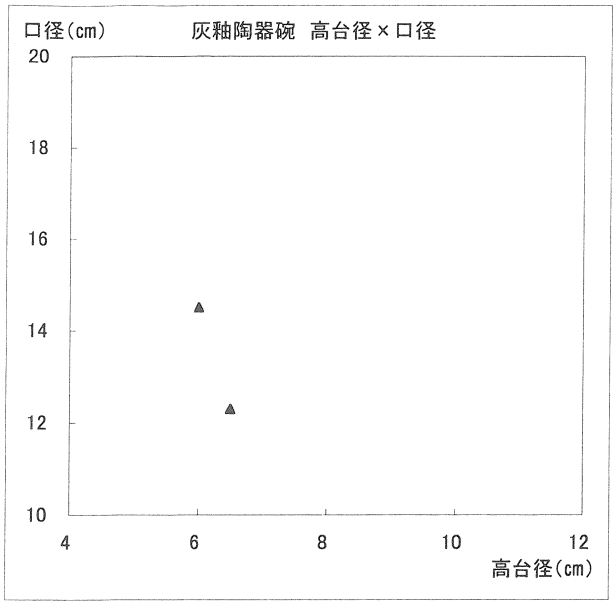
小碗・輪花小碗（1684～1688）は三角高台で、底部は糸切り後ナデ調整されている。口径9.3～11.0cm、器高3.0～4.0cm、高台径4.5～5.5cm をはかる。

壺（1692）は口径13.3cm、胴部最大径22.0cm をはかる。肩部に「山さほ」とヘラ書きされている。

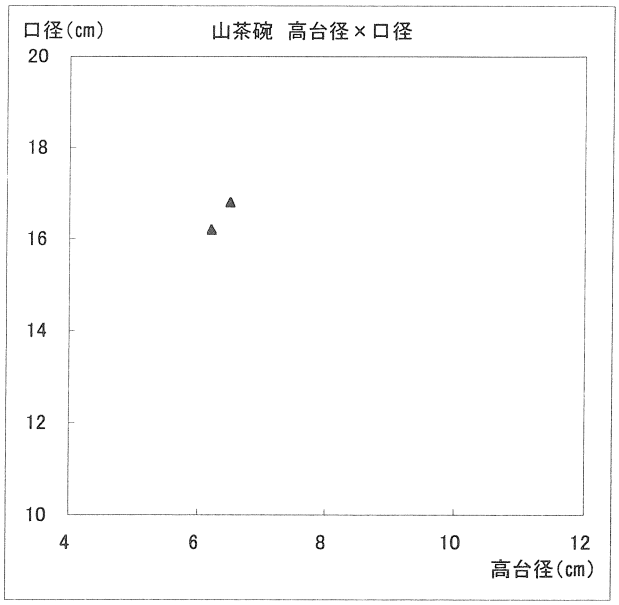
7　西ノ谷古窯跡（第403・404図）

西ノ谷古窯跡は浜北市宮口大屋敷と尾野の境にある北麓丘陵の侵食谷（西ノ谷）の西側斜面に位置しており、基数は明確ではない。山茶碗が採集されており、３点（1700～1702）が報告されている（浜北市教委1989）。

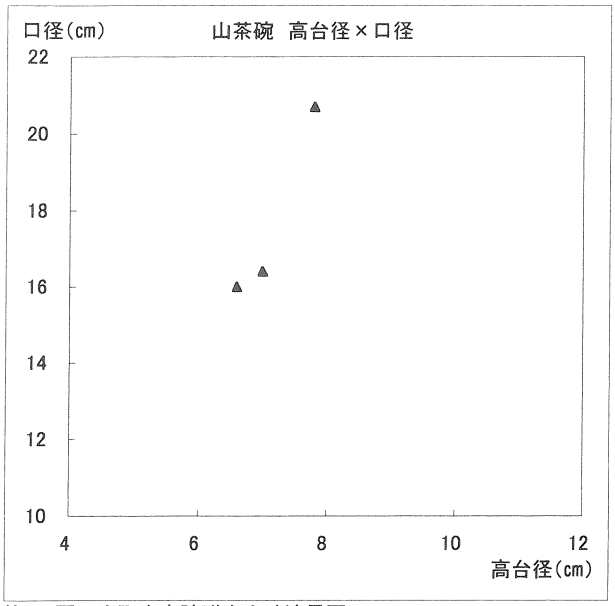
高台端部には籾殻痕が確認でき、高台は低く潰れた三角形を呈している。口径16.2～16.8cm、器高5.4～5.6cm、高台径6.2～6.5cm をはかる。



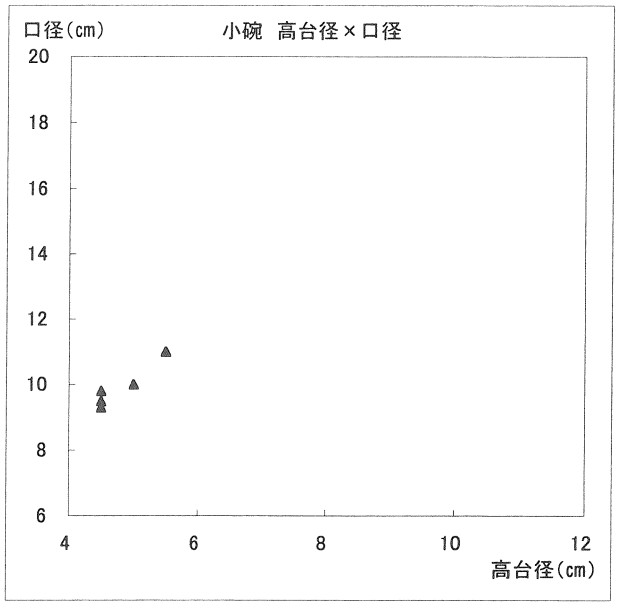
第400図　譲栄古窯跡群出土碗法量図

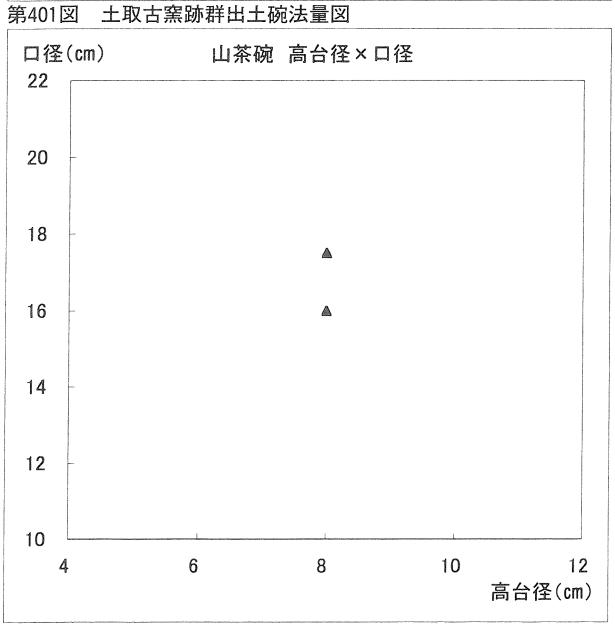


第403図　西ノ谷古窯跡出土碗法量図

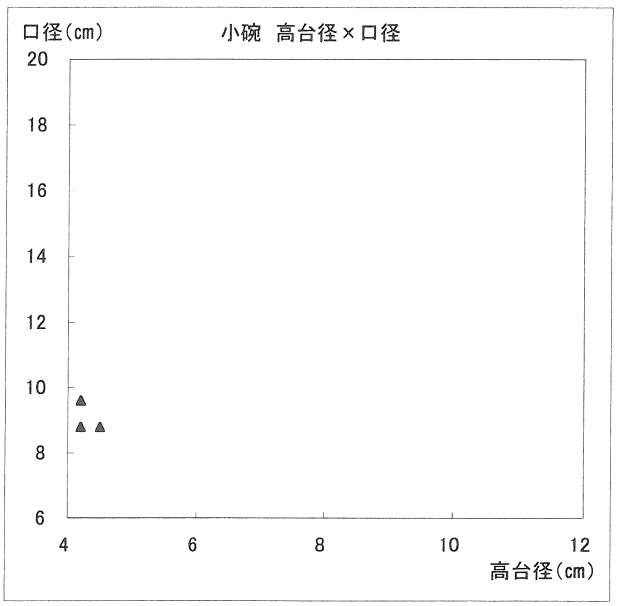


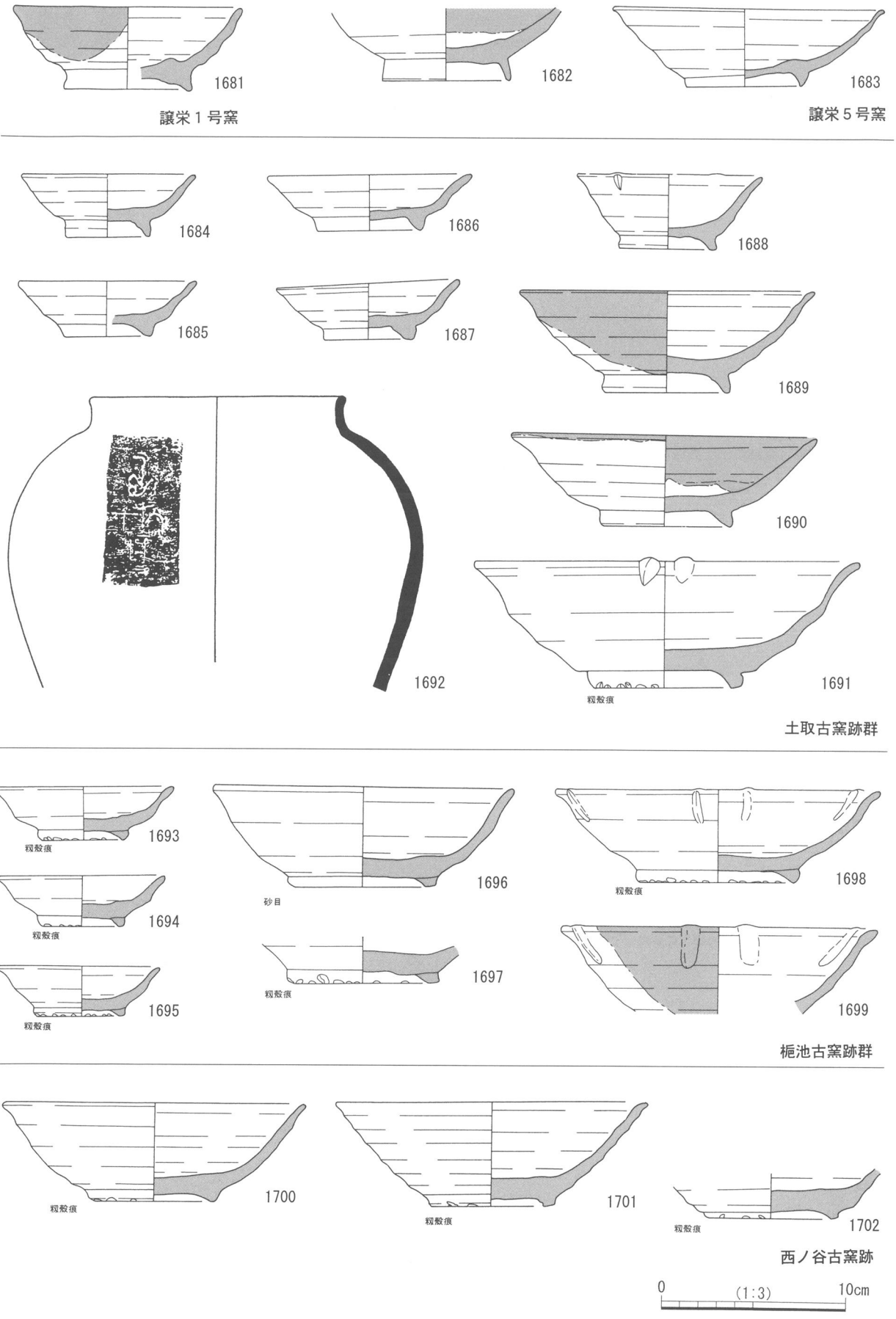
第401図　土取古窯跡群出土碗法量図





第402図　梶池古窯跡群出土碗法量図





第404図　譲栄古窯跡群・土取古窯跡群ほか出土遺物実測図(浜北市教委1989より)

第61表　宮口古窯跡群出土灰釉陶器・山茶器観察表

番号	出土窯	挿図	種類	器種	口径(幅)	器高	底部径	高台高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面底部	備考	報告書番号
1230	大屋敷６号	375	瓦	鬼瓦					黒灰	良好	密					
1231	大屋敷６号	376	山茶碗	碗					灰黄	良好	密					
1232	大屋敷６号	376	山茶碗	碗					灰黄	良好	密					
1233	大屋敷６号	376	山茶碗	碗		(2.4)	6.7	0.5	灰黄	良好	密		不明	静止ナデ	籾痕	
1234	大屋敷６号	376	山茶碗	碗		(2.3)	7.9	0.8	灰黄	良好	密		ナデ	未調整	籾痕	
1235	大屋敷６号	376	山茶碗	碗		(2.9)	7.3	0.7	灰黄	良好	密		ナデ	静止ナデ	籾痕	
1236	大屋敷６号	376	山茶碗	山皿	9.0	2.3	3.8		灰黄	良好	密		未調整	未調整		
1237	大屋敷６号	376	山茶碗	山皿	8.2	2.3	4.2		灰白	良好	密		未調整			
1238	大屋敷６号	376	山茶碗？	壺？					黒灰	良好	密					
1239	大屋敷６号	376	瓦	平瓦					黒灰	良好	密					
1240	大屋敷６号	376	焼台						黒灰	良好	粗					
1241	大屋敷６号	376	焼台						黒灰	良好	粗					
1242	大屋敷６号	376	焼台						黒灰	良好	粗					
1243	大屋敷６号	376	焼台						黒灰	良好	粗					
1244	大屋敷６号	376	焼台						黒灰	良好	粗					
1245	大屋敷６号	377	焼台						黒灰	良好	粗					
1246	大屋敷６号	377	焼台						黒灰	良好	粗					
1247	大屋敷６号	377	焼台						黒灰	良好	粗					
1248	大屋敷６号	377	焼台						黒灰	良好	粗					
1249	大屋敷６号	377	焼台						黒灰	良好	粗					
1250	大屋敷５号	379	灰釉	無台碗	12.0	2.5	5.1									82
1251	大屋敷５号	379	灰釉	無台碗	13.0	2.7	6.0									84
1252	大屋敷５号	379	灰釉	無台碗	12.0	3.5	5.4									100
1253	大屋敷５号	379	灰釉	碗	12.4	4.0	5.6	0.5					ナデ			94
1254	大屋敷５号	379	灰釉	碗	12.0	4.0	6.0	0.4					未調整			99
1255	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.0	3.4	6.5	0.5				漬掛	未調整			104
1256	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.0	4.0	6.0	0.7					ナデ			98
1257	大屋敷５号	379	灰釉	碗	11.8	3.3	5.5	0.7				刷毛	未調整			102
1258	大屋敷５号	379	灰釉	碗	12.5	4.0	6.0	0.8					ナデ			90
1259	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.0	4.5	6.5	0.8					ナデ			86
1260	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.0	4.5	5.0	1.0					ナデ			88
1261	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.3	3.8	6.7	0.6								112
1262	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.2	4.1	6.0	0.9				漬掛	ナデ			110
1263	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.8	4.5	6.7	0.8				刷毛	未調整			106
1264	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.6	4.1	6.4	0.9				漬掛	未調整			105
1265	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.1	4.3	6.8	0.6				漬掛	未調整			103
1266	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.6	3.7	6.0	0.9					ナデ			92
1267	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.8	4.0	6.5	0.6				刷毛	ナデ			113
1268	大屋敷５号	379	灰釉	碗	12.7	4.4	6.3	0.8				漬掛	ナデ			111
1269	大屋敷５号	379	灰釉	碗	14.0	4.8	6.5	0.9					ナデ			83
1270	大屋敷５号	379	灰釉	碗	13.0	5.4	6.4	0.9				漬掛	未調整			101
1271	大屋敷５号	379	灰釉	碗	15.4	6.1	6.5	0.9					ナデ			97
1272	大屋敷５号	379	灰釉	碗	15.5	7.3	6.1	1.2				漬掛	ナデ			109
1273	大屋敷５号	379	灰釉	碗	15.4	5.6	7.5	0.8					ナデ			93
1274	大屋敷５号	379	灰釉	碗	16.6	4.0	7.5	1.1					ナデ			96
1275	大屋敷５号	379	灰釉	碗	16.5	5.5	7.0	1.2				刷毛	未調整			107
1276	大屋敷５号	379	灰釉	輪花碗	13.0	4.6	6.6	0.9					ナデ			91
1277	大屋敷５号	379	灰釉	輪花碗	13.4	5.0	6.0	0.9					未調整			87
1278	大屋敷５号	379	灰釉	輪花碗？	12.5	3.4	5.7	0.8					未調整			85
1279	大屋敷５号	379	灰釉	輪花碗	13.5	5.2	6.8	0.8					未調整			89
1280	大屋敷５号	379	灰釉	輪花碗	15.0	5.5	7.3	1.1				漬掛	ナデ			108
1281	大屋敷５号	379	灰釉	碗			8.0	1.2					ナデ			
1282	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.6	3.7	6.5	0.8	灰黄	良好	密					
1283	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.6	4.0	6.8	0.7	淡灰	良好	密					
1284	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.5	4.1	7.0	0.6	灰	良好	密					
1285	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.2	4.0	6.2	0.5	白灰褐	良好	密					
1286	大屋敷５号	380	灰釉	碗	12.7	4.2	6.4	0.5	暗灰黄	不良	粗					
1287	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.5	4.5	6.7	0.8	灰白	良好	密					
1288	大屋敷５号	380	灰釉	碗	14.0	4.3	7.5	0.8	灰白	良好	密					
1289	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.9	3.7	6.4	0.8	灰黄	良好	密					
1290	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.5	4.2	6.7	0.8	灰白	良好	密					
1291	大屋敷５号	380	灰釉	碗			5.8	0.9	灰黄	不良	粗					
1292	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.4				灰白	良好	密					
1293	大屋敷５号	380	灰釉	碗	12.2	3.9	6.3	0.6	淡灰	不良	密					
1294	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.7	4.5	6.2	0.7	灰白	良好	密					
1295	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.0	3.7	5.5	0.6	淡灰	良好	密					
1296	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.1	4.6	6.6	0.8	黄灰	良好	粗					
1297	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.8	4.0	6.7	0.7	浅黄	良好	密					
1298	大屋敷５号	380	灰釉	碗	12.8	4.2	6.3	0.5	灰褐	良好	密					
1299	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.3	4.1	5.9	0.6	淡黄褐	不良	密					
1300	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.2	4.2	6.3	0.5	暗灰黄	良好	密					
1301	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.2				灰白	良好	粗					
1302	大屋敷５号	380	灰釉	碗	12.3	3.6	6.3	0.7	灰	良好	密					
1303	大屋敷５号	380	灰釉	碗	12.3	3.8	5.0	0.6	黄褐	不良	粗					
1304	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.0	3.9	6.7	0.7	灰白	良好	密					
1305	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.5	4.2	6.0	0.8	暗灰黄	不良	密					
1306	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.2	3.8	6.7	1.0	灰褐	良好	粗					
1307	大屋敷５号	380	灰釉	碗	13.5	4.1	6.2	0.7	灰黄	良好	密					

番号	出土窯	挿図	種類	器種	口径(幅)	器高	底部径	高台高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面底部	備考	報告書番号
1308	大屋敷5号	380	灰釉	碗	13.1	4.8	6.4	0.8	灰白	不良	粗					
1309	大屋敷5号	380	灰釉	碗	13.8	3.3	6.4	0.7	暗灰黄	良好	粗					
1310	大屋敷5号	380	灰釉	碗			7.0	0.9	灰白	良好	密					
1311	大屋敷5号	380	灰釉	碗			6.2	0.7	灰褐	不良	粗					
1312	大屋敷5号	380	灰釉	碗			7.4	0.6	灰黄	不良	粗					
1313	大屋敷5号	380	灰釉	碗			6.8	0.7	灰白	良好	密					
1314	大屋敷5号	380	灰釉	碗			6.8	0.8	灰白	良好	密					
1315	大屋敷5号	380	灰釉	碗			5.3	0.3	灰黄	良好	密					
1316	大屋敷5号	380	灰釉	碗			6.5	0.7	暗灰黄	良好	密					
1317	大屋敷5号	380	灰釉	碗			6.8	1.0	灰黄	不良	粗					
1318	大屋敷5号	380	灰釉	碗			6.3	0.7	灰白	良好	密					
1319	大屋敷5号	380	灰釉	碗			6.0	0.8	灰黄褐	良好	密					
1320	大屋敷5号	380	灰釉	碗			5.7	0.7	灰白	良好	密					
1321	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.8	4.4	6.1	0.7	灰白	良好	密					
1322	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.8	4.6	6.8	0.9	灰白	良好	密					
1323	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.0	4.6	6.8	0.9	黄灰	良好	密					
1324	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.9	4.5	6.8	0.8	暗灰黄	良好	密					
1325	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.4	4.8	6.0	0.9	灰褐	良好	粗					
1326	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.9				灰白	良好	密					
1327	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.6	4.2	6.5	0.5	灰褐	良好	粗					
1328	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.2	4.0	6.3	0.7	灰白	良好	密					
1329	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.2	4.3	6.0	0.6	灰白	良好	密					
1330	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.3	3.5	6.0	0.7	灰黄	不良	粗					
1331	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.0	3.8	6.3	0.7	灰黄	不良	密					
1332	大屋敷5号	381	灰釉	碗	14.1	4.1	6.5	0.7	灰白	良好	密					
1333	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.2	5.9	6.5	1.1	淡黄	不良	密					
1334	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.6	4.9	6.5	0.9	灰黄	良好	粗					
1335	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.5	5.0	7.1	0.8	灰黄	不良	密					
1336	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.4	4.9	6.8	0.9	淡灰	良好	粗					
1337	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.2	3.6	6.5	0.5	黄褐	良好	粗					
1338	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.2	3.4	5.7	0.7	灰黄	良好	密					
1339	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.9	4.0	6.8	0.7	黄褐	良好	粗					
1340	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.7	4.1	6.4	0.9	灰白	良好	密					
1341	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.6	4.3	6.2	0.9	暗灰黄	良好	粗					
1342	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.8	4.1	6.8	0.9	灰	良好	密					
1343	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.9	5.0	6.7	0.9	灰褐	不良	密					
1344	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.8	5.1	6.8	0.8	灰褐	良好	密					
1345	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.5	5.0	6.5	1.0	灰白	良好	密					
1346	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.2	4.9	7.0	0.8	灰白	良好	密					
1347	大屋敷5号	381	灰釉	碗	14.7	4.5	6.9	0.9	灰黄	良好	密					
1348	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.5	5.0	6.8	0.9	灰黄	良好	密					
1349	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.8	3.9	6.7	0.6	灰	良好	密					
1350	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.7	3.8	6.5	0.5	淡灰	良好	密					
1351	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.0	4.3	5.8	0.7	灰白	良好	密					
1352	大屋敷5号	381	灰釉	碗	13.0	4.1	6.7	0.8	灰	良好	密					
1353	大屋敷5号	381	灰釉	碗	12.7	3.8	6.0	0.5	淡灰	良好	密					
1354	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.2	3.5	6.0	0.6	灰白	良好	密					
1355	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.0	4.3	6.7	0.5	灰	良好	密					
1356	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.4	3.7	6.0	0.6	黄灰	良好	密					
1357	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.2	4.0	7.0	0.7	灰黄	良好	密					
1358	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.0	3.9	6.2	0.8	暗灰黄	良好	粗					
1359	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.4	4.4	6.7	0.8	灰白	良好	密					
1360	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.0	4.2	7.0	0.6	灰白	良好	密					
1361	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.0	3.8	6.5	0.6	灰白	良好	密					
1362	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.3	4.0	6.1	0.8	灰黄	良好	密					
1363	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.0	4.0	6.7	0.8	灰白	良好	密					
1364	大屋敷5号	382	灰釉	碗	12.5	4.1	6.0	0.6	灰白	良好	密					
1365	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.4	4.3	6.5	0.7	灰白	良好	密					
1366	大屋敷5号	382	灰釉	碗	12.7	3.5	6.4	0.6	灰白	良好	密					
1367	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.8	4.3	6.7	0.8	灰白	良好	密					
1368	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.5	4.5	6.7	1.1	黄褐	良好	密					
1369	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.2	3.8	6.0	0.6	灰白	良好	密					
1370	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.9	4.1	7.0	0.7	灰白	良好	密					
1371	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.6	3.8	6.2	0.8	灰白	良好	密					
1372	大屋敷5号	382	灰釉	碗	12.8	4.3	6.4	0.7	灰白	良好	密					
1373	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.6	4.8	6.2	0.8	灰白	良好	密					
1374	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.4	4.0	7.0	0.7	灰	良好	密					
1375	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.9	3.6	6.4	0.6	灰白	良好	密					
1376	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.8	4.1	6.5	0.8	灰白	良好	密					
1377	大屋敷5号	382	灰釉	碗	12.8	4.1	6.2	0.8	灰白	良好	密					
1378	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.2	3.9	7.5	0.8	灰白	良好	密					
1379	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.8	4.4	6.8	0.6	灰白	良好	密					
1380	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.8	4.4	7.2	0.9	灰	良好	密					
1381	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.2	3.8	7.0	0.7	灰白	良好	密					
1382	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.4	4.0	7.3	0.7	灰白	良好	密					
1383	大屋敷5号	382	灰釉	碗	15.7	3.6	7.2	0.6	灰白	良好	密					
1384	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.4	4.4	7.0	0.7	灰黄	良好	密					
1385	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.0	4.4	7.0	0.8	灰白	良好	密					

番号	出土窯	挿図	種類	器種	口径(幅)	器高	底部径	高台高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面底部	備考	報告書番号
1386	大屋敷5号	382	灰釉	碗	13.2	4.3	6.5	0.5	灰褐	不良	密					
1387	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.0				灰白	良好	密					
1388	大屋敷5号	382	灰釉	碗	14.0				灰白	良好	密					
1389	大屋敷5号	383	灰釉	碗	15.5	5.7	6.8	0.9	白灰黄	不良	密					
1390	大屋敷5号	383	灰釉	碗	14.6	5.1	6.7	0.8	黄灰	良好	密					
1391	大屋敷5号	383	灰釉	碗	15.2	4.9	7.2	0.8	灰黄褐	良好	密					
1392	大屋敷5号	383	灰釉	碗	15.2	6.2	6.5	1.1	灰白	良好	粗					
1393	大屋敷5号	383	灰釉	碗	16.0	5.6	6.7	1.0	淡灰	良好	密					
1394	大屋敷5号	383	灰釉	碗	15.8	6.0	7.2	0.9	灰褐	良好	密					
1395	大屋敷5号	383	灰釉	碗	17.0	6.5	8.5	1.1	灰白	良好	密					
1396	大屋敷5号	383	灰釉	碗			8.0	1.1	暗黄橙	不良	粗					
1397	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.2	1.4	灰白	良好	密					
1398	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.8	0.9	灰白	良好	密					
1399	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.8	1.0	暗灰黄	不良	密					
1400	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.2	0.9	灰黄	良好	密					
1401	大屋敷5号	383	灰釉	碗			8.0	1.2	淡黄	不良	密					
1402	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.5	1.2	浅黄	良好	密					
1403	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.4	1.2	灰黄	良好	密					
1404	大屋敷5号	383	灰釉	碗			8.0	1.1	灰黄褐	不良	密					
1405	大屋敷5号	383	灰釉	碗			8.3	0.8	灰白	不良	密					
1406	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.3	0.6	灰白	良好	密					
1407	大屋敷5号	383	灰釉	碗			8.0	1.2	黄灰	良好	密					
1408	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.9	0.8	暗灰黄	良好	密					
1409	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.3	0.6	灰黄褐	良好	密					
1410	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.2	1.0	灰黄	良好	粗					
1411	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.6	0.7	明黄褐	不良	密					
1412	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.5	0.6	灰黄	不良	粗					
1413	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.5	0.7	暗灰黄	良好	密					
1414	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.0	0.7	黄褐	良好	密					
1415	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.2	0.7	淡黄	不良	密					
1416	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.7	0.6	暗灰黄	良好	粗					
1417	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.2		灰褐	良好	密					
1418	大屋敷5号	383	灰釉	碗			6.5	0.5	黄灰褐	不良	密					
1419	大屋敷5号	383	灰釉	碗			7.0	0.5	灰白	良好	密					
1420	大屋敷5号	383	灰釉	無台碗	12.8	3.3	6.0		灰白	良好	密					
1421	大屋敷5号	383	灰釉	無台碗	12.0	3.8	5.0		淡灰	良好	粗					
1422	大屋敷5号	383	灰釉	無台碗	13.0	3.2	5.8		淡灰	良好	密					
1423	大屋敷5号	383	灰釉	無台碗	12.0	3.2	5.0		灰白	良好	密					
1424	大屋敷5号	383	灰釉	無台碗	11.5	3.2	5.0		黄灰白	不良	密					
1425	大屋敷5号	383	灰釉	無台碗			6.0		淡黄	不良	密					
1426	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	12.9				灰白	良好	密					
1427	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	12.7	3.7	6.0	0.8	褐灰	不良	粗					
1428	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	13.1	4.0	6.2	0.7	灰黄	良好	粗					
1429	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	13.5	4.8	6.4	0.9	淡灰	良好	密					
1430	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	13.2	5.1	6.0	0.9	灰白	良好	密					
1431	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	13.0				灰白	良好	密					
1432	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	14.8	3.7	7.3	0.7	暗灰黄	不良	密					
1433	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	15.7	5.9	7.7	0.9	浅黄	良好	密					
1434	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	16.0	5.1	7.5	0.9	灰	良好	密		ナデ			
1435	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	15.1	6.5	7.5	1.1	灰黄	不良	粗					
1436	大屋敷5号	384	灰釉	輪花碗	18.6	7.0	8.4	1.4	淡黄	不良	密					
1437	大屋敷5号	384	灰釉	鉢	17.6				灰白	不良	粗					
1438	大屋敷5号	384	灰釉	鉢	17.6				淡黄	不良	密					
1439	大屋敷5号	384	灰釉	托か脚付盤			9.7		淡灰黄	不良	密					
1440	大屋敷5号	384	灰釉	壺?			18.0		黄褐	良好	密					
1441	大屋敷5号	385	灰釉	壺か鉢												116
1442	大屋敷5号	385	灰釉	甑			19.0									114
1443	大屋敷5号	385	灰釉	獣足付短頸壺												115
1444	龕玉中学校西	386	灰釉	無台碗	11.8	3.4	5.5		灰	良好	密		未調整			
1445	龕玉窯	386	灰釉	無台碗	11.0	2.1	5.8		灰黄褐	良好	密		未調整			
1446	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.5		灰黄	良好	密		未調整			
1447	龕玉中学校西	386	灰釉	無台碗			5.5		灰白	良好	密		未調整			
1448	龕玉中学校西	386	灰釉	無台碗			5.0		灰黄褐	良好	密		未調整			
1449	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	13.0	3.0	5.8	0.6	灰	良好	密		ナデ			
1450	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	12.5	4.5	6.7	1.2	灰白	良好	密					
1451	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	13.8	5.0	6.0	0.6	灰白	良好	密		未調整			
1452	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	13.7	4.2	6.6	0.9	灰黄褐	良好	密		ナデ			
1453	龕玉窯	386	灰釉	碗	14.5				灰白	良好	密					
1454	龕玉窯	386	灰釉	碗	13.5				灰白	良好	密					
1455	龕玉窯	386	灰釉	輪花碗	14.5				灰白	良好	密					
1456	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	12.0				灰白	良好	密					
1457	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	12.0				灰白	良好	密					
1458	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	13.5				灰白	不良	密					
1459	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	14.0				灰	良好	密					
1460	龕玉窯	386	灰釉	碗	15.0				浅黄褐	良好	密					
1461	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	14.5				灰白	良好	密					
1462	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	16.0				灰白	良好	密					
1463	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	16.0				灰白	良好	密					

番号	出土窯	挿図	種類	器種	口径(幅)	器高	底部径	高台高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面底部	備考	報告書番号
1464	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	16.5				灰白	良好	密					
1465	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			7.3	0.6	灰黄褐	良好	密		未調整			
1466	龕玉窯	386	灰釉	碗			6.5	0.6	灰白	良好	密		ナデ			
1467	龕玉窯	386	灰釉	碗			6.5	0.7	白灰	良好	密		ナデ	静止ナデ		
1468	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			5.8	0.7	灰白	良好	密		未調整			
1469	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.0	0.7	浅黄橙	不良	密		未調整			
1470	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.5	0.7	灰白	良好	密					
1471	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.0	0.8	灰白	良好	密		ナデ			
1472	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			7.0	0.6	灰白	良好	密		ナデ	静止ナデ		
1473	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.0	0.8	灰白	良好	密		ナデ			
1474	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			7.0	0.7	暗灰黄	良好	密		未調整			
1475	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.5	0.8	灰白	良好	密		未調整			
1476	龕玉窯	386	灰釉	碗			6.1	0.7	灰白	良好	密		ナデ			
1477	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.5	0.7	灰白	良好	密		ナデ			
1478	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			6.0	0.6	灰白	良好	密		未調整			
1479	龕玉窯	386	灰釉	碗			6.3	0.7	灰黄	良好	密		未調整	静止ナデ		
1480	龕玉窯	386	灰釉	碗			7.0	1.0	灰黄	良好	密			静止ナデ		
1481	龕玉窯	386	灰釉	碗			7.8	0.8	灰黄	不良	密		ナデ			
1482	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			7.0	0.7	灰黄	良好	密		未調整			
1483	龕玉中学校西	386	灰釉	碗			7.0	0.7	灰白	不良	密		未調整			
1484	龕玉窯	386	灰釉	碗	15.0				浅黄褐	良好	密					
1485	龕玉中学校西	386	灰釉	碗	15.0				灰	良好	密					
1486	龕玉窯	386	灰釉	鉢	15.3				浅灰黄	良好	密					
1487	龕玉中学校西	386	灰釉	長頸壺	13.2				灰白	良好	密					
1488	龕玉中学校西	386	灰釉	長頸壺	30.4				灰白	良好	密					
1489	龕玉中学校西	387	灰釉	長頸壺	19.5				灰白	良好	密					
1490	龕玉中学校西	387	灰釉	長頸壺			15.2		暗灰	良好	密					
1491	蛭沢池北	387	灰釉	碗	12.2				灰白	良好	密					
1492	蛭沢池北	387	灰釉	碗	15.5				灰白	良好	密					
1493	蛭沢池北	387	灰釉	碗			7.2		灰白	良好	密					
1494	蛭沢池北	387	灰釉	碗			6.9		灰白	良好	密					
1495	蛭沢池北	387	灰釉	碗			6.9		灰白	良好	密					
1496	蛭沢池北	387	灰釉	無台碗			4.8		灰白	良好	密					
1497	蛭沢池北	387	灰釉	壺			9.0		灰白	良好	密					
1498	蛭沢池北	387	灰釉	壺？			14.0		灰白	良好	密					
1499	蛭沢池北	387	灰釉	ツク			10.5		灰白	良好	密					
1500	蛭沢奥池南	387	山茶碗	碗					灰白	良好	密					
1501	大屋敷１・２号	387	灰釉	風字硯		2.0										3
1502	大屋敷１・２号	387	灰釉	小型壺	4.3											1
1503	大屋敷３・４号	387	灰釉	碗	13.5	3.7	5.5	0.6					未調整			2
1504	吉名５号	389	灰釉	碗	15.8	5.0	8.0	0.6				刷毛	ヘラ削り			21
1505	吉名５号	389	灰釉	碗	14.8	4.6	6.5	0.9				漬掛	未調整			7
1506	吉名５号	389	灰釉	碗	15.6	4.8	7.0	0.8					未調整			3
1507	吉名５号	389	灰釉	碗	15.0	4.6	9.0	0.7					未調整			5
1508	吉名５号	389	灰釉	碗	13.2	5.1	6.2	0.9				刷毛	未調整			17
1509	吉名５号	389	灰釉	碗	12.0	3.6	6.0	0.7					未調整			10
1510	吉名５号	389	灰釉	碗	13.8	4.9	6.8	0.9				刷毛	未調整			19
1511	吉名５号	389	灰釉	碗	13.5	5.0	5.8	1.0				漬掛	未調整		ソダ痕	15
1512	吉名５号	389	灰釉	碗	12.5	3.7	6.0	0.6					未調整			12
1513	吉名５号	389	灰釉	碗	12.8	4.4	5.8	1.0				漬掛	ナデ			2
1514	吉名５号	389	灰釉	碗	13.3	4.0	7.0	0.7					未調整			8
1515	吉名５号	389	灰釉	碗	13.2	4.0	6.5	0.7				漬掛	未調整			4
1516	吉名５号	389	灰釉	碗	12.8	3.6	5.5	0.7				漬掛	未調整			6
1517	吉名５号	389	灰釉	碗	13.0	4.5	6.0	0.9					未調整			11
1518	吉名５号	389	灰釉	碗	13.6	4.0	6.7	0.9				漬掛	ナデ			25
1519	吉名５号	389	灰釉	碗	12.2	3.3	6.0	0.4				漬掛	ナデ			14
1520	吉名５号	389	灰釉	碗	12.8	4.6	6.2	0.9					未調整			9
1521	吉名５号	389	灰釉	碗	13.0	4.0	5.8	0.7					未調整			22
1522	吉名５号	389	灰釉	皿	14.0	3.3	6.3	0.9					未調整			23
1523	吉名５号	389	灰釉	碗	13.0	3.6	6.2	0.6					未調整			1
1524	吉名５号	389	灰釉	碗	13.5	4.2	7.3	0.8				漬掛	ナデ			27
1525	吉名５号	389	灰釉	碗	14.0	4.1	5.8	0.6					未調整			20
1526	吉名５号	389	灰釉	碗	13.0	5.5	5.8	0.8					ナデ			24
1527	吉名５号	389	灰釉	托			10.5	3.0								28
1528	吉名５号	389	灰釉	輪花碗	13.8	5.3	6.5	1.0					ナデ			18
1529	吉名５号	389	灰釉	輪花碗	13.5	5.5	6.6	1.2					ナデ			16
1530	吉名５号	389	灰釉	輪花碗	16.8	6.0	7.8	1.0								26
1531	吉名５号	389	灰釉	輪花碗	16.3	6.0	7.3	1.1					未調整			13
1532	吉名５号	390	灰釉	長頸壺	19.3											29
1533	吉名５号	390	灰釉	甕	22.5											30
1534	吉名５号	390	灰釉	壺	14.6											32
1535	吉名５号	390	灰釉	壺か鉢												31
1536	吉名５号	390	灰釉	壺か鉢	5.8	2.3										33
1537	吉名５号	390	窯道具	トチ	5.7	2.4										37
1538	吉名５号	390	窯道具	トチ	5.9	2.4										38
1539	吉名５号	390	窯道具	トチ	6.0	1.5										34
1540	吉名５号	390	窯道具	トチ	5.0	2.0										35
1541	吉名５号	390	窯道具	トチ	4.8	2.2										36

番号	出土窯	挿図	種類	器種	口径(幅)	器高	底部径	高台高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面底部	備考	報告書番号
1542	吉名５号	391	瓦	丸瓦												39
1543	吉名５号	391	瓦	平瓦												40
1544	吉名５号	392	灰釉	碗	15.0				灰白	良好	粗					
1545	吉名５号	392	灰釉	碗	15.4	5.1	8.0	0.7	灰白	良好	密		ナデ？			
1546	吉名５号	392	灰釉	碗	17.2	4.5	8.8	0.7	灰黄	良好	密		未調整			
1547	吉名５号	392	灰釉	碗	17.6	4.6	8.7	0.5	灰白	良好	密		ヘラ削り			
1548	吉名５号	392	灰釉	碗	12.4	4.5	5.2	0.5	灰白	良好	密		ヘラ削り			
1549	吉名５号	392	灰釉	碗			7.6	0.5	灰白	良好	密					
1550	吉名５号	392	灰釉	皿	13.5	3.1	6.0	0.8	灰白	不良	密		ヘラ削り			
1551	吉名５号	392	灰釉	皿			6.9	0.5	淡灰褐	良好	密		ヘラ削り			
1552	吉名５号	392	灰釉	碗			9.1	1.0	灰白	良好	密		ナデ			
1553	吉名５号	392	窯道具	トチ	4.6	1.6										
1554	吉名５号	392	窯道具	トチ	6.1	1.5										
1555	吉名５号	392	窯道具	トチ	5.0	2.1										
1556	吉名６号	392	灰釉	段皿	17.8				灰白	良好	密					
1557	吉名６号	392	灰釉	皿	14.0	2.6	7.8	0.6	灰白	良好	密					
1558	吉名６号	392	灰釉	碗	14.3	5.7	7.6	0.6	褐灰白	良好	密					
1559	吉名６号	392	灰釉	碗	15.5	5.0	7.5	0.6	灰	良好	密		ヘラ削り			
1560	吉名６号	392	灰釉	碗	18.0	4.2	9.3	0.5	灰白	良好	密		ヘラ削り			
1561	吉名６号	392	灰釉	碗			6.6	0.5	褐	不良	密		ヘラ削り			
1562	吉名６号	392	灰釉	碗			8.5	0.5	灰白	良好	密		ヘラ削り			
1563	吉名６号	392	灰釉	碗			8.2	0.3	灰白	良好	密					
1564	吉名６号	392	灰釉	碗	13.8	4.5	7.1	0.5	黄褐	不良	密		ナデ			
1565	吉名６号	392	灰釉	碗	15.3	4.4	8.5	0.6	淡灰白	不良	密		ナデ			
1566	吉名６号	392	灰釉	碗	17.2	5.8	7.8	0.4	褐灰白	良好	密					
1567	吉名６号	392	灰釉	碗	17.5	6.3	8.5	0.6	褐灰	不良	密		ヘラ削り			
1568	吉名６号	392	灰釉	碗			6.8	1.0	褐灰	不良	粗		未調整			
1569	吉名６号	392	灰釉	碗	16.3	4.8	7.3	1.0	灰白	良好	密		未調整			
1570	吉名６号	392	灰釉	碗	17.7	6.1	7.2	1.1	灰	良好	密		ヘラ削り			
1571	吉名５号	392	灰釉	碗	11.6	3.5	5.5	0.6	灰白	良好	密		未調整			
1572	吉名６号	392	灰釉	碗	13.8	4.6	6.0	0.4								
1573	吉名６号	392	灰釉	碗	18.4	4.8	7.6	0.7	灰	良好	密		ヘラ削り			
1574	吉名６号	392	灰釉	碗	18.8				灰白	良好	密				ヘラ描き文	34
1575	吉名６号	394	灰釉	皿	14.5	2.6	7.8	0.5				刷毛	ヘラ削り			61
1576	吉名６号	394	灰釉	皿	15.0	2.5	7.2	0.6					ヘラ削り			55
1577	吉名６号	394	灰釉	碗	12.8	3.8	5.8	0.3				刷毛	ナデ			63
1578	吉名６号	394	灰釉	碗	13.6	4.5	7.5	0.5					ヘラ削り			45
1579	吉名６号	394	灰釉	碗	13.6	4.5	7.0	0.5					ヘラ削り			43
1580	吉名６号	394	灰釉	碗	14.0	4.5	7.0	0.4				刷毛	ヘラ削り			53
1581	吉名６号	394	灰釉	碗	16.4	5.0	8.0	0.5					ヘラ削り			41
1582	吉名６号	394	灰釉	碗	16.2	5.2	8.0	0.5					ヘラ削り			47
1583	吉名６号	394	灰釉	碗	17.5	6.1	8.5	0.7					ヘラ削り			51
1584	吉名６号	394	灰釉	碗	15.8	5.3	7.5					刷毛	ナデ			42
1585	吉名６号	394	灰釉	碗	14.0	4.3	6.0	0.5					未調整			65
1586	吉名６号	394	灰釉	皿	14.3	3.0	6.7	0.8				刷毛	ヘラ削り			57
1587	吉名６号	394	灰釉	皿	14.0	2.5	6.7	0.4					ヘラ削り			59
1588	吉名６号	394	灰釉	碗	14.5	4.3	6.5	0.5				刷毛	ナデ			54
1589	吉名６号	394	灰釉	碗	14.8	4.5	6.5	0.5				刷毛	未調整			68
1590	吉名６号	394	灰釉	碗	14.8	3.8	6.8	0.4				刷毛	未調整			62
1591	吉名６号	394	灰釉	碗	14.0	4.5	6.5	0.8				刷毛	未調整			58
1592	吉名６号	394	灰釉	碗	16.0	5.0	7.5	0.9				刷毛	ナデ			66
1593	吉名６号	394	灰釉	碗	13.8	4.5	6.6	0.3					ヘラ削り			49
1594	吉名６号	394	灰釉	碗	14.0	4.8	6.5	0.8					未調整			50
1595	吉名６号	394	灰釉	碗	13.8	4.2	6.2	0.9					未調整			67
1596	吉名６号	394	灰釉	碗	14.2	4.5	6.5	0.7				刷毛	未調整			52
1597	吉名６号	394	灰釉	碗	17.0	4.6	7.0	0.8					ヘラ削り			48
1598	吉名６号	394	灰釉	碗	14.0	4.2	5.7	0.7				刷毛	未調整			64
1599	吉名６号	394	灰釉	碗	14.7	4.5	6.8	0.5				刷毛	未調整			60
1600	吉名６号	394	灰釉	碗	16.2	5.6	6.0	0.8				刷毛	未調整			56
1601	吉名６号	394	灰釉	碗	18.0	5.3	7.6	0.7					ヘラ削り			44
1602	吉名６号	394	灰釉	碗	18.0	6.0	7.5	0.8				刷毛	ナデ			46
1603	吉名６号	395	灰釉	長頸壺	16.4				灰白	良好	密					
1604	吉名６号	395	灰釉	長頸壺	17.9				灰白	良好	密					
1605	吉名６号	395	灰釉	短頸壺	14.9				灰褐	良好	密					
1606	吉名６号	395	灰釉	壺？			7.1		灰白	良好	密					
1607	吉名６号	395	窯道具	ツク	7.8	8.1	5.3		暗灰黄	良好	密					
1608	吉名６号	395	窯道具	ツク			6.1		灰白	良好	密					1
1609	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.3	2.0										
1610	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.1	1.5										
1611	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.2	2.1										
1612	吉名６号	395	窯道具	トチ	4.3	1.7										
1613	吉名６号	395	窯道具	トチ	4.4	1.5										
1614	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.5	1.9										
1615	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.4	2.1										
1616	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.6	2.0										
1617	吉名６号	395	窯道具	トチ	4.7	1.4										
1618	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.2	2.5										
1619	吉名６号	395	窯道具	トチ	5.0	2.0										

番号	出土窯	挿図	種類	器種	口径(幅)	器高	底部径	高台高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面底部	備考	報告書番号
1620	吉名6号	395	窯道具	トチ	5.1	1.7										
1621	吉名6号	395	窯道具	トチ	6.0	2.6										
1622	吉名6号	395	窯道具	トチ	7.2	2.6										
1623	吉名6号	395	窯道具	トチ	11.5	4.0										
1624	吉名5・6号	395	灰釉	碗	18.5	7.0	7.0	1.1	黄灰褐	良好	密		ヘラ削り			10
1625	吉名6号	396	灰釉	小型壺	5.0											71
1626	吉名6号	396	灰釉	短頸壺	9.3											70
1627	吉名6号	396	灰釉	手付瓶												72
1628	吉名6号	396	灰釉	長頸壺	18.0											69
1629	吉名6号	396	灰釉	壺			10.3									74
1630	吉名6号	396	灰釉	脚付盤			18.5									76
1631	吉名6号	396	灰釉	兜か鉢												75
1632	吉名6号	396	灰釉	兜か鉢												77
1633	吉名6号	396	灰釉	トチ	7.8	2.8										78
1634	吉名6号	396	灰釉	トチ	5.4	2.5										79
1635	吉名6号	396	灰釉	トチ	5.4	2.0										80
1636	吉名1・2号	397	灰釉	皿	13.0	3.0	7.0	0.8					ヘラ削り			13
1637	吉名1・2号	397	灰釉	皿	15.0	3.5	7.2	0.8					ヘラ削り			4
1638	吉名1・2号	397	灰釉	碗	15.6	4.8	6.0	0.8					ヘラ削り			7
1639	吉名1・2号	397	灰釉	碗	14.5	4.4	7.0	0.8					ヘラ削り			9
1640	吉名1・2号	397	灰釉	碗	14.7	4.4	6.0	0.6				刷毛	ヘラ削り			10
1641	吉名1・2号	397	灰釉	碗	16.5	5.0	8.0	1.2					ヘラ削り			5
1642	吉名1・2号	397	灰釉	碗			6.5	1.2				刷毛	ヘラ削り			11
1643	吉名1・2号	397	灰釉	碗	13.5	4.5							ヘラ削り			6
1644	吉名1・2号	397	灰釉	碗	13.5	4.5	5.5	0.6					未調整			15
1645	吉名1・2号	397	灰釉	碗	13.5	3.2	5.8	0.6					未調整			16
1646	吉名1・2号	397	灰釉	碗	14.0	4.0	6.2	0.6					ナデ			14
1647	吉名1・2号	397	灰釉	碗	15.0	4.3	6.2	0.6				刷毛	ヘラ削り			8
1648	吉名1・2号	397	灰釉	碗	19.6							刷毛				12
1649	吉名1号	399	灰釉	碗	15.6	5.0	6.4	0.6								2
1650	吉名1号	399	灰釉	碗	15.6	5.4	7.4	1.0								1
1651	吉名1号	399	灰釉	碗	13.8	5.0	6.4	1.2								4
1652	吉名1号	399	灰釉	碗	14.0	4.2	6.2	0.6								3
1653	吉名1号	399	灰釉	碗	13.8	4.0	6.6	0.6								6
1654	吉名1号	399	灰釉	碗	13.8	4.0	6.4	0.4								5
1655	吉名1号	399	灰釉	蓋	17.8											7
1656	吉名1号	399	灰釉	皿	10.6	2.4	5.8	0.8								15
1657	吉名1号	399	灰釉	無台碗	13.0	3.0	5.0									16
1658	吉名1号	399	灰釉	無台碗	13.0	3.8	5.4									17
1659	吉名1号	399	灰釉	碗	16.6	4.8	7.8	0.8								6
1660	吉名1号	399	灰釉	碗	15.6	4.0	7.0	0.8								8
1661	吉名1号	399	灰釉	碗	13.2	6.2	5.8	0.8								10
1662	吉名1号	399	灰釉	皿	13.6	3.0	5.8	0.4								12
1663	吉名1号	399	灰釉	無台碗?	12.4	3.2	6.8	0.6								14
1664	吉名1号	399	灰釉	碗	13.8	6.6	7.0	0.6								5
1665	吉名1号	399	灰釉	碗	13.4	4.0	6.0	0.6								7
1666	吉名1号	399	灰釉	碗	14.2	4.6	7.4	0.8								9
1667	吉名1号	399	灰釉	皿	14.0	3.0	6.0	0.6								11
1668	吉名1号	399	灰釉	皿	14.4	3.2	6.2	0.8								13
1669	吉名1号	399	灰釉	碗	18.0	6.8	8.5	1.0								1
1670	吉名1号	399	灰釉	碗	16.8	5.2	7.2	0.8								3
1671	吉名1号	399	灰釉	碗	18.0	6.4	8.0	1.0								2
1672	吉名1号	399	灰釉	碗	17.4	6.0	7.4	1.2								4
1673	吉名1号	399	灰釉	耳皿	7.8	3.0	3.6	0.8								22
1674	吉名1号	399	灰釉	耳皿	9.6	3.0	5.2	0.6								21
1675	吉名1号	399	灰釉	小型壺	8.0											18
1676	吉名1号	399	灰釉	小型壺			5.6									19
1677	吉名1号	399	灰釉	短頸壺	4.8											20
1678	吉名1号	399	灰釉	長頸壺	12.6	18.8	8.0	0.6								23
1679	吉名1号	399	灰釉	蓋	19.6											24
1680	吉名1号	399	灰釉	短頸壺	12.0											25
1681	譲栄1号	404	灰釉	碗	12.3	4.5	6.5	1.0				刷毛	未調整			19
1682	譲栄5号	404	灰釉	碗			5.8	1.2					ナデ			18
1683	譲栄5号	404	灰釉	碗	14.5	4.2	6.0	0.8					未調整			17
1684	土取窯跡	404	山茶碗	小碗	9.3	3.4	4.5	0.8					ナデ			21
1685	土取窯跡	404	山茶碗	小碗	9.5	3.0	4.5	0.5					ナデ			25
1686	土取窯跡	404	山茶碗	小碗	11.0	3.0	5.5	0.8					ナデ			20
1687	土取窯跡	404	山茶碗	小碗	9.8	3.0	4.5	0.7					ナデ			26
1688	土取窯跡	404	山茶碗	輪花小碗	10.0	4.0	5.0	0.6					ナデ			23
1689	土取窯跡	404	山茶碗	碗	16.0	5.5	6.6	1.0					未調整			24
1690	土取窯跡	404	山茶碗	碗	16.4	5.0	7.0	0.8					未調整			22
1691	土取窯跡	404	山茶碗	輪花碗	20.7	7.0	7.8	0.7					未調整		籾殻痕	27
1692	土取窯跡	404	灰釉	壺	9.0										「山さほ」	38
1693	梶池窯跡	404	山茶碗	小碗	9.6	2.9	4.2	0.5					ナデ		籾殻痕	28
1694	梶池窯跡	404	山茶碗	小碗	8.8	2.8	4.2	0.5					ナデ		籾殻痕	30
1695	梶池窯跡	404	山茶碗	小碗	8.8	2.7	4.5	0.4					ナデ		籾殻痕	29
1696	梶池窯跡	404	山茶碗	碗	16.0	5.4	8.0	0.4					ナデ		砂目	31
1697	梶池窯跡	404	山茶碗	碗			8.0	0.5							籾殻痕	33

番号	出土窯	挿図	種類	器種	口径(幅)	器高	底部径	高台高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面底部	備考	報告書番号
1698	梶池窯跡	404	山茶碗	輪花碗	17.5	5.0	8.0	0.7					未調整		籾殻痕	34
1699	梶池窯跡	404	山茶碗	輪花碗	17.0										籾殻痕	32
1700	西ノ谷古窯	404	山茶碗	碗	16.2	5.4	6.2	0.5					ナデ		籾殻痕	35
1701	西ノ谷古窯	404	山茶碗	碗	16.8	5.6	6.5	0.3					ナデ		籾殻痕	36
1702	西ノ谷古窯	404	山茶碗	碗				0.3					ナデ		籾殻痕	37
1703	大屋敷遺跡	410	縄文	破片												66
1704	大屋敷遺跡	410	縄文	破片												67
1705	大屋敷遺跡	410	縄文	破片												68
1706	大屋敷遺跡	410	縄文	破片												69
1707	大屋敷遺跡	410	縄文	破片												70
1708	大屋敷遺跡	410	弥生	甕	20.0											71
1709	大屋敷遺跡	410	弥生	壺												72
1710	大屋敷遺跡	410	弥生	壺												73
1711	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片												74
1712	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片												76
1713	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片												75
1714	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片												77
1715	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片			5.6									78
1716	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片			6.6									80
1717	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片			7.0									79
1718	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片			6.0									81
1719	大屋敷遺跡	410	弥生	甕破片			4.8									82
1720	大屋敷遺跡	410	灰釉	碗			9.4									83
1721	大屋敷遺跡	410	山茶碗	碗			7.0									86
1722	大屋敷遺跡	410	山茶碗	碗			6.8									84
1723	大屋敷遺跡	410	山茶碗	碗			7.0									87
1724	大屋敷遺跡	410	山茶碗	碗			8.2									85
1725	大屋敷遺跡	410	陶器	壺			10.8									88
1726	大屋敷遺跡	410	陶器	壺			11.0									89
1727	大屋敷遺跡	410	陶器	壺			9.2									92
1728	大屋敷遺跡	410	渥美？	壺												90
1729	大屋敷遺跡	410	天目	碗			6.2									91
1730	大屋敷遺跡	411	縄文	破片												
1731	大屋敷遺跡	411	縄文	破片												
1732	大屋敷遺跡	411	縄文	破片												
1733	大屋敷遺跡	411	縄文	破片												
1734	大屋敷遺跡	411	須恵器	摘蓋	13.8											
1735	大屋敷遺跡	411	須恵器	坏			4.0									
1736	大屋敷遺跡	411	須恵器	壺	11.9											
1737	大屋敷遺跡	411	須恵器	壺	26.4											
1738	大屋敷遺跡	411	灰釉	碗	13.0				灰黄	良好	密					
1739	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗	17.6				灰黄	良好	密					
1740	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗	17.6				灰黄	良好	密					
1741	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			7.0	0.9								
1742	大屋敷遺跡	411	灰釉	碗			7.0	1.0								
1743	大屋敷遺跡	411	灰釉	壺	17.8											
1744	大屋敷遺跡	411	山茶碗	皿	9.0											
1745	大屋敷遺跡	411	山茶碗	皿	8.8											
1746	大屋敷遺跡	411	山茶碗	皿	9.0	1.9	4.5									
1747	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			6.5	0.5								
1748	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			9.0	0.3								
1749	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			8.0	1.1								
1750	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			7.4	0.6								
1751	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			6.6	0.4								
1752	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			7.8	0.4							砂目	
1753	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗	17.9											
1754	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			7.0	0.5								
1755	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			7.5	0.3								
1756	大屋敷遺跡	411	山茶碗	碗			8.4	0.6								
1757	大屋敷遺跡	411	灰釉	壺？			12.0									
1758	大屋敷遺跡	411	鉄釉	鉢？	19.3											
1759	大屋敷遺跡	411	天目	碗	12.0											

第７節　大屋敷１号窯の評価

第Ⅴ章の最後に、宮口古窯跡群における大屋敷１号窯の位置づけを行い、大屋敷１号窯の報告を終えたい。

１　大屋敷１号窯の窯構造について

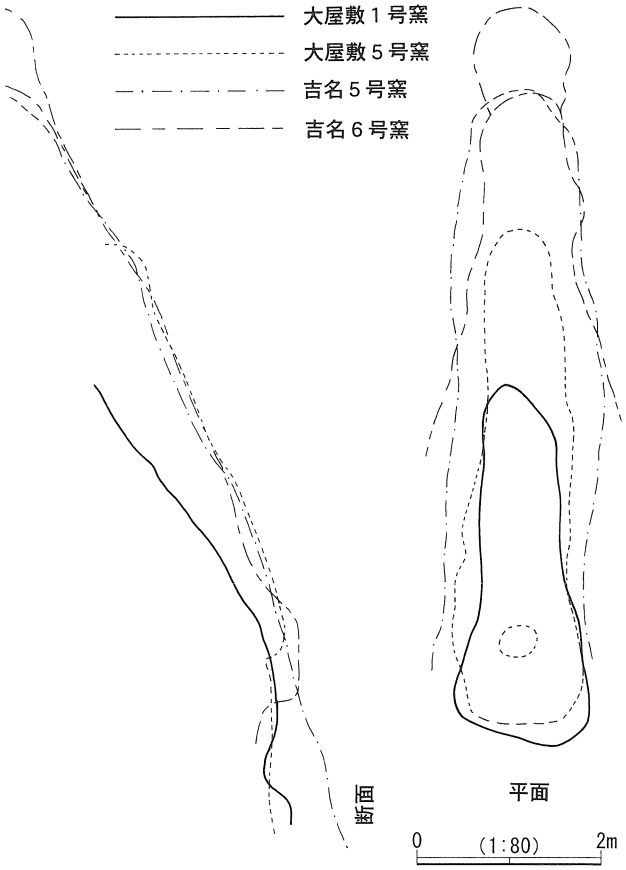
宮口古窯跡群は現在までに東ノ谷窯を含めて28基が確認されており、そのうち大屋敷１・５号窯、吉名１・２・５・６号窯の６基が発掘調査されている。そのうち正式報告が刊行されている３基と大屋敷１号窯の窯構造について比較検討し、大屋敷１号窯の位置づけについて考えてみたい。

（１）平面形態の比較（第405図）

宮口古窯跡群のうち焚口から煙出しまで残存するものは吉名１号窯のみであり、無花果形（寸胴形）を呈する。規模は焼成室幅で吉名５号窯1.4m以上、吉名６号窯1.16m以上、大屋敷５号窯1.2m、大屋敷１号窯は1.1mであり、吉名１号窯は概報では約2.0mをはかる（静岡大学1958）。

また、山茶碗が採集された土取古窯跡群中の１基は、焼成室の断面が幅２m近くの大型のものであるとされている（註2，註は125頁）。

宮口窯の研究（松井1989bほか）では、宮口窯の灰釉陶器と山茶碗の編年は、灰釉陶器段階は吉名６号窯→吉名１号窯→吉名５号窯・大屋敷５号窯→大屋敷１号窯の順に操業され、山茶碗段階に移行すると考えられている。この考えに従って窯の規模を比較すると、宮口窯は灰釉陶器生産段階では新しくなるに従い規模が小型化しているといえ、一方山茶碗生産段階に入ると規模が大型化している状況を確認できる。



第405図　宮口古窯跡群窯構造比較図

したがって、猿投窯でも灰釉陶器生産段階では時期が新しくなるに従い、窯の規模が小型化するとされており、宮口窯は猿投窯と同様の様相を示していることが判明する。

一方、山茶碗生産段階に入ると、灰釉陶器の段階と比較して一挙に大型化したことが想定でき、灰釉陶器段階と山茶碗段階では生産体制や窯構築技術、焼成技術に何らかの変化があったことが想定できる。

大屋敷１号窯は、大屋敷５号窯よりもやや小型化しており、窯の規模からみると大屋敷５号窯よりも若干新しい様相が窺え、灰釉陶器の変遷観と一致する。

（２）断面形態の比較

吉名５・６号窯、大屋敷５号窯の燃焼室の傾斜角度は15～25度である一方、大屋敷１号窯は35度で、約10～20度傾斜角度に差があり、大屋敷１号窯の焼成室は他の３基と比較して急傾斜であることが判明する（第405図）。山茶碗段階の窯が調査されていないことから、山茶碗段階の窯の角度は不明であるが、大屋敷１号窯は急角度であり、新しくなるにつれて急角度になる可能性と、大屋敷１号窯は礫の多い地

山を掘りこんでいるためにこの角度までしか掘らなかった特異な窯である可能性の二者が考えられる。

吉名５号窯や大屋敷５号窯では煙出し部分は燃焼室よりも傾斜角度が急傾斜になるが、この２基より古い吉名６号窯は煙出し部分でも傾斜は緩やかである。したがって、このような状況から判断すると、宮口窯では時期が新しくなるに連れて焼成室の傾斜が急になる可能性が高いと推測しておきたい。

２　窯道具について

（１）焼台について

大屋敷１号窯（灰釉陶器期）では、窯入れ当初の原位置を保持した灰釉陶器は存在しない。灰原から出土した遺物の中には、馬爪形焼台が含まれている。また、灰原から出土した遺物には碗の底部に粘土が付着したものが十数点出土しており、灰釉陶器を直接粘土で固定している。また、甕や鉢などの破片の割れ口に自然釉が付着したものが確認でき、一部には粘土が付着している。したがって、大屋敷１号窯では、馬爪形焼台を用いてその上に転用した碗や皿を載せたもの、粘土を丸めて２～５cm程度の大きさにしたものを焼台（安定を保つため）として使用したものがある。

大屋敷６号窯（山茶碗期）では、採集された遺物の中に馬爪形焼台も含まれている。この焼台には瓦が釉着したもの、高台の痕跡が残るものも確認できる。また碗・皿の底部に自然釉がたっぷりと付着しているものが確認でき、馬爪形焼台と商品として流通させない碗・皿類を転用し焼台としたものが併用されている。

焼台の変遷　大屋敷１号窯と６号窯の焼台を比較すると、１号窯のものは円柱状である一方で、６号窯のものはいわゆる馬爪（馬糞）形といわれるような幅が広い三角錐のような形状であり、宮口窯での焼台は円柱状のものから馬爪（馬糞）形のものへ変化し、さらに大型化した可能性が高い。

焼台の出現　吉名５号窯では、焼成に失敗した碗を床に粘土で固定して、焼台として使用している。吉名６号窯では、コップ形ツクやトチが出土しており、馬爪形焼台は採用されていなかった可能性が高い。

吉名１号窯の状況が不明であるため、吉名５号窯の段階で馬爪形高台が出現したのか、その前の段階である吉名１号窯の段階で出現していたのか判然としない。猿投窯での焼台の出現が黒笹90号窯式期と考えられていることから（斎藤2000）、宮口窯においてもにおいてもトチが採用されなくなり重ね焼きが始まる吉名１号窯段階で出現した可能性が高い。

つまり、大屋敷１号窯は前段階までに安定的に使用されていた筒状の馬爪形焼台を継続的に採用している。一方、大屋敷６号窯は大屋敷１号窯と比較すると、やや焼台の形を変化・大型化させ、用いたことが判明する。

（２）碗・皿の重ね方について

吉名６号窯は上述したように三叉トチ、十字トチ、コップ形ツクが出土しており、また碗・皿に残る痕跡から、角高台のものはツクやトチを利用して積載されていることが判明する。三角高台のものは焼台を利用しての重ね焼きである。吉名６号窯や吉名１号窯の三日月高台碗も重ね焼きである。大屋敷１・５・６号窯は直接の重ね焼きである。したがって、大屋敷１・６号窯は宮口窯における焼成技術の一連の流れに乗っていると考えることができる。

一方で、宮口窯に含めて考えられている都田川流域の浜松市鴨ヶ谷古窯（松井1989a・b）は焼成に輪ドチを用いている（註３）。輪ドチは現段階において宮口窯では確認できない手法であり、鴨ヶ谷古窯の系譜に関しては宮口窯と同一かどうか再考する必要がある。

3　燃料材について

大屋敷１号窯灰原から出土した炭化材の分析結果は本章第５節に掲載した。この分析の結果、燃料材として利用された木材は、針葉樹のマツ属、広葉樹のコナラ属(コナラ節・クヌギ節)、クリ、アワブキであることが判明した。大屋敷１号窯が築窯された麁玉中学校北側の丘陵には、第Ⅳ章で報告したように古墳時代終末期の大規模群集墳が造営されており、大屋敷１号窯周辺は古墳築造のためほとんどの樹木が伐採されたと想定することができる。分析の結果においても二次林的要素の強いマツ属が検出されたことは、燃料材とされた樹木が古墳造営終了後の奈良時代以降に形成された森林であったことを物語っている。

一方、吉名１・２・５・６号窯および大屋敷５号窯では用いられた燃料材の分析が行われていないため不明な部分が多い。吉名古窯跡群周辺には譲栄Ⅰ遺跡、新屋遺跡などが確認されるものの、現状では古墳の築造が活発ではなく、今後確認されたとしても大規模とはならず古墳の基数は数基程度と想定できる。その仮定が正しければ、吉名古窯跡群周辺は大屋敷古窯跡群周辺ほど開発が進んでおらず、古墳時代より遡る段階の森林が残存していた可能性が想定できる。したがって、大屋敷１号窯と吉名古窯跡群や譲栄古窯跡群などでは使用された燃料材が異なる可能性があり、当地域の植生と窯操業者集団の樹木の選定など興味深い事実が明らかになることが期待される。

また、2002～03年にかけて発掘調査された白鳳期～奈良時代前半の浜北市於呂地区に所在する篠場瓦窯跡群(静岡埋文研2003)において利用された燃料材との比較を行うことも重要であり、平安時代と奈良時代前後での燃料材の選定における類似性や差異が明らかになることが期待される。

さらに付け加えるなら、現在森林公園として指定されている範囲のうち大屋敷地区ならびに西ノ谷池周辺の林は山茶碗窯操業のための伐採(鎌倉時代前半)以後に形成された二次林であるといえよう。

4　大屋敷１号窯の時期的位置づけ

(１)宮口古窯跡群における生産器種構成について(第406図)

第406図に、宮口古窯跡群における生産器種を示した。

宮口古窯跡群は、灰釉陶器生産段階では古い時期の窯(吉名１・６号窯)ほど多種(特に碗・皿類の種類)を生産しており、新しくなるにつれて生産器種が減少し、特殊形態の耳皿や手付瓶などが消滅し、碗、

器種／窯名	碗									鉢	壺		甑	硯	陶錘	短頸壺		瓦	トチ	馬爪焼台	その他
	碗	碗B	無台碗	小碗	輪花碗	托	皿	耳皿	段皿		小型	大型				短頸壺	獣足				
吉名１	■		■		■		■	■			■	■				■		■	■		唾壺・短頸壺・水注・蓋・サヤ
吉名５	■	■			■	■	■											■	■		
吉名６	■				■		■		■	■	■	■							■		手付瓶・ツク
大屋敷１	■	■	■		■	■	■			■	■	■	■	■	■					■	
大屋敷３	■																				
大屋敷４	■																				
大屋敷５	■	■	■		■					■	■	■	■			■	■				短頸壺・提瓶・甕
大屋敷６		■		■	■		■				■	■						■		■	
譲栄１	■																				
譲栄５	■																				
土取		■			■						■	■									「山さほ」銘短頸壺
梶池		■																			
西ノ谷		■		■																	
東ノ谷																		■			須恵器

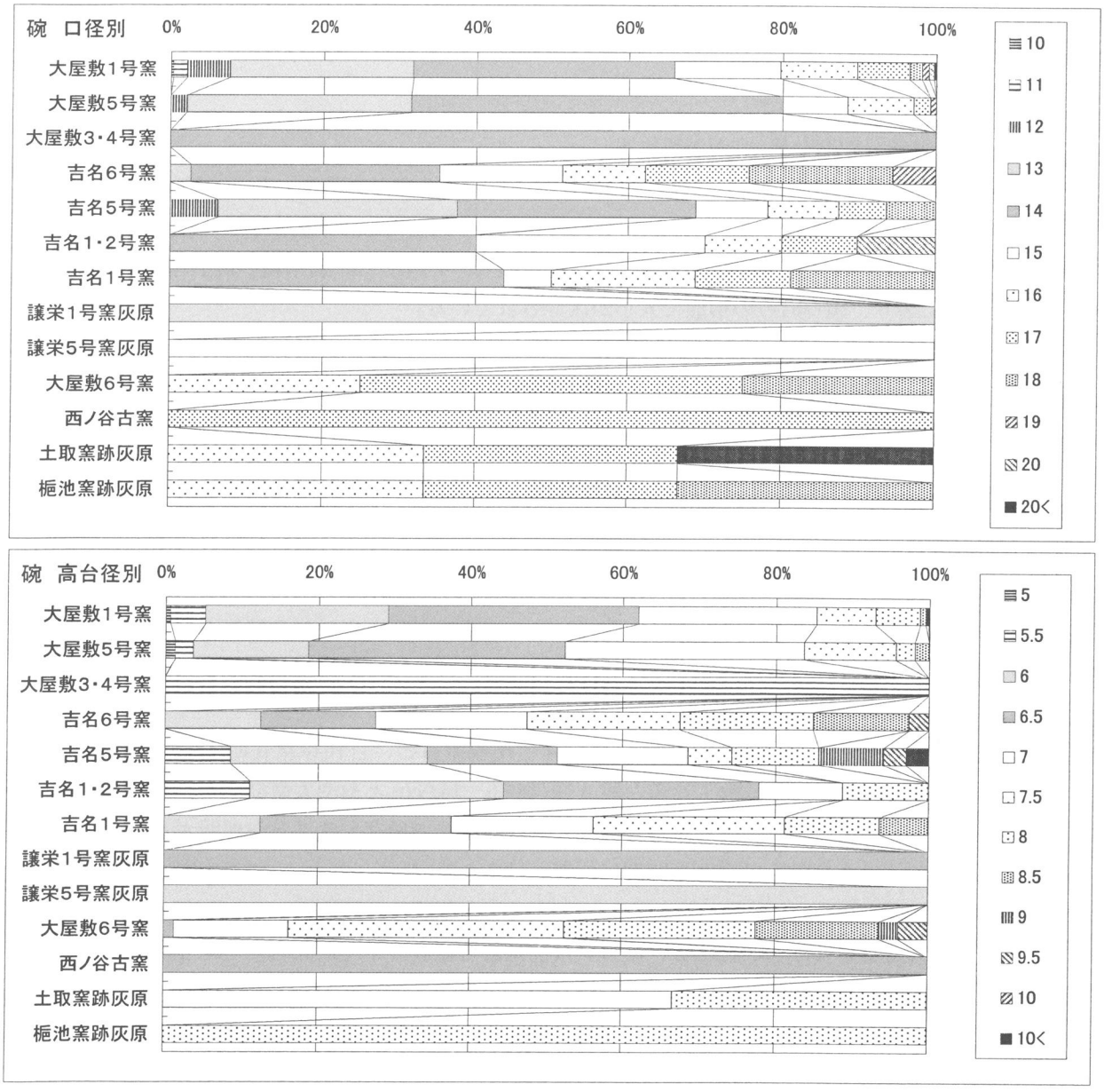
第406図　宮口古窯跡群生産器種構成図

皿、長頸壺、鉢に収斂していく状況を示している。一方、山茶碗生産段階には、山茶碗、小碗、山皿、鉢、壺・甕に限定されるようである。

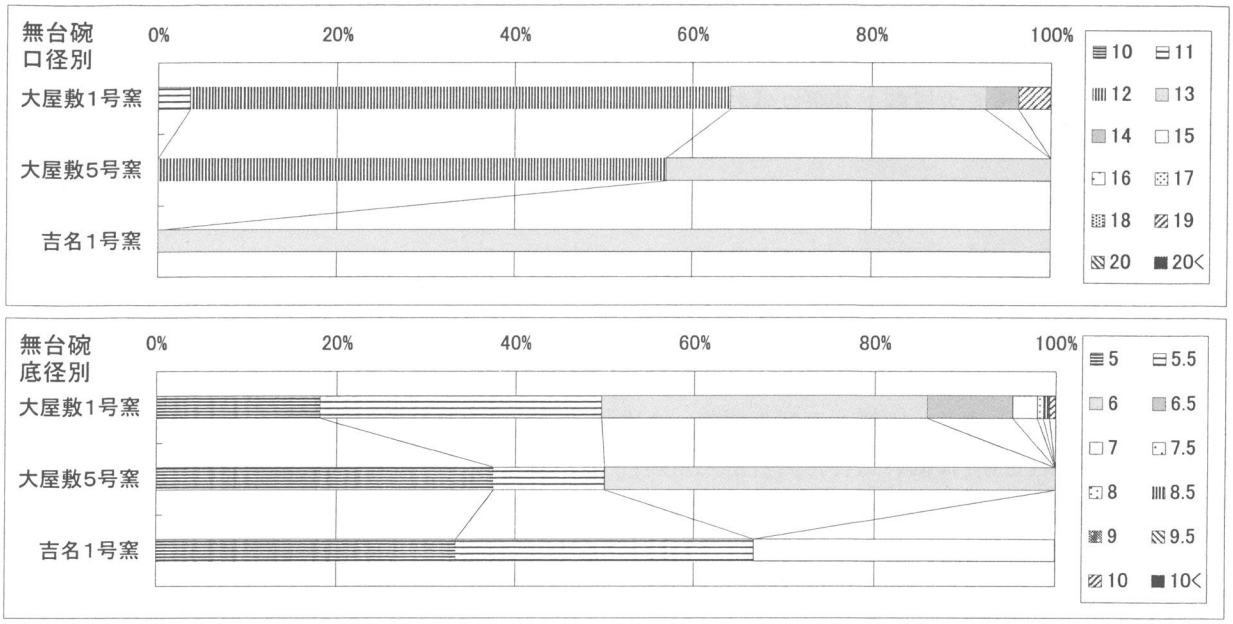
宮口古窯跡群のうち大屋敷１号窯以外の生産器種構成が明らかになっていないため詳細な検討はできないが、大屋敷１号窯は本章第２節で報告したように、碗類(碗と無台碗)が95%を占めており、猿投窯や二川窯と比較して碗類の生産が多いという状況(贄1997)を証明している。

(２)編年的位置づけと自然科学的位置づけ(第407・408図)

編年的位置づけ　松井一明氏によれば(松井1989a・ｂほか)、宮口古窯跡群産灰釉陶器は、高台の形、釉薬の塗布方法、底部の調整、器種構成の４つを基準に変遷過程を追うことができる。１段階(Ⅰ期)は角高台、内側のみ刷毛塗り、底部ヘラ削り調整、２段階(Ⅱ期)は三日月高台、底部ヘラ削り調整、刷毛塗り主体、３段階(Ⅲ期)は低い三日月高台か三角高台で、漬け掛け主体、底部は高台部のみヘラ削りを施すものがある段階、４段階(Ⅳ期)では三角高台か爪形高台、底部はナデ調整が主体で、碗Ｂ(松井氏分



第407図　宮口古窯跡群碗法量割合図



第408図　宮口古窯跡群出土無台碗法量割合図

類Ｄ類)、托(松井氏分類高台Ⅲ Ａ)が出現する。

宮口窯の碗類の法量をみておくと、古い時期に位置づけられる吉名６号窯、それに続く吉名１号窯の段階では碗類に大小の区別が確認でき、新しくなるにつれて大型のものが失われ、小型化する(松井編年Ⅲ・Ⅳ期)。一方で、吉名５号窯、大屋敷５号窯の段階(Ⅳ－１期)で、別系統の碗Ｂ(高台の高い爪形高台)が出現しており、碗(高台)の形態で大小が区分されている。

大屋敷１号窯では、碗・皿の高台形は三角高台あるいは爪形高台で、底部はナデ調整あるいは未調整であり、施釉方法は漬け掛けであることから、松井編年Ⅳ段階に位置づけることが可能である。碗の形態や法量からは大屋敷５号窯製品と区別するのは非常に困難を極める。ただし、底部の調整や焼成器種に差異が確認できる。大屋敷５号窯製品には刷毛塗りが一部確認でき、底部調整にもヘラ削りが用いられるものが確認されている。一方、大屋敷１号窯製品は、刷毛塗りは確認することはできず、ヘラ削りが施されるものも確認できない。また、大屋敷１号窯製品の碗Ｂには、口縁端部が玉縁状を呈するものが数個体出土しており、猿投窯百代寺窯式に併行するもので、大屋敷５号窯では確認することはできない。したがって、大屋敷５号窯と１号窯は、碗(碗Ａ)の形態で区分することは難しく、細部の調整や焼成器種の差異により、松井編年どおり大屋敷５号窯(松井編年Ⅳ－１期)→大屋敷１号窯(Ⅳ－２期)に区分することが可能である(松井1989a・ｂほか)。

また、大屋敷１号窯は、猿投窯百代寺窯式期の碗と比較すると、百代寺窯式期の碗(小碗)は口径が11.0～12.0cm 前後であるが、大屋敷１号窯の碗Ａ類は13.0～14.0cm とやや大型であり、宮口窯では猿投窯と比較すると口径が大きなものが灰釉陶器生産の最終段階まで残存することが判明する。

一方、松井氏により大屋敷１号窯と同時期に位置づけられる(松井1989a・b)譲栄古窯群資料は、口径が10cm 前後の小碗である。大屋敷１号窯では、口径10.0cm 前後の碗は出土しておらず、譲栄古窯跡群との間に１段階差をつけるか(松井2004)、あるいは別系統の流れの中で成立したとすることができる。

つづいて、山茶碗Ⅰ期に位置づけられる土取古窯群出土資料と比較すると、土取窯出土山茶碗は大屋敷１号窯と比較して胎土が荒くなっており、砂が目立つようになる。胎土や調整技法からみると、灰釉陶器段階と山茶碗段階では明瞭に区分することができる。

一方、法量的にみると、土取窯出土小碗は口径が10.0cm 前後と大屋敷１号窯と比較して小型化して

いる。また、山茶碗は口径が16.0cm 前後であり、大屋敷１号窯の碗Ｂとほぼ同法量であり、大屋敷１号窯段階の碗Ｂの法量および形態を引き継いでいる可能性が高い。したがって、灰釉陶器から山茶碗への流れは、小碗は小型化するものの形態的には連続しており、大型の碗も形態的にもスムーズに変遷していると考える。

したがって、大屋敷１号窯は宮口古窯跡群の増産体制に入ったⅣ－１期(10世紀末～11世紀前半)に引き続くⅣ－２期(11世紀前半～後半)に築窯され、山茶碗段階へ法量的にスムーズに移行させたと評価することができる。

自然科学分析との比較　灰釉陶器の形態、組成における相対年代と比較するために、大屋敷１号窯灰原から３点の炭化材を採集し、放射性炭素14年代測定分析を実施した。この結果、最下層(43層)で採取した試料は、較正したもので西暦900～955年(10世紀前半)を示し、燃焼室から出土した炭化材は西暦980年(10世紀後半)を示した。

現状で猿投窯との対比を中心とした宮口窯編年案と自然科学分析による年代に50～100年の差異があり、自然科学分析の方が古い値を示している。しかし、上述したように、宮口窯編年案は猿投窯との対比で行われており、相対年代比定の方がより蓋然性が高いといえる。したがって、松井一明氏により示された相対年代を基にした年代比定により、大屋敷１号窯は11世紀前半～後半に位置づけたい。

５　宮口古窯跡群の操業と流通

(１)宮口古窯跡群の操業(第409図)

第409図に、松井編年(松井1989b)を基にして宮口窯各窯のおおよその操業時期を図示した。

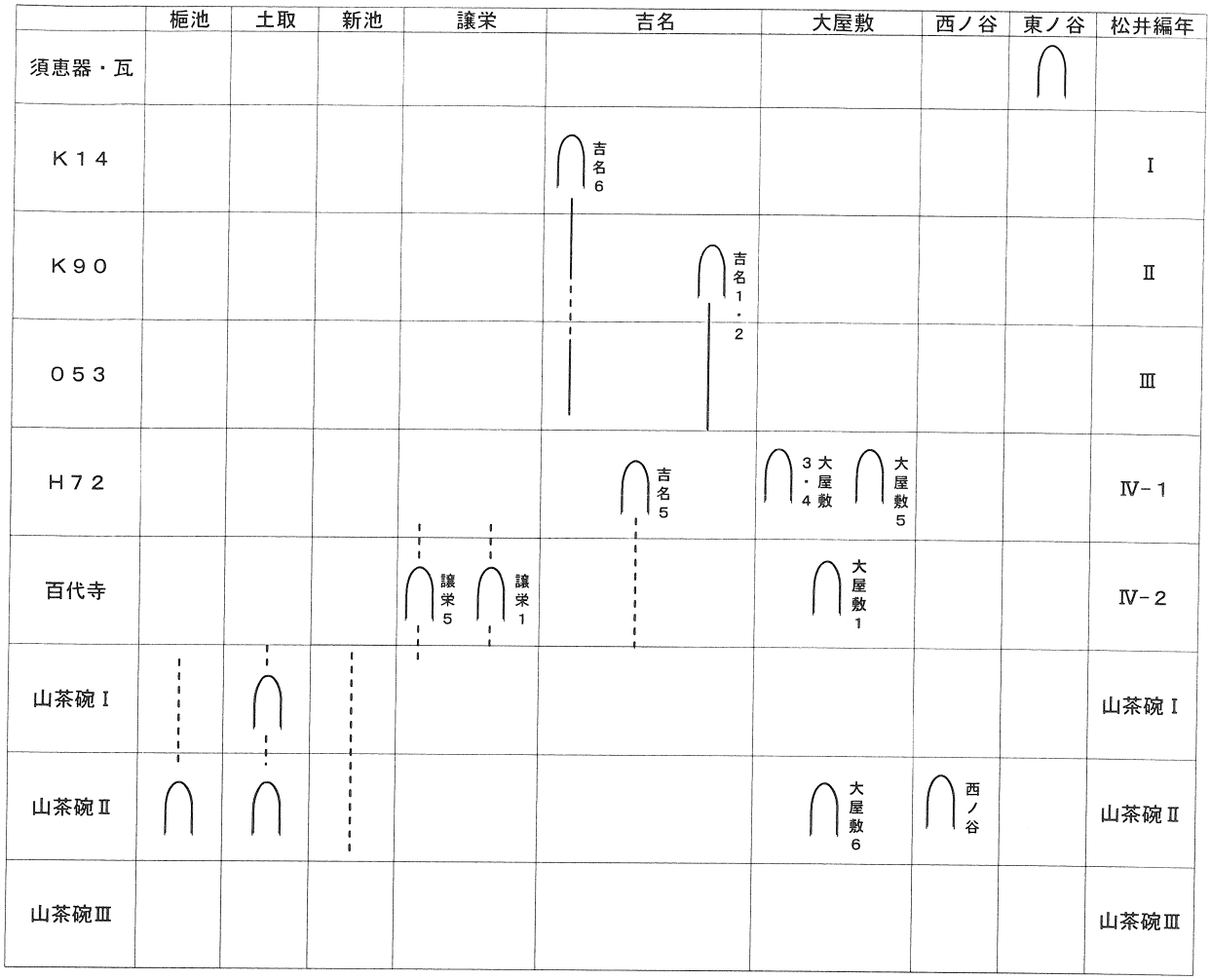
宮口古窯跡群は黒笹14号窯式(K14)段階において吉名６号窯で操業が開始され、黒笹90号窯式(K90)段階まで継続する。吉名１号窯はK90段階から折戸53号窯式(O53)段階まで生産される。つづく、東山72号窯式(H72)段階で、大屋敷５号窯、大屋敷３・４号窯、吉名５号窯が操業を開始し、宮口古窯跡群での増産が開始された可能性が高い。つづく、百代寺窯式期段階にも、大屋敷１号窯、譲栄１・５号窯が操業されており、この段階においても宮口窯では増産体制を維持していた蓋然性が高い。

各窯の操業時期と営まれた場所を比較すると(10頁第320図参照)、夜水沢池(吉名古窯跡群)周辺で開始された生産が、大屋敷～西ノ谷地区(東群)と、譲栄～栂池地区(西群)へと分散するような形で操業が併行して行われており、宮口古窯跡群は増産体制に入った段階で二集団に分かれて操業していた可能性も高い。東群では、吉名６号窯→吉名１号窯から続いて大屋敷５号窯→大屋敷１号窯→大屋敷６号窯、西ノ谷古窯と東へ向かって進み、西群では吉名６号窯→吉名１号窯から続いて吉名５号窯→譲栄１・５号窯→土取古窯跡群→栂池古窯跡群へと移動している様子が窺える。

したがって、宮口古窯跡群は、吉名古窯群で黒笹14号(K14)窯期後半に操業が開始され、黒笹90号窯期～折戸53号窯期まで１～２基で操業された後、東山72号窯期以降増産体制に入ったものと考えることができ、それは山茶碗Ⅱ期まで継続する。増産期には、窯の操業地域が２箇所に分かれることから、操業単位が１集団で交互に移動して操業した可能性(松井1989b)と、同時期の窯が東群と西群で併存していることから２集団あった可能性が想定できる。筆者は、同時期の窯が東群と西群で複数存在する可能性が高いことから、後者の可能性が高いと考えている。

(２)製品の流通について

大屋敷１号窯で生産した黄土を刷毛塗りする壺・鉢(破片)が浜松市恒武西宮遺跡や笠井若林遺跡などの恒武遺跡群で出土している(註４)。また、浜松市笠井若林遺跡では、宮口窯産の灰釉陶器が出土しており、その中に大屋敷１号窯生産品と同様の特徴(黄土刷毛塗り)を有する鉢・壺の破片がある。



第409図　宮口古窯跡群窯変遷図

これ以外の遺跡の資料は確認していないため不明であるが、宮口窯の生産・供給体制やその流通範囲を、出土遺物を中心として文献等を含めて明らかにしていく必要がある。

6　小結

本報告では大屋敷１号窯の発掘調査の成果から大屋敷１号窯の位置づけに関して、宮口古窯跡群内で検討したものであり、大屋敷１号窯生産品流通範囲や流通経路に関しては明らかにすることができていない。また、宮口窯産における各時期の生産品の流通との類似性・差異等も検討できていない。今後、調査を続けていくことが望まれる。

註

1　松井一明氏は宮口古窯跡群の編年を構築するに当たり、今回碗Ｂとした形態を深碗に分類している(松井1989b ほか)。一方、贄元洋氏は、宮口古窯跡群で出土する高台の高い碗(碗Ｂ)は典型的な深碗形態を呈していないとし、深碗に分類すべきではないとしている(贄1997)。筆者は、このような形態の系譜を特定する能力は持ち合わせていないため、通常の碗(碗Ａ)と区別して、高台が高さ１cm以上で、爪形のものを碗Ｂとした。

2　当研究所評議員　向坂鋼二先生、袋井市教育委員会　松井一明氏のご教示による。

3　浜松市博物館に展示されている鴨ヶ谷窯出土碗には輪ドチが用いられたものがある。

4　静岡県教育委員会文化課　溝口彰啓氏のご教示による。

引用・参考文献

報告・報告書

静岡県　1990『静岡県史』資料編２　考古２

静岡県　1992『静岡県史』資料編３　考古３

静岡県教育委員会編・発行　1989『静岡県の窯業遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003『篠場瓦窯発掘調査現地説明会資料』

静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部発行　1958『宮口古窯群』

静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部発行　1959『発掘速報』１号・２号

多治見市教育委員会編・発行　1990『明和　明和古窯跡群発掘調査報告書』

豊橋市教育委員会編・発行　2000『二川古窯址群(Ⅰ)』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書52)

豊橋市教育委員会編・発行　2002『二川古窯址群(Ⅱ)』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書61)

浜北市教育委員会編・発行　1988『浜北市吉名第５号・第６号古窯跡－明神池運動場造成に伴う発掘調査概報－』

浜北市教育委員会編・発行　1989『浜北市明神池運動公園内遺跡』

浜北市教育委員会編・発行　2003『中屋遺跡確認調査報告書』

浜北市史編さん委員会　1989『浜北市史』通史編上巻　浜北市

平野吾郎　1992「灰釉陶器」『静岡県史』資料編３　考古３　静岡県

松澤和人・河合君近　1994「【瀬戸窯資料調査報告１】古代末期灰釉陶器窯調査報告(上)」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』
2　瀬戸市埋蔵文化財センター

松澤和人・河合君近　1995「【瀬戸窯資料調査報告２】古代末期灰釉陶器窯調査報告(下)」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』
3　瀬戸市埋蔵文化財センター

論文

尾野善裕　1999「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』96　岐阜史学会

河合　修　2004「旗指窯の展開と山茶椀の発生」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』
静岡県埋蔵文化財調査研究所

斎藤孝正　1982「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊考古学ジャーナル』211　ニューサイエンス社

斎藤孝正　1989「灰釉陶器の研究Ⅱ－猿投窯第Ⅴ期椀・皿類の型式編年－」『名古屋大学文学部研究論集』104(史学35)
名古屋大学

斎藤孝正　2000『日本の美術』409　越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器　至文堂

贄　元洋　1997「古代遠江の食膳具」『静岡県考古学研究』29　静岡県考古学会

贄　元洋　1998「二川窯における灰釉陶器生産の出現過程」『三河考古』11　三河考古刊行会

贄　元洋　2002「二川窯出土遺物の分類と編年」『二川古窯址群(Ⅱ)』　豊橋市教育委員会

平野吾郎　1992「灰釉陶器の編年」『静岡県史』資料編３　考古３　静岡県

藤澤良祐　1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ　瀬戸市歴史民俗資料館

松井一明　1985「浜北市宮口古窯群の検討(１)」『静岡県考古学研究』17　静岡県考古学会

松井一明　1986a「宮口窯の生産」『灰釉陶器の時代とその流通』　静岡県考古学会

松井一明　1986b「宮口古窯群について」「遠江における灰釉陶器窯群の開始と終末について」『灰釉陶器の時代とその流通』
静岡県考古学会

松井一明　1989a「灰釉陶器をつくる人々」『浜北市史』通史上巻　浜北市

松井一明　1989b「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』
静岡県教育委員会

松井一明　2004「宮口古窯跡群産灰釉陶器・山菜碗はどこに流通したか」『浜北市史』資料編　浜北市

溝口彰啓　2004「遠江・駿河地域における灰釉陶器・山茶碗窯の構造について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』　静岡県埋蔵文化財調査研究所

山下峰司　1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』　真陽社

山村　宏・平野和男　1963「静岡県の古窯跡」『静岡県の古代文化』　静岡県教育委員会

図の出典

第320図　浜北市教委1989に加筆。

第321図　浜北市1：2,500地形図14に加筆。

第379，385，386，389～391，394，396，397，404図　浜北市教委1989より抜粋。

第380～384，386，392，395，411図　浜北市教育委員会より原図提供。静岡県埋蔵文化財調査研究所編集・トレース。

第399図　静岡県1992より抜粋。

第Ⅵ章　調査のまとめ

1　大屋敷Ｃ古墳群について

大屋敷Ｃ古墳群は、古墳時代終末期に築造された54基以上で構成される大規模群集墳であることが判明した。調査した古墳51基は約3.0～13.0m の墳丘を有し、すべて横穴式石室を埋葬施設としている。石室の規模は0.5～8.0m のものまで確認することができる。副葬品は須恵器が主体で、土師器、鉄製品、玉類などが納められている。古墳は、古墳規模・石室規模が大きいものが副葬品も豊富であり、古墳規模・石室規模が小さくなるにつれて、副葬品も少なくなることが判明した。

また、大屋敷Ｃ古墳群は石室の開口方位から幾つかのまとまりが確認でき、大きく２群４支群20単位群に区分することができ、20集団が古墳の造営に関与していた可能性が高い。また、造営にあたっては、大屋敷Ｃ古墳群においてやや優位にある５集団がほぼ同時に築造を開始していることが判明し、それ以後も、集団を束ねるような有力墳は確認できない。大屋敷Ｃ古墳群はほぼ同階層の集団が継続的に造営した古墳群である。

さらに、大屋敷Ｃ古墳群の成立は、浜北北麓古墳群で７世紀前半頃に築造された向野古墳の出現を契機としており、天竜川流域の古墳群だけでなく、三河地域から浜名湖沿岸、都田川流域の古墳の築造技術、石室の構築技術の影響を受けて成立したことが判明した。

2　大屋敷１号窯について

大屋敷１号窯の生産器種は碗、無台碗、皿、托、長頸壺、鉢、甑、風字二面硯、陶錘であり、生産の割合は碗類が最も多く、碗と無台碗で全体の95％を占めており、猿投窯や二川窯と比較して碗類の割合が多いことが判明した。また、大屋敷１号窯の碗（碗Ａ）は同時期の猿投窯の製品と比べると、２cm程度口径が大型であり、上記の二古窯と異なり、口径が10～12cm 程度まで小型化せず、13～14cm の口径が引き継がれていることが判明した。

大屋敷１号窯は、11世紀前半～後半に操業されたことが判明した。碗は、高台が高く爪形の碗Ｂがあり、また碗Ｂには玉縁口縁のものが出現していることから、猿投窯百代寺窯式とほぼ併行すると推測する。

大屋敷１号窯の操業においてはマツ、アワブキ、クリ、コナラなど大屋敷Ｃ古墳群の造営停止後に繁茂した森林が利用されていたことが判明した。

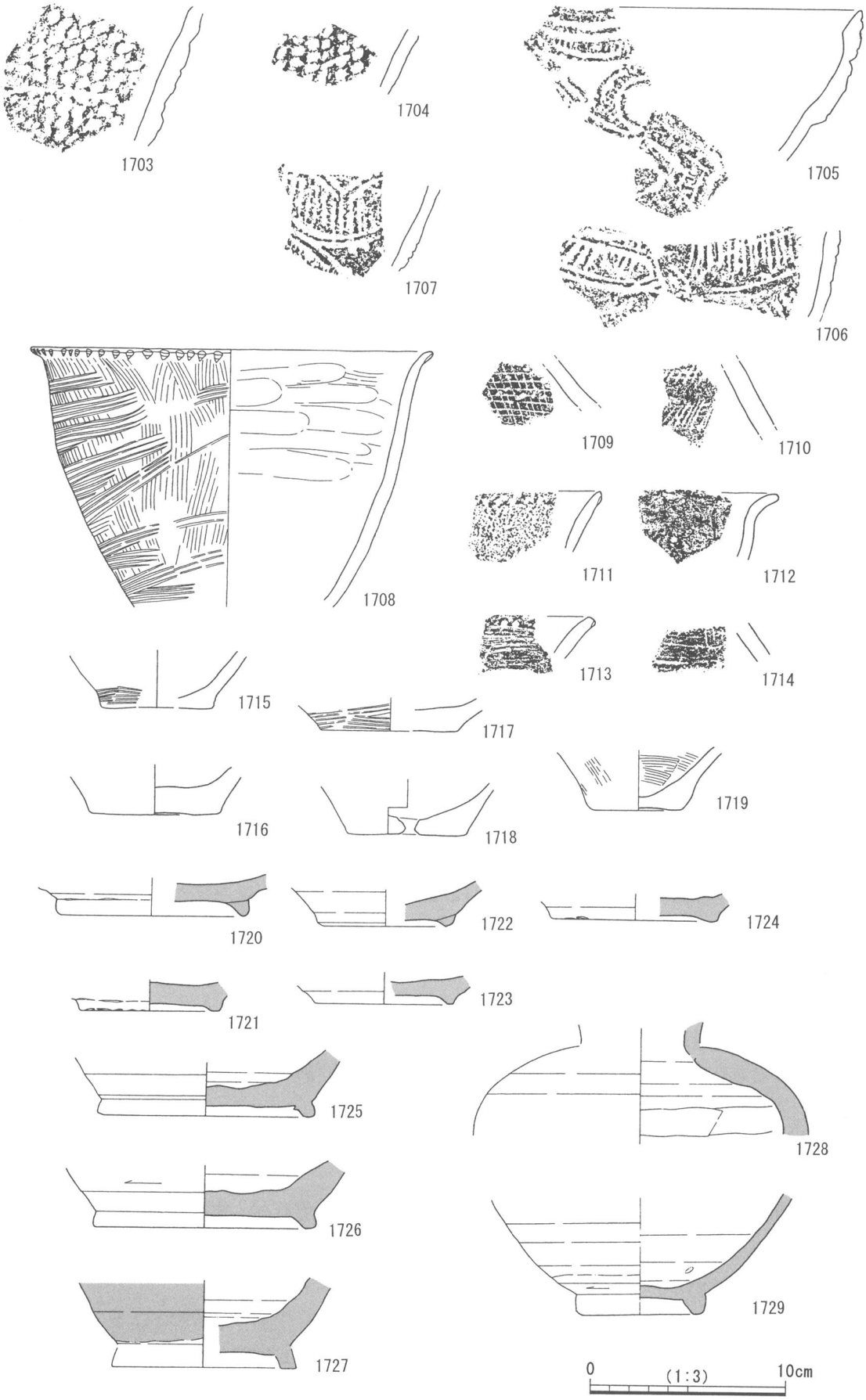
さらに、大屋敷１号窯は宮口古窯跡群が増産体制に突入した段階で築窯された窯で、灰釉陶器を最後に焼成した窯であり、灰釉陶器から山茶碗への転換期の窯と評価することができる。

3　大屋敷地区の土地利用

（１）大屋敷遺跡について（第410・411図）

大屋敷遺跡は、大屋敷Ａ・Ｂ・Ｃ古墳群の範囲とほぼ一致しており、第Ⅲ章で記述したように、本格的な調査は実施されていないものの、表面採集や、興覚寺後古墳・大屋敷Ａ古墳群（A46号墳）の調査に伴い遺物が出土している。

大屋敷遺跡出土遺物には、縄文時代では草創期の粗縄文土器、中期の加曽利系土器、後・晩期の東海系土器があり、弥生時代では中期の白岩式土器が出土している。古墳時代では後期から終末期の須恵器、奈良時代の須恵器、土師器が出土し、平安時代以降では灰釉陶器、山茶碗、常滑焼、天目茶碗などが出土しており（浜北市教委1988）、縄文時代～近世にかけての複合遺跡であることがわかる。



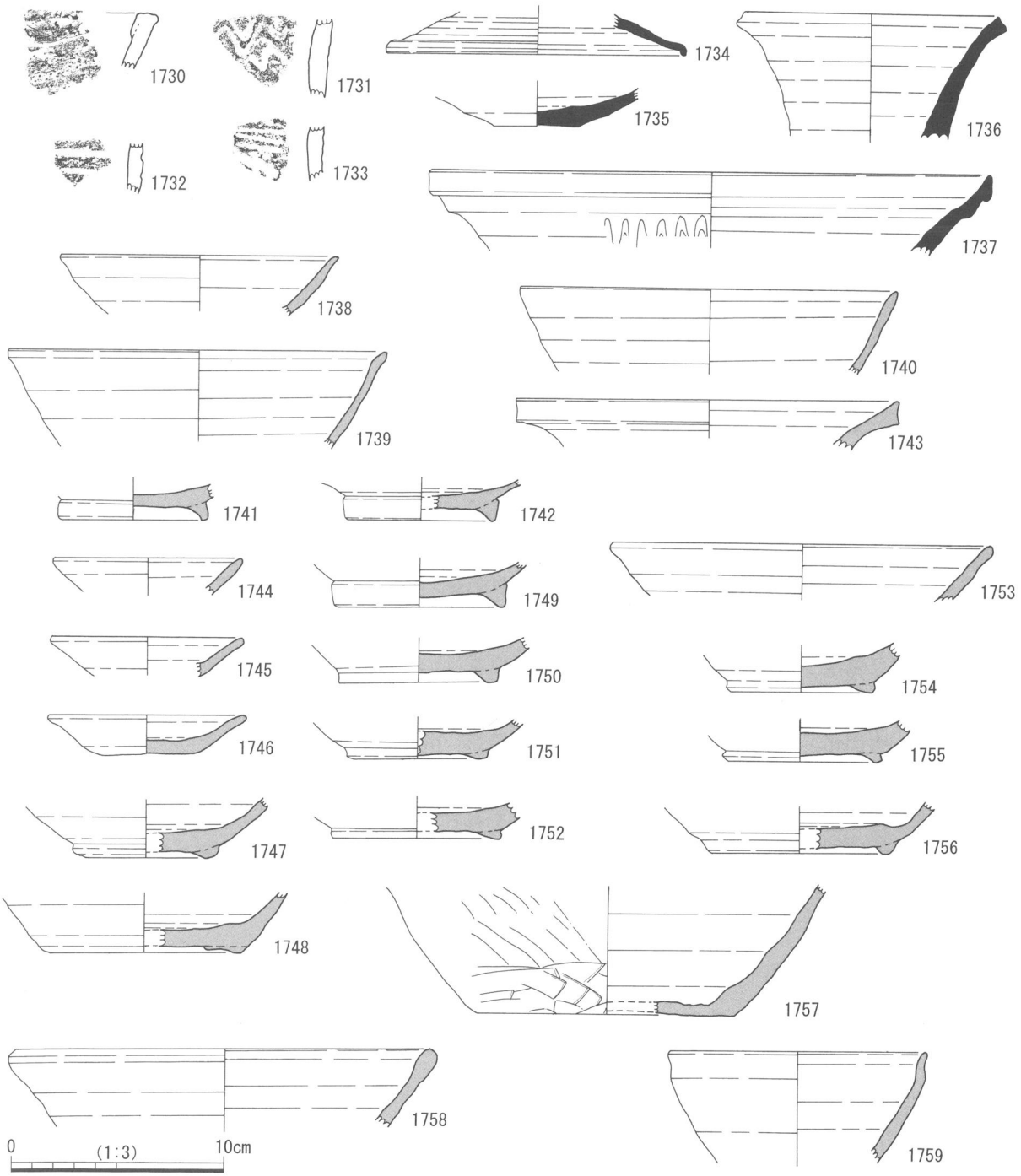
第410図　大屋敷遺跡出土遺物実測図①（浜北市教委1988より）

(2)浜北市宮口字大屋敷地区における歴史的変遷

最後に浜北市宮口大屋敷地区の歴史的変遷に関して、大屋敷C古墳群、大屋敷1号窯を中心に簡単にみておきたい。

この地域に、人間の生活が営まれ始めるのは縄文時代早期であり、麁玉中学校南側に広がる平坦地が生活域として利用され、その北側の斜面地(大屋敷C古墳群内)で陥し穴が5基出土していることから丘陵は狩猟・採集域とされていた可能性が高い。これは断続的ながら、弥生時代後期まで継続する。

一方で、古墳時代後期に平坦地に興覚寺後古墳が築造されると、三方原段丘上やその背後の北麓丘陵に20m以下の円墳で構成される群集墳(大屋敷A・B・C古墳群)が築造され、奈良時代前半まで墓域と



第411図　大屋敷遺跡出土遺物実測図②

して利用されている。

興覚寺後古墳の調査などで奈良時代に帰属する須恵器や土師器が出土していることから奈良時代には、生活域として利用されていた可能性が高い。丘陵斜面は、古墳造営終了後は平安時代に窯業生産地となるまで人為が及ばなかった可能性が高い。

平安時代には、平坦地では灰釉陶器が数多く採集されることから、宮口地区で灰釉陶器を生産していた工人集団が生活あるいは工房として利用していた可能性が高く、北麓丘陵の谷部は窯場として利用され、丘陵は燃料の供給場所として伐採が進んでいたことが想定できる。平安時代～鎌倉時代は平坦地が生活・工房域、斜面地が窯・燃料供給場所として機能していた可能性が高い。

鎌倉時代～室町時代は、大屋敷墳墓群が興覚寺後古墳の南側に営まれており、緩やかな斜面を利用して数段のテラスを造成しており、大屋敷地区は墳墓地として利用されていた可能性が高い(久野1988)。

引用・参考文献

久野正博　1988「浜北市北部丘陵地域における中世墓の様相」『静岡県考古学研究』 静岡県考古学会

浜北市　1989『浜北市史』通史編上巻

浜北市　2004『浜北市史』資料編

浜北市教育委員会編・発行　1988『浜北北麓古墳群』

図の出典

第410図　浜北市教委1988より抜粋。

第411図　浜北市教育委員会より図面の提供を受け、当研究所で編集・トレース。

謝辞

大屋敷Ｃ古墳群・大屋敷１号窯の発掘調査、資料整理、報告書作成にあたり、下記の個人・機関に有益なご教示、ご指導ならびにご高配賜った。末筆ながら銘記して深謝します(五十音順、敬称略)。

網干善教　安藤　寛　犬塚裕史郎　岩原　剛　上杉彰紀　上原真人　太田宏明　大野勝美
尾野善裕　加藤理文　河合　修　木村弘之　久野正博　後藤建一　齋藤香織　佐野聖子
下津谷達男　柴田　稔　白井秀明　白澤　崇　菅原雄一　鈴木一有　鈴木京太郎　鈴木敏則
鈴木　靖　竹内直文　谷口安曇　贄　元洋　西井　亨　西澤正晴　土生田純之　平松良雄
深野信之　本田祐二　前田庄一　松井一明　松下善和　溝口彰啓　向坂鋼二　室内美香
森　泰通　山下總太郎　米田文孝　青　永鉉
静岡県浜松土木事務所　竹内建設株式会社　浜北市教育委員会　浜北市宮口地区自治会
浜北市麁玉公民館　浜北市立麁玉小学校　浜北市立麁玉中学校　浜北市営明神池運動公園
株式会社フジヤマ